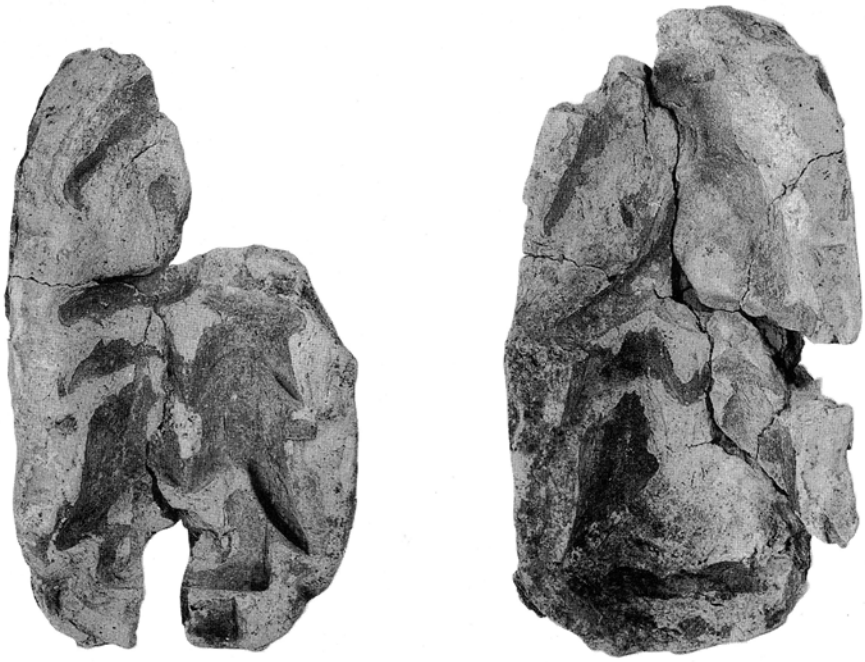
博　多　51

－博多遺跡群第80次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集



福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

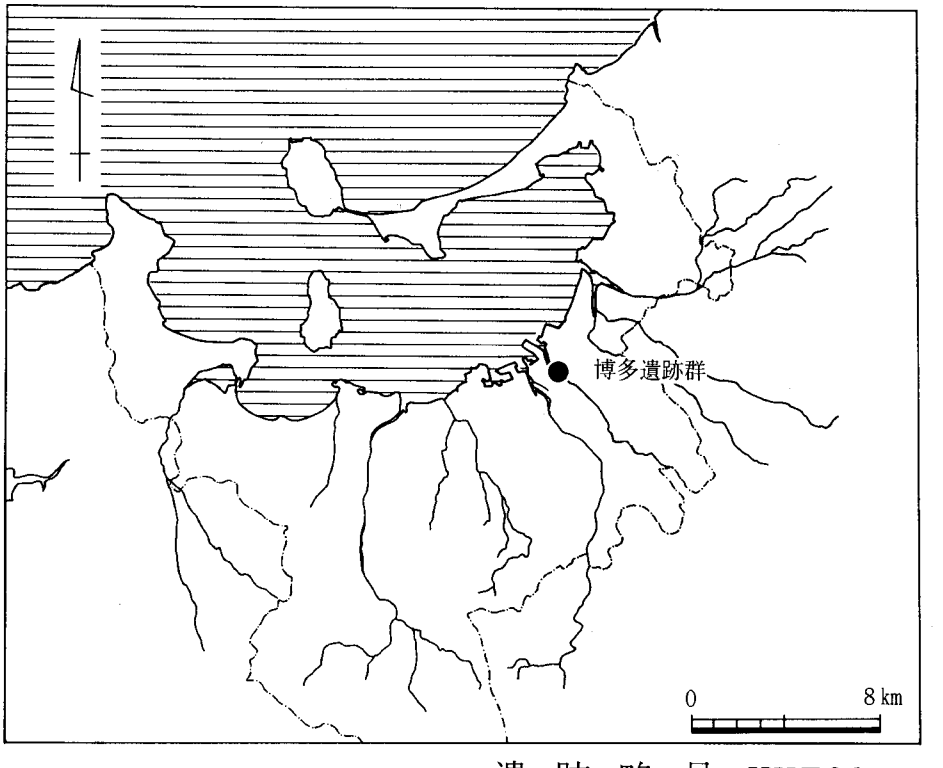
1 9 9 6

福 岡 市 教 育 委 員 会

博（はか）　多（た）　51

－博多遺跡群（はかたいせきぐん）第80次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集



遺 跡 略 号　HKT80
遺跡調査番号　９３０９

１９９６

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、大陸よりもたらされた豊かな文化財が眠る街として知られています。とりわけ、福岡平野の海岸部にある博多遺跡群は、その象徴とも言うべき遺跡で、中世の貿易都市「博多」の姿を今に伝えています。

福岡市教育委員会では、博多遺跡群を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は「博多町家ふるさと館」建設事業にともなって実施した博多遺跡群第80次調査の成果について報告するものです。調査地点は、博多の鎮守である櫛田神社の隣りにあり、中世の櫛田神社に係わる遺構、遺物等を発見することができました。

調査に際して、冷泉町３区町世話人森下章一氏をはじめ、地元の皆様には、快くご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができました。関係者の方々に対し、深く感謝の意を表するとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は平成５年５月20日から平成７年３月31日にかけて福岡市教育委員会が行った、博多区冷泉町304-1所在の博多遺跡群第80次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、福岡市経済振興局経済部観光課が計画した、博多歴史体験施設（仮称）整備事業に伴う事前調査として実施した。

3．調査で検出した遺構は、その性格を問わず発見順に連番号を与えた。また、遺構の性格を示す記号としてＳＢ（建物遺構）、ＳＣ（竪穴住居跡）、ＳＤ（溝状遺構）、ＳＥ（井戸）、ＳＫ（土坑、甕棺墓、木棺墓）、ＳＸ（性格不明遺構）を用いた。また、建物等の柱穴には別途番号を与え、これはPit-で表記した。

4．本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武学（福岡市教育委員会）が主に行い、正林真由美、星野恵美、森山恭助、小川宏子の助力を得た。また、遺構断面図は立石真二が作製した。

5．本書に使用した遺物実測図の作製には、主に田中克子があたり、吉武、西村晴香がこれを補った。

6．本書に使用した銅銭の拓本作製は有島美江が行った。

7．本書に使用した図の製図は、吉武、田中、太田富美子、大神真理子が行った。

8．本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。

9．本書に使用した方位は、全て磁北である。

10．本書の執筆は、遺物を田中が行い、吉武が補足した。その他は吉武が行った。なお、出土遺物のうち、陶磁器については「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　別冊　福岡市教育委員会　1984）に基づいて記述した。

11．本書の編集は吉武が行った。

12．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	９３０９		遺跡略号	ＨＫＴ８０	
調査地地籍	博多区冷泉町３０４－１		分布地図番号		
開発面積	853.86㎡	調査対象面積	853.86㎡	調査面積	691㎡
調査期間	1993年（平成５年）５月20日～1994年（平成６年）３月31日				

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……3
Ⅲ．調査の記録……5
1．調査の経過……5
2．調査の概要……5
(1)層序……5
(2)1面の概要……7
(3)2面の概要……7
(4)3面の概要……8
(5)4面の概要……8
(6)5面の概要……8
3．弥生時代の遺構と遺物……13
(1)竪穴住居跡……13
(2)甕棺墓……16
4．古代の遺構と遺物……19
(1)竪穴住居跡……19
(2)溝状遺構……21
(3)井戸……21
(4)土坑……22
5．中世の遺構と遺物……23
(1)建物遺構……23
(2)溝（道路）状遺構……25
(3)井戸……30
(4)土坑……42
(5)瓦溜り……75
(6)鋳造関連遺構……82
(7)木棺墓……85
6．近世の遺構と遺物……89
(1)井戸……89
(2)土坑……92
(3)その他の遺構……96
7．包含層・柱穴出土遺物……99
(1)弥生時代、古墳時代の遺物……99
(2)古代の遺物……99
(3)中世の遺物……101

(4)その他の遺物……105
(5)柱穴出土遺物……106
(6)玉類……107
(7)銅銭……108
Ⅳ．おわりに……112
Ⅴ．博多遺跡群第80次調査で出土した骨類について（パリノ・サーヴェイ株式会社）……114

挿　図　目　次

Fig. 1　調査地点位置図(1/25,000、1/6,000)……2
Fig. 2　調査区位置図（1/1,000)……4
Fig. 3　調査区域図（1/300)……4
Fig. 4　南壁・東壁(部分）土層断面図(1/80)……6
Fig. 5　東１面遺構配置図（1/150)……7
Fig. 6　２面遺構配置図（1/150)……9
Fig. 7　３面遺構配置図（1/150)……10
Fig. 8　４面遺構配置図（1/150)……11
Fig. 9　５面遺構配置図（1/150)……12
Fig.10　SC-190、198実測図(1/60)……14
Fig.11　SC-200、390実測図(1/60)……15
Fig.12　SC-190出土遺物実測図(1/4)……16
Fig.13　SC-198出土遺物実測図(1/4)……16
Fig.14　SC-390出土遺物実測図(1/4)……17
Fig.15　SK-187、385、394実測図（1/40)……17
Fig.16　SK-187出土遺物実測図(1/4)……17
Fig.17　SK-385出土遺物実測図(1/4)……18
Fig.18　SK-394出土遺物実測図(1/4)……18
Fig.19　古代の遺構配置図(1/200)……19
Fig.20　竪穴住居跡実測図(1/60)……20
Fig.21　竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)……21
Fig.22　SD-183土層断面図(1/40)……21
Fig.23　SE-195実測図(1/40)……21
Fig.24　SE-195出土遺物実測図(1/3)……22
Fig.25　SK-378実測図(1/40)……22
Fig.26　SK-378出土遺物実測図(1/3)……22
Fig.27　SB-45、47実測図(1/40)……24
Fig.28　SB-240実測図(1/60)……25
Fig.29　SD-40実測図(1/80)……26
Fig.30　SD-40土層断面図(1/40)……26
Fig.31　SD-40出土遺物実測図Ⅰ(1/3、1/4)……28
Fig.32　SD-40出土遺物実測図Ⅱ(1/3)……29
Fig.33　SD-40出土遺物実測図Ⅲ(1/3、1/4)……29
Fig.34　SD-181土層断面図(1/40)……29
Fig.35　SD-181出土遺物実測図(1/3)……30
Fig.36　SE-100実測図(1/60)……30
Fig.37　SE-100出土遺物実測図(1/3)……31
Fig.38　SE-112実測図(1/60)……32
Fig.39　SE-112出土遺物実測図(1/3)……32
Fig.40　SE-120実測図(1/60)……32
Fig.41　SE-124実測図(1/60)……33
Fig.42　SE-124出土遺物実測図(1/3)……33
Fig.43　SE-131実測図(1/60)……34
Fig.44　SE-160実測図(1/60)……34
Fig.45　SE-168、182実測図(1/60)……34
Fig.46　SE-179実測図(1/60)……35
Fig.47　SE-180実測図(1/60)……35
Fig.48　SE-180出土遺物実測図(1/3)……35
Fig.49　SE-188、192、193、194実測図(1/60)……36
Fig.50　SE-285、286実測図(1/60)……36
Fig.51　SE-285出土遺物実測図(1/3)……37
Fig.52　SE-286出土遺物実測図(1/3)……37
Fig.53　SE-287実測図(1/60)……37
Fig.54　SE-287出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)·38
Fig.55　SE-300実測図(1/60)……38
Fig.56　SE-300出土遺物実測図(1/3)……39
Fig.57　SE-350実測図(1/60)……39
Fig.58　SE-350出土遺物実測図(1/3)……39

Fig.59 SE-370、380実測図(1/60) ……40
Fig.60 SE-370出土遺物実測図(1/3) ……41
Fig.61 SE-371実測図(1/60) ……41
Fig.62 SK-38実測図(1/30) ……42
Fig.63 SK-38出土遺物実測図(1/3) ……42
Fig.64 SK-39実測図(1/40) ……43
Fig.65 SK-39出土遺物実測図(1/3) ……43
Fig.66 SK-51実測図(1/40) ……44
Fig.67 SK-51出土遺物実測図(1/3) ……44
Fig.68 SK-64実測図(1/40) ……44
Fig.69 SK-64出土遺物実測図(1/3) ……44
Fig.70 SK-69実測図(1/30) ……44
Fig.71 SK-69出土遺物実測図(1/3) ……45
Fig.72 SK-79実測図(1/40) ……45
Fig.73 SK-79出土遺物実測図(1/3) ……45
Fig.74 SK-80実測図(1/40) ……46
Fig.75 SK-80出土遺物実測図(1/3) ……47
Fig.76 SK-80下層出土遺物実測図(1/3) ……48
Fig.77 SK-82実測図(1/30) ……48
Fig.78 SK-82出土遺物実測図(1/3、1/4) ……49
Fig.79 SK-97、99実測図(1/40) ……49
Fig.80 SK-97、99出土遺物実測図(1/3) ……50
Fig.81 SK-110実測図(1/40) ……50
Fig.82 SK-110出土遺物実測図(1/3) ……50
Fig.83 SK-117実測図(1/40) ……51
Fig.84 SK-117出土遺物実測図(1/3) ……51
Fig.85 SK-121実測図(1/30) ……51
Fig.86 SK-121出土遺物実測図(1/3) ……51
Fig.87 SK-122実測図(1/40) ……52
Fig.88 SK-122出土遺物実測図(1/3) ……52
Fig.89 SK-123実測図(1/40) ……52
Fig.90 SK-123出土遺物実測図(1/3) ……53
Fig.91 SK-125、126実測図(1/40) ……53
Fig.92 SK-125出土遺物実測図(1/3) ……54
Fig.93 SK-126出土遺物実測図(1/3) ……54
Fig.94 SK-127実測図(1/40) ……55
Fig.95 SK-129実測図(1/30) ……55
Fig.96 SK-127、129出土遺物実測図(1/3、1/4) ·55
Fig.97 SK-130実測図(1/30) ……56
Fig.98 SK-130出土遺物実測図(1/3) ……56
Fig.99 SK-132実測図(1/40) ……57
Fig.100 SK-132出土遺物実測図(1/3) ……57
Fig.101 SK-135実測図(1/40) ……57
Fig.102 SK-135出土遺物実測図(1/3) ……58
Fig.103 SK-145実測図(1/40) ……58
Fig.104 SK-148実測図(1/40) ……58
Fig.105 SK-145、148出土遺物実測図(1/3、1/4) ·58
Fig.106 SK-150実測図(1/40) ……59
Fig.107 SK-150出土遺物実測図(1/3) ……59
Fig.108 SK-154実測図(1/40) ……59
Fig.109 SK-154出土遺物実測図(1/3) ……60
Fig.110 SK-155実測図(1/40) ……60
Fig.111 SK-155出土遺物実測図(1/3) ……60
Fig.112 SK-165実測図(1/40) ……61
Fig.113 SK-165出土遺物実測図(1/3、1/4) ……61
Fig.114 SK-217実測図(1/40) ……61
Fig.115 SK-217出土遺物実測図(1/3) ……61
Fig.116 SK-225実測図(1/40) ……62
Fig.117 SK-225出土遺物実測図(1/3) ……62
Fig.118 SK-237実測図(1/40) ……62
Fig.119 SK-237出土遺物実測図(1/2、1/3) ……62
Fig.120 SK-238実測図(1/40) ……63
Fig.121 SK-238出土遺物実測図(1/2、1/3) ……63
Fig.122 SK-239実測図(1/40) ……63
Fig.123 SK-239出土遺物実測図(1/3) ……64
Fig.124 SK-261実測図(1/40) ……64
Fig.125 SK-261出土遺物実測図(1/3) ……64
Fig.126 SK-264実測図(1/40) ……64
Fig.127 SK-264出土遺物実測図(1/3) ……65
Fig.128 SK-265実測図(1/40) ……65
Fig.129 SK-265出土遺物実測図(1/3、1/4) ……65
Fig.130 SK-280、281実測図(1/40) ……66
Fig.131 SK-280出土遺物実測図(1/3) ……66
Fig.132 SK-281出土遺物実測図(1/3) ……67
Fig.133 SK-282、283実測図(1/30) ……68
Fig.134 SK-282、283出土遺物実測図(1/3) ……68
Fig.135 SK-290実測図(1/30) ……69
Fig.136 SK-290出土遺物実測図(1/3) ……70
Fig.137 SK-301実測図(1/40) ……70
Fig.138 SK-305実測図(1/40) ……71

Fig.139 SK-301、305出土遺物実測図(1/3)……71
Fig.140 SK-320実測図(1/40) ……71
Fig.141 SK-320出土遺物実測図(1/3)……71
Fig.142 SK-328実測図(1/40) ……72
Fig.143 SK-328出土遺物実測図(1/3)……72
Fig.144 SK-343実測図(1/40) ……72
Fig.145 SK-343出土遺物実測図(1/3)……73
Fig.146 SK-346実測図(1/40) ……73
Fig.147 SK-346出土遺物実測図(1/3)……73
Fig.148 SK-355実測図(1/30) ……74
Fig.149 SK-355出土遺物実測図(1/3)……74
Fig.150 SK-366実測図(1/40) ……74
Fig.151 SK-366出土遺物実測図(1/3)……74
Fig.152 SK-61実測図(1/60)……75
Fig.153 SK-61出土遺物実測図Ⅰ (1/3、1/4)…77
Fig.154 SK-61出土遺物実測図Ⅱ (1/4)……78
Fig.155 SK-61出土遺物実測図Ⅲ (1/4)……79
Fig.156 SK-61出土遺物実測図Ⅳ (1/4)……80
Fig.157 SK-61出土遺物実測図Ⅴ (1/4)……81
Fig.158 鋳造関連遺構配置図(1/60)……82
Fig.159 SK-48実測図(1/40)……82
Fig.160 SK-48出土遺物実測図(1/3) ……83
Fig.161 SK-54実測図(1/40)……84
Fig.162 SK-54出土遺物実測図(1/3) ……84
Fig.163 SK-211実測図(1/40) ……85
Fig.164 SK-211出土遺物実測図(1/3、1/4)……85
Fig.165 木棺墓SK-360実測図(1/30) ……86
Fig.166 木棺墓SK-360出土遺物実測図Ⅰ(1/3)·87
Fig.167 木棺墓SK-360出土遺物実測図Ⅱ(1/8)·88
Fig.168 SE-35実測図(1/60) ……89
Fig.169 SE-35上層出土遺物実測図(1/3、1/4) ··90
Fig.170 SE-35出土遺物実測図(1/3、1/4) ……91
Fig.171 近世土坑実測図(1/40) ……93
Fig.172 近世土坑出土遺物実測図(1/3、1/4) ····94
Fig.173 SK-248出土遺物実測図(1/3)……95
Fig.174 SK-249出土遺物実測図(1/3)……96
Fig.175 SK-05、07実測図(1/40) ……96
Fig.176 SK-05出土遺物実測図(1/3、1/4) ……97
Fig.177 SX-10実測図(1/30)……97
Fig.178 SX-10出土遺物実測図(1/3、1/4) ……98
Fig.179 SX-36実測図(1/30)……98
Fig.180 包含層出土遺物実測図Ⅰ(1/4) ……99
Fig.181 包含層出土遺物実測図Ⅱ(1/3) ……100
Fig.182 包含層出土遺物実測図Ⅲ(1/3、1/4) ··101
Fig.183 包含層出土遺物実測図Ⅳ(1/3) ……103
Fig.184 包含層出土遺物実測図Ⅴ(1/3) ……104
Fig.185 包含層出土遺物実測図Ⅵ(1/3) ……105
Fig.186 包含層出土遺物実測図Ⅶ(1/2、1/3) ··106
Fig.187 包含層出土遺物実測図Ⅷ(1/3) ……106
Fig.188 柱穴出土遺物実測図(1/2、1/3) ……107
Fig.189 玉類実測図(1/1) ……107
Fig.190 出土銅銭拓本Ⅰ(1/1) ……110
Fig.191 出土銅銭拓本Ⅱ(1/1) ……111
Fig.192 歓喜天像推定復元図(1/2) ……113

図 版 目 次

PL. 1　1．東1面北半部（南東から）　2．東1面北半部（南西から）
PL. 2　1．東2面全景（南西から）　2．西2面全景（北東から）
PL. 3　1．東3面全景（南西から）　2．西3面全景（北東から）
PL. 4　1．東4面全景（南西から）　2．西4面全景（北東から）
PL. 5　1．東5面（古代）全景（南西から）　2．東5面（弥生時代）全景（南西から）
PL. 6　1．西5面全景（北東から）　2．5面SC－190(北東から)
PL. 7　1．5面SC－198(西から)　2．5面SC－200(南西から)
PL. 8　1．5面SC－390(北東から)　2．5面SK－187(南西から)

PL. 9　1．5面SD－183(東から)　2．4面SE－195(東から)
PL. 10　1．4面SD－181(東から)　2．2面SB－45、47(西から)
PL. 11　1．2面SB－240(東から)　2．2面SB－240土層断面（南から)
PL. 12　1．東2面SD－40土層断面（南東から)　2．西2面SD－40土層断面（南東から)
3．西3面SD－40検出時（北から)　4．西3面SD－40(北から)
5．3面SE－100(北西から)　6．3面SE－100土層断面（南西から)
7．3面SE－112(南西から)　8．3面SE－124上面（北東から)
PL. 13　1．4面SE－124土層断面（北東から)　2．4面SE－124完掘状態（南西から)
3．4面SE－134(南西から)　4．4面SE－168(南西から)
5．4面SE－179(南西から)　6．4面SE－180(北から)
7．5面SE－188、192、194(南西から)　8．5面SE－188(南西から)
PL. 14　1．5面SE－193(南から)　2．3面SE－285、286(南西から)
3．3面SE－287土層断面（南西から)　4．3面SE－287完掘状態（南西から)
5．3面SE－300土層断面（南東から)　6．3面SE－300鏡出土状況（南東から)
7．3面SE－300(南東から)　8．3面SE－300井戸側（南東から)
PL. 15　1．4面SE－350土層断面（南西から)　2．4面SE－350井戸側（南西から)
3．4面SE－370土層断面（北西から)　4．5面SE－380(北西から)
5．2面SK－38(西から)　6．3面SK－64(南から)
7．3面SK－69(南西から)　8．3面SK－80西半部（東から)
PL. 16　1．3面SK－82(南西から)　2．2～3面SK－121(北から)
3．4面SK－122(南西から)　4．4面SK－125、126、127(西から)
5．4面SK－130(南から)　6．4面SK－130(東から)
7．4面SK－132(南西から)　8．4面SK－129石鍋出土状況（南から)
PL. 17　1．4面SK－129石鍋出土状況（東から)　2．4面SK－123白磁出土状況（東から)
PL. 18　1．4面SK－135(南西から)　2．4面SK－145(南東から)
3．4面SK－150(西から)　4．4面SK－155(北から)
5．4面SK－165(南西から)　6．2面SK－217銅銭出土状況（北から)
7．2面SK－237(北から)　8．2面SK－261(南東から)
PL. 19　1．2面SK－263、264(南東から)　2．2面SK－265(南東から)
3．3面SK－282、283(北東から)　4．3面SK－290(南西から)
5．3面SK－320(北から)　6．3面SK－328(北西から)
7．4面SK－355(南東から)　8．3面SK－366(北東から)
PL. 20　1．2面SK－61(南西から)　2．2面SK－61(西から)
3．2面SK－61(北から)　4．2面SK－61土層断面（西から)
5．2面SK－61土層断面（南西から)
PL. 21　1．2面SK－48(南東から)　2．4面SK－360(南西から)
PL. 22　1．4面SK－360(南東から)　2．4面SK－360(北東から)
PL. 23　1．5面SE－35完掘状態（南西から)　2．2面SE－35の上面（南西から)
3．5面SE－35石組（北西から)　4．5面SE－35井戸側（北西から)
5．2面SK－248、249(北から)

PL. 24　1．1面SX－10（南から）　2．1面SX－36（南東から）
PL. 25　1．南壁土層断面（北西から）　2．西5面の砂丘断面（南東から）
　　3．東5面の生痕
PL. 26　出土遺物・Ⅰ
PL. 27　出土遺物・Ⅱ
PL. 28　出土遺物・Ⅲ
PL. 29　出土遺物・Ⅳ
PL. 30　出土遺物・Ⅴ
PL. 31　出土遺物・Ⅵ
PL. 32　出土遺物・Ⅶ
PL. 33　出土遺物・Ⅷ
PL. 34　出土遺物・Ⅸ
PL. 35　出土遺物・Ⅹ
PL. 36　出土遺物・Ⅺ
PL. 37　出土遺物・Ⅻ
PL. 38　出土遺物・XIII
PL. 39　出土遺物・XIV
PL. 40　1．出土遺物・XV　2．材の顕微鏡写真

表　目　次

Tab. 1　SD-40 出土土師器小皿・坏計測表……29
Tab. 2　SK-38 出土土師器小皿・坏計測表……42
Tab. 3　SK-80 出土土師器小皿・坏計測表……46
Tab. 4　SK-239出土土師器小皿・坏計測表……63
Tab. 5　SK-280、281出土土師器小皿・坏計測表……67
Tab. 6　SK-283出土土師器小皿・坏計測表……68
Tab. 7　SK-305出土土師器坏計測表……71
Tab. 8　SK-211出土土師器小皿計測表……85
Tab. 9　遺構別銅銭一覧表Ⅰ……108
Tab.10　遺構別銅銭一覧表Ⅱ……109
Tab.11　出土銅銭一覧表……109

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

福岡市博多区冷泉町304-1 において、福岡市経済振興局経済部観光課によって「博多歴史体験施設(仮称)」建設の計画が起こり、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に遺跡の有無についての事前審査願が提出された。同地は博多の鎮守である櫛田神社のすぐ東側に位置しており、最近まで櫛田神社の社領に含まれ、「櫛田裁縫学校」が建てられていた場所である。申請地は、以前に民間開発に伴って既に試掘調査を実施しており、平成３年９月18日に行った試掘調査では、地表下約70cmから200cmまでの間に包含層と遺構を検出し、12～14世紀を中心とした多量の遺物が出土した。その後、この民間開発が中止され、地元の要望によって福岡市が土地を買収し、頭書の計画が起こされたものである。計画事業の内容は、博多の染物工房である「三浦邸」の建て替えにともなって解体される明治期の町家をこの場所に移築復元し、これと同時に博多の歴史・文化を展示する施設を併せて建設するというものであった。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、事業の計画中止や、設計変更を含めて観光課と協議を重ねた。しかし、事業が地元住民の強い要望のもとに計画されたものであること等により中止は困難であり、また、建物の構造上、地下の遺構への影響は避け難く、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成５年度の令達事業として行うこととなり、平成５年５月20日から平成６年３月31日にかけて実施した。また、整理報告書作製は、出土遺物が多量であったため、平成６～７年度の２ヵ年で行った。

2．調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、冷泉町３区町世話人森下章一氏をはじめ地元の方々には、調査事務所用地や山留め工事等の条件整備に関して多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、調査を円滑に進めることができた。ここに記して感謝を申し上げたい。

調査委託　福岡市経済振興局経済部観光課

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾　學（前）、荒巻輝勝（現）
埋蔵文化財第２係長　山崎純男（前）、山口譲治（現）

調査庶務　埋蔵文化財第１係　中山昭則（前）、内野保基（現）

調査担当　埋蔵文化財第２係　横山邦継、加藤良彦、宮井善朗（試掘担当）
埋蔵文化財第１係　井澤洋一、吉武　学（事前協議担当）
埋蔵文化財第２係　吉武　学（調査担当）

調査作業　青柳武、秋山豊、荒木宏隆、生田昭二、井関鶴雄、内野英文、梅本不二男、大里金作、大村達也、鬼塚幸男、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、小路丸嘉人、舌間三郎、渋谷博之、高崎秀巳、高田勘四郎、高田勲、高田茂、高山和哉、常岡嘉稔、徳永栄彦、富永壽、楢崎薫、西田昭、二宮白人、布巻和昭、萩尾行雄、広田安平、藤田圭三、

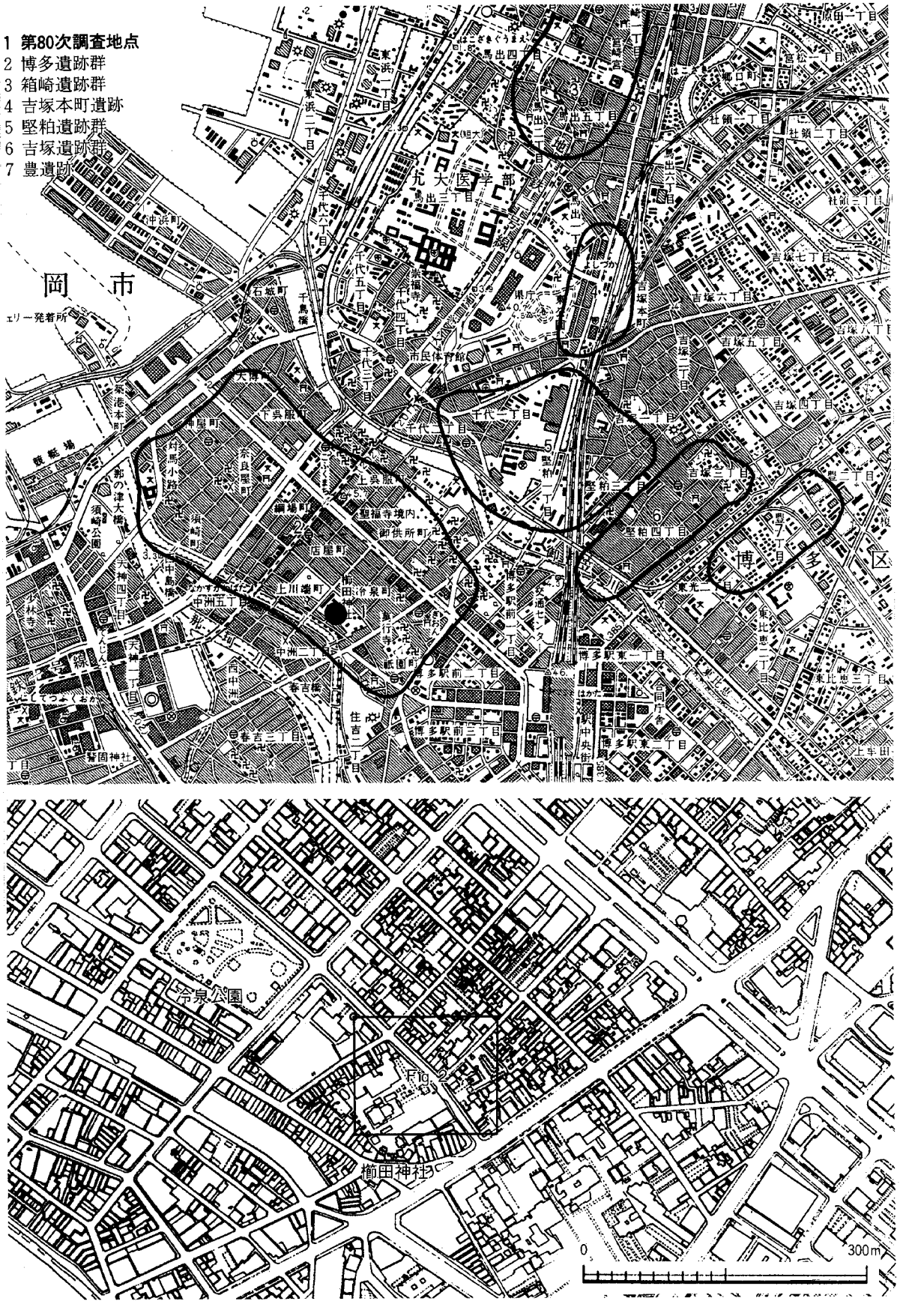


Fig. 1　調査地点位置図（1/25,000、1/6,000）

松原高博、村山市次、森垣隆視、森田剛、森本勇夫、森山恭助、吉永和弘、脇田栄、米倉國弘、遠藤貞子、岡野民枝、小川宏子、尾崎真佐子、金子澄子、唐島栄子、川上すぎえ、境フジ子、酒井康恵、佐島政美、正林真由美、菅野シゲ、杉村百合子、武田潤子、為房紋子、中島庸紀子、仲田静代、西本スミ、野口ミヨ、日尾野典子、星野恵美、松藤ナツエ、村田トモヨ、森山タツエ、

整理調査員　田中克子、立石真二

整理作業　安部国恵、有島美江、井澤早苗、大神真理子、太田富美子、金子美穂、冨田輝子、西めぐみ、西村晴香、長谷川千加子、宮坂環

調査中、西南学院大学磯望氏に、現地にて地層についてご指導を頂いた。感謝申し上げたい。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、博多湾岸に列状に形成された砂丘上に位置し、北を博多湾、残りの三方を河川によって画されている。博多湾岸には、このような古砂丘が海岸線に沿っていくつも形成されており、こうした砂丘上に大小規模の遺跡が存在することが近年の調査で明らかとなってきた。その中でも、福岡平野の湾岸には、博多遺跡群が立地する砂丘を起点に、ここから東側へ断続的に砂丘が伸び、この上に堅粕遺跡群、吉塚本町遺跡、箱崎遺跡群などの古代～中世の集落遺跡が存在している。

博多遺跡群は、その契機となった福岡市営地下鉄の建設に伴う調査を含め、既に100次を越える調査が行われており、博多遺跡群の基盤である砂丘の発達と利用状況についても次第に明らかとなってきた。この砂丘は縄文海進以後に形成されたもので、３つの列からなり、内陸側から砂丘Ⅰ～Ⅲと称され、内陸側の砂丘Ⅰ・Ⅱは「博多浜」、海側の砂丘Ⅲは「息の浜」と呼ばれている。砂丘は内陸側から沖へ向かって発達していったと見られ、これにあわせて遺跡の中心が博多浜から息の浜へ移ったことがこれまでの調査で判明している。最も古い遺構は、弥生時代中期中頃の竪穴住居跡や甕棺墓などで、博多浜の中心部に見られ、以後、古墳時代、古代を経て、南北朝時代になると、遺跡の中心が息の浜へ移り、文献上に見る博多の盛衰と符号することが確認されている。

第80次調査地点は、博多浜を形成する砂丘が中間でくびれ、砂丘ⅠとⅡとに分けられる部分の西側に位置している。周辺の調査地点における基盤砂丘の傾斜を見ると、北側の第70次調査では北側へ下り、南側の第63次調査では南側へ下っている。第80次調査では南側へ下っていることから見て、70～80次の間に砂丘の頂部が、80～63次の間に砂丘の後背地が存在していることが分かる。このことから、第80次調査地点は砂丘Ⅱの内陸側の緩い斜面上に位置していると考えられる。

調査地点の周辺で、これまでに検出された最も古い遺構は、第63次調査で確認された古墳時代前期の竪穴住居跡であるが、遺構としては極めて密度が薄い。当調査では、弥生時代後期前半の竪穴住居跡と甕棺墓を検出し、一帯の土地利用が弥生時代にまで遡ることを確認した。古代になると、第63次調査や当調査でも検出した竪穴住居跡が、かなりの密度で見られるようになる。

調査地点の昭和初期の旧町名は「社家町」で、つい最近まですぐ東側に位置する櫛田神社の神官の居住地であった場所である。櫛田神社は、大宰大弐であった平清盛が、肥前国神崎荘から勧請したとされるが、文献上に初めて現れるのは鎌倉時代末の「博多日記」であるとされている。

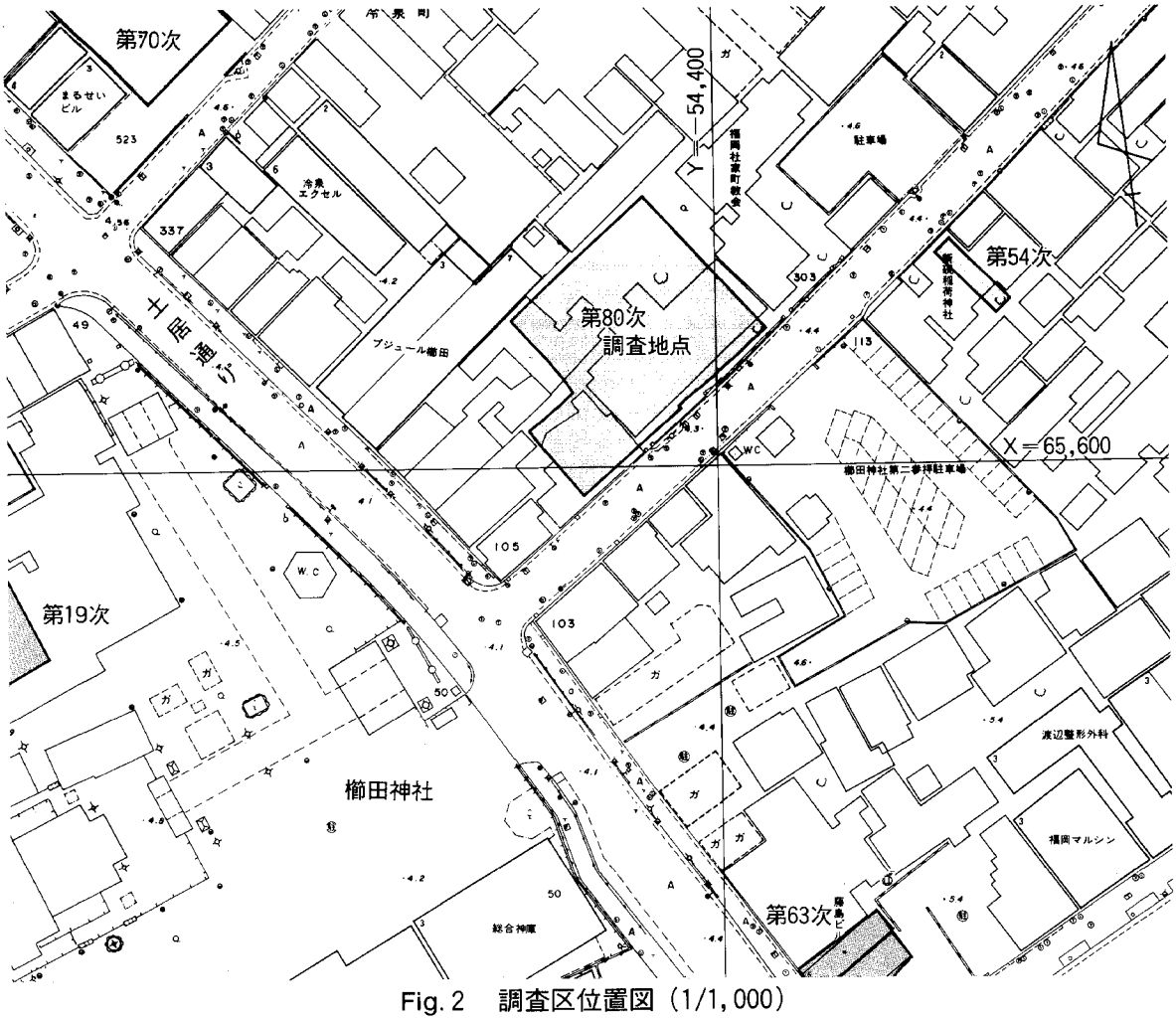


Fig. 2　調査区位置図（1/1,000）

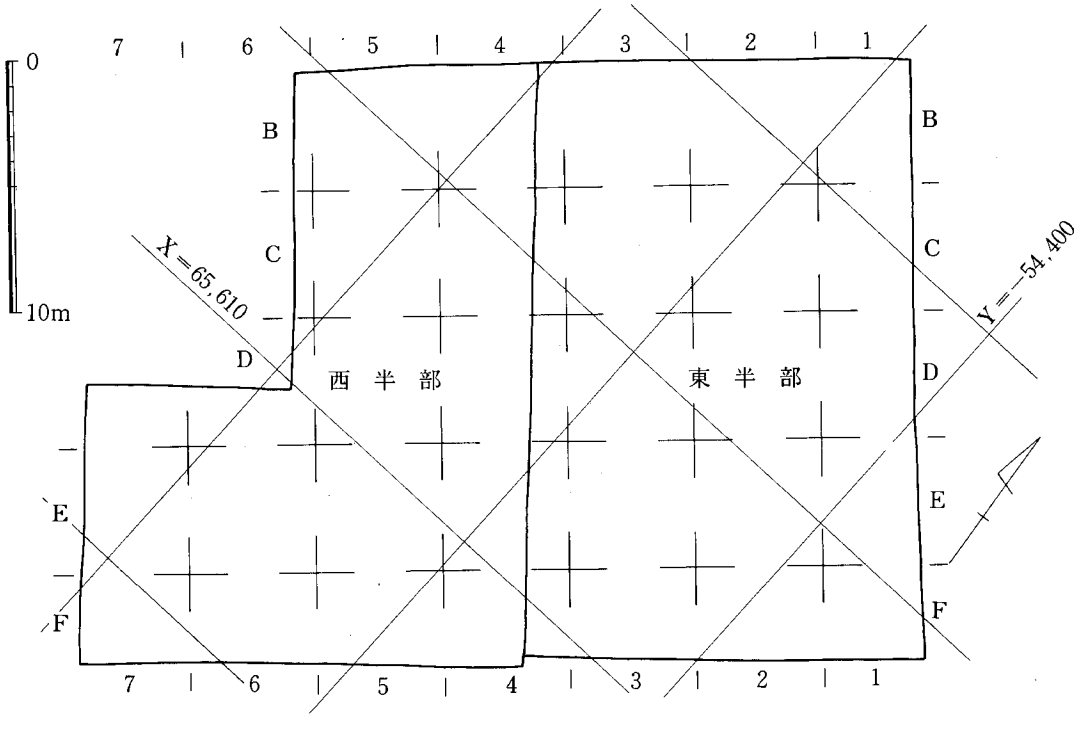


Fig. 3　調査区域図（1/300）

Ⅲ. 調　査　の　記　録

1．調査の経過

発掘調査は平成５年５月20日から開始した。当初は、約２カ月ほどで調査を一旦中断し、山留め（矢板）工事を行う予定であったため、取りあえず調査区を東西に分割し、東側半分から調査を開始した。しかし、山留め工事が大幅に遅れてしまい、結局工事を実施したのは、11月12日に東側半分の調査を終了させた後のことであった。工事後、南半分の調査を翌平成６年１月21日～３月31日に実施したが、結果として東側は明かり掘削となってしまい、隣地との間に引きを多く取ったため、下層に行くほど西側に比べて調査範囲が若干狭くなっている。

発掘調査は、試掘調査のデータをもとに、地表下0.7ｍまで重機によって掘削し、ここを１面とした。表層には現代を中心とする多数の攪乱坑があり、１面でもこれらが多数残っていた。その後、試掘トレンチの清掃を行い基盤層までの土層の観察を行った。整地層と見られる水平堆積層も一部に見られたが、各時代の遺構の切り合いが激しく、面的に広げることが可能な鍵層が存在しなかったため、特定の整地面上での遺構検出は不可能と判断し、２面以降は約0.3ｍおきに機械的に掘り下げて、人為的な遺構検出面を設定しながら調査を進めた。遺構検出面は基盤層上での最終面を含めて５面を数えた。また、東１面の検出遺構の大半が近・現代の攪乱坑であったため、後期に調査をおこなった西半部では１面の調査を割愛し、２面から調査を開始した。切り合いの多さと調査の未熟さにより、遺構の検出には困難を極め、上位の面で検出すべき遺構を下位の面まで持ち越したことがよくあり、その結果、各遺構面を時代別に掘り上げることができなかった。

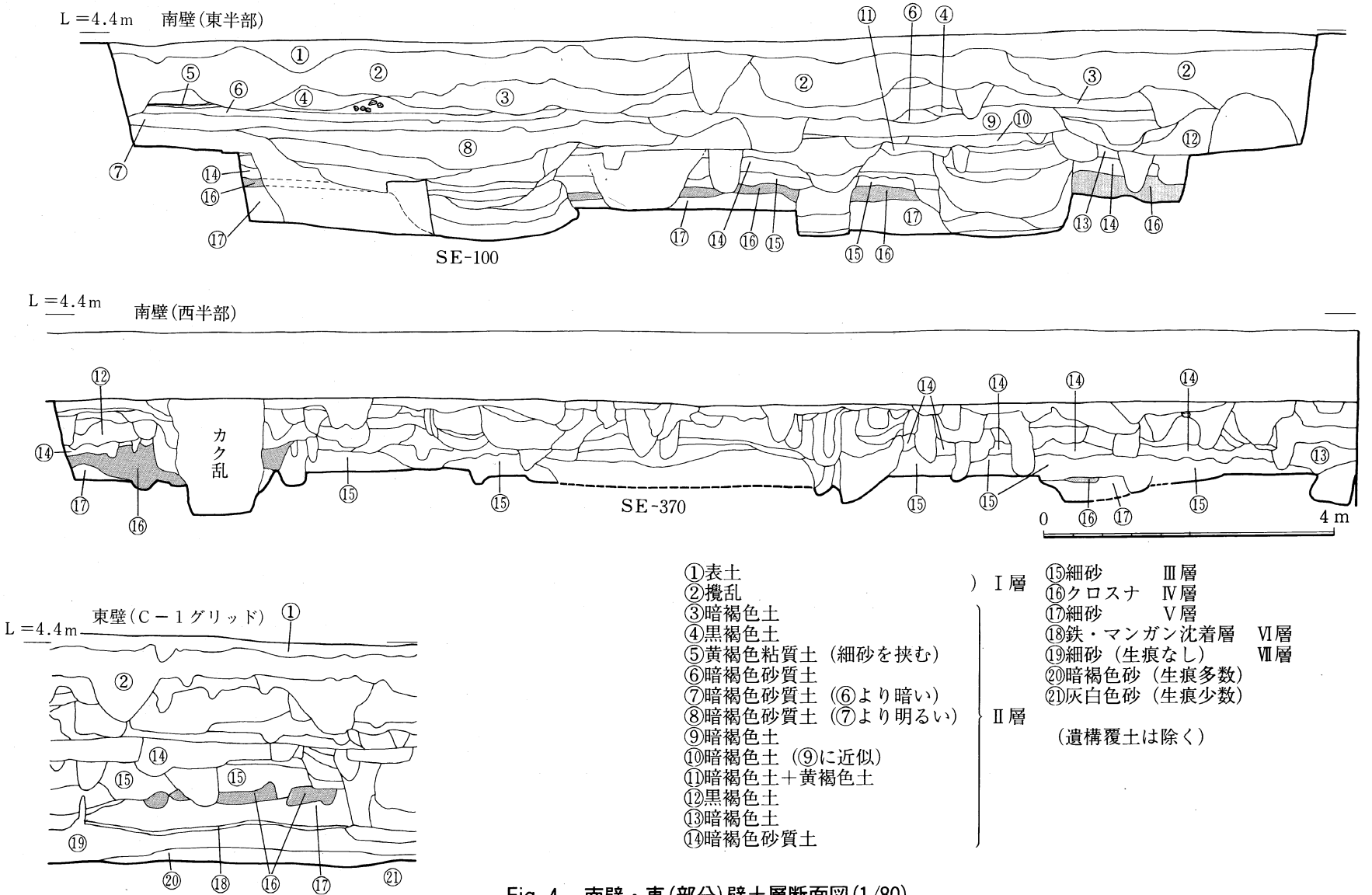
調査区には、現在の町割りと同じ方向を軸とした５ｍ方眼のグリッドを設け、名称を北から南へＢ～Ｆ、東から西へ１～７とし、包含層（整地層）出土遺物はこのグリッドごとに取り上げた。

また、調査終了後、出土した歓喜天像鋳型について平成６年４月５日に記者発表を行った。

2．調査の概要

(1)層序　Fig. 4　PL.25

地表面では、調査区内の北端部と南端部では比高差が0.3ｍある。調査直前には地ならしされた平坦面であったが、本来は複数に区画された段状の敷地が存在していた可能性がある。また、基盤である砂層も緩やかに北から南へ下っている。調査区内の土層は、大きく見ると、上層より、Ⅰ表土（攪乱層）（①～②）、Ⅱ近世～中世の遺物包含層（暗褐色土を主体とする）（③～⑭）、Ⅲ細砂層（⑮）、Ⅳ黒色砂層（⑯）、Ⅴ細砂層（⑰）、Ⅵ鉄分の沈着層（⑱）、Ⅶ細砂層（⑲）で、以下水成砂と見られる砂層が続く。Ⅰ層は近世～現代の整地層を含み、地表下0.7ｍまで堆積している。攪乱坑によって寸断されている。Ⅱ層は調査の主たる対象となる層で、整地層、焼土層を含み、地表下0.7～1.75ｍまで約１ｍの厚さに堆積している。中世～近世の文化層である。Ⅲ層は風成砂で（西南学院大学　磯望氏のご教示による）、塵芥が細かい縞状に堆積している。層中には古代の遺物が含まれる。Ⅳ層はクロスナ層で、この層の上面から古代の遺構が掘りこまれている。また、この層の上面で動植物の生痕が多数見られた。Ⅴ層の上面で弥生時代後期の遺構を検出した。またⅤ層以下にも弥生土器が含まれており、Ⅶ層あたりまで弥生時代中期の遺物が出土する。Ⅴ層は海浜砂が流され、河口部に二次堆



①表土
②攪乱
③暗褐色土
④黒褐色土
⑤黄褐色粘質土（細砂を挟む）
⑥暗褐色砂質土
⑦暗褐色砂質土（⑥より暗い）
⑧暗褐色砂質土（⑦より明るい）
⑨暗褐色土
⑩暗褐色土（⑨に近似）
⑪暗褐色土＋黄褐色土
⑫黒褐色土
⑬暗褐色土
⑭暗褐色砂質土

）Ⅰ層
Ⅱ層

⑮細砂　Ⅲ層
⑯クロスナ　Ⅳ層
⑰細砂　Ⅴ層
⑱鉄・マンガン沈着層　Ⅵ層
⑲細砂（生痕なし）　Ⅶ層
⑳暗褐色砂（生痕多数）
㉑灰白色砂（生痕少数）

（遺構覆土は除く）

Fig. 4　南壁・東(部分)壁土層断面図(1/80)

積した砂ではないかとの指摘を受けた。また、Ⅶ層には動植物の生痕はないが、それより下位の層には再び多数を見ることができる。

(2) 1 面の概要　Fig. 5　PL. 1

東半部で地表下約0.7mに設定した最初の遺構検出面である。2面と時期差がほとんど見られなかったため、西半部では1面の調査を省いている。検出面を表土の傾斜に合わせて設定したため、北端と南端で約0.3mの比高差を生じた。調査区の北端を占める大きな攪乱坑は、つい先頃銀杏の大木を移植するために掘られたもので、この銀杏は現在、冷泉公園の中に植樹されている。検出した遺構は、近世～現代の井戸、土坑、柱穴などである。井戸のうち1基は、石組井戸で、石は抜き取られている。土坑は大半がゴミ棄て穴と見られ、瓦積の地下室状遺構(SX-10)などを除いて、近、現代のものが多い。柱穴は調査区の北隅に礫を礎盤に用いたものが見られたが、建物として復元するに至らなかった。

1面の年代は一部に16世紀代の遺構を含むが、概ね江戸時代以降で、「櫛田裁縫学校」の解体工事によるものと見られる攪乱坑が多い。

(3) 2 面の概要　Fig. 6　PL. 2

1面からマイナス0.3mに設定した遺構検出面である。東半部では井戸などの深い遺構を除いて、近世以降のものは含まれないが、西半部ではこの面から調査を始めたため、近世以降のものも含まれる。溝（道路）、瓦溜り、石組の建物基礎、鋳造関連遺構、土坑等の14～16世紀の遺構を中心に検出した。瓦溜り(SX-61)からはコンテナ箱にして約150箱の瓦が出土した。石組建物基礎は3棟検出し、うち1棟(SB-45)はこの瓦溜りを埋めて整地した跡に建てられており、瓦はこの建物の建て替えに伴

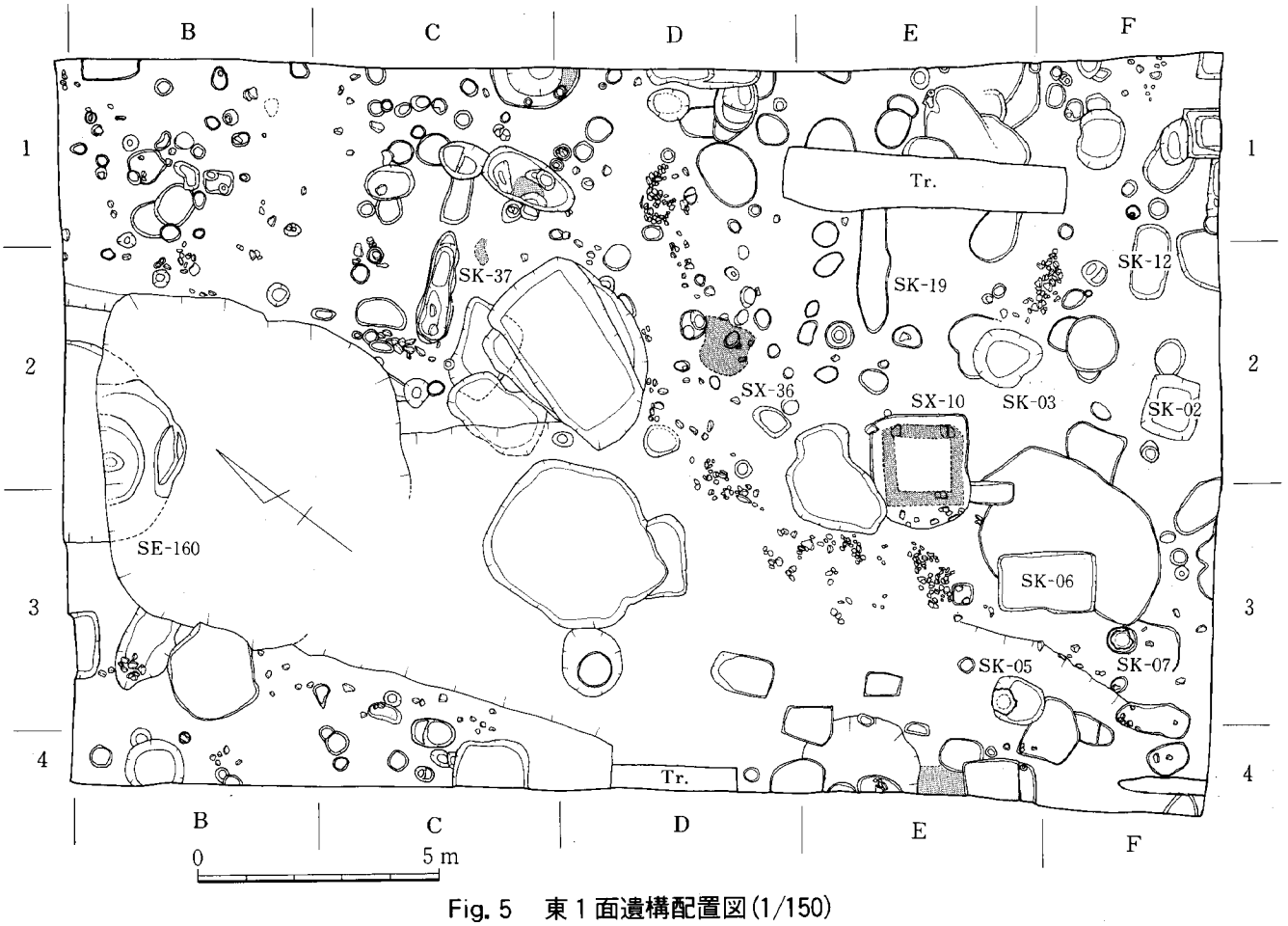


Fig. 5　東1面遺構配置図(1/150)

って廃棄されたものである可能性が強い。鋳造関連遺構が2ヵ所あり、ひとつは廃棄土坑(SK-48)を中心に固くしまった生活面や焼土等が周囲に見られた部分で、土坑からは密教の秘仏である「歓喜天」像の鋳型とともに、取瓶、砥石、原料となった銅銭などが一括して出土している。他方は鍋の鋳型が廃棄された土坑(SK-211)である。この面からの出土遺物には、一括埋納された備蓄銭159枚(SK-217)、分銅、錠前等がある。

(4) 3面の概要　Fig. 7　PL. 3

2面からマイナス0.3mに設定した遺構検出面である。遺構の大半は柱穴等のピットである。最も遺構検出が困難だった面である。本来この面で検出すべき遺構を見逃し、次の4面まで下げたところで確認したものが多い。検出面の土質は、1、2面と同様、暗褐色土であった。柱穴以外の検出遺構には、溝、井戸、土坑などがある。溝(SD-40)は多数が重なって検出され、道路の側溝である可能性が強い。北側が後世の遺構に切られており、狭い範囲で確認したのみだが、さほど大きな道路ではないと考えられる。出土遺物には、井戸(SE-300)から出土した湖州鏡などがある。また、この面の遺構には、土師器を一括廃棄した土坑が多い。また、輸入陶磁器の出土量は全体的に少なかった。

3面の検出遺構はおおむね12～14世紀頃のものが主体を占める。

(5) 4面の概要　Fig. 8　PL. 4

Ⅲ層の上面に設定した遺構検出面である。遺構検出面が黄褐色の砂層に変化したため、これまでの面で見落としていた遺構を含めた、多数の遺構を検出した。主な遺構は、溝状遺構、井戸、土坑、木棺墓などである。溝状遺構は現在の町割りに近い方向のものと、調査区の西に向かって集まる特異なものがある。井戸は、同じ場所で切り合ったものが多く、通常の桶側井戸の他に板材を方形に組んだものなどが見られる。木棺墓(SK-360)は今回の調査で唯一確認した埋葬遺構である。墓の頭位置に石塔を立てていたと見られ、人骨は腐食していたが、青磁椀2点と土師器皿6点が副葬されていた。

4面の遺構は、11世紀後半から12世紀前半にかけてのものが主体を占める。

(6) 5面の概要　Fig. 9　PL. 5、6

Ⅴ層上面に設定した遺構検出面である。東半部ではⅣ層上で一度遺構の精査を行い、全体写真を撮影したが、後期に実施した西半部の調査では遺構の密度が薄く、調査期間の不足もあってⅣ層上での調査を省いた。従って正確には5面は上下2面に分けられることになる。

Ⅳ層上では、奈良時代後半の竪穴住居跡4棟と溝1などを検出した。竪穴住居跡は、一部に床面が見られたものの残りが悪く、柱穴を確認したのみである。いずれも4本柱の竪穴住居跡である。溝は現在の町割りの方向に近い。当該期の遺構は密度が薄く、遺物の出土量も少ない。

Ⅳ層中からは古墳時代前期の古式土師器が出土したが、当該期の遺構は検出できなかった。

Ⅴ層上面では弥生時代中期後半の竪穴住居跡、小児甕棺墓を検出した。遺構のプランは不明瞭であったが、出土土器にはローリングを受けた痕跡は全く見られなかった。Ⅵ層上面で、標高は約2mを測るが、現在の湧水レベルが標高1.2mであることから見ても、生活適地としては水際の限界に近い場所に相当するものと見られる。また、周辺で過去に行われた調査では弥生時代の明確な遺構は確認されておらず、今後の周辺での調査による追確認を期待したい。

Ⅴ層中、及びⅦ層からは、弥生時代中期の土器が出土している。Ⅴ層は海浜砂が流され、河口部に二次堆積した砂と見られるが、出土した土器に著しくローリングを受けたものは見受けられず、調査地周辺のごく近い場所から流れ込んだものと考えられる。

Fig. 6　2面遺構配置図(1/150)

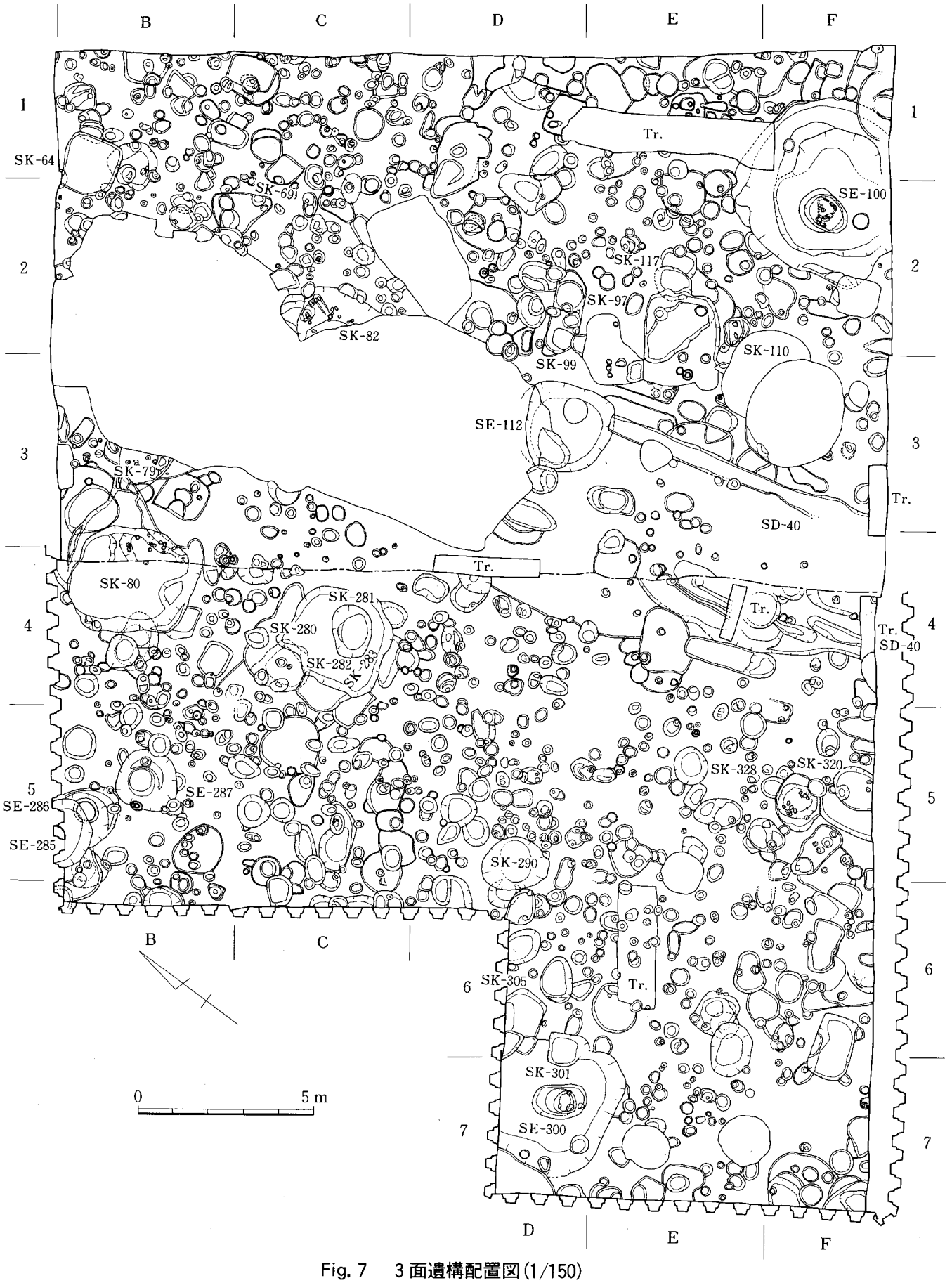


Fig. 7　3面遺構配置図(1/150)

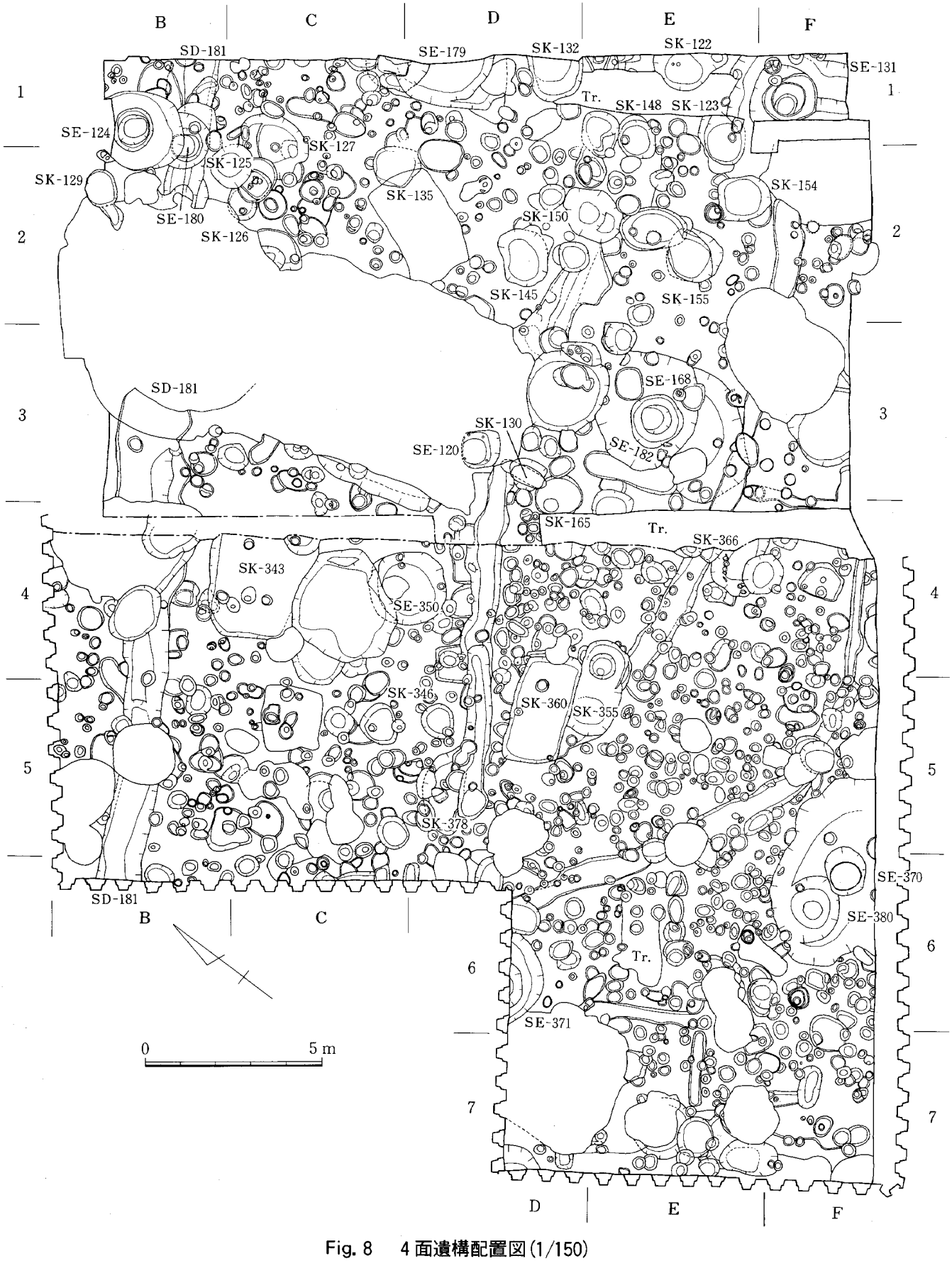


Fig. 8　4面遺構配置図(1/150)

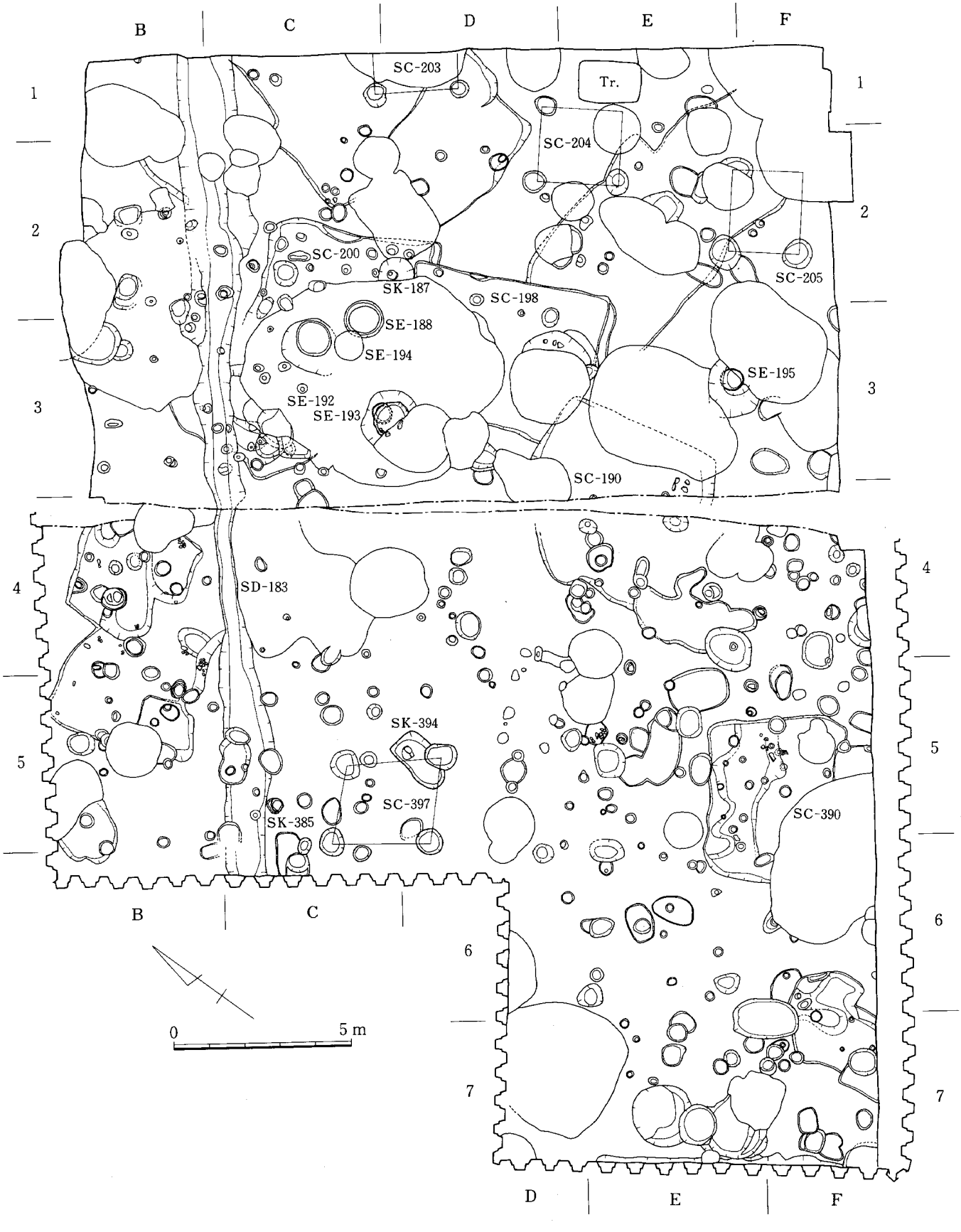


Fig. 9　5面遺構配置図(1/150)

3．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、プラン等が明瞭でないものが多い。ここでは竪穴住居跡４、土坑３を報告するが、他にも平面形のはっきりしない落ち込みが見られた。基盤の砂層中にも弥生土器が多量に含まれており、砂丘上に自然発生した浅い窪みである可能性もある。

(1)竪穴住居跡

竪穴住居跡は４棟を報告する。

ＳＣ－１９０　Fig.10　PL.6

５面に検出した方形プランをとると思われる遺構である。Ｄ～Ｅ－３～４グリッドに位置する。東西の調査区にまたがって検出され、西半部ではそのプランが不明瞭であった。中世の井戸、土坑などによって寸断されている。南北6.0ｍ、東西5.0ｍを測り、南北にやや長い。床面までの深さは0.25ｍを残す。床面には主柱穴は確認できない。また、炉、焼土等も検出されなかった。プランが不鮮明で、竪穴住居跡とするにやや疑問の残る遺構である。

ＳＣ－１９０出土遺物　Fig.12　PL.26

１～３は弥生土器である。１は直口の甕形土器である。胴部が内湾気味にすぼまり、面取りして、そのまま口縁としている。外面刷毛目調整の後、ナデ調整を施す。口径は28.0cmを測る。２は鋤先口縁の壺形土器である。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。横ナデ調整し、外面には赤色顔料を塗布する。口縁は外径で20.0cmを測る。弥生時代中期の土器で、包含層から混入したものであろう。３は甕形土器で、口縁は「く」字形に緩く屈曲し、内面の稜は明確でない。外面に刷毛目調整、内面は板状工具でナデ調整する。口径29.2cm。

以上の出土土器は、弥生時代後期前半に比定されよう。

ＳＣ－１９８　Fig.10　PL.7

東５面に検出した隅丸方形プランの遺構である。Ｄ－３グリッドに位置し、北側を近世井戸SE－35に大きく切られている。南北に長く、5.8ｍ×4.5ｍを測る。壁は0.25ｍの深さが残る。床面には柱穴、炉、焼土等の施設は検出されなかった。整った平面形をしており、竪穴住居跡と考えられる。

ＳＣ－１９８出土遺物　Fig.13　PL.26

４、５は弥生土器の甕形土器で、同一個体と見られる。４は口縁部片で、口縁屈曲部内面の稜は明瞭ではない。胴部外面に刷毛目調整、内面にナデ調整を施し、口縁内面は刷毛目調整する。口径は34.0cmである。５は平底の底部片で、外面に刷毛目調整、内面にナデ調整を施す。底面には、焼成後に外面より穿孔しており、孔の径は2.0cmを測る。

出土土器は、弥生時代後期前半に比定されよう。

ＳＣ－２００　Fig.11　PL.7

東５面に検出した。SC-198の北隣りに位置しており、南端部をこれに切られる。また、西～南側を近世の井戸SE－35に大きく切り取られている。南北に長い隅丸方形プランの竪穴住居跡で、南北4.8ｍ、東西は3.5ｍ以上になる。深さは0.25ｍが残っている。床面には多数のピットを検出したが、住居跡の主要部分が失われているため、いずれが主柱穴か不明である。貼床、炉、焼土等は検出できなかった。覆土からは、弥生時代後期前半の土器が出土した。

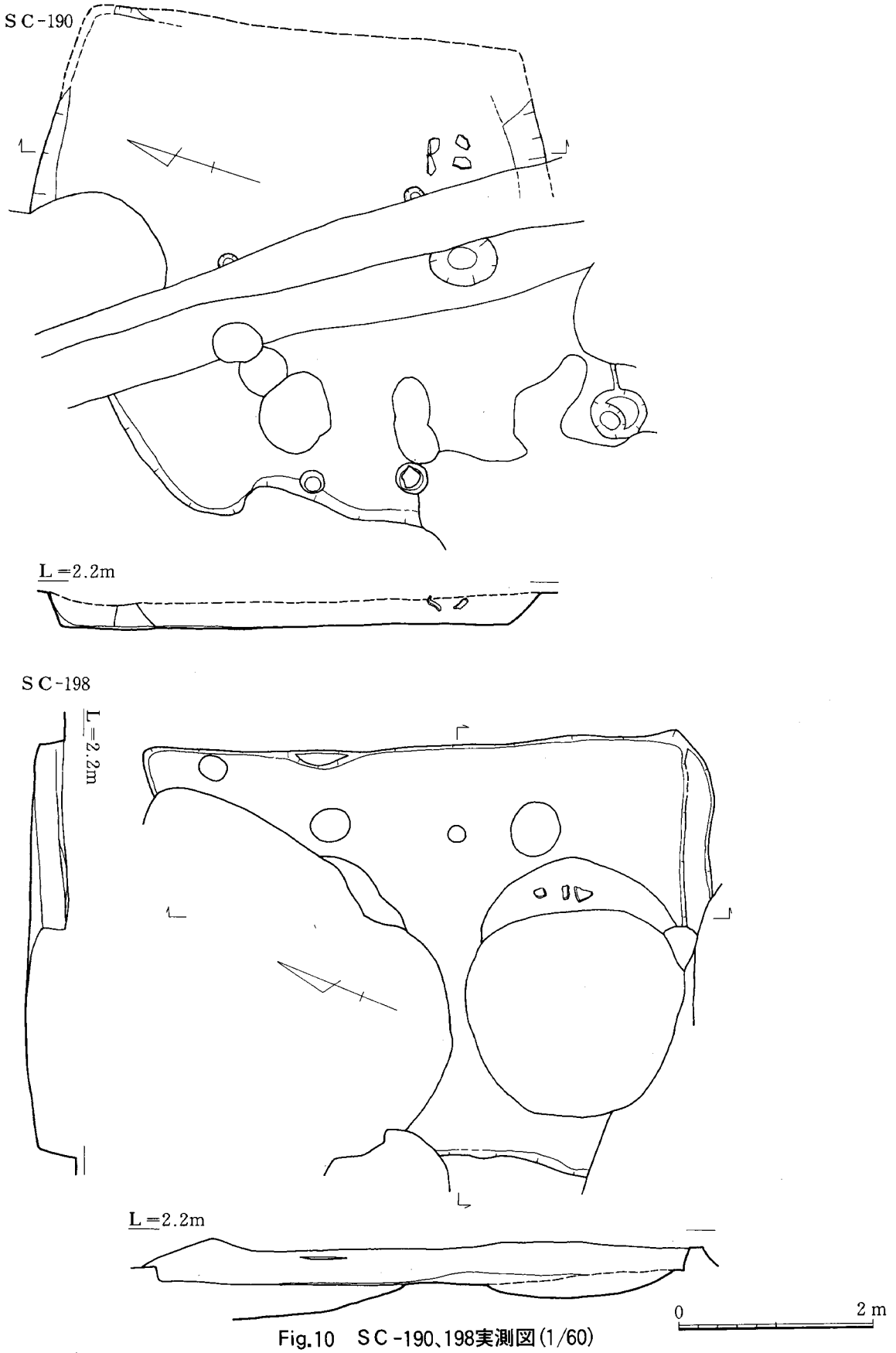


Fig.10　SC-190、198実測図(1/60)

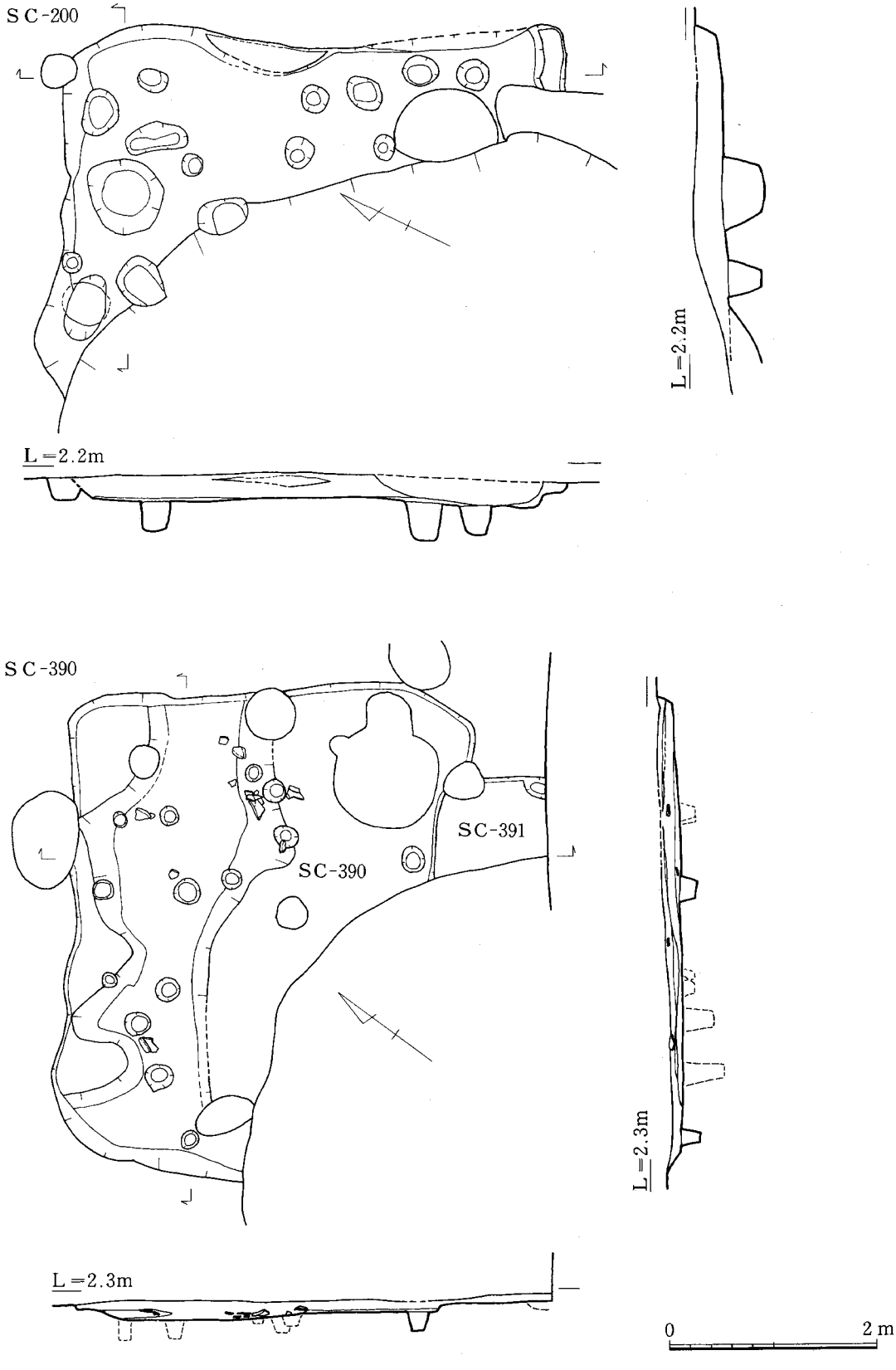


Fig.11　SC-200、390実測図(1/60)

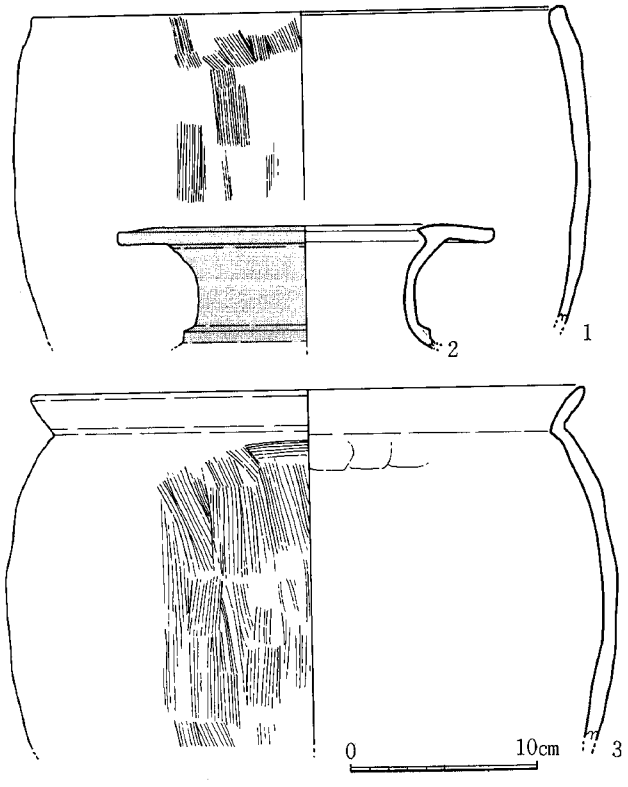


Fig.12　SC-190出土遺物実測図(1/4)

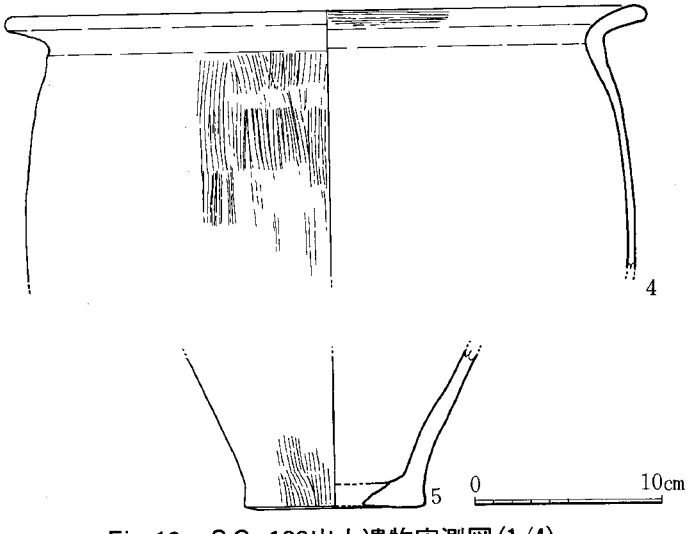


Fig.13　SC-198出土遺物実測図(1/4)

SC－390　Fig.11　PL.8

西5面に検出した竪穴住居跡である。E～F－5～6グリッドに位置する。南側約1/4は中世の井戸SE-380に切られている。また、南東側に別の住居跡と見られる掘り込み（SC-391）があり、これにも切られている。北東－南西の方向に長い隅丸方形プランを呈し、長4.65m、幅3.9mを測る。深さは0.15mで、残りが悪い。床面には、北西辺に沿って、段状に一段高くつくり、ベッド状遺構としている。床面にはピット13を検出した。深いピットもあるが、主柱穴は明らかにしがたい。貼床、焼土、炉は検出できなかった。床面に貼り付いた状態で弥生土器が出土している。

SC－390出土遺物　Fig.14

6、7は弥生土器である。ともに甕形土器の口縁部片である。6は「く」字形に屈曲して、短く開く口縁をなし、端部は面取りされる。頸部に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内外面をナデ調整、口縁部を横ナデ調整する。口径は36.4cmである。7は、口縁の屈曲部が内側へ突出し、口縁は内湾して開き、端部は丸い。頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、横ナデする。胴部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。口径は33.4cmである。

以上の土器は、弥生時代後期前半に比定されよう。

(2)甕棺墓

甕棺墓は3基検出した。いずれも小児棺で、甕の底部に穿孔したものを用いている。

SK－187　Fig.15　PL.8

東5面に検出した。弥生時代後期前半の竪穴住居跡SC-200の上面で検出し、これを切っている。掘り方の西側半分は近世井戸に切られている。棺は単棺で、掘り方中央部の基底面からやや浮いた位置に据えられている。伏せ置きし、底部を少し北に倒している。底部は穿孔している。覆土が住居跡覆土に近似しており、掘り方は明瞭ではなかったが、円形プランと見られる。南北径は1.0mで、掘

り方の深さは0.5mを測る。

ＳＫ－１８７出土遺物　Fig.16　PL.26

出土遺物は、甕棺に使用された甕形土器１点のみである。８は弥生土器の甕形土器で、口縁部は「く」字形に屈曲し、やや外反して開き、端部は丸い。胴部は肩の張る器形をなし、最大径は中位よりやや上にある。底部は平底で、焼成後に穿孔している。調整は、外面が縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整で、底部には指頭痕が残る。ほぼ完存しており、口径24.9cm、器高27.5cm、底径9.6cmを測る。底部孔の径は2.6cmである。

弥生時代後期前半に位置づけられよう。

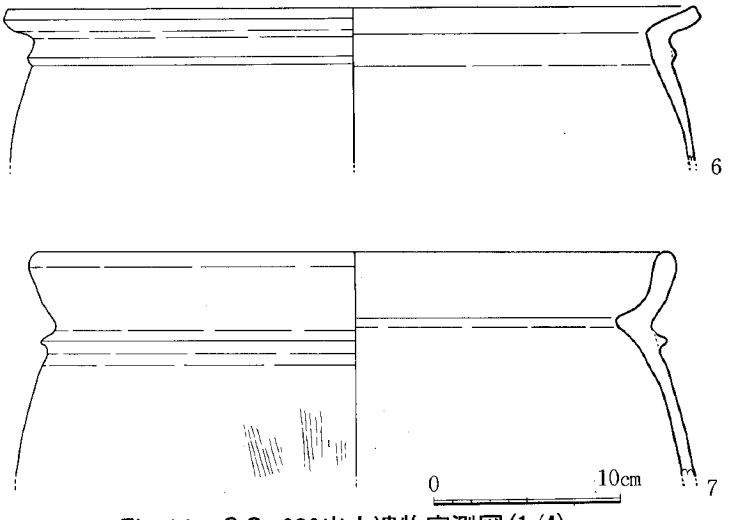


Fig.14　ＳＣ-390出土遺物実測図(1/4)

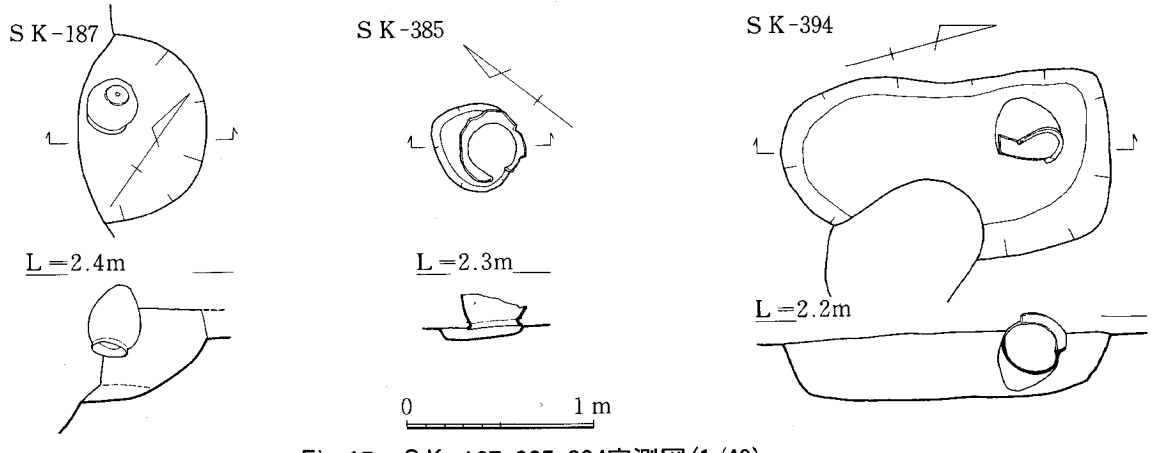


Fig.15　ＳＫ-187、385、394実測図(1/40)

ＳＫ－３８５　Fig.15

西５面に検出した。調査区西端のＣ－５グリッドに位置する。４面から５面に遺構検出面を下げる途中で甕棺が出土し、掘り方を飛ばしている。掘り方は僅かに基底部のみが確認できた。棺は掘り方の南側に寄せて据えられ、口縁をほぼ水平にして伏せて置かれている。単棺である。底部は棺内に落ち込んだ状態で出土した。

ＳＫ－３８５出土遺物　Fig.17　PL.26

甕棺が破砕した状態で出土した。胴部の破片がな

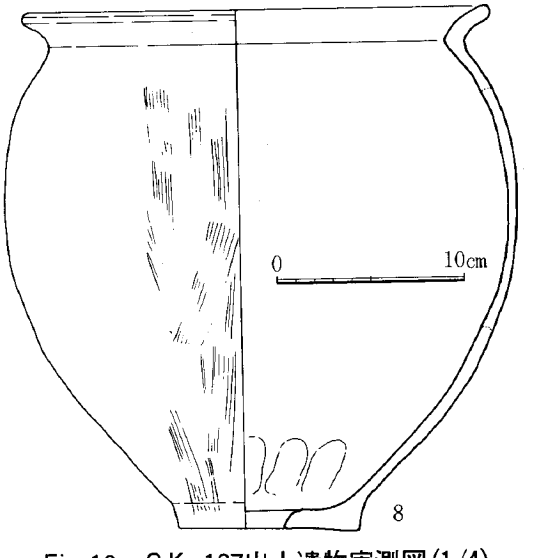


Fig.16　ＳＫ-187出土遺物実測図(1/4)

く、接合できない。9、10は埋葬主体として使用された甕形土器で、同一個体である。口縁は屈曲して短く開き、端部は丸い。頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、横ナデする。内外面に刷毛目調整を行い、内面は刷毛目の上からナデ調整を加えている。底部には指頭痕が残る。口径31.4cm、底径10.2cmを測る。

弥生時代後期前半に位置づけられよう。

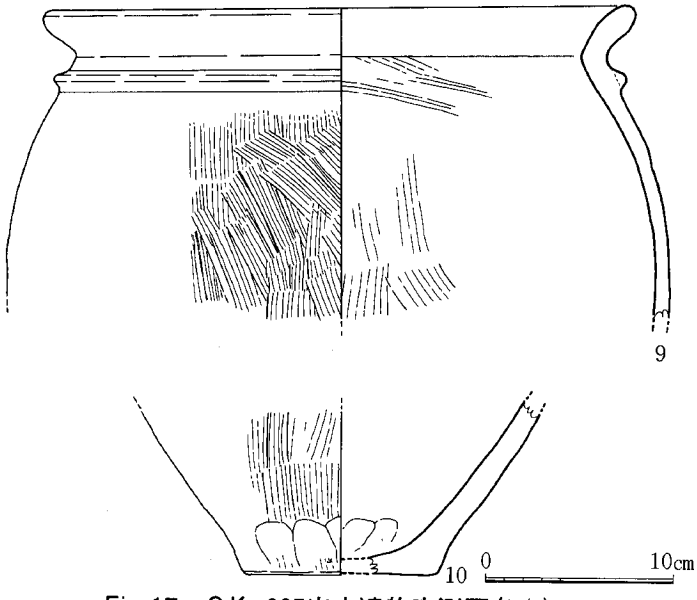


Fig.17　SK-385出土遺物実測図(1/4)

SK－394　Fig.15

西5面に検出した。D－5グリッドに位置する。掘り方の一部を古代の竪穴住居跡SC-397の柱穴に切られている。棺は掘り方の北よりに置き、口をやや上に向けて、横臥させる。甕棺の主軸は、掘り方の長軸とほぼ直交する。掘り方は南北に長い隅丸方形プランを呈し、長さ1.75m、幅0.95mを測る。深さは0.35mで、掘り方の底面は平坦につくる。

SK－394出土遺物　Fig.18 PL.26

11は埋葬者をおさめた甕形土器である。口縁は「く」字形に屈曲し、外反して短く開き、屈曲部内面の稜ははっきりしている。胴部は肩が張り、最大径はやや上位にある。底部には径2.6cmの孔を焼成後に穿つ。外面にはかなり細かい刷毛目調整を施しており、内面は指頭痕の上からナデ調整している。頸部内面は横位の刷毛目調整を施している。口径27.3cm、器高36.5cm、底径10.0cmを測る。

弥生時代後期前半の土器であろう。

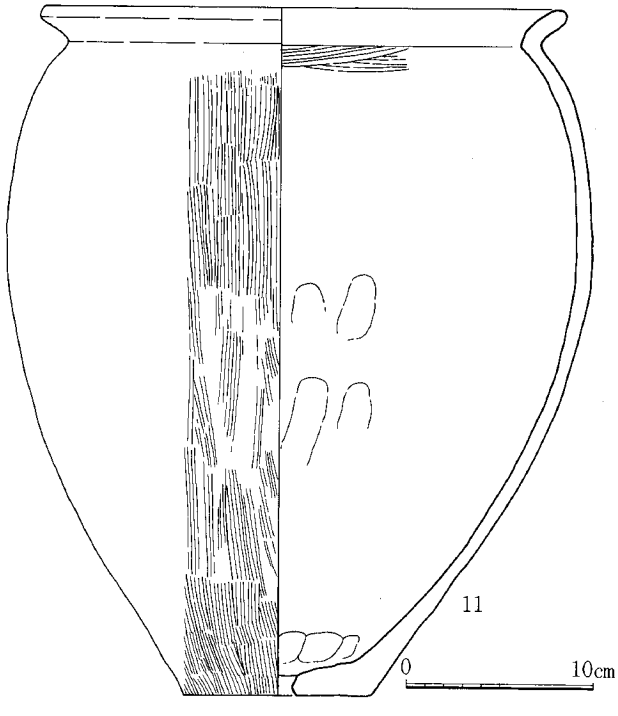


Fig.18　SK-394出土遺物実測図(1/4)

4．古代の遺構と遺物

古代の遺構のうち、竪穴住居跡は全て床面がなく、主柱穴を確認したのみである。遺構はクロスナの上面で検出され、覆土は灰褐色で、弥生、中世の遺構とは容易に区別し得る。

(1)竪穴住居跡

ＳＣ－２０３　Fig.20

東５面の東壁際に検出した。Ｃ～Ｄ－１グリッドに位置する。東側が調査区外へ伸びる４本柱の竪穴住居跡と見られる。調査区内で２本の柱穴を確認した。主軸は40°西へ振れる。柱穴は平面プランが円形で、径50～70cm、深さ26cmを測る。柱痕跡はない。柱穴覆土からは、弥生土器、古式土師器の小片が少数出土したが、他の遺構より見て、古代の竪穴住居跡と考えられる。

ＳＣ－２０４　Fig.20

東５面で検出した。SC-203の南に２ｍ離れて位置している。主柱穴が４本の竪穴住居跡と考えられるが、東側のひとつは中世の土坑に切られ消滅している。主軸は34°西へ振れる。柱穴は平面形が円形で、径60～78cm、深さ21～40cmを測る。柱痕跡はない。柱穴掘り方からは、弥生土器、古式土師器、須恵器等が出土した。

ＳＣ－２０４出土遺物　Fig.21

出土遺物の大半は古式土師器であるが、それに混じって古代の土器が少数出土した。12は須恵器の

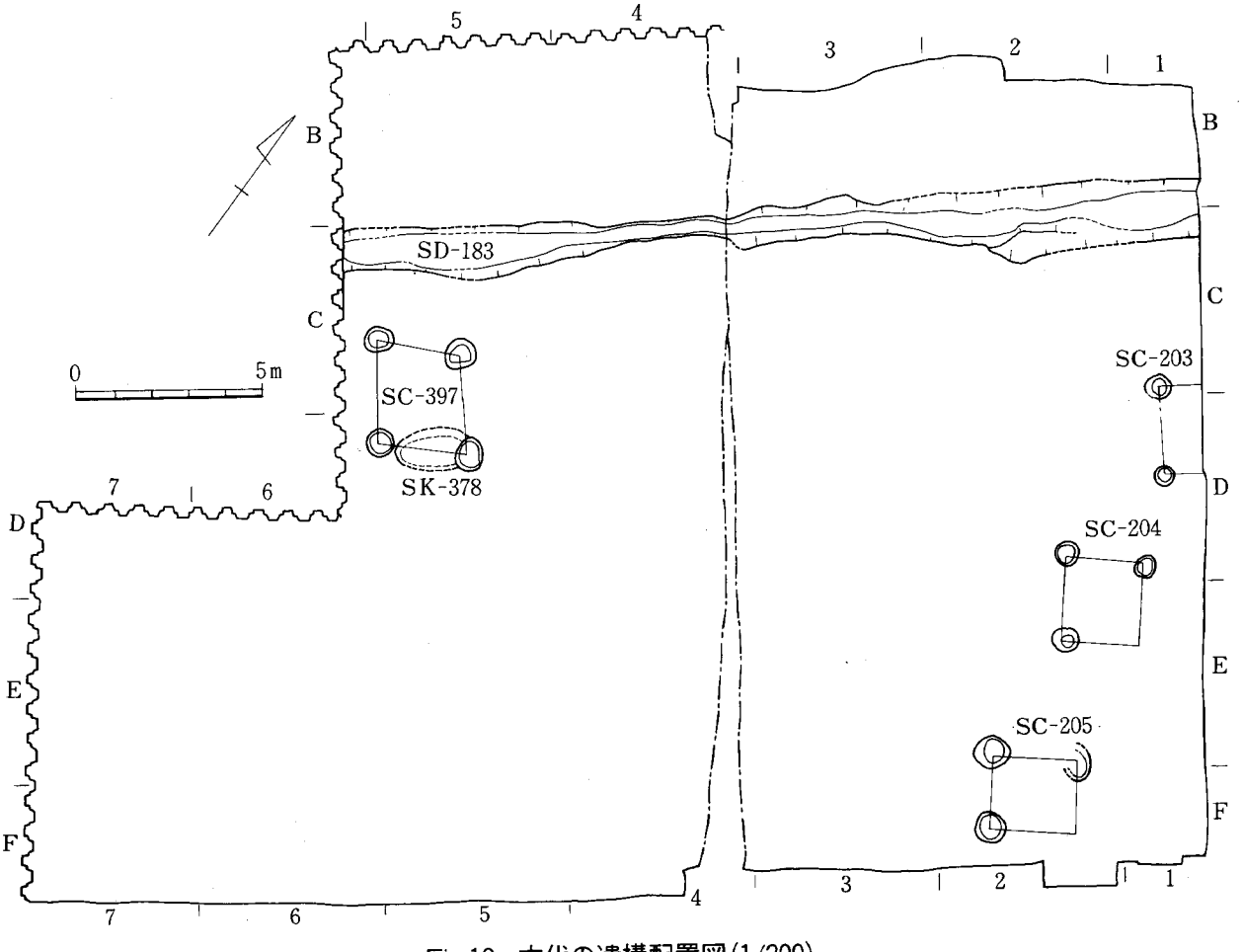


Fig.19　古代の遺構配置図(1/200)

坏である。底部外縁に低い高台を貼付する。高台径は8.5 cm。

ＳＣ－２０５ Fig.20

東５面で検出した。SC-204の南に３ｍ離れて位置している。主柱穴が４本の竪穴住居跡と考えられるが、東側のひとつは検出できなかった。削平されたものか。主軸は33°西へ振れる。柱穴は平面プランが円形で、径87～100cm、深さ15～46cmを測る。柱痕跡はない。柱穴掘り方からは、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器等が出土した。

ＳＣ－２０５出土遺物 Fig.21

13、14は須恵器坏で、高台が付く。13は体部との境に高台を貼付する。内底はナデ調整。高台径7.3cm。14は大坏で、高台は底部の内よりに貼付する。内底にナデ調整を加え、外底は回転ヘラ削り。高台径は13.2cmを測る。

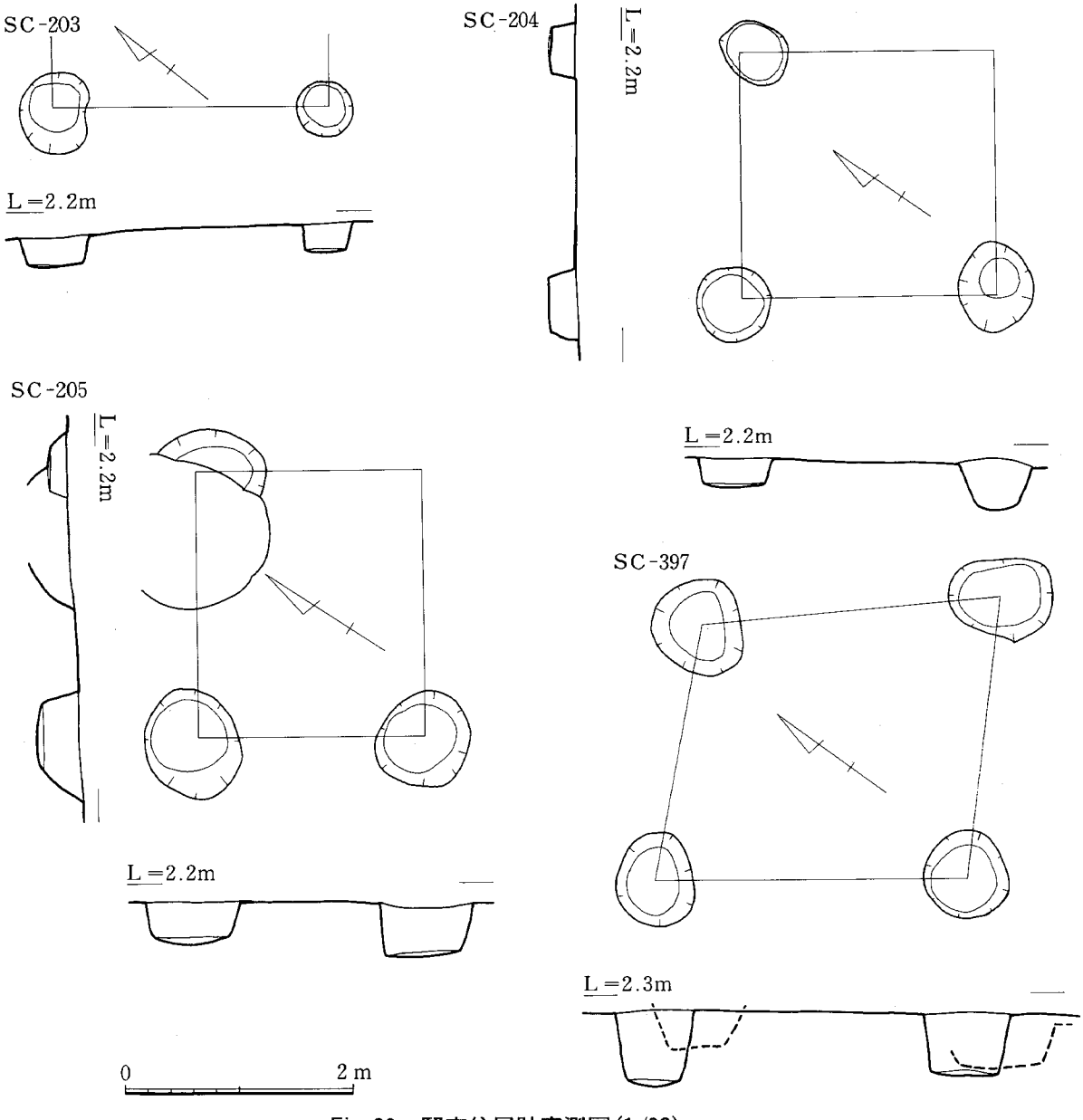


Fig.20 竪穴住居跡実測図(1/60)

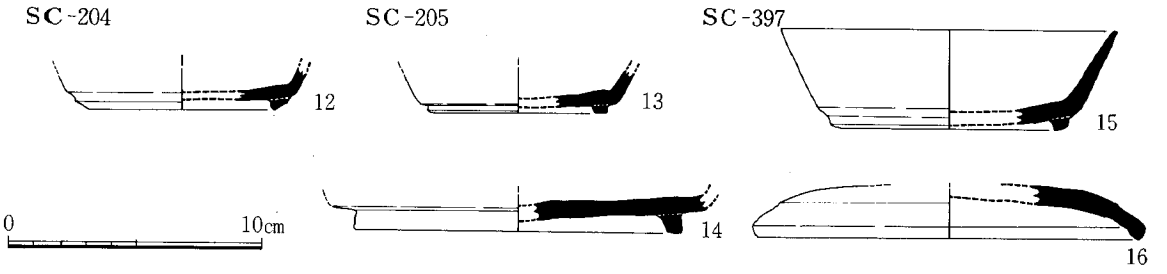


Fig.21　竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)

ＳＣ－３９７　Fig.20

西５面で検出した。Ｃ～Ｄ－５グリッドに位置しており、弥生時代の甕棺墓SK-397の掘り方を切っている。主柱穴が４本の竪穴住居跡と考えられる。主軸は35°西へ振れるが、柱穴の並びはやや歪で、軸が平行四辺形を呈する。柱穴は平面プランが円～長円形で、径75～90cm、深さ30～65cmを測る。柱痕跡は確認できない。柱穴掘り方からは、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器等が出土した。

ＳＣ－３９７出土遺物　Fig.21

15は須恵器坏で、底部に高台を貼り付ける。体部は直線的に開き、高台の位置は底部外縁に近い。口径13.4cm、器高4.0cm、高台径9.6cmである。16は須恵器蓋である。口縁端部は断面が三角形をなし、口唇部内面に段があるが、かなり退化したタイプである。天井部には回転ヘラ削り、内底にはナデ調整を施す。口径は15.8cm。

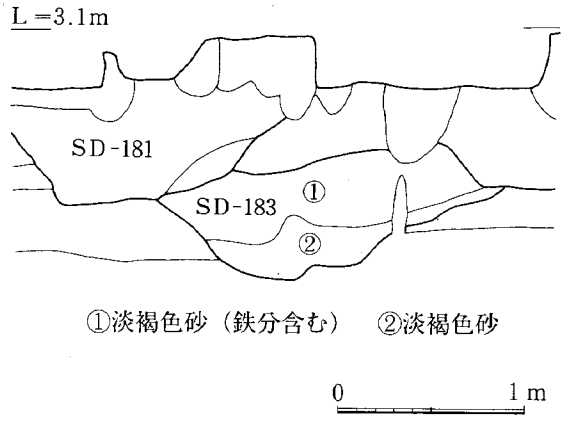


Fig.22　ＳＤ-183土層断面図(1/40)

(2)溝状遺構

ＳＤ－１８３　Fig.22　PL.9

東西の５面で検出した溝状遺構である。調査区の北壁沿いに、長さ23ｍを確認した。主軸の方位は磁北から51°東に振れており、現在の町割りの方向に近い。中世の溝SD-181に切られている。溝の幅は0.5～1.8ｍで、平均では約１ｍの幅を持っている。削平されて浅い部分もあるが、深さは0.4ｍ前後で、横断面形は浅皿状を呈する。溝の基底面は東から西へ緩く下っている。覆土は淡褐色砂で、２層に区分でき、上層には鉄分の沈着が見られた。

出土遺物は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器、古代の須恵器、無釉陶器等があるが、小片のため図化していない。

竪穴住居跡と同時期の遺構で、集落を画する溝と見られる。

(3)井戸

ＳＥ－１９５　Fig.23　PL.9

東５面に検出した。中、近世の井戸に切られ、掘り方はほとんど残っていない。現況で、掘り方の径は1.7ｍを測る。断面形はすり

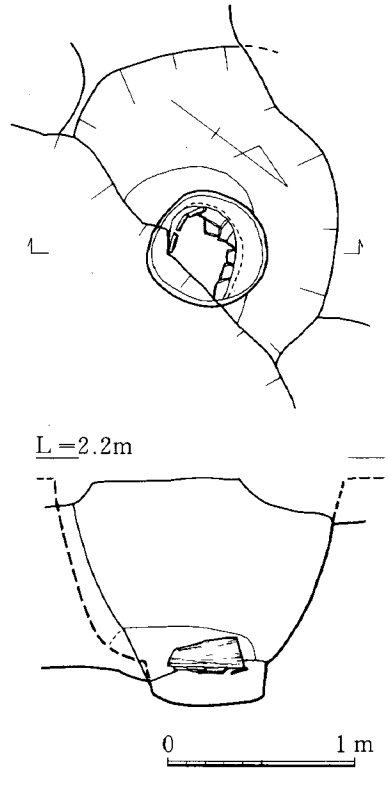


Fig.23　ＳＥ-195実測図(1/40)

鉢状を呈し、深さ0.98mで一旦平坦面をつくり、ここに井戸側を据える穴を掘っている。井戸側は湧水レベル以下にのみ残存しており、曲物を使用している。曲物は平面形が楕円形に潰れた状態となっており、基底には瓦を割って敷いている。

ＳＥ－１９５出土遺物

Fig.24　PL.26

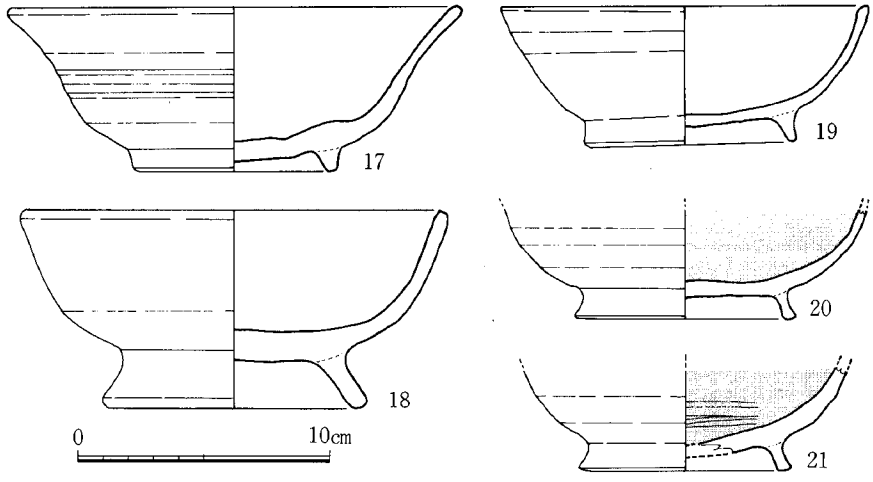


Fig.24　ＳＥ-195出土遺物実測図(1/3)

土師器坏、須恵器、黒色土器、瓦、緑釉、越州窯系青磁等が出土した。

17～19は土師器椀である。17は体部が比較的直線的で、口縁端部が少し外反する。高台は低い。口径18.0cm、器高6.5cm、高台径8.2cmを測る。18、19は体部が丸みを持ち、高台は高く、外方へ開く。18は口径17.0cm、器高7.9cm、高台径10.5cm。19は口径14.6cm、器高5.5cm、高台径8.5cmである。

20、21は内面のみに炭素を吸着させた黒色土器Ａ類の椀である。いずれも高台が高く、やや外開きとなり、土師器の椀に似た器形をなすものと思われる。21の内面のヘラ磨きは雑で、四分割して施されている。

17のみが時期的に若干古いが、他はおおむね10世紀前半～中頃の土器と考えられる。

(4)土坑

ＳＫ－３７８　Fig.25

西４面遺構を調査中に下層で検出したため、４面で調査を行った。Ｄ－５グリッドに位置する。中世の溝と多数の柱穴に切られており、遺構の残りは悪い。平面プランは東西に長い不整円形と見られ、長径2.5m以上である。深さは0.3mで、底面は平坦である。

竪穴住居跡SC-397柱穴のやや南よりの位置に検出しており、この竪穴住居跡に伴う土坑である可能性が強い。

ＳＫ－３７８出土遺物　Fig.26

遺物の出土量は少ないが、古代の須恵器、土師器甕、坏等が出土しており、ほとんどが奈良時代末～平安時代の時期の遺物で占められる。

22は土錘か。やや偏平な棒状を呈し、横断面形は楕円である。頭部と下端部に孔があけられており、下半部は孔から下が折れている。

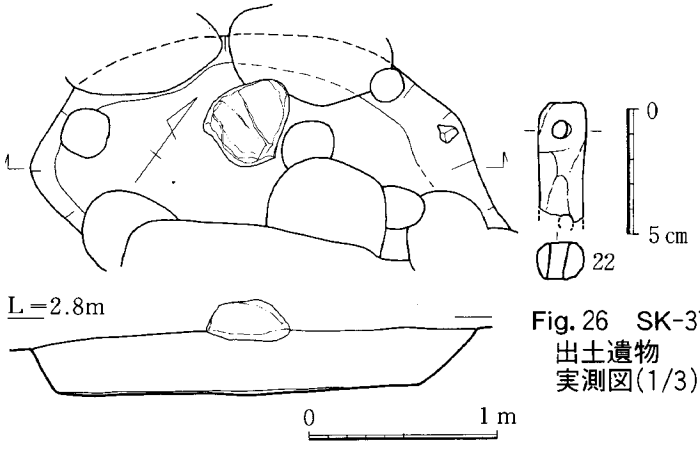


Fig.25　ＳＫ-378実測図(1/40)

Fig.26　SK-378出土遺物実測図(1/3)

5．中世の遺構と遺物

(1)建物遺構

建物遺構は石組基礎の遺構３棟を報告する。これ以外にも、調査区内では柱穴状のピットが極めて多数検出され、そのうちには掘立柱建物に復元したものもある。しかし、遺構検出面を越えた復元や出土遺物等の詳細な検討をしておらず、確実性を欠くため今回の報告からは省いた。他の掘立柱建物の復元を含め、今後に検討を加えて欠を補いたい。

ＳＢ－４５、４７　Fig.27　PL.10

東２面の東端部に検出した石組基礎の建物遺構である。礫を敷詰めて建物の基礎としている。２棟が切り合っており、新しい遺構をSB－45、これに切られる古い遺構をSB－47とした。

SB－45は調査区でＬ字形に曲がっており、東、南の調査区外にそれぞれ伸びている。主軸の方位は磁北から21°西に偏する。遺構の構築にあたっては、まず、基礎を組む部分を掘り窪め、礫で基礎を組んだ後、固定する為に掘り方内に粘土を充填して突き固めている。掘り方は石組に沿うようにして掘られ、西側のSB－47を破壊している。材に用いられた礫は、径５～20cmの川原石で、拳大のものが多く、上面が平坦になるように面を揃えている。石組の固定のために入れられた粘土は、灰褐色の粘土で、この粘土は西側へ伸びて、後述する瓦溜りSK－61の上を覆っていた。

SB－47は北側をSB－45に破壊されており、南側は調査区の外へ伸びている。主軸の方位は、磁北から28°東偏する。上面は瓦溜りSK－61同様、SB－45を固定する粘土に全て覆われており、この粘土を撤去した後に発見した遺構である。SB－45と比べ、掘り方が明瞭でなく、粘土も顕著には見られなかった。ただし、材の礫は偏平な礫を選択して用いた状況が見られ、石組の上面はSB－45よりも面が揃っており、丁寧な造りである印象を受ける。

また、SB－45のコーナーから、西側へ伸びる石列を検出したが、礫は散乱した状況で、瓦等も含まれており、石組基礎とするには疑問が残る。

以上の建物は、同一の場所で、方向を変えて（49°回転させて）建て替えられた建物の痕跡であり、建て替える際に多量の瓦が廃棄されていることから、瓦葺きの建物であったと見られる。

遺構の時期は瓦溜りSK－61との関係から、14世紀代に比定できよう。

ＳＢ－２４０　Fig.28　PL.11

西２面のＣ～Ｄ－４～５グリッドに検出した石組基礎の建物遺構である。後世の遺構による破壊が著しく残りが悪いが、方形プランに組まれた基礎と思われる。東西３ｍ、南北４ｍ程度の範囲に粘土を敷き詰め、この中に一辺2.5ｍの正方形に石を組んでいる。主軸方位は磁北から７°西偏する。遺構の構築にあたっては、SB－45と同様、基礎を組む部分を掘り窪めて、その中に礫で基礎を組み、粘土（①層）を充填して固定している。掘り方は石組に沿うようにして掘られており、ここに厚く粘土を充填する。石組内部には粘土を薄く貼っている。石組は後世の遺構による破壊によって大部分が散乱しているが、自然の転石を用いており、石組の上面は面が不揃いで、全体的にSB－45ほど丁寧なつくりではないようである。出土遺物は石組に含まれていた瓦等が少数あるのみである。

遺構の時期は明確ではないが、構築方法の類似から、SB－45に近い時期の遺構と見られる。

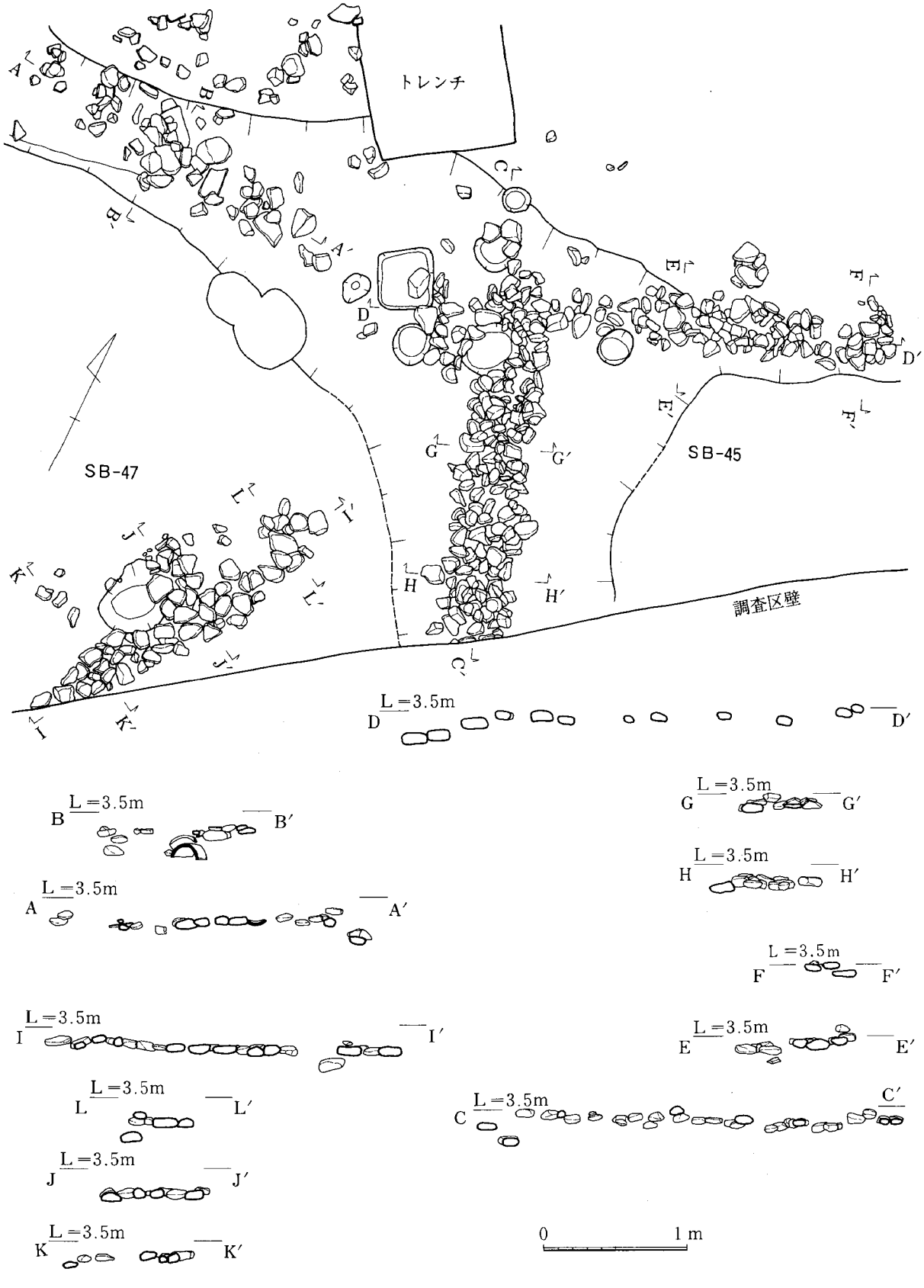


Fig.27　SB-45、47実測図(1/40)

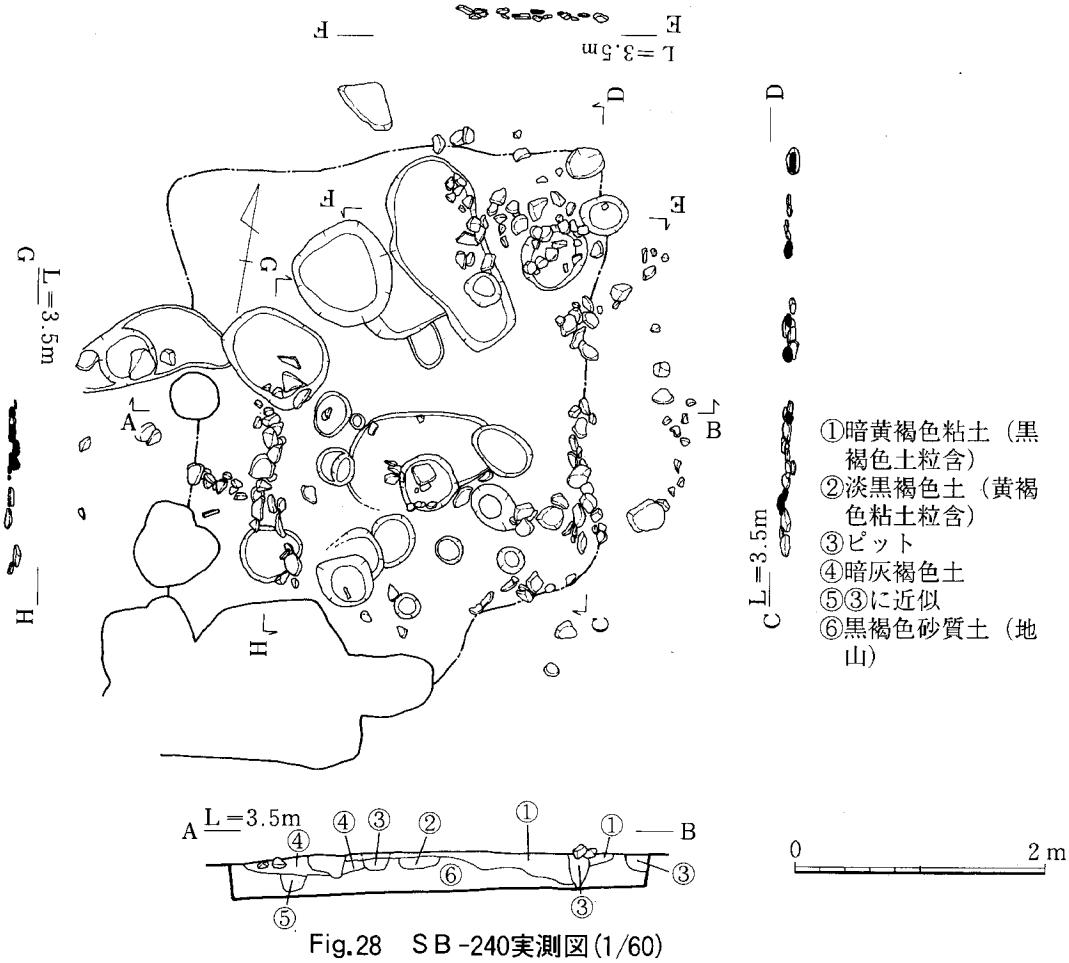


Fig.28　ＳＢ-240実測図(1/60)

(2)溝状遺構（道路遺構）

ＳＤ－４０　Fig.29、30　PL.12

調査区の中央に検出した溝状遺構である。調査区南壁の中央から調査区の北東隅へぬけており、主軸の方向は磁北から15°西偏する。溝の中ほどは現代の攪乱坑と近世井戸に大きく切られている。

２面と３面で検出しており、多数の溝が切り合っていると見られる。また、東西の調査区に股がっており、それぞれ別に調査したため、東西の遺構が上手く繋がらなかった。

２面で検出した溝は、全体の幅が5.8～7.2ｍで、溝の中が３条の小溝に分かれている。溝と溝の間には、道路面と見られる土器の細片や小石が踏め絞められた部分がある。また、小溝の覆土には多量の礫が含まれていた。

３面で検出した溝は、全体の幅が4.0～4.8ｍで、やはり溝の中に小溝が５条ほど見られた。３面の溝は２面の掘り残しが含まれる可能性がある。

これらは、道路の側溝の可能性が強いが、最大幅7.2ｍの中に、路幅を変えて幾度も側溝が掘られたものと見られ、さほど規模の大きな道路とは考えにくい。

遺構の覆土からは、14世紀前半から15世紀前半までの遺物が出土した。

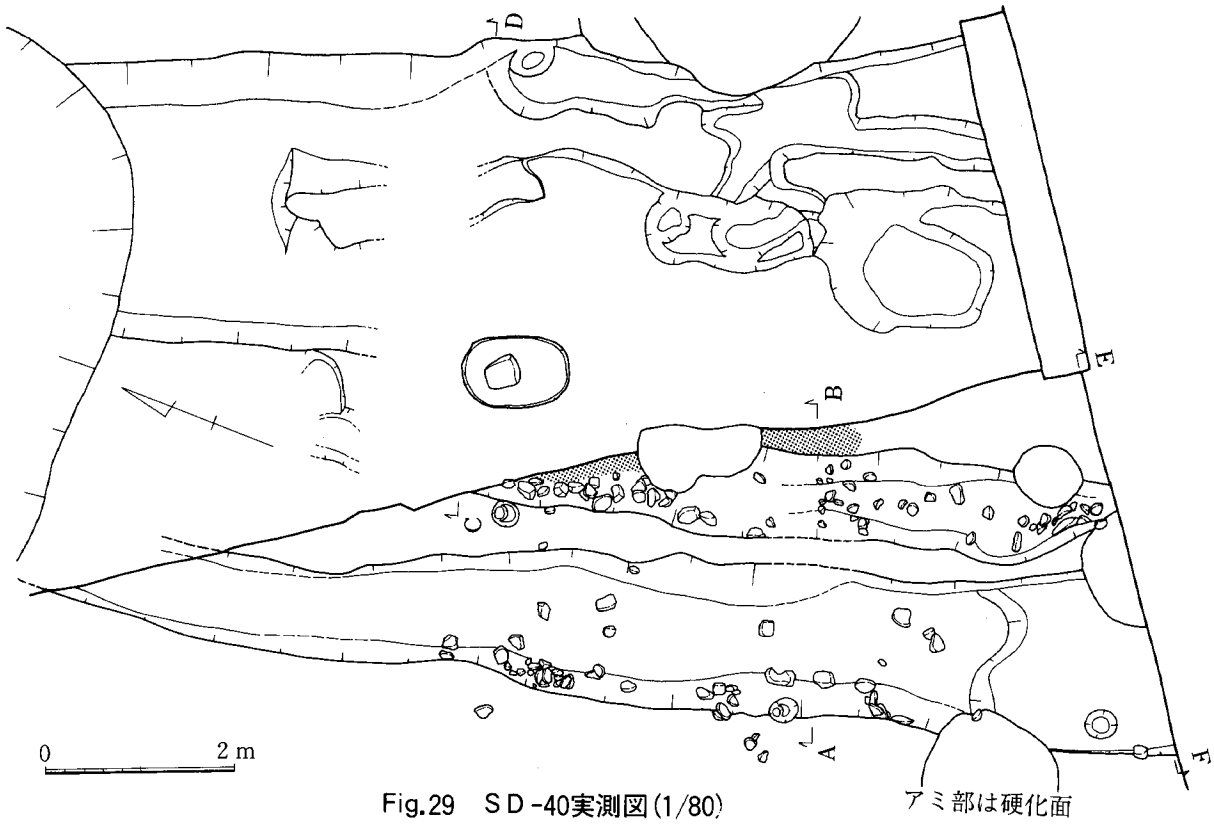
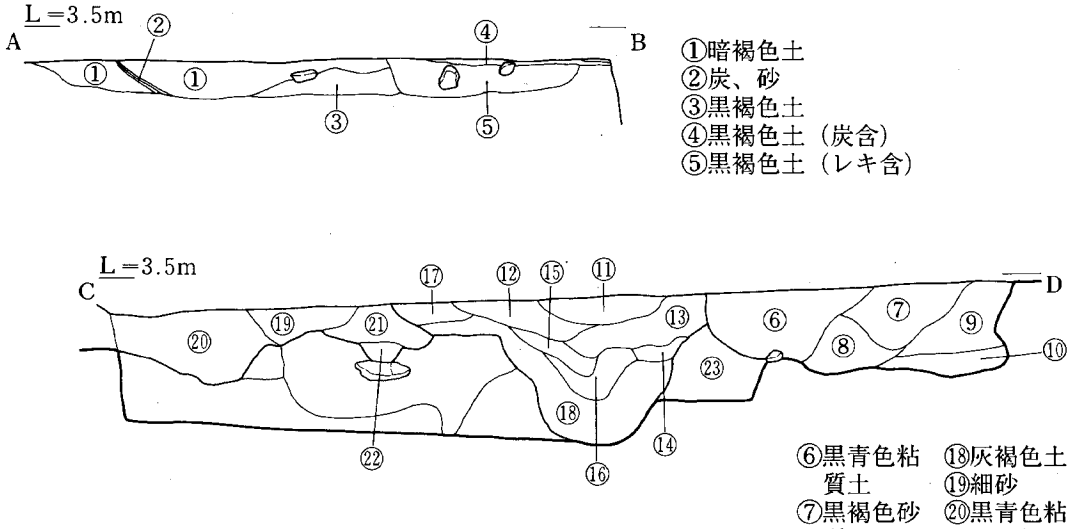


Fig.29　SD-40実測図(1/80)



①暗褐色土
②炭、砂
③黒褐色土
④黒褐色土（炭含）
⑤黒褐色土（レキ含）

⑥黒青色粘質土
⑦黒褐色砂質土
⑧細砂
⑨黒青色土
⑩細砂
⑪黒青色土
⑫暗褐色土
⑬細砂
⑭褐色細砂
⑮黒青色シルト
⑯暗褐色土（鉄分含）
⑰黄褐色砂質土
⑱灰褐色土
⑲細砂
⑳黒青色粘土と細砂の互層
㉑灰褐色土
㉒黒青色土
㉓黒青色土（地山）
㉔砂
㉕暗褐色砂質土（鉄分含）
㉖黒色土
㉗黒褐色土
㉘黒青色粘土
㉙黒褐色土
㉚黒色土（黄褐色粘土粒含）
㉛黒褐色土
㉜黒色土（炭含）
㉝淡黒色土
㉞黒色土
㉟㉞に近似

Fig.30　SD-40土層断面図(1/40)

ＳＤ－４０出土遺物　Fig.31～33　PL.27

各調査区、各面ごとに出土遺物を分けて説明する。Fig.31は東２面、Fig.32は西２面、Fig.33は３面検出のSD－40の出土遺物をそれぞれまとめたものである。23～62が上層、63～71が下層から出土した遺物ということになる。

Fig.31の23～50は東２面で調査したSD－40から出土した遺物である。全体の種類としては、土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、土師質土器鍋、瓦質・須恵質土器鉢、緑釉、灰釉、国産陶器、瓦、中国製白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系Ⅰ～Ⅴ類、同安窯）・青白磁・陶器、高麗・李朝陶磁器などがある。土器以外には、銅銭２枚があるが、錆がひどく判読できない。

23～29は土師器小皿で、全て底部糸切りである。口径に対し器高が比較的高いものが多い。口径は7.2～8.8cm、器高は1.2～1.7cmで、図化した以外の土器を含めた10個体の平均値は、口径8.1cm、器高1.4cmである。30～39は土師器坏である。底部は全て糸切りである。約半数のものが内底にナデ調整を施している。口径11.3～13.0cm、器高2.5～3.0cmで、図化した遺物以外の土器を含めた21個体の平均法量は、口径が12.4cm、器高が2.7cmである。40は土師質土器の鍋である。内面には細かな横方向の刷毛目調整を施しており、外面にはススが付着する。口径33.6cm。41は釜を模したミニチュアの手捏ね土器である。鍔が付く。口径3.5cm、器高2.5cm。42は土師器椀である。高台は低い。外底に墨書があり、「市」か。43は土錘である。円筒形を呈し、長さ6.8cm、径3.5cm。

44～46は青磁である。44は龍泉窯椀Ⅰ類で、外底に「二」と墨書する。45は龍泉窯椀Ⅴ類で、外面に蓮弁文、内面に印花文を施す。口径15.3cm。46は高麗青磁と思われる小椀である。胎土は灰褐色で、黄味がかった透明釉が全面に施されており、高台畳付と内面見込みに目跡が残る。口径10.2cm、器高4.8cm、高台径4.9cmを測る。47、48は李朝施釉陶器である。47は雑釉椀のいわゆる刷毛手で、灰白色の素地に白泥を塗り、透明釉を重ねる。口径19.0cm。48は象嵌青磁のいわゆる三島手椀である。口径17.0cm、器高8.0cm、高台径5.6cm。49は白磁の壺類である。胎土は僅かに灰色がかった白色で、やや軟質の陶胎。釉調は乳白色の半透明釉で、全体に細かな貫入がある。肩部から胴部にかけての破片で、肩部には放射状の沈線を施し、胴部には縦沈線で画した中に陽刻の花唐草文を配する。型作りであろう。50は平瓦の小片で、凸面の格子叩き目の中に「樂之ヵ」の字が認められる。「安樂寺」に関わる瓦か。以上の遺物は、14世紀前半～15世紀前半に位置付けられよう。

Fig.32の51～62は西２面で調査したSD－40から出土した遺物である。遺構番号はSD-250、SD-260で取り上げている。全体の種類としては、土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師質土器鍋、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、中国製白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系Ⅰ～Ⅲ類、同安窯）・青白磁・陶器などがある他、銅銭が３枚出土しており、「太平通寶」がある。51～57は土師器小皿で、底部は全て糸切り。口径は7.8～9.4cm、器高は0.9～1.7cmの間にあり、図化した以外の土器を含めた27個体の平均値は、口径8.4cm、器高1.2cmである。58～62は土師器坏で、底部は全て糸切り。口径11.6～13.3cm、器高2.3～2.9cmで、未図化の土器を含めた14個体の平均値は、口径12.6cm、器高2.6cm。以上の遺物は14世紀前～中頃に位置づけられよう。

Fig.33の63～71は、３面で調査したSD－40下層出土の遺物である。遺構番号はSD-107、SD-334で取り上げている。全体の種類としては、土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、瓦質土器鉢、中国製白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系Ⅰ類、同安窯）・青白磁・陶器、高麗陶磁器などがある。

63は土師器小皿で、底部は糸切り。口縁が内湾する。内底にはナデ調整を加え、底部に板圧痕が残

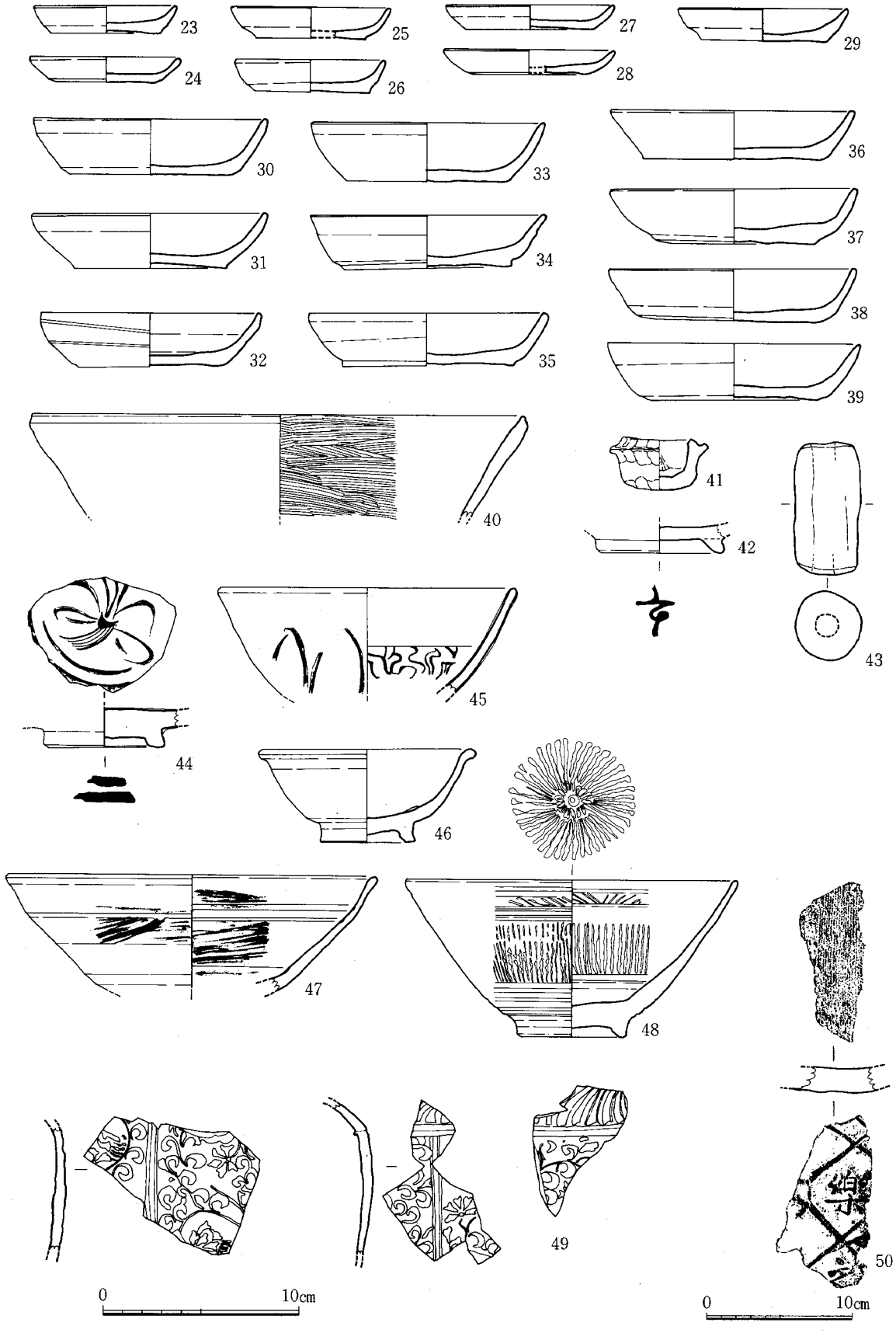


Fig.31　ＳＤ-40出土遺物実測図Ⅰ(1/3、1/4)

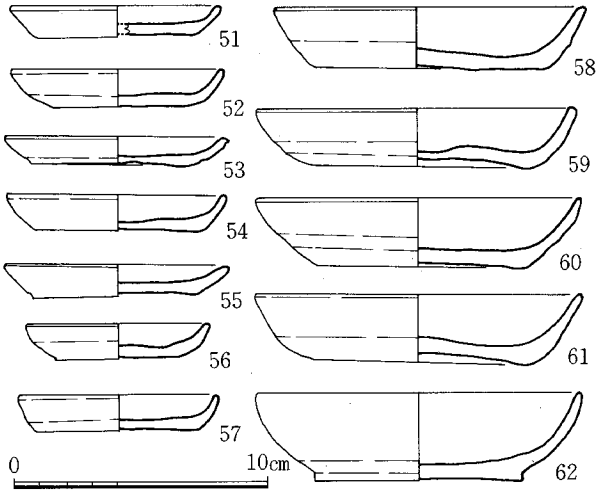
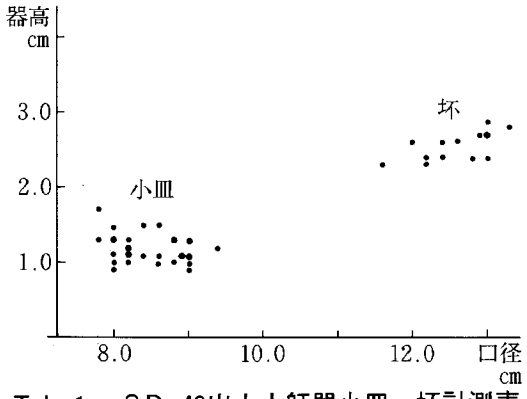


Fig.32　SD-40出土遺物実測図Ⅱ(1/3)



Tab. 1　SD-40出土土師器小皿・坏計測表

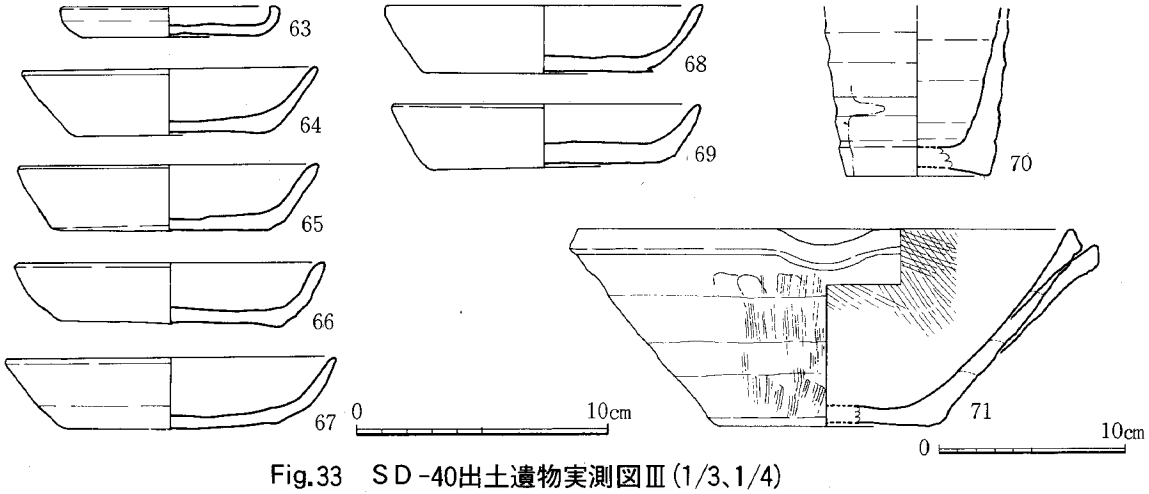


Fig.33　SD-40出土遺物実測図Ⅲ(1/3、1/4)

る。64～69は土師器坏で、底部は全て糸切りで、内底にナデ調整を加えない。口径11.6～13.0cm、器高2.4～3.0cmで、未図化遺物を含めた12個体の平均値は、口径12.7cm、器高2.6cmである。71は瓦質土器の片口鉢で、口縁は断面三角形に肥厚する。内面には粗い刷毛目を入れ、内底付近は使用による磨滅が著しい。外面には縦に刷毛目調整した後、ナデ調整を加える。口径26.4cm、器高10.5cm、底径12.0cm。70は中国製陶器B群の瓶である。胎土には灰色の細かい砂粒を含み、釉は濃いオリーブ色の透明釉である。底径は5.8cmを測る。以上の遺物は14世紀後半頃のものである。

SD－181　Fig.34　PL.10

4面に検出した。調査区の北壁沿いに検出した溝状遺構で、調査区内で長さ23.4mを確認した。調査地周辺の現在の町割りの方向に等しく、主軸方位は磁北より58°東に偏する。現代の攪乱坑や中世の遺構に著しく破壊されている。幅1.0～1.2m、深さ0.6mを残す。横断面形は、略逆台形である。溝の覆土は、①暗褐色砂質土（他遺構の覆土）、②暗褐色～淡褐色砂、③暗褐色砂である。東側の一部で、古代の溝SD-183と重なっている。

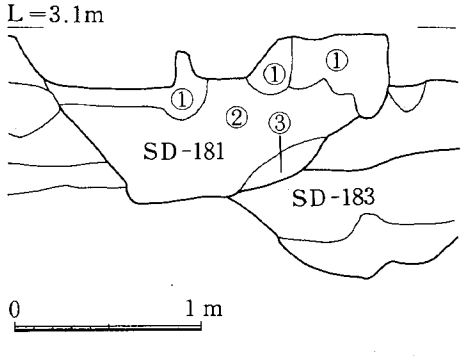


Fig.34　SD-181土層断面図(1/40)

ＳＤ－１８１出土遺物　Fig.35

土師器小皿、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦質土器鉢、緑釉、中国製白磁・青磁（北宋前半越州窯系、龍泉窯系）・陶器などが出土した。72～74は土師器小皿で、底部は糸切り。口径と器高はそれぞれ、72が8.0cm、1.2cm、73が8.0cm、1.3cm、74が8.4cm、1.4cmである。75は土師器坏で、底部は糸切り。口径12.6cm、器高3.0cm。76は緑釉の椀で、淡橙色で土師質の胎土に、黄緑色の不透明釉を施す。口縁端部に緑彩を施したものか。口径13.2cm。

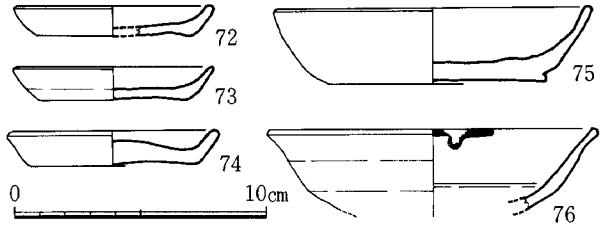


Fig.35　ＳＤ-181出土遺物実測図(1/3)

以上の遺物は、13世紀中頃～14世紀代のものと見られる。

(3)井戸

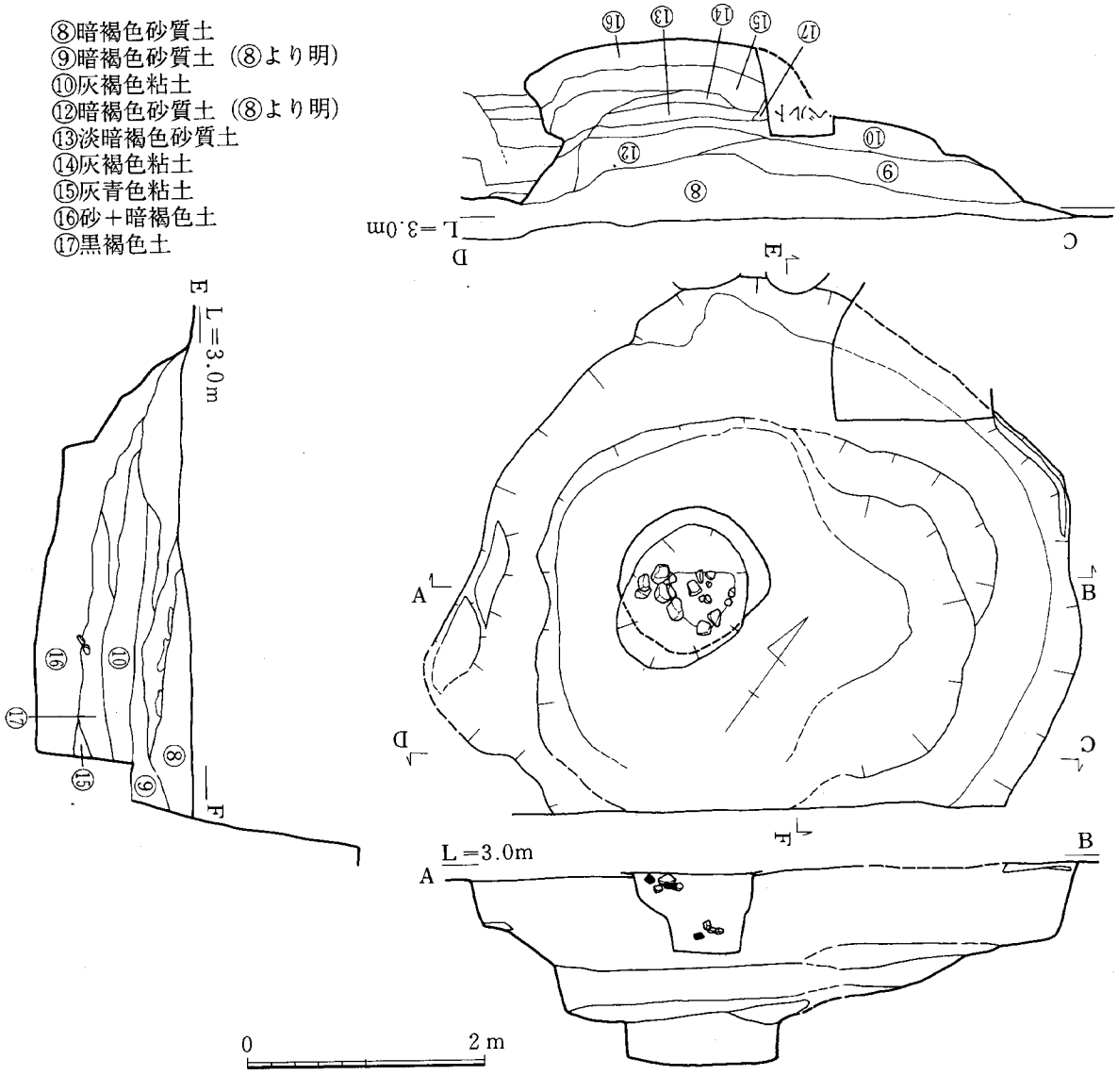


Fig.36　ＳＥ-100実測図(1/60)

ＳＥ－１００　Fig.36　PL.12

東３面に検出した井戸である。Ｆ－１～２グリッドに位置し、掘り方の一部は調査区外に及ぶ。井戸側は木桶と見られるが腐食して残っていない。掘り方は円形プランを呈し、径5.0ｍと大きい。深さ1.2ｍまで段状に掘り窪め、基底面を平坦につくる。基底の南に偏して、深さ0.3ｍの円形坑を掘り、ここに井戸側を置いている。円形坑の径は1.3ｍであるが、これは調査中の湧水によって崩れたもので、実際よりも大きい。井戸側の上層からは、埋没中に入れられた小礫が出土した。

ＳＥ－１００出土遺物　Fig.37　PL.27

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器、土師質土器鍋、瓦質・須恵質土器鉢、緑釉、国産陶器類、石製品、土製品、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系Ⅰ～Ⅲ類、同安窯）・青白磁・陶器、高麗青磁・無釉陶器などの他、銅銭４枚が出土した。

77～87は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。77、78は小形で、口縁を内側に折り返している。77は口径5.0cm、器高1.4cm、78は口径5.2cm、器高1.4cm。79は器高が高く、口径6.7cm、器高1.7cm。小皿の法量は、口径7.6～8.2cm、器高0.9～1.4cmの間にある。88～95は土師器坏で、底部は全て糸切り。口径10.6～15.6cm、器高2.3～3.5cmで、小形のものが多い。96は有溝の土錘で、ラグビーボール形を呈し、縦方向に溝を切る。長さ6.1cm、幅3.5cm、重さ60ｇを量る。97は滑石製の石製品である。スタンプ形をなし、一部が欠損している。楕円形の板に方柱状のつまみを付けた形につくり、つまみには横位から穿孔している。

98～102は輸入陶磁器。98～100は白磁である。98は椀で、内面には縦方向の堆線が入る。外底に「上」の墨書がある。99も椀で、胎土は灰白色で、褐色の班が入る。釉はかなり光沢のある透明釉で、表面には胎土中に含まれる鉄分が褐班状に浮かぶ。全面に施釉し、高台畳付は釉剝ぎする。内面には

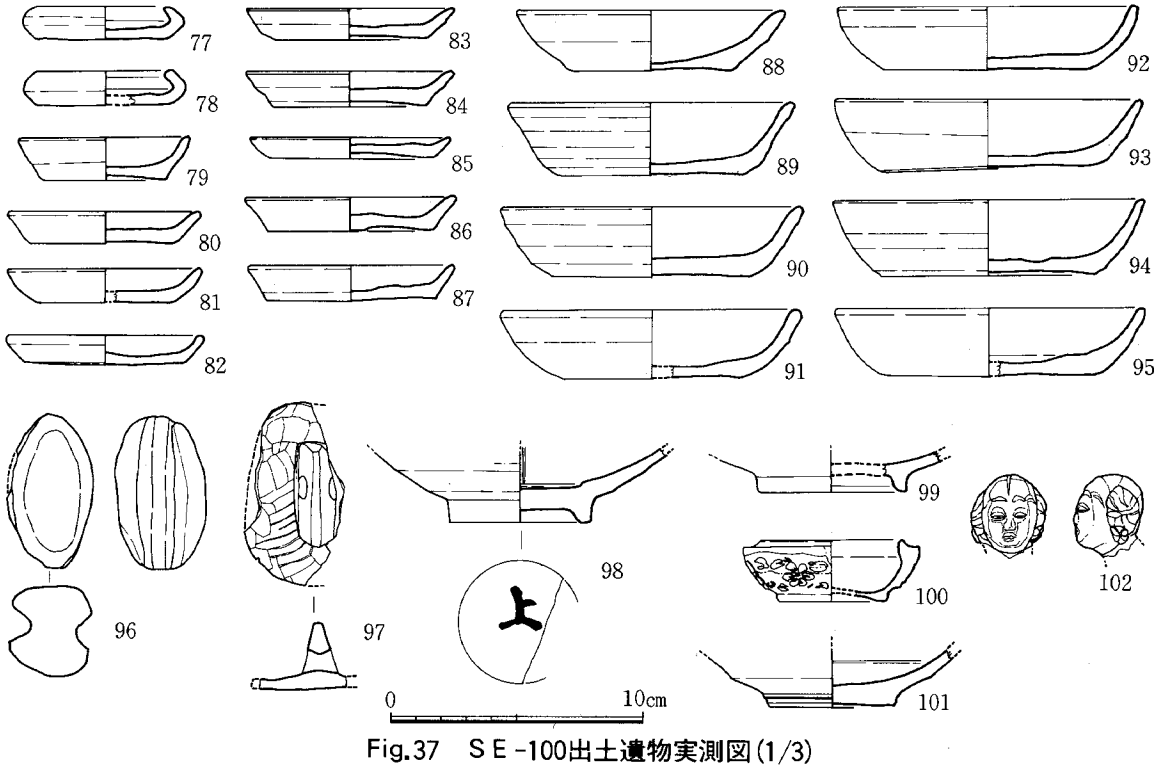


Fig.37　ＳＥ-100出土遺物実測図(1/3)

釉下に化粧掛けが認められる。100は合子の身である。型作りで、外面に印花文がある。口縁の受け部は釉剝ぎ、体外面下半は露胎である。101は高麗青磁椀であろう。見込みに沈圏線が巡り、円盤状高台の外縁と見込みには4カ所に目跡がある。102は白磁俑の頭部である。胎土はきめが細かく精良で、やや精白色がかった透明釉を施す。中国広東省あたりの製品か。

銅銭は「嘉泰通寶」「明道元寶」「元豊通寶」「至□□寶」が出土した。

以上は、14世紀前半～中頃の遺物と考えられる。

ＳＥ－１１２ Fig.38 PL.12

東3面に検出した。Ｄ－３グリッドに位置する。北西側を近世井戸SE－35に切られる。井戸側は木桶と見られるが腐食して残っていない。掘り方は東側がやや直な円形プランを呈し、径2.5mである。深さ1.0mで一旦平坦面をつくり、掘り方基底の東よりに深さ0.5mの円形坑を掘り、井戸側を置いている。円形坑の径は0.7mを測る。

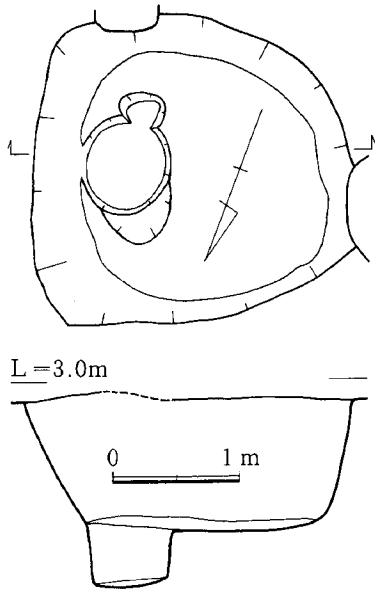


Fig.38 ＳＥ-112実測図(1/60)

ＳＥ－１１２出土遺物 Fig.39 PL.27

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器、瓦質・須恵質土器鉢、土錘、中国産白磁・青磁（龍泉窯系Ⅰ・Ⅱ類、同安窯）・青白磁・黒釉椀・陶器、高麗陶磁器などが出土した。

103～106は土師器小皿で、底部は全て糸切り。口径7.6～8.4cm、器高1.1～1.6cmと小型品で、口径に対し器高がやや高いものが多い。107、108は土師器坏で、底部は糸切り。107は口径12.3cm、器高2.4cm、108は口径13.0cm、器高2.7cm。108は口縁と内底に油煙が付着する。109は白磁合子の身である。口径6.2cm、器高1.1cm、底径2.2cm。内面には印花文が施され、体外面下半は露胎。

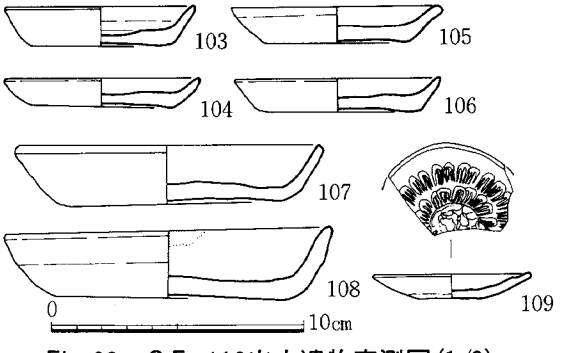


Fig.39 ＳＥ-112出土遺物実測図(1/3)

以上の遺物は、14世紀代と見られる。

ＳＥ－１２０ Fig.40

東4面で調査した。Ｄ－３グリッドに位置する。近世井戸SE－35の掘り方の中で検出し、遺構の掘り込み面が不明である。井戸側は不明確で、掘り方底面の4隅に縦杭を打っており、板材等で構築したものか。掘り方は円形プランを呈するものと思われ、径1.7mである。深さは1.2mで、掘り方底面は平坦につくる。

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、国産緑釉椀、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯系）・陶器などが出土した。他に明代青花、李朝青磁が含まれているが、SE－35掘り方から調査時に混入したものと思われる。遺物の時期は12世紀代。

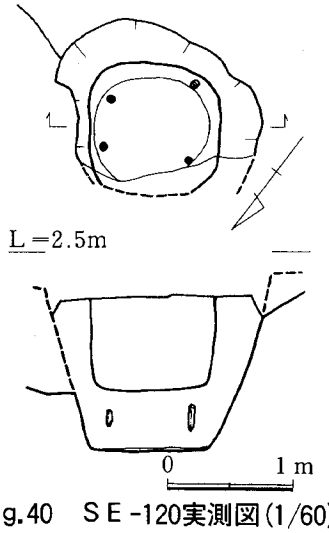


Fig.40 ＳＥ-120実測図(1/60)

ＳＥ－１２４　Fig.41　PL.12、13

東４面に検出した井戸であるが、井戸側の一部は３面で確認している。Ｂ－１～２グリッドに位置し、掘り方の一部は調査区外に及ぶ。井戸側は木桶で、下端のみが遺存していた。掘り方は円形プランを呈し、径2.25ｍを測る。深さ1.1ｍで平坦面をつくり、中央に深さ0.5ｍの円形坑を掘り、井戸側を据える。円形坑の径は1.2ｍである。井戸側の桶は平面が楕円形に潰れており、径は0.55～0.65ｍである。井戸側の上面には、埋没中に投げ入れられたと見られる礫があった。土層は、①暗褐色土と砂の縞状堆積(井戸側内)、②暗褐色土（砂ブロックを含む)、③砂と暗褐色土の互層、④暗褐色土（砂が縞状に入る）である。

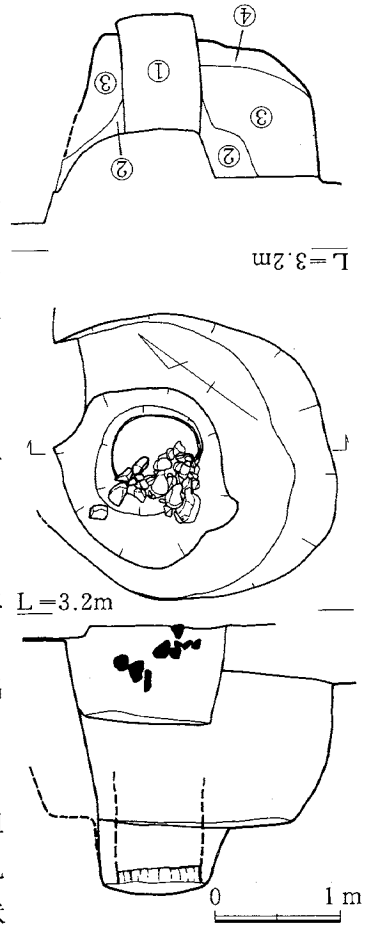


Fig.41　ＳＥ-124実測図(1/60)

ＳＥ－１２４出土遺物　Fig.42　PL.27

土師器小皿（糸切り)、土師器坏（糸切り)、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、国産陶器類、石製品、瓦、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系Ⅰ類)・青白磁・陶器、高麗陶器などが出土した。

110は土師器小皿で、底部は糸切り。口径9.0cm、器高1.1cm。111、112は瓦器である。他にも瓦器は比較的多く出土している。111は小皿で、押し出し技法で作られ、底部はヘラ切りである。土師器の小型丸底坏に似た器形をなす。口径9.4cm、器高2.0cm。112は椀で、丸底状の坏に断面台形の低い高台を付ける。内外面のヘラ磨きは雑で、体外面下半には押し出した痕跡が残る。口径15.2cm、器高5.7cm、高台径5.8cm。113は滑石製品である。２ヵ所に穿孔があるが、１孔は貫通していない。

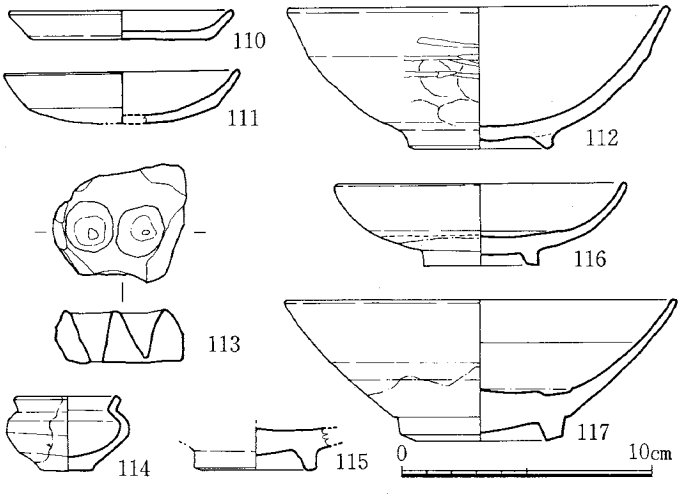


Fig.42　ＳＥ-124出土遺物実測図(1/3)

114、115は青磁である。114は小壺で、灰色の胎土に暗青灰色の半透明釉をかける。口縁端部と体部に熔着痕がある。口径4.2cm、器高3.0cm、底径1.1cm。115は高麗青磁椀で、畳付と見込みに目跡が残る。116は白磁の皿で高台が付く。胎土はきめが細かくやや軟質で、化粧掛けを施し、透明釉をかける。口径11.6cm、器高3.3cm、高台径4.6cm。中国広東省あたりの製品と思われる。117は白磁椀Ⅸ類で、見込みを釉剝ぎする。口径15.6cm、器高5.6cm、底径6.5cmである。

以上の内、112、113は掘り方から出土した。

出土遺物は、12世紀後半～13世紀前半に位置づけられよう。

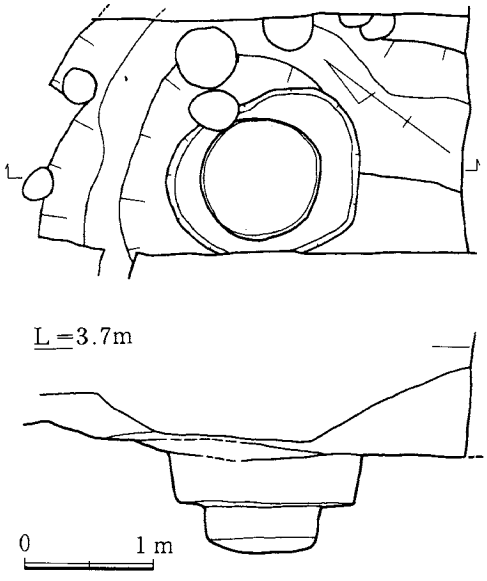


Fig.43　ＳＥ-131実測図(1/60)

ＳＥ－１３１　Fig.43

東３面の井戸SE-100の掘り方の中に検出した井戸である。井戸側は木桶と見られるが腐食のため残っていない。掘り方はSE-100に破壊されて不明である。掘り方基底面に平坦面をつくり、中央に深さ0.4mの円形坑を掘り、井戸側を据える。円形坑の径は1.0mで、湧水により崩れている。

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器、緑釉、瓦、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯）・陶器などが出土したが、図化できるものはない。

12世紀代の井戸と見られる。

ＳＥ－１６０　Fig.44

Ｂ－２グリッドに位置する。現代の攪乱坑によりほとんど破壊されており、東５面の最終面で基底部分のみを調査した。掘り方の一部は１面で検出している。井戸側は調査区外にある。掘り方は円形か。掘り方の径は４ｍを越える。

土師器坏（糸切り）、白磁片などの遺物が少量出土した。中世の井戸であろう。

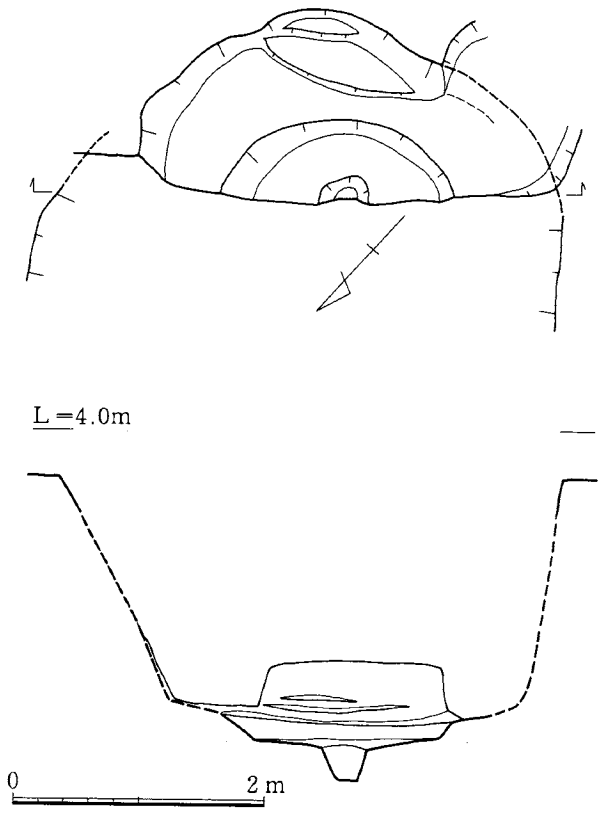


Fig.44　ＳＥ-160実測図(1/60)

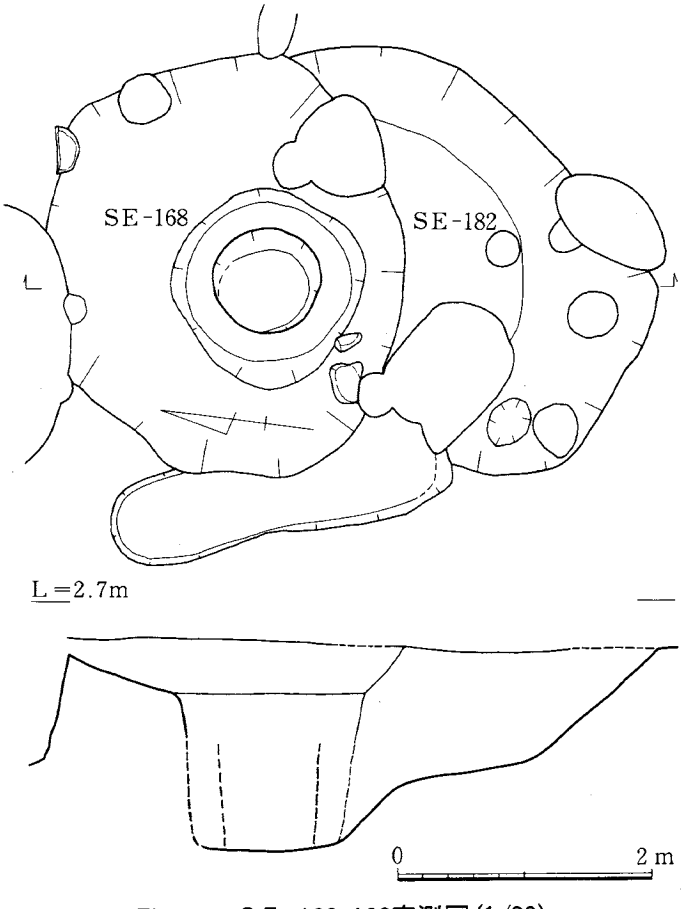


Fig.45　ＳＥ-168、182実測図(1/60)

ＳＥ－１６８・１８２　Fig.45　PL.13

東４面に検出した。SE-107の南に位置し、これに切られている。SE-168が182を切っている。井戸側は木桶であるが、腐食しており痕跡のみ残る。SE-168の井戸側の外側にひと回り大きな桶があり、これがSE-182の井戸側と見られるが、写真撮影後に崩壊し、図化することはできなかった。SE-168の掘り方は東西にやや長い円形プランで、長径3.3m、短径2.8mである。掘り方は上部がすり鉢状にすぼまり、下部は円筒形をなす。検出面から基底までの深さは1.65mである。桶の径は0.6mである。SE-182の掘り方は、168に切られ不明瞭だが、円形プランか。井戸側は北よりに設けている。

土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、須恵質土器鉢、瓦、中国産白磁・青磁（越州窯系）・陶器などが出土したが、図化できない。

12世紀代の井戸と見られる。

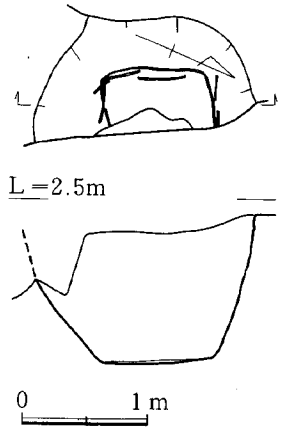
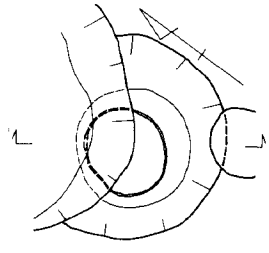


Fig.46　ＳＥ-179実測図(1/60)

ＳＥ－１７９　Fig.46　PL.13

東４面で検出した。Ｄ－１グリッドに位置し、東側半分は調査区外にある。他の土坑に大きく切られている。井戸側には板材を方形に組むが、腐食のため痕跡的で、平面で確認したに留まる。掘り方は円形プランを呈し、径は1.8m前後。深さは1.2mで、基底面は平坦である。

土器片１点、白磁片１点が出土した。中世の井戸か。



ＳＥ－１８０　Fig.47　PL.13

東４面に検出した。SE-124の南側に位置し、これに大きく切られている。井戸側は木桶で、湧水点以下が残っていたが、腐食のため取り上げることはできなかった。掘り方は円形プランを呈し、径1.6mである。円筒形に掘り、深さは1.8mで、基底面は平坦である。桶は径0.62～0.72mで、0.3mの高さが残り、外面に責め具の痕跡が認められた。

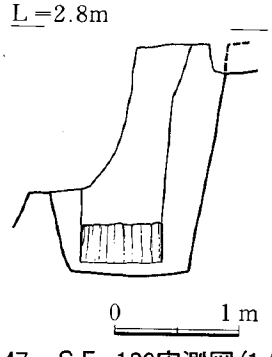


Fig.47　ＳＥ-180実測図(1/60)

ＳＥ－１８０出土遺物　Fig.48　PL.27

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯系）・陶器、高麗陶器などが出土した。

118は白磁鉢である。口縁は肥厚し、体部は上半部で「く」字形に屈曲する。見込みには段を持ち、底部は碁笥底風になる。胎土は乳白色で精良。釉はやや空色がかった透明釉である。畳付から外底は露胎。口径18.3cm、器高13.2cm、底径7.0cm。井戸側内より出土した。

SE-180の遺物は、12世紀後半～13世紀。

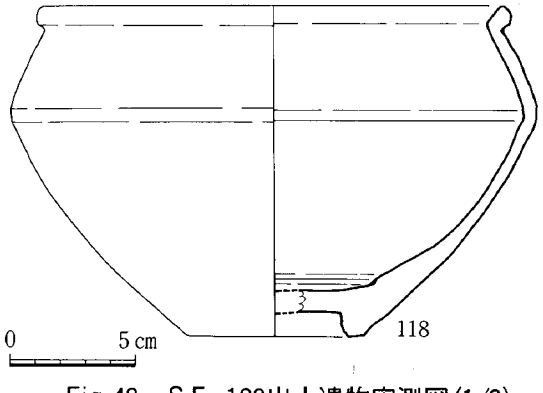


Fig.48　ＳＥ-180出土遺物実測図(1/3)

ＳＥ－１８８　Fig.49　PL.13

近世井戸SE－35の掘り方底面に検出した。東５

面調査。SE－35にほとんど破壊されており、下端部のみを検出した。井戸側は木桶で、その一部が僅かに残っていた。井戸側の掘り方は径1.0mの円形プランである。

土師器坏（糸切り）、瓦、土錘、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・青白磁・陶器などが出土した。また、明代の青花が1点含まれるが、これはSE－35から混入したものであろう。

ＳＥ－１９２ Fig.49 PL.13

同じく、近世井戸SE－35の掘り方底面で検出し、破壊のため、下端部のみを調査。SE-188の北東に隣接する。井戸側は木桶で、腐食してほとんど消滅していた。痕跡により、桶の径は0.85～0.95mと知れる。出土遺物は、土器片2点のみである

ＳＥ－１９３ Fig.49 PL.14

近世井戸SE－35の掘り方底面に検出し、基底部のみを調査した。SE-188の南西側に位置する。井戸側にはくり抜き材を逆さに置いており、径は1.05m。また、井戸側の下には曲物をおいて水溜りとしており、曲物の径は0.4mである。遺物は出土していない。

ＳＥ－１９４ Fig.49 PL.13

近世井戸SE－35の掘り方底面で検出し、SE-188の西側に隣接する。井戸側の痕跡のみが残る。木桶と見られ、径は0.8mである。

土師器坏（糸切り）、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ類）、瓦質土器捏鉢などが出土した。

ＳＥ－２８５ Fig.50 PL.14

西3面に検出した。B－5グリッドに位置し、北側半分は調査区外にかかる。井戸側は桶と見られるが、残っていない。掘り方は円形プランを呈し、径2.0mである。円筒形に深さ1.8mまで掘り下げ、平坦面をつくる。底面に井戸側を据えた坑の一部を確認した。

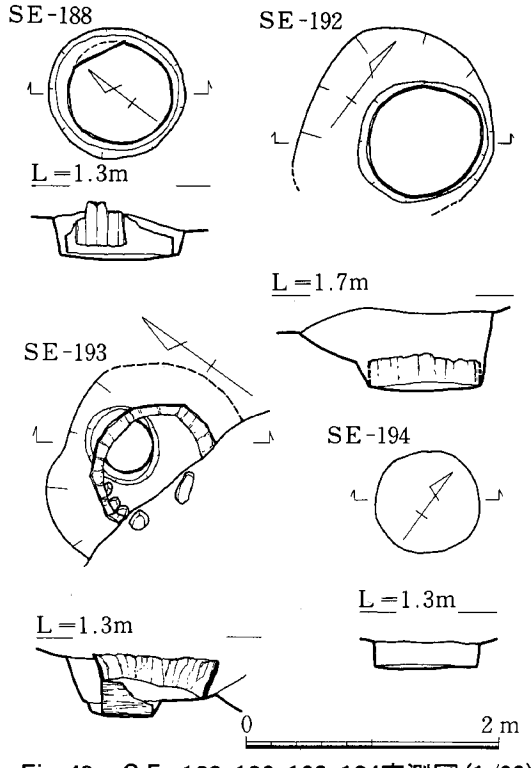


Fig.49 ＳＥ-188、192、193、194実測図(1/60)

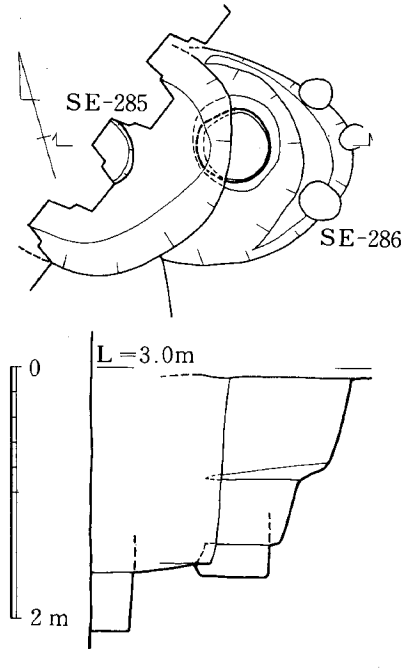


Fig.50 ＳＥ-285、286実測図(1/60)

ＳＥ－２８５出土遺物 Fig.51 PL.27

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、須恵質土器鉢、土錘、中国産白磁・青磁・陶器などが出土した。瓦器の量は多めである。

119は瓦器椀である。器高はやや低めで高台の径は大きい。高台は断面台形で極めて低い。内外面にかなり粗雑なヘラ磨きを施し、内面にはコテあて痕が残る。口径16.0cm、器高5.4cm、底径7.1cm。120は棒柱状の土錘で、長さ8.0cm、径3.4cm、重さ90g。ともに掘り方から出土した。

以上の遺物は、12世紀後半～13世紀に位置づけられよう。

ＳＥ－２８６ Fig.50 PL.14

SE-285の南に位置し、これに大きく切られている。井戸側には木桶の痕跡が見られた。桶の径は0.55ｍである。掘り方は円形プランを呈し、径1.7ｍで、すり鉢状に掘り窪め、基底に井戸側を据える坑を設ける。検出面から基底までは1.6ｍを測る。

ＳＥ－２８６出土遺物 Fig.52 PL.28

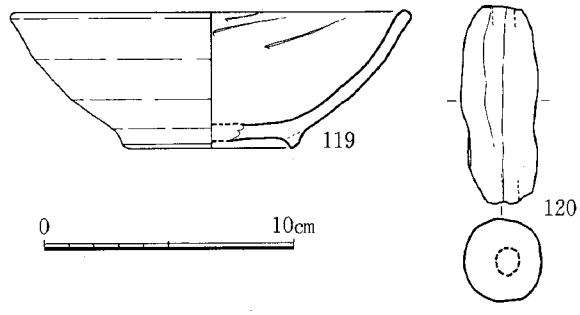


Fig.51 ＳＥ-285出土遺物実測図(1/3)

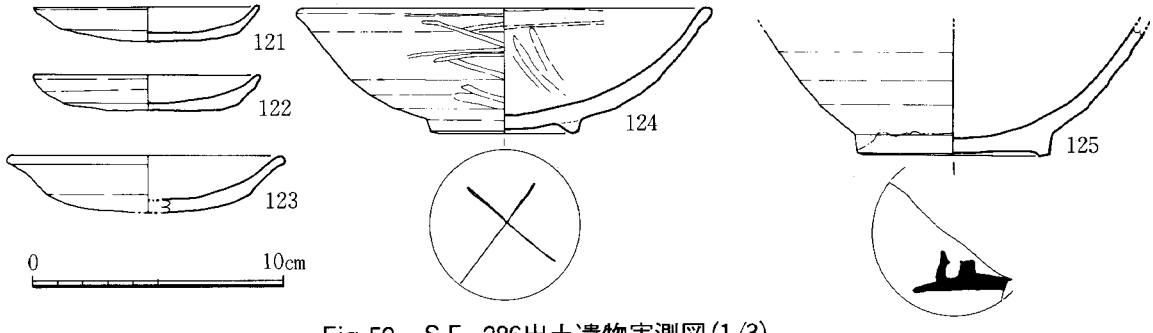


Fig.52 ＳＥ-286出土遺物実測図(1/3)

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、土錘、中国産白磁・陶器などが出土した。土師器は丸底坏の量が目立つ。

121、122は土師器小皿で、底部は糸切り。121は口径9.0cm、器高1.4cm、122は口径9.0cm、器高1.4cm。123は瓦器の小皿である。器形は土師器小型丸底坏に似ており、底部はヘラ切りである。口径11.0cm、器高2.3cm。124は瓦器椀である。器高は低めで、断面台形の低い高台が付く。ヘラ磨きはかなり雑で、しかもまばらである。外底に「×」のヘラ記号を入れる。口径16.6cm、器高5.0cm、高台径5.9cm。125は白磁椀Ⅳ類。外底に墨書があり、花押か。124のみ掘り方、他は井戸側内出土。

12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

ＳＥ－２８７ Fig.53 PL.14

SE-286の南東に接して検出した。286との切り合いはない。井戸側は木桶で、湧水レベル以下に残っていたが、取り上げることはできなかった。径0.6～0.65ｍの円形の桶である。掘り方は平面プランが円形で、径1.7～1.8ｍを測る。掘り方の断面はすり鉢状を呈し、深さは1.85ｍを残す。井戸の土層断面は、①暗褐色土、②黒色土（黄褐色粘土ブロックを含む）、③黒褐色砂質土、④黒色土＋暗褐色土、⑤黒色土と黄褐色砂の互層、⑥暗褐色土、⑦砂、⑧暗褐色砂と黄褐色砂の互層、⑨黒色土、⑩黄褐色砂で、①②層は井戸側内の埋め土である。

ＳＥ－２８７出土遺物 Fig.54 PL.28

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、須恵質土器鉢、緑釉、中国産白磁・青磁（越州窯系、同安窯）・青白磁・陶器などが出土した。

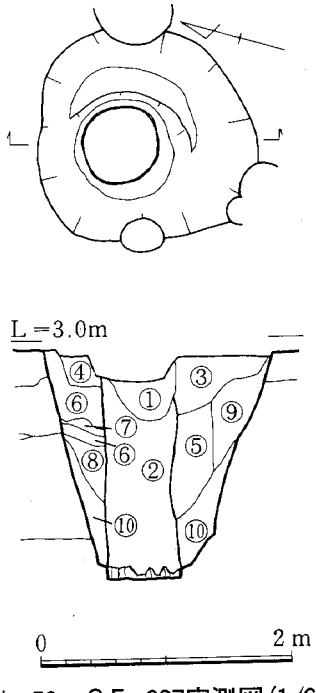


Fig.53 ＳＥ-287実測図(1/60)

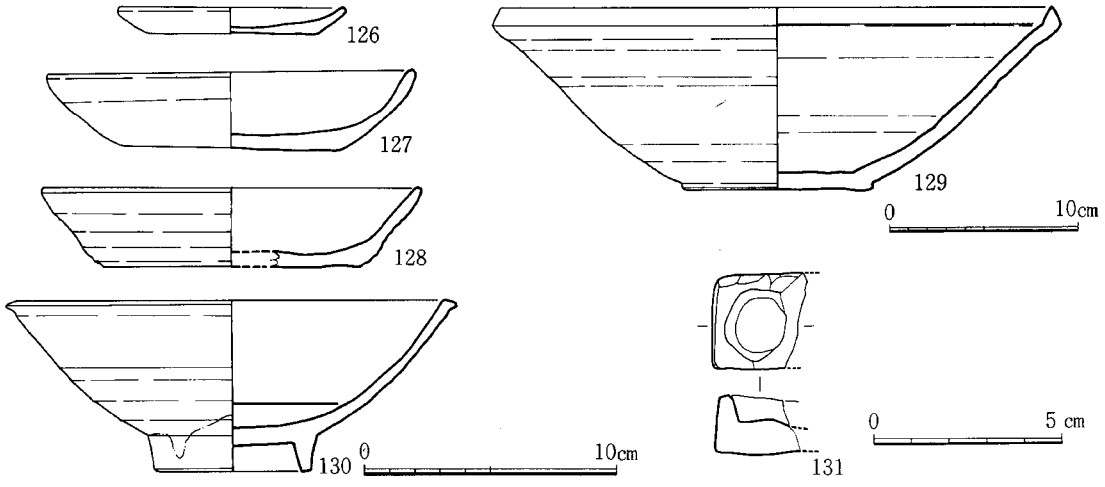


Fig.54　ＳＥ-287出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)

126は土師器小皿で、底部は糸切り。口径9.0cm、器高1.1cm。127、128は土師器坏で、127は口径14.5cm、器高3.0cm、128は口径15.0cm、器高3.2cm。129は東播系須恵質土器鉢で、体部は直線的に開き、口縁部は上方につまみ上げて尖らせる。底部には糸切り痕が残る。内面は器面が平滑になっており、かなり使いこまれたものか。口径29.0cm、器高9.7cm、底径10.0cm。130は白磁椀Ⅳ類で、口径17.8cm、器高6.8cm、高台径6.3cm。131は滑石製品である。方柱状の石の一面に円形の孔を彫り込んでいる。128のみ掘り方、他は井戸側内より出土した。

13世紀前半に位置づけられよう。

ＳＥ－３００　Fig.55　PL.14

西３面に検出した。Ｄ－７グリッドに位置し、北側は調査区外に伸びる。井戸側は木桶で、２段が残っていた。桶は、板材を幅13cm前後に縦割りしたものを組み、伏せ置きして重ねている。１段目の桶は、径が65cm、高さが30cmで、２段目はこれに６cm重ねて置く。責め具の痕跡は見られない。１、２段目とも、樹種はスギである。掘り方は平面プランが隅丸方形で、東西長3.9ｍを測る。深さ1.5ｍまで掘り下げて平坦面をつくり、掘り方の南寄りに井戸側を据える坑を掘っている。掘り方の土層断面は、①暗褐色砂質土、②暗褐色砂、③砂、④黒色土と砂の互層、⑤灰褐色砂、⑥砂、⑦黄白色粗砂（地山の河砂）で、井戸側内には黒褐色粘質土（炭、礫、瓦を含む）が堆積していた。また、井戸側底面から少し浮いた状態で湖州鏡が出土し、上層には埋没中に投げ入れられた礫が固まって出土した。

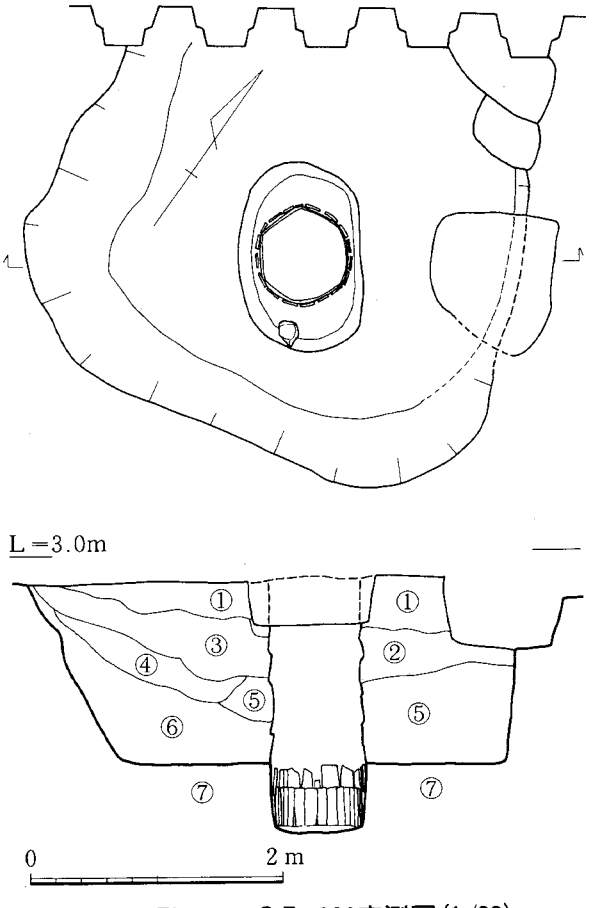


Fig.55　ＳＥ-300実測図(1/60)

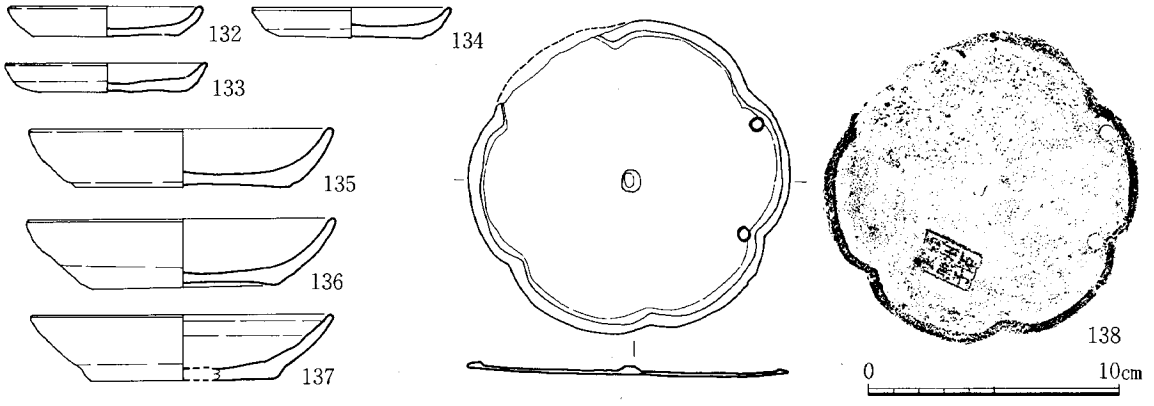


Fig.56　ＳＥ-300出土遺物実測図(1/3)

ＳＥ－３００出土遺物　Fig.56　PL.28

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器・天目・高麗青磁などの他、青銅鏡が出土した。

132～134は土師器小皿で、底部は糸切り。口径7.6～8.0cm、器高1.2cm。135～137は土師器坏で、底部は糸切り。口径12.0～12.2cm、器高2.3～2.8cm。小皿、坏ともに小型のものが多い。138は湖州六花鏡で、鏡面はわずかに膨らみ、素鈕である。縁は蒲鉾型を呈し、縁に沿って２カ所に穿孔している。鏡背に「湖州石家照子」の銘が入る。133、136、137が掘り方、他は井戸側出土。

以上の遺物は、14世紀代に位置づけられよう。

ＳＥ－３５０　Fig.57　PL.15

西４面で検出した。Ｃ～Ｄ－４グリッドに位置し、北西側を中世の土坑SK-280に切られる。井戸側は木桶と曲物で、２重につくる。内側に置かれた曲物は、径60cm、高さ43cmで、合わせ目には樹皮等はない。曲物の上から桶を伏せ置いて２重としており、桶の径は62～67cm、高さは64cmが残っており、責め具は確認できない。ともに遺存状態は悪く、取り上げられなかった。掘り方は南北にやや長い円形プランで、長径2.3m、短径2.05mを測る。円筒状に掘り下げており、底面は平坦である。西壁の一部が崩壊している。検出面から底面まで、2.0mである。井戸側は掘り方の北西に寄せて組まれている。井戸側には黒色粘質土がつまっており、掘り方の土層は①黒色土（砂ブロックを含む）、②砂の縞状堆積、③赤褐色砂、④黒褐色砂、⑤淡暗褐色砂、⑥粗砂である。井戸の基底面は粗砂層で、湧水が著しい。

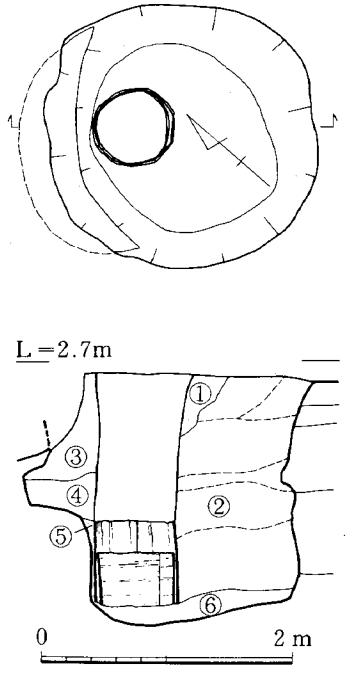


Fig.57　ＳＥ-350実測図(1/60)

ＳＥ－３５０出土遺物　Fig.58　PL.28

土師器小皿（ヘラ切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系）・陶器等が出土。

139～141は土師器小皿で、底部は全てヘラ切り。口径9.0～9.2cm、器高1.0～1.5cm。142は白磁の平皿Ⅱ類で、口径9.0cm、器高2.5cm。140、141が掘り方、他

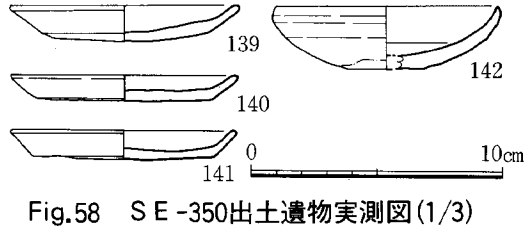


Fig.58　ＳＥ-350出土遺物実測図(1/3)

は井戸側内出土。

時期的には、12世紀中頃より以降か。

ＳＥ－３７０ Fig.59 PL.15

西３面で確認したが、他の遺構に著しく切られていたため、約0.3ｍ下げた４面で調査した。Ｆ-5～6グリッドに位置し、南側は調査区外に及ぶ。井戸側は木桶だが、ほとんど土に帰っている。最も残りの良い部分で25cmの高さがあった。桶の痕跡から、径82cmの井戸側と知れる。掘り方の全形は不明だが、調査区内ではいびつな円形を呈している。深さ0.6～0.7ｍで平坦面となり、中央に井戸側を据えるための浅い穴を掘っている。掘り方の土層は①黒色土（砂ブロックを含む）、②暗褐色砂（灰白色砂ブロックを含む）、③暗褐色砂質土（黒色土と砂のブロックを含む）、④黄褐色砂（黒色土、赤褐色砂ブロックを含む）、⑤③に近似、⑥暗褐色砂、⑦灰白色砂（赤褐色砂・黒色土ブロックを含む）、⑧灰白色砂、⑨赤褐色砂～赤黒色砂（鉄分を含む）である。井戸の基底面は粗砂層で、湧水が著しい。

ＳＥ－３７０出土遺物 Fig.60 PL.28

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀・小皿、須恵質土器鉢、灰釉、土錘、中国産白磁・陶器、高麗青磁・陶器等が出土した。

143～147は土師器小皿で、底部は全て糸切り。口径8.7～9.5cm、器高1.1～1.4cm。148、149は土師器坏で、底部はヘラ切り。148は口径16.0cm、器高3.2cm。149は内面に油煙が付着しており、口径15.8cm、器高3.7cm。150～153は瓦器である。150は小皿で、土師器小型丸底坏に器形が似ており、ヘラ切りである。口径10.0cm、器高2.0cm。151～153は椀で、口径に比べて器高がやや低い。体部は丸く、高台は低い。内外面とも雑なヘラ磨きを施す。151は口径15.4cm、器高5.0cm。152は口径16.0cm、器高4.8cm。153は口径17.0cm、器高5.3cm。

154は高麗青磁の小椀である。胎土は灰色で、細かい白色砂粒を含む。釉は青灰色の半透明釉で全面に施釉する。畳付と見込みに目跡が残る。口径10.8cm、器高3.7cm。155は白磁の合子である。受け部から内面にかけて露胎。体外面に縦位の劃線を入れる。中国広東省産か。

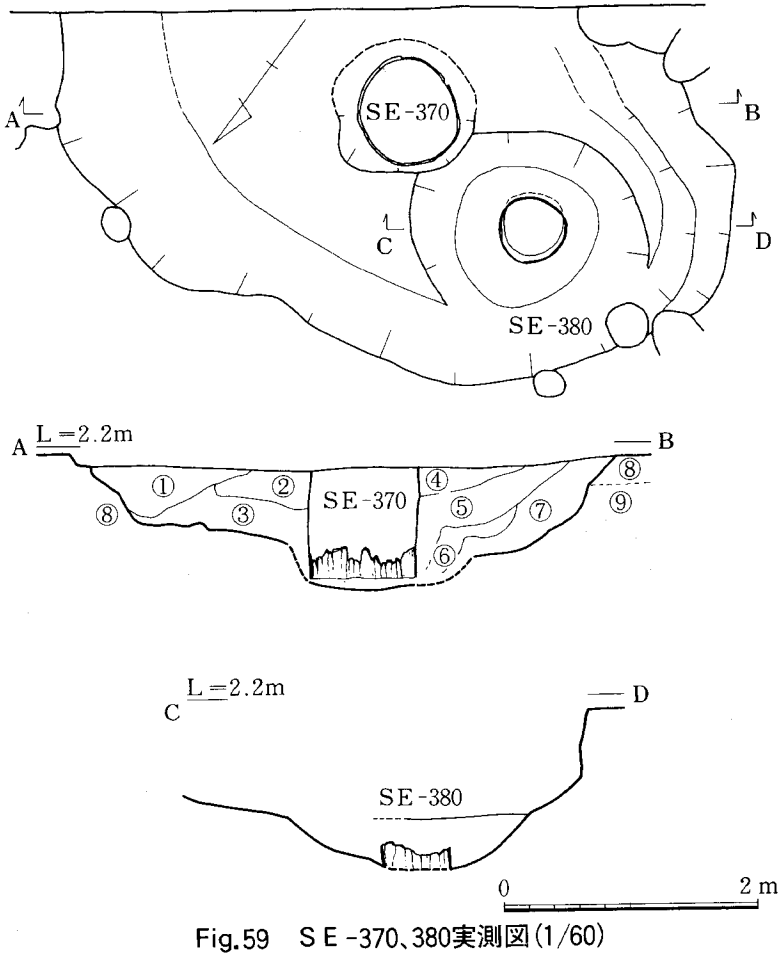


Fig.59 ＳＥ-370、380実測図(1/60)

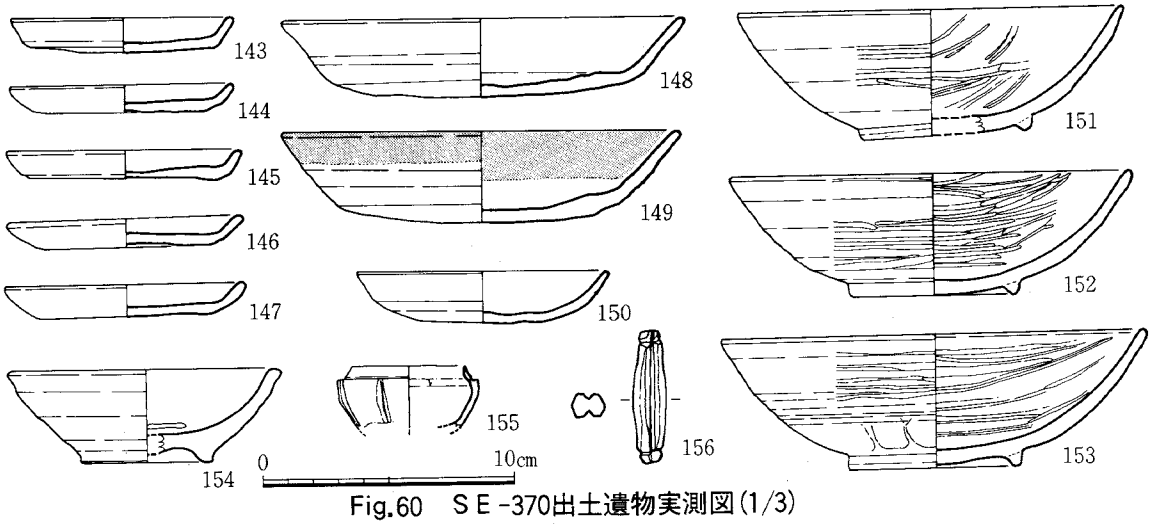


Fig.60　ＳＥ-370出土遺物実測図(1/3)

156は滑石製の有溝石錘で、側面と上下両端に切込みを施す。長5.3cm、径1.3cm、重さ10ｇ。
154、155は掘り方、他は井戸側内より出土した。
以上の遺物は、12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

ＳＥ－３７１　Fig.61

西３面で一部を検出したが、遺構の切り合いが著しいため、調査は４面で行った。SE-300の東側に位置し、これを切っている。井戸側を含めた井戸の主要部分は、北側の調査区外にある。掘り方は、調査区内では円形プランを呈する。深さ0.9ｍで平坦面をつくり、井戸側を据えるためと見られる坑を掘っている。

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器などが出土した。

ＳＥ－３８０　Fig.59　PL.15

井戸SE-370の掘り方底面で検出した、基底部のみの残欠である。井戸側は桶で、一部で二重に回っており、内側の径の小さな桶は水溜めの可能性がある。内側の桶は最大15cmの高さが残っていたが、腐食が著しく、大部分は痕跡であった。桶の径は55cmを測る。掘り方はSE-370掘削時に、これと同時に掘り上げてしまったと思われ、西側へ張り出す掘り方の一部が、SE-380のものであろうか。基底面には、井戸側を据えるための浅い坑を掘っており、坑の径は1.8ｍで、深さは0.5ｍを測る。

SE-380としての出土遺物はなく、SE-370に含まれているものと考えられる。

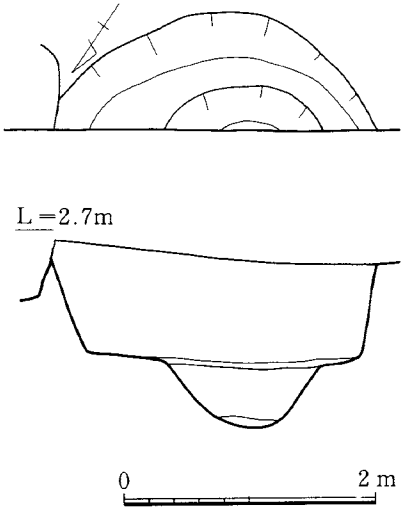


Fig.61　ＳＥ-371実測図(1/60)

(4)土坑

中世の土坑は多数を検出したが、紙数の限りもあり、遺物の出土量が多く、図化できたものを中心に取り上げる。

ＳＫ－３８ Fig.62 PL.15

東２面で検出した土坑である。Ｅ－３グリッドに位置する。溝状遺構SD-40を切っており、その上面に検出した。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長径1.1ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。土坑の壁はほぼ垂直に立ち、底面は平坦である。土坑内からは、土師器の皿、坏類がまとまって出土した。

ＳＫ－３８出土遺物 Fig.63 PL.28 Tab. 2

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、土師質土器鍋、中国産白磁・青磁（龍泉窯、

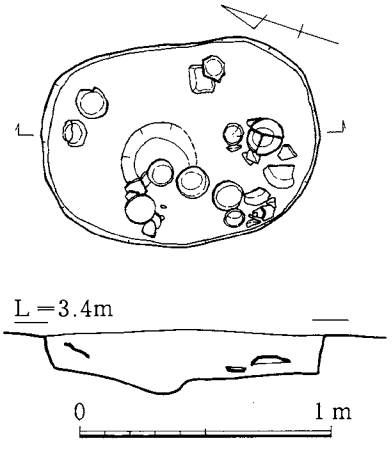
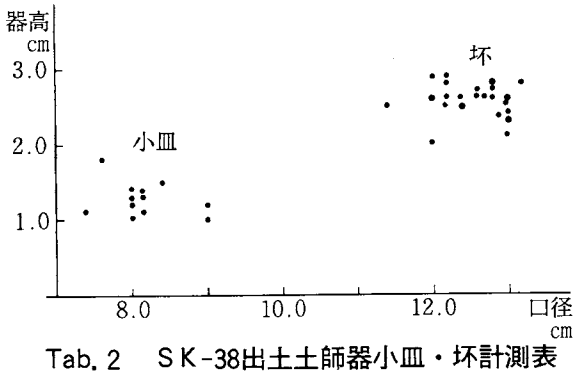


Fig.62 ＳＫ-38実測図(1/30)



Tab. 2 ＳＫ-38出土土師器小皿・坏計測表

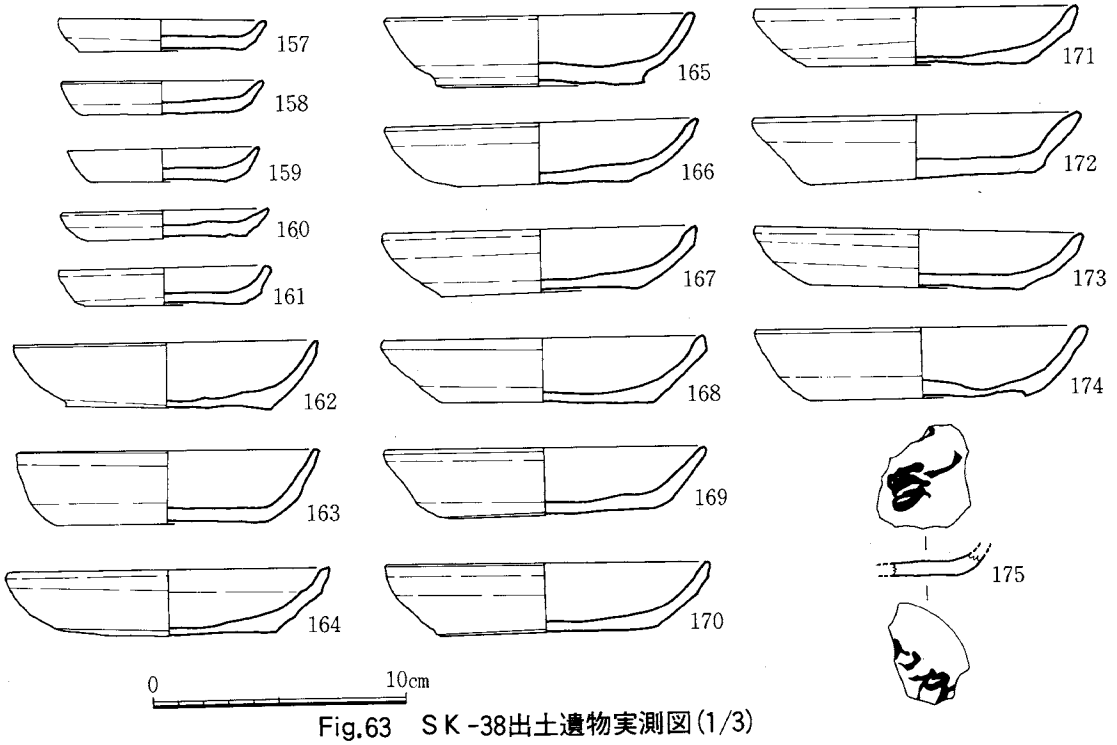


Fig.63 ＳＫ-38出土遺物実測図(1/3)

同安窯）・陶器などが出土した。土師器小皿と坏の法量を計測表に示す。

157～161は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。図化遺物以外のものを含めた平均の法量は、口径8.2cm、器高1.3cm。162～175は土師器坏で、底部は全て糸切り。平均法量は、口径12.6cm、器高2.6cm。小皿、坏ともに、内底にほとんどナデによる再調整を加えないのが特徴である。175は底部の内外面に墨書がある。

以上の土器は、13世紀中頃～14世紀前半に位置づけられよう。

ＳＫ－３９　Fig.64

東２面で検出した土坑である。Ｅ－１グリッドに位置する。東側は調査区外に伸びる。平面プランは不整な楕円形と見られ、長径2.3m、深さ0.35mを測る。土坑の壁はほぼ垂直に立ち、底面は平坦で、底面の西よりに浅い窪みがある。窪みは隅丸方形を呈し、長0.85m、深さ0.2mである。

ＳＫ－３９出土遺物　Fig.65　PL.28

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、土錘、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ類、同安窯）・青白磁などが出土した。

176～182は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径7.5～8.9cm、器高1.2～2.2cmで、口径に比べて器高の高いものが目立つ。183～185は土師器坏で、底部は糸切り。口径11.6～13.0cm、器高2.8cmで、口径の小さいものが多い。187～189は土錘で、計10本が出土しており、いずれも細身の紡錘形である。186は黒釉椀で、口縁は内湾気味に大きく開く。高台は径が小さく、浅く削り出す。胎土は灰色を呈し精良で、黒色の釉を厚く施す。口径11.0cm、器高4.3cm。

以上のほか、銅銭「乾元重寶」が１枚出土した。

遺物の時期は、14世紀前半～中頃と見られる。

ＳＫ－５１　Fig.66

東２面で検出した土坑である。Ｂ－１グリッドに位置する。平面プランは不整な円形で、径は0.95～1.1m、深さは0.12mと浅い。土坑の底面は平坦である。

ＳＫ－５１出土遺物　Fig.67　PL.29

出土量は少なく、土師器小皿、土師器坏、瓦器椀、中国産白磁・陶器がある。

190は白磁椀Ⅴ類で、外底に墨書がある。191は白磁平皿のⅡ類で、口径10.1cm、器高2.5cm。

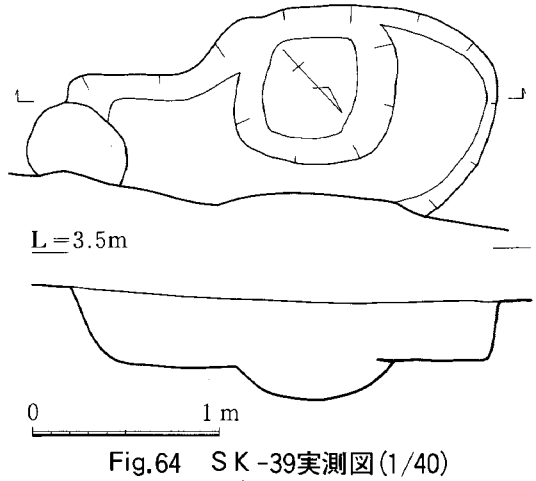


Fig.64　ＳＫ-39実測図(1/40)

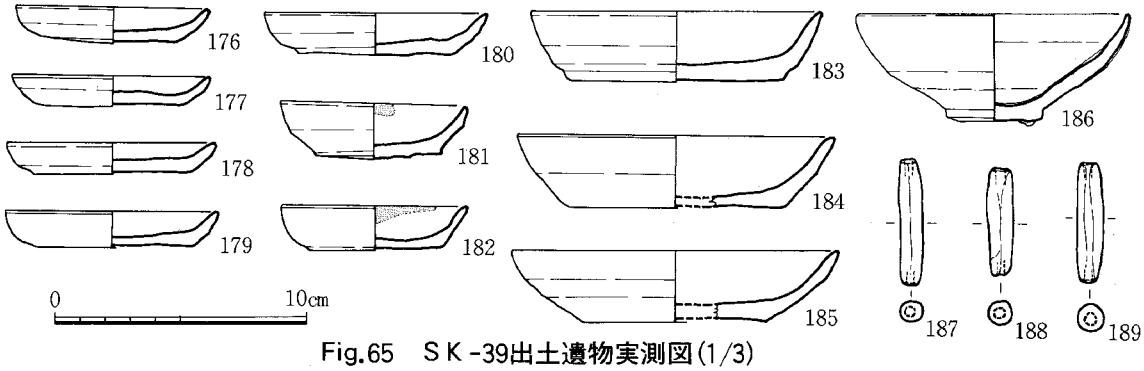


Fig.65　ＳＫ-39出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－６４　Fig.68　PL.15

東３面で検出した土坑である。Ｂ－１グリッドに位置する。平面プランは隅丸方形で、東西1.7ｍ、南北1.5ｍと、やや東西に長い。深さは0.13ｍと浅い。土坑の底面は平坦である。土坑の覆土には軟らかい粘土がつまっていたため、採集して水洗したが、粘土中からは何らの遺物も得ることができなかった。

ＳＫ－６４出土遺物　Fig.69

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、須恵質土器鉢、緑釉、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・陶器が出土した。

192～194は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。192は口径8.2cm、器高1.3cm、193は口径8.2cm、器高1.3cm、194は口径8.5cm、器高1.3cm。195は土師器坏で、底部は糸切り。口径11.6cm、器高2.5cm。

時期は、13世紀後半～14世紀か。

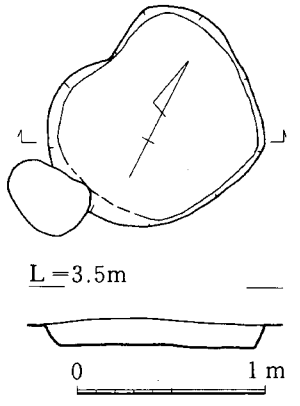


Fig.66　ＳＫ-51実測図(1/40)

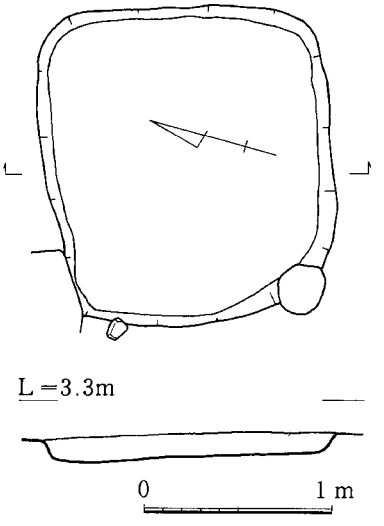


Fig.68　ＳＫ-64実測図(1/40)

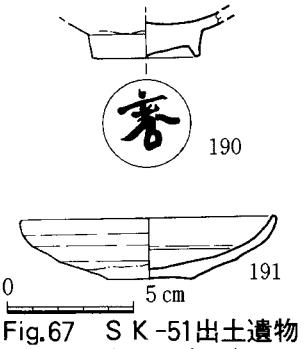


Fig.67　ＳＫ-51出土遺物実測図(1/3)

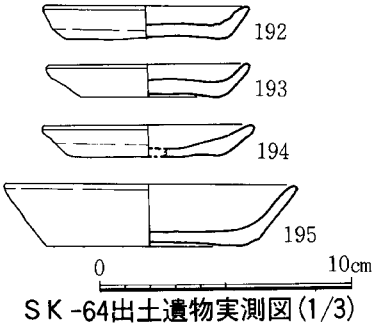


Fig.69　ＳＫ-64出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－６９　Fig.70　PL.15

東２面から３面にかけて遺構検出面を下げる際に出土した土師器の一括遺物である。本来は２面で検出すべき土坑に含まれていた遺物と考えられる。３面で遺物の下に土坑を検出したが、遺物はかなり浮いており、この土坑に伴うものとは考えにくい。Ｃ－１グリッドに位置する。土坑は不整形で、0.9ｍ×1.1ｍ、深さ0.2ｍである。

ＳＫ－６９出土遺物　Fig.71　PL.29

一括遺物には、土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・陶器などが含まれている。

196～205は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた16個体の平均の法量は、口径9.2cm、器高1.2cmである。206、207は土師器丸底坏である。底部はヘラ切りで、内面にヘラ磨きを施す。206は口径16.0cm、器高3.0cm、207は口径15.4cm、器高2.7cmをそれぞれ測る。208～210は土師器坏で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた５個体の平均法量は、口径16.0cm、器高3.2cmである。小皿、坏ともに大型品が多い。

以上の遺物は12世紀後半～13世紀代のものである。

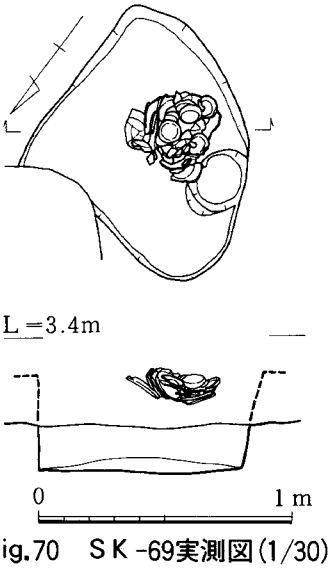


Fig.70　ＳＫ-69実測図(1/30)

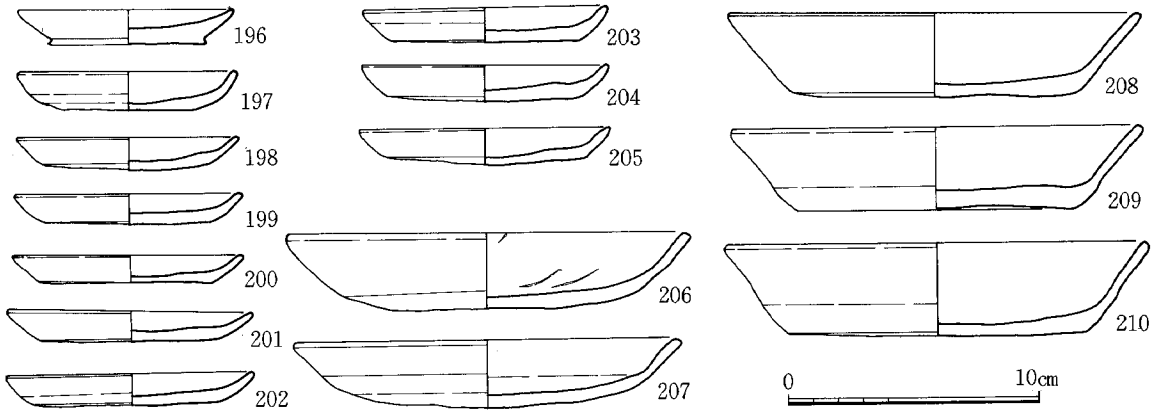


Fig.71　ＳＫ-69出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－７９　Fig.72

東３面で検出した土坑である。Ｂ－３グリッドに位置する。東側を現代の攪乱坑に切られ、半分以上を失っている。平面プランは楕円形と見られるが、規模は不明である。深さは0.6ｍを測る。土坑の基底は平坦面をなし、やや南に下っている。

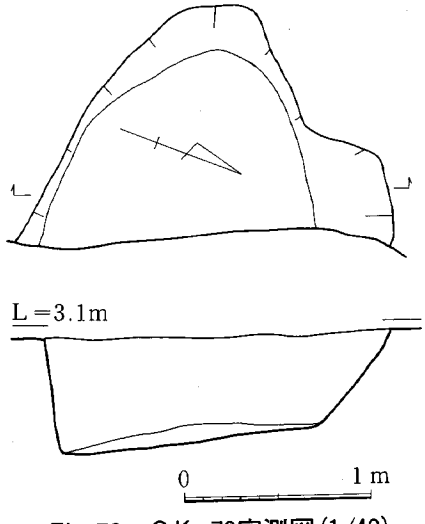


Fig.72　ＳＫ-79実測図(1/40)

ＳＫ－７９出土遺物　Fig.73

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、緑釉、灰釉、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯）・青白磁・天目・陶器類などが出土した。

211～214は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径は7.8～8.2cm、器高は1.1～1.5cmの間にある。215～219は土師器坏で、底部は糸切り。口径は11.6～13.2cm、器高は2.1～2.7cmの間にある。小皿、坏ともに内底にはナデ調整を加えない。

220は黄褐釉陶器の椀である。胎土は灰褐色を呈しており、細かな黒斑が見られる。釉は暗黄色の不透明釉で、やや緑味がかる。胎土、釉調の特徴は福建省磁灶窯系製品と似ている。

以上の遺物は、14世紀代にあてられよう。

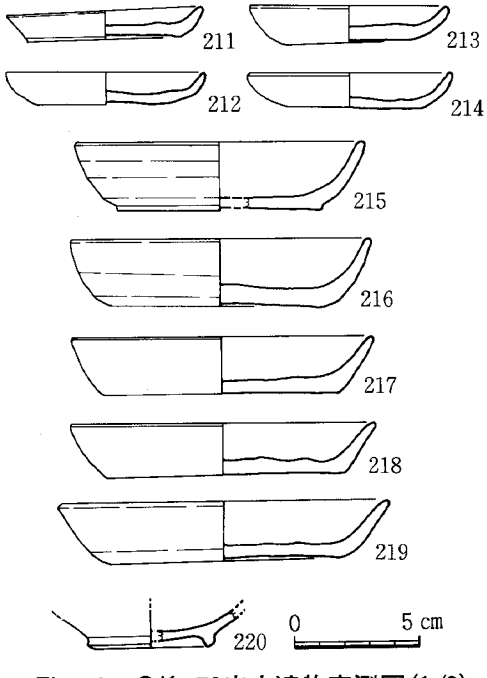


Fig.73　ＳＫ-79出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－８０　Fig.74　PL.15

３面に検出した土坑である。東西の調査区にまたがって調査した。Ｂ－４グリッドに位置する。平面プランは東西に少し長い円形を呈し、東西4.1ｍ、南北3.5ｍである。深さは0.5ｍを残し、底面は平坦である。

土坑の東よりに楕円形の落ち込みが見られ、SK－80下層としたが、別の土坑の可能性がある。ただし、出土遺物に

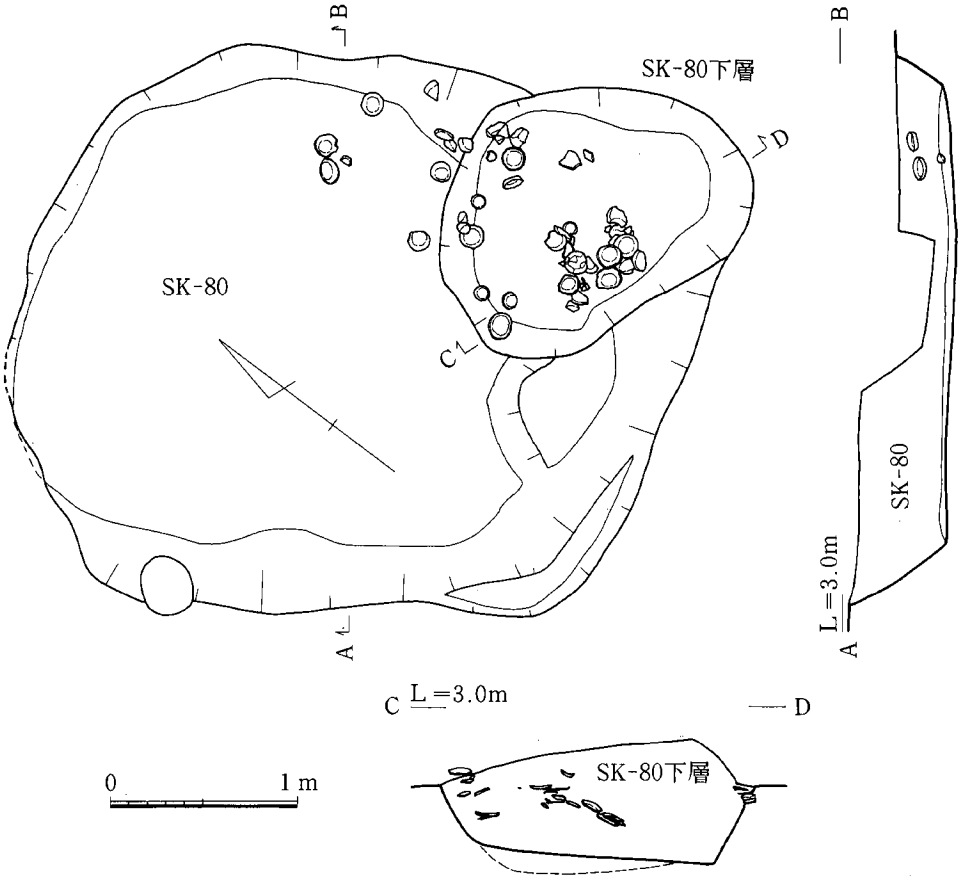
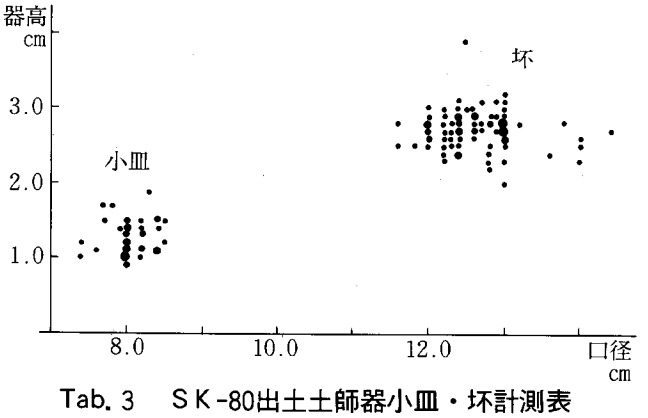


Fig.74　ＳＫ-80実測図(1/40)

時期差は認められない。SK－80下層遺構は東西に長い不整な楕円形で、東西1.7m、南北1.3mを測る。基底面とSK－80底面との比高差は0.6mで、北へ深い。

土坑からは土師器小皿、坏類が多量に出土した。数回に渡り、土坑の周囲からまとめて投げ入れられたような状況で、完品が多く、破損したために廃棄されたものではないと考えられる。祭祀に関わる土師器の投棄行為と見られる。



Tab. 3　ＳＫ-80出土土師器小皿・坏計測表

ＳＫ－８０出土遺物　Fig.75　PL.29　Tab. 3

SK－80出土遺物と、SK－80下層出土遺物に相違は認められない。

土師器小皿、土師器坏、黒色土器、瓦器椀、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁(越州窯系、龍泉窯、同安窯)・陶器、高麗・李朝陶磁器、銅銭などが出土した。量的には土師器がほとんどを占めており、完品が多い。土師器小皿と坏は、数値を表に示す。

279を除いて全て土師器である。底部は全て糸切りされている。221～245、280～284は小皿である。未図化遺物を含めた58個体の平均法量は、口径8.1cm、器高1.2cmである。246～278、285～296は土師器坏である。未図化遺物を含めた120個体の平均法量は、口径12.6cm、器高2.7cmである。278は底部の中央に穿孔している。小皿、坏ともに小型品が多く、内底にナデ調整を加えないものが目立つ。

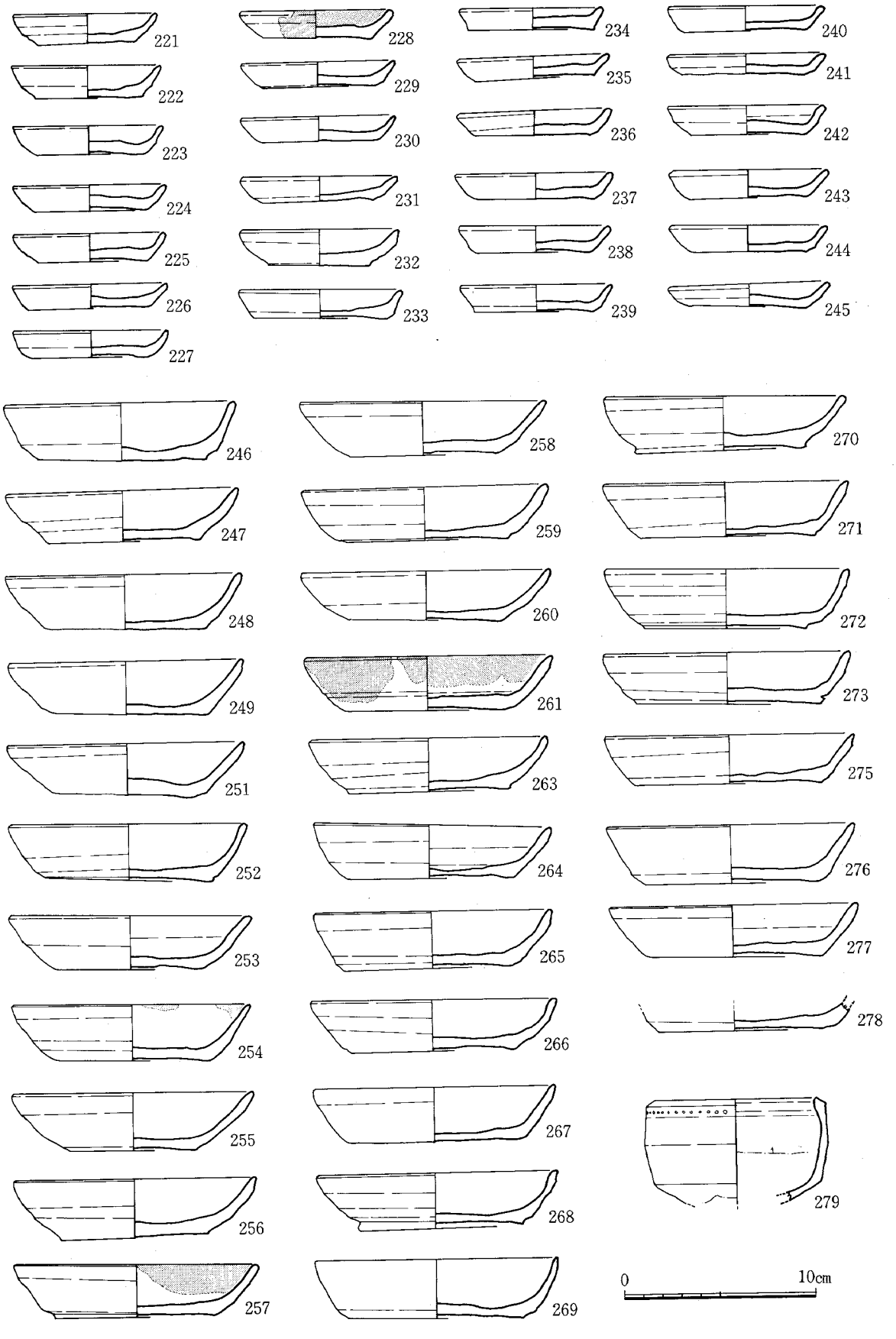


Fig.75　ＳＫ-80出土遺物実測図(1/3)

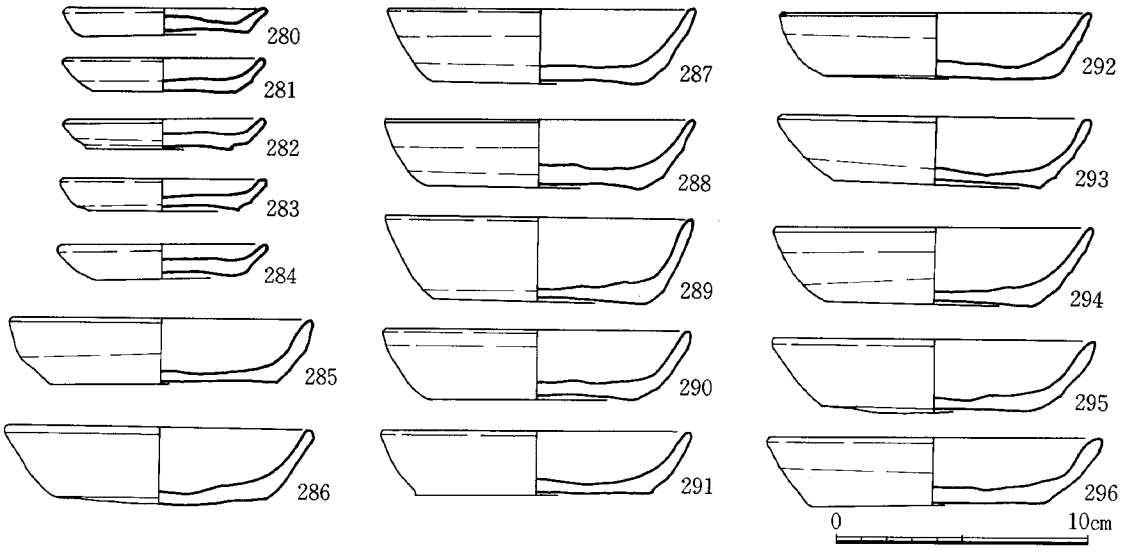


Fig.76　ＳＫ-80下層出土遺物実測図(1/3)

228、254、257、261は口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されている。

279は白磁の香炉である。口縁部外面に小さな連珠状の文様を入れる。淡灰白色の精良な胎土に、やや黄緑色を帯びた透明釉をかけ、内面下半と外面下部は露胎とする。全体に密な貫入がある。口径8.5cmである。

他に銅銭「熙寧元寳」が１枚出土した。

14世紀前半から中頃にあてられよう。

ＳＫ－８２　Fig.77　PL.16

東３面に検出した土坑である。Ｃ－２グリッドに位置する。西側の過半部を近世井戸SE－35の掘り方に破壊されており、全体形が不明だが、平面プランは隅丸方形か。深さは0.9ｍを残す。覆土は暗褐色砂質土で、遺物は周囲から流れ込んだ状況で出土しており、廃棄物を投入した土坑と見られる。

ＳＫ－８２出土遺物　Fig.78　PL.29

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁・陶器などが出土した。

297～301は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた10個体の平均法量は、口径7.9cm、器高1.1cmである。口径に比べて器高の高いものが含まれる。302～306は土師器坏で、底部

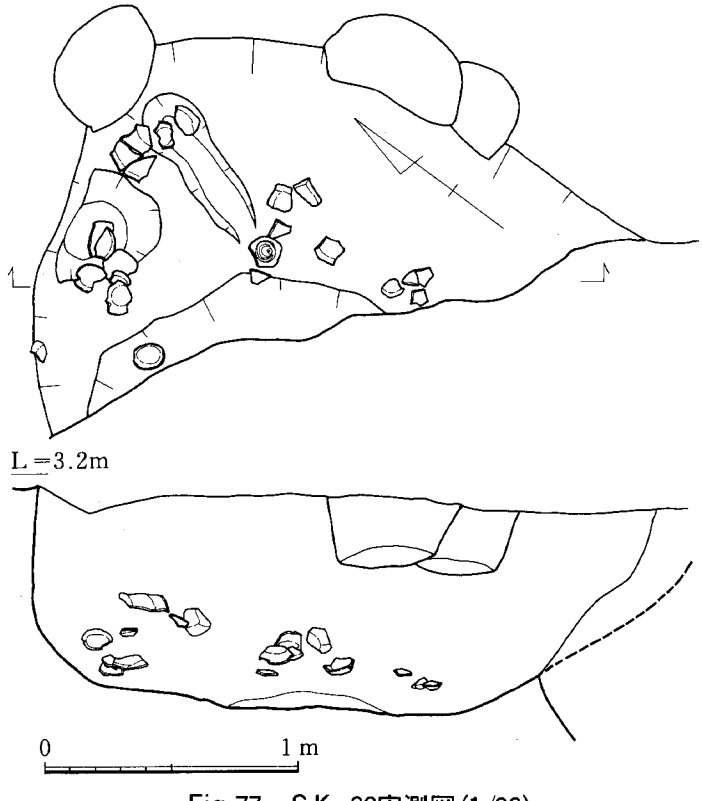


Fig.77　ＳＫ-82実測図(1/30)

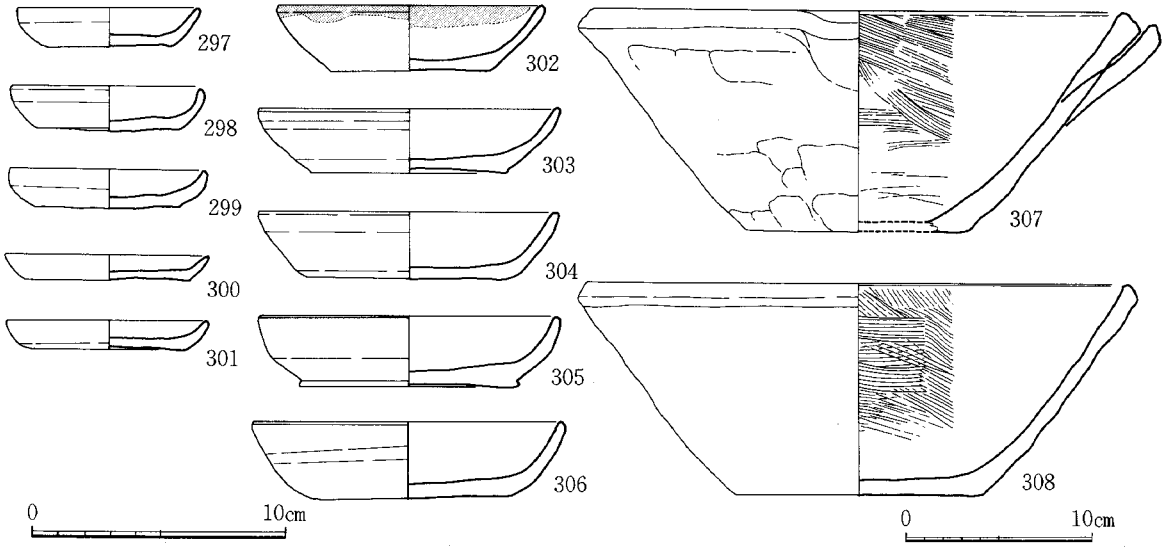


Fig.78　ＳＫ-82出土遺物実測図(1/3、1/4)

は全て糸切り。未図化遺物を含めた14個体の平均法量は、口径12.3cm、器高2.7cmである。内底にナデ調整を加えないものが多い。307、308は瓦質土器で、片口の捏ね鉢である。両者とも、内面には刷毛目調整を施しており、底部は使用によって著しく磨滅している。307は口径28.2cm、器高11.7cm、308は口径29.8cm、器高11.3cmをそれぞれ測る。

14世紀中頃にあてられよう。

ＳＫ－９７・９９　Fig.79

東３面に検出した土坑である。Ｄ－２グリッドに位置する。検出時には東西に長い楕円形の土坑と考えて掘り進め、途中で２つの土坑の切り合いであることが判明したため、東側に位置するものをSK－97、西側に位置するものをSK－99とした。検出面での規模は東西2.45ｍ、南北0.9ｍであるが、本来はふたつとも径0.9ｍほどの円形土坑であろう。深さはともに0.3ｍである。

ＳＫ－９７出土遺物　Fig.80　PL.29

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器などが出土した。

309～314は土師器小皿である。309、310は底部ヘラ切りで、309が口径9.6cm、器高1.5cm、310が口径10.2cm、器高1.6cmである。311～314は底部糸切りで、口径8.7～9.5cm、器高1.0～1.5cmである。315、316は土師器丸底坏である。315は口径15.0cm、器高3.1cmで、口縁部内面にコテあて痕が残る。316は口径15.4cm、器高3.3cmである。

317、318は白磁である。317は平皿Ⅲ類で、内面に圏線を入れる。口径10.8cm、器高2.7cmである。318は大鉢で、胎土はきめが細かく精良で、淡い黄緑色の半透明釉がかかる。見込みには浅い沈圏線が巡る。また、畳付には目跡がある。口径23.4cm、器高7.3cmである。317、318は中国広東省あたりの製品と考えられる。

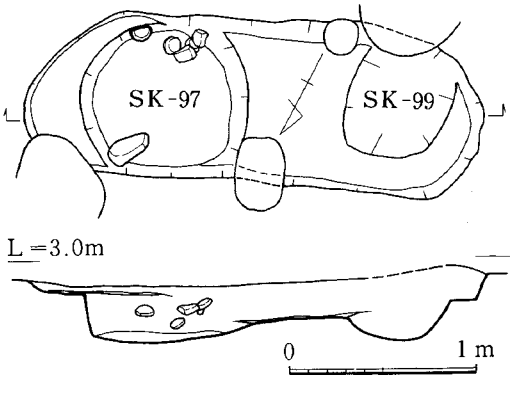


Fig.79　ＳＫ-97、99実測図(1/40)

以上の遺物は、12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

ＳＫ－９９出土遺物 Fig.80 PL.29

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（同安窯）・陶器が出土した。

319～321は土師器小皿である。319、320は底部ヘラ切りで、いずれも口径9.6cm、器高1.2cmである。321は底部糸切りで、口径9.8、器高1.3cmである。322は土師器丸底坏で、口径16.8cm、器高3.3cmである。323は瓦器椀で、やや足高の高台を貼付し、内外面に粗雑なヘラ磨きを施す。口径15.8cm、器高5.2cmを測る。

以上の遺物は、12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

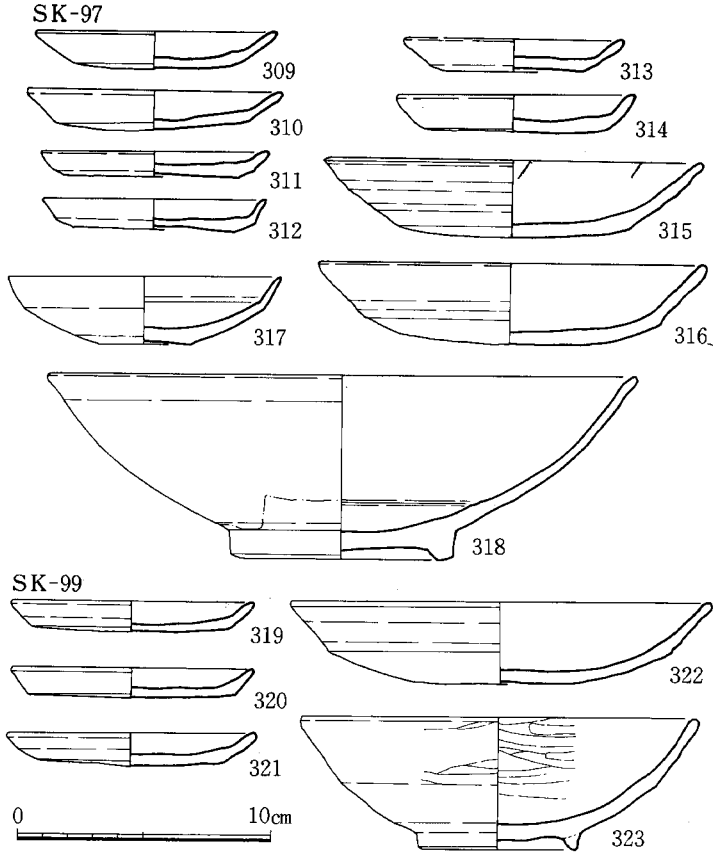


Fig.80 ＳＫ-97、99出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１１０ Fig.81

東３面に検出した小さな土坑である。Ｅ－２グリッドに位置し、南側の一部を近代の井戸に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径0.9ｍ、短径0.75ｍを測る。深さは0.23ｍで、段状に掘り窪めている。覆土には礫が含まれていた。

ＳＫ－１１０出土遺物 Fig.82 PL.29

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、黒色土器、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅱ類）・陶器などが出土した。

324～332は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径8.0～8.4cm、器高0.9～1.6cmで、器高がやや高めのものが多い。333、334は土師器坏で、ともに底部は糸切りである。333は口径12.0cm、器高3.0cm、334は口径13.0cm、器高3.0cm。

時期は13世紀後半から14世紀にかけてであろう。

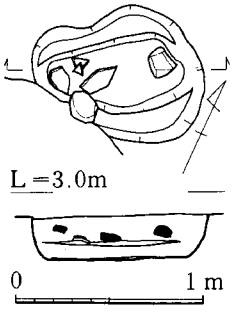


Fig.81 ＳＫ-110実測図(1/40)

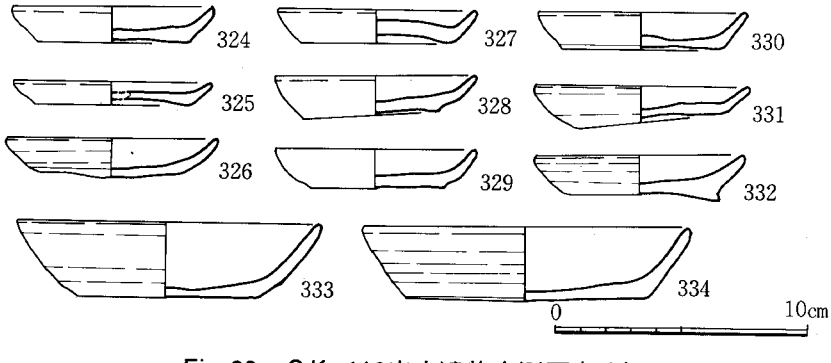


Fig.82 ＳＫ-110出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１１７　Fig.83

東３面に検出した土坑である。Ｅ－２グリッドに位置し、西側の一部を近世の遺構SK－10に切られている。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長径1.2ｍ、短径0.9ｍを測る。深さは0.85ｍで、円筒形に掘り下げている。

ＳＫ－１１７出土遺物　Fig.84　PL.30

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系）・青白磁・陶器などが出土した。

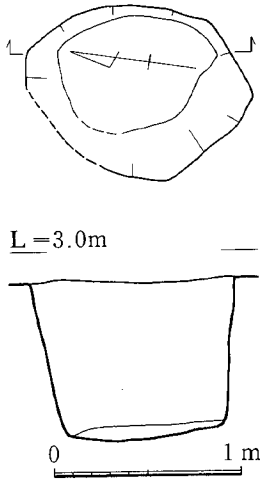


Fig.83　ＳＫ-117 実測図(1/40)

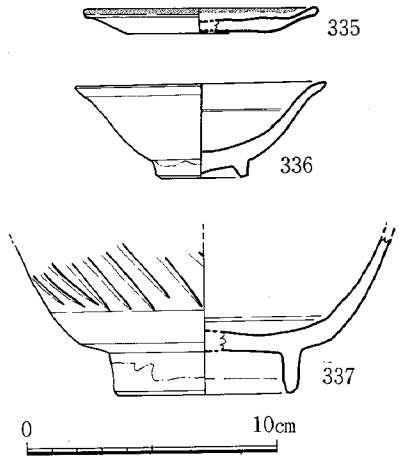


Fig.84　ＳＫ-117 出土遺物実測図(1/3)

335は土師器小皿で、底部糸切りである。口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿に用いている。口径9.4cm、器高1.0cmを測る。336は白磁の小椀Ⅴ類である。内面に沈圏線を巡らせる。口径10.0cm、器高3.7cmである。337は白磁椀０－Ⅲ類で、かなりの大型品である。外面には片切り彫りによる縦位の劃線を入れている。胎土は黄白色を呈し、やや粉っぽい。化粧掛けを施した後、白濁した釉をかけている。細かな貫入がある。高台径は7.3cmである。中国広東省の製品である。

以上の遺物は、12世紀前半代に位置づけられよう。

ＳＫ－１２１　Fig.85　PL.16

東２面から３面に遺構検出面を下げる途中で出土した、土師器の一括遺物である。本来２面で検出すべき土坑に含まれていたものと考えられる。Ｄ－１グリッドに位置する。最大で５枚の土師器が重なっていた。また、覆土には炭化物が含まれていた。

ＳＫ－１２１出土遺物　Fig.86

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）の他、少量の白磁と青磁が出土した。

338～340は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径7.8～8.2cm、器高1.2～1.5cmの間におさまる。341～346は土師器坏で、全て底部は糸切りである。口径12.0～15.9cm、器高2.3～2.8cmの間の数値を測る。

時期は、14世紀代である。

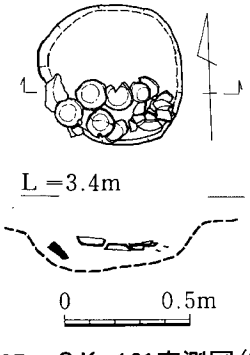


Fig.85　ＳＫ-121実測図(1/30)

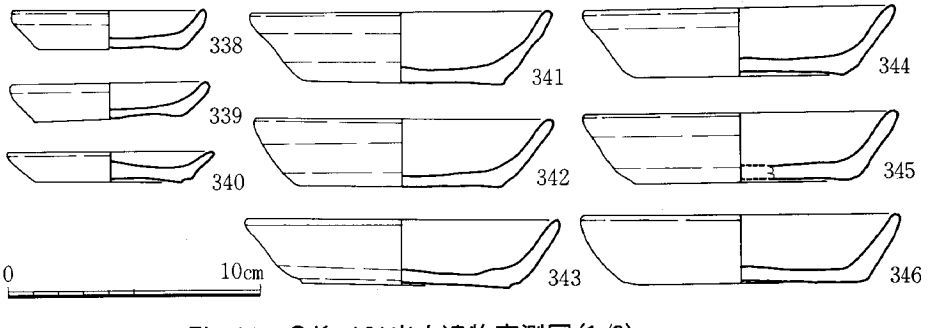


Fig.86　ＳＫ-121出土遺物実測図(1/3)

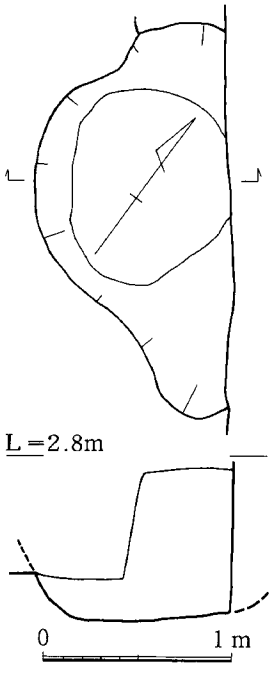


Fig.87　ＳＫ-122実測図(1/40)

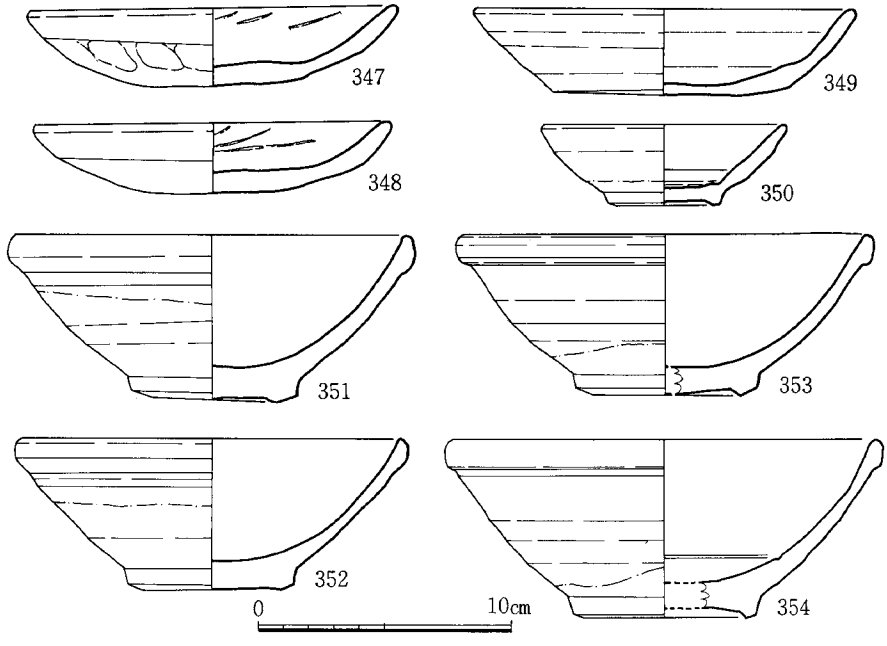


Fig.88　ＳＫ-122出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１２２　Fig.87　PL.16

東４面に検出した。Ｅ－１グリッドの調査区壁際に位置しており、東側は区外へ伸びている。壁沿いに長い楕円形プランを呈し、長さ2.1ｍ、深さ0.8ｍである。覆土は暗褐色砂質土である。

ＳＫ－１２２出土遺物　Fig.88　PL.30

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・陶器などが出土した。

347、348は土師器丸底坏である。口縁部内面にコテあて痕が残る。347は口径14.8cm、器高3.1cm、348は口径14.3cm、器高2.8cmである。349は土師器坏で、底部糸切りである。口径15.2cm、器高3.4cmを測る。

350は白磁の高台付き皿Ⅰ類である。見込みには段がある。351～354は白磁椀のⅣ類で、354は見込みに沈圏線が巡る。

以上の遺物は、12世紀中頃から後半に位置づけられる。

ＳＫ－１２３　Fig.89　PL.17

東４面に検出した。Ｅ－１グリッドに位置する。東端が少し試掘トレンチにかかっている。極めて小さな土坑で、東西に長い楕円形プランを呈し、長径0.45ｍ以上、短径0.32ｍ、深さ0.15ｍである。白磁がまとまって出土したが、全て割れており、これを廃棄するために掘られた土坑と見られる。

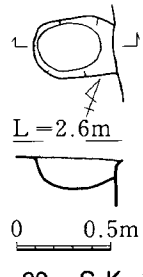


Fig.89　ＳＫ-123
実測図(1/40)

ＳＫ－１２３出土遺物　Fig.90　PL.30

出土遺物は、土師器片３点以外は、全て中国産白磁・陶器である。

355～358は白磁の椀Ⅴ類で、いずれも見込みに段が付く。また、355は口縁が輪花となる。359は白磁の小椀で、外面からの縦位のヘラ押しにより、口縁を輪花につくる。口径10.7cm、器高6.5cmである。360は褐釉陶器Ａ群壺で、口縁上面

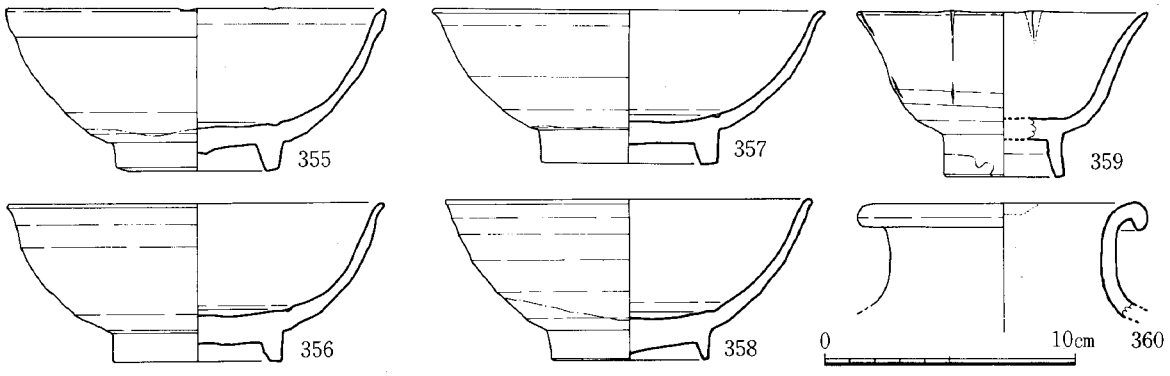


Fig.90　ＳＫ-123出土遺物実測図(1/3)

に白色の目土が残る。

11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられよう。

ＳＫ－１２５　Fig.91　PL.16

東４面に検出した。Ｃ－２グリッドに位置する。平面プランはほぼ正円形をなし、径は1.2～1.28m、深さは0.85mである。断面図に見る土層の土質は、①黒褐色土、②黒褐色土＋黒色土、③黒色土である。

ＳＫ－１２５出土遺物　Fig.92　PL.30

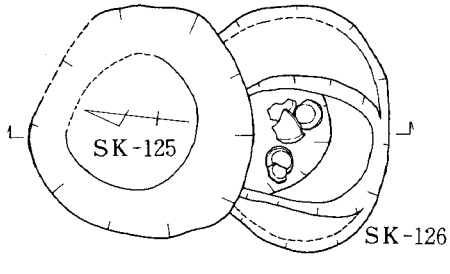
土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀・小皿、中国産白磁・青磁（越州窯系）・青白磁・陶器などが出土した。土師器はヘラ切りと糸切りが相半ばしている。また、土師器丸底坏が量的に多い。

361～364は土師器小皿で、底部はヘラ切り。口径8.5～9.1cm、器高1.1～1.6cm。365～368は土師器丸底坏で、368のみが底部糸切り。口径15.2～15.6cm、器高2.7～3.2cm。369～373は瓦器椀である。いずれも、高台は断面台形で低く、坏底に広めに貼付する。ヘラ磨きは粗雑で、外面には指頭痕が残り、磨きを加えない部分が多い。374は瓦器の小皿である。ヘラ磨きは内面のみに施しており、内底はジグザグ状に、体部は口縁と平行に加えている。

375～378は白磁である。375は椀Ⅱ類、376は椀Ⅳ類、377は平皿Ⅱ類である。378は小壺で、白色の胎土に、やや黄味をおびた透明釉をかける。体部外面下半～外底と内面上半は露胎である。

379は青白磁合子の蓋である。

12世紀中頃から後半にあてられよう。



ＳＫ－１２６　Fig.91　PL.16

東４面に検出した。SK-125の南に隣接し、これに切られている。平面プランは略円形で、東西長1.3mを測る。深さ0.3mまで下げて平坦面をつくり、さらに中央を一段下げる。遺構検出面から基底面までの深さは0.6mである。土坑覆土は③黒色土で、遺物の多くは、基底面から少し浮いた状態で出土した。

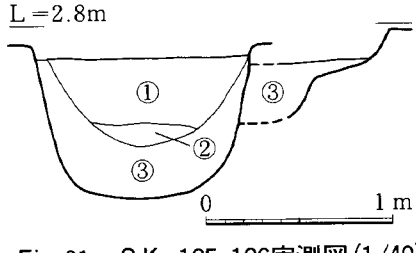


Fig.91　ＳＫ-125、126実測図(1/40)

ＳＫ－１２６出土遺物　Fig.93　PL.30

土師器小皿（ヘラ切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、

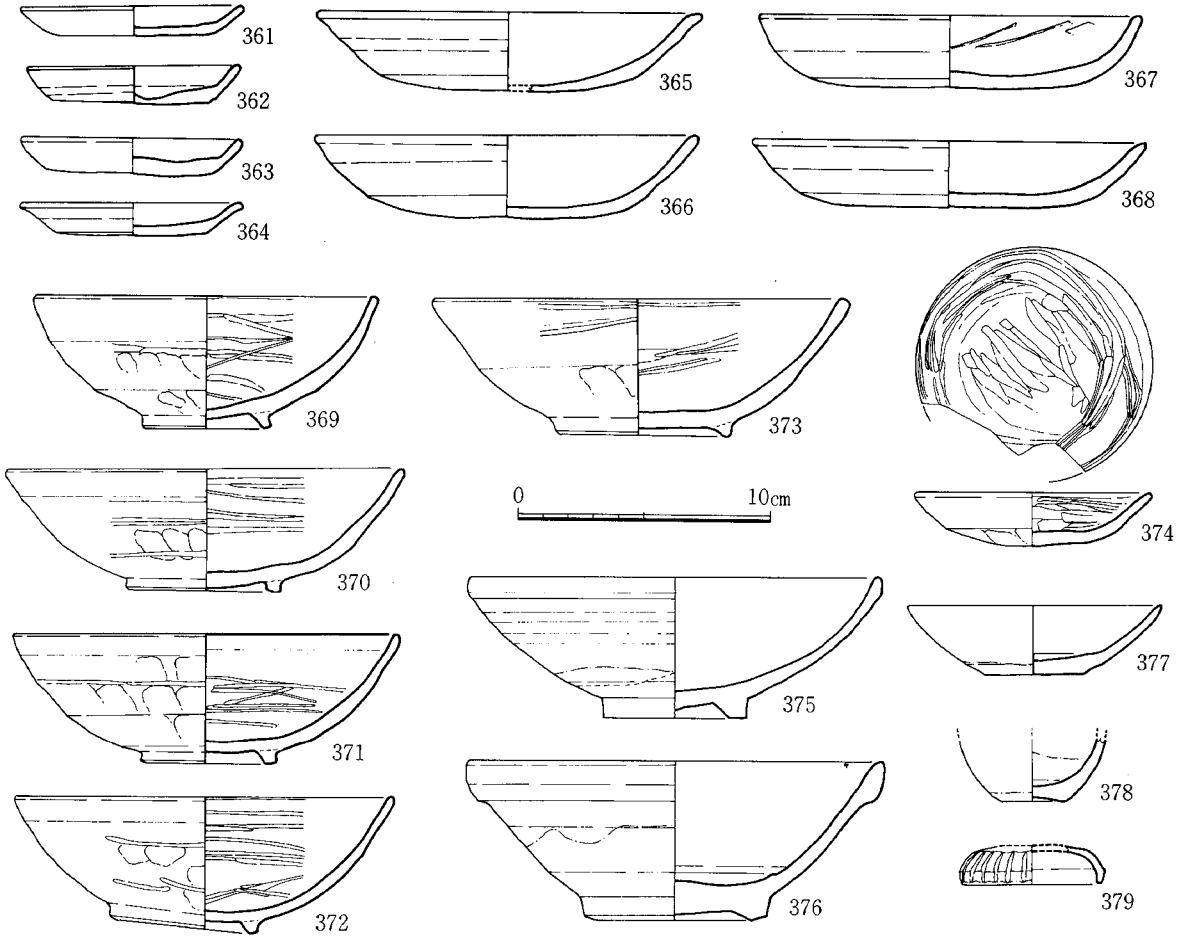


Fig.92　ＳＫ-125出土遺物実測図(1/3)

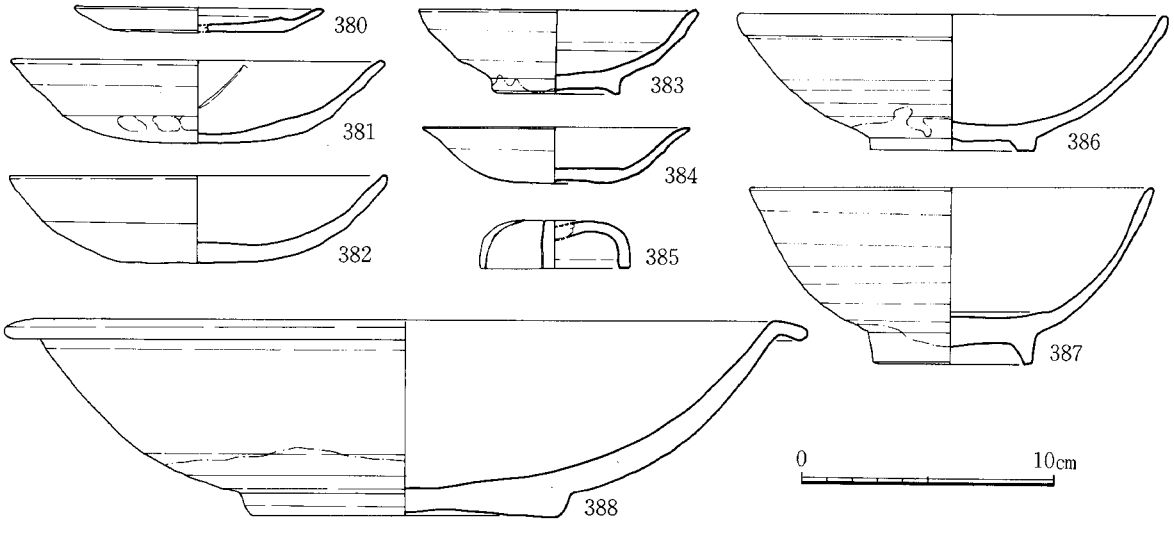


Fig.93　ＳＫ-126出土遺物実測図(1/3)

黒色土器、土錘、中国産白磁・陶器が出土した。

380は土師器小皿で、底部はヘラ切り。口径9.8cm、器高1.1cm。381、382は土師器丸底坏で、381は内面にコテあて痕が残り、口径14.8cm、器高3.3cm。382は口径15.0cm、器高3.5cm。

383～388は白磁である。383は高台付き皿Ⅰ類、384は平皿Ⅱ類、386は椀Ⅱ類、387は椀Ⅴ類である。385は合子の蓋で、外面は瓜割状になり、内面は露胎。388は鉢で、口縁は端部で屈曲して下方へ垂れ、

底部は円盤状を呈する。白色の精良な胎土に、乳白色の半透明釉をかけ、体部外面下半は露胎とする。見込みに融着痕がある。口径29.0cm、器高7.8cm。中国広東省あたりの製品と見られる。

以上の遺物は、12世紀代にあてられよう。

ＳＫ－１２７ Fig.94 PL.16

東４面に検出した。SK-125、126の東に隣接し、これらに切られている。平面プランは南北にやや長い楕円形で、長径2.0m、短径1.8mを測る。深さは0.9mを残しており、基底面は平坦で、北側に一段高い。

ＳＫ－１２７出土遺物 Fig.96

土師器小皿、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、中国産陶器などが出土した。

389は内面のみを燻す黒色土器Ａ類の椀で、内面に渦巻き状に暗文を入れている。口径17.0cm。他の遺物に比べると時期的にかなり古く、遺構の時期を示す遺物ではない。畿内系の土器であろう。

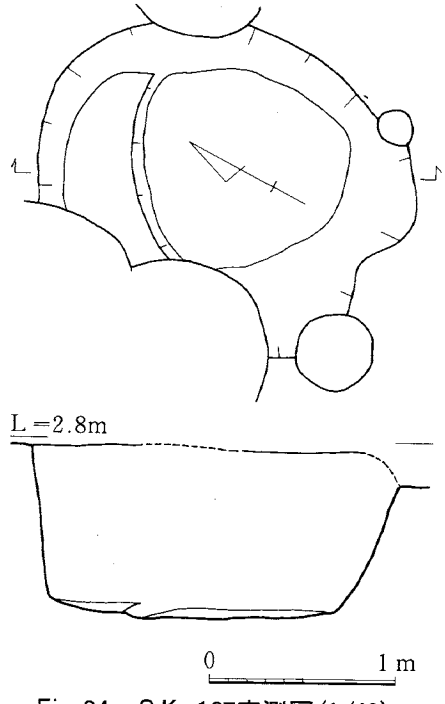
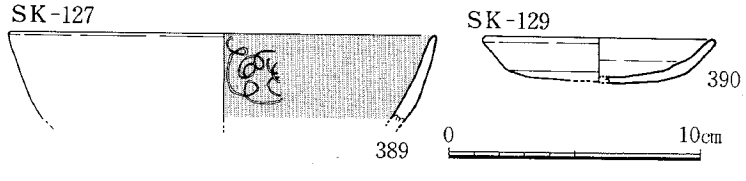


Fig.94 ＳＫ-127実測図(1/40)

ＳＫ－１２９ Fig.95 PL.16、17

東４面に検出した。Ｂ－２グリッドに位置する。西側を現代の攪乱坑に切られる。また、南側は調査時に降雨のため崩壊した。平面プランは楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.85m、深さ0.6mで、基底面は平坦で少し南へ下る。滑石製の石鍋１個体半が、北北西から投げ棄てられた状態



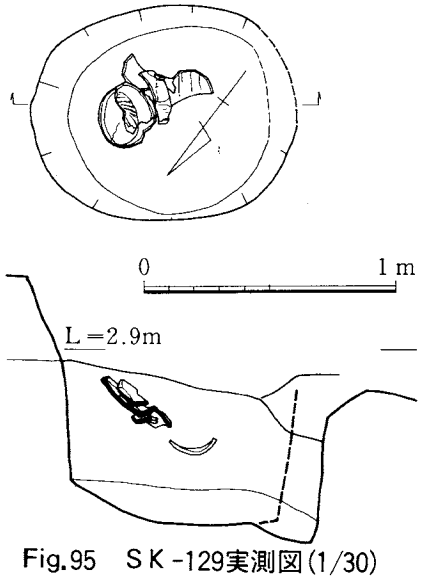


Fig.95 ＳＫ-129実測図(1/30)

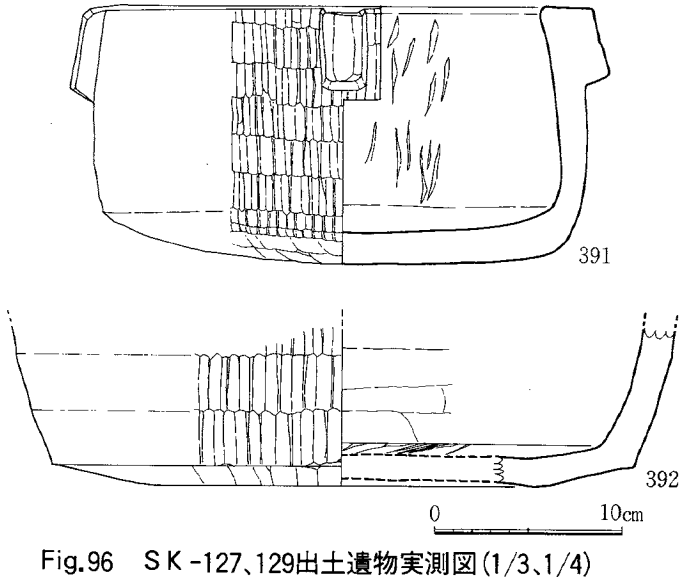


Fig.96 ＳＫ-127、129出土遺物実測図(1/3、1/4)

で出土した。

ＳＫ－１２９出土遺物 Fig.96 PL.30

土師器小皿（ヘラ切り）、土師器坏、石鍋、中国産白磁・陶器が出土した。

390は土師器小皿で、底部はヘラ切りである。口径9.2cm、器高1.7cm。

391、392は滑石製の鍋である。391の口縁は上から見て隅丸方形である。口縁部外面の４カ所に縦位の耳がある。外面のヘラ削りは非常に丁寧に施している。外面にはススが付着している。口径22.0cm、器高13.7cmを測る。392は石鍋の底部片で、やや大ぶりである。

11世紀後半～12世紀の遺物であろう。

ＳＫ－１３０ Fig.97 PL.16

東４面に検出した。Ｄ－３グリッドに位置する。平面プランは南北に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.4m、深さ0.85mである。土坑の壁が外に向かって膨らみ、縦横断面形が袋状を呈する。記録を取る前に土坑の上部が崩壊してしまっており、実際はもっとオーバーハングしていた。基底面は平坦である。土坑の上層付近から、完品を含む土師器を中心に、遺物がかなりまとまって出土した。

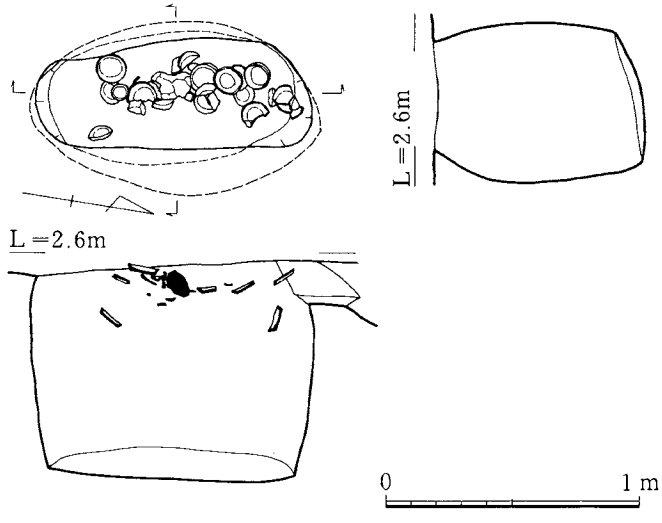


Fig.97 ＳＫ-130実測図(1/30)

ＳＫ－１３０出土遺物 Fig.98 PL.31

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯、同安窯）・陶器などが出土した。

393～397は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径7.7～9.0cm、器高1.1～1.6cmの間の数値を示す。398～404は土師器坏で、全て底部は糸切りである。口径10.6～12.6cm、器高2.3～2.7cmの間の数値を示すが、口径は11.5～12.0cmに集中している。

405は同安窯系青磁の皿で、見込みに櫛描きで施文している。胎土は灰白色を呈し精良で、淡青緑色の透明釉をかける。

以上の遺物は、13世紀代に位置づけられよう。

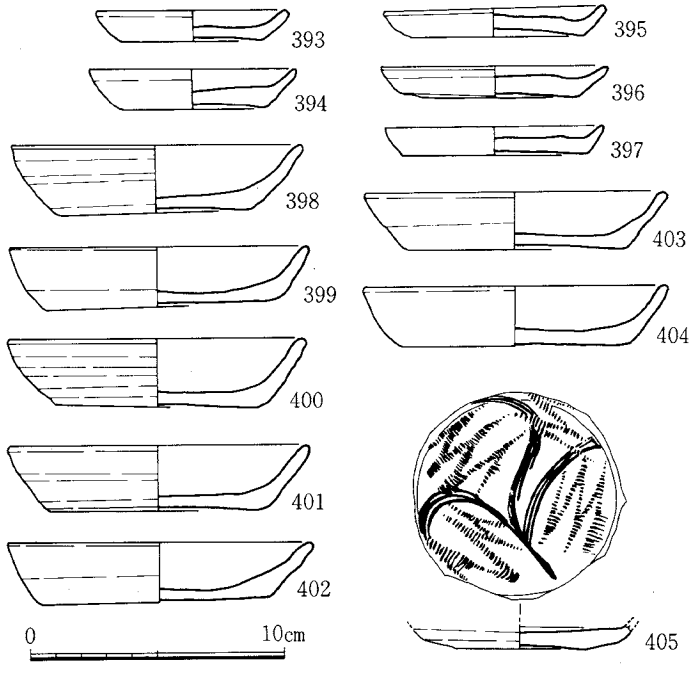


Fig.98 ＳＫ-130出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１３２ Fig.99 PL.16

東４面に検出した。Ｄ－１グリッドの調

査区壁際に位置し、東側は調査区外に伸びる。平面プランは東西に長い楕円形と見られ、短径は1.5m程度である。深さは0.85mを残しており、円筒形に掘り下げている。覆土は、黒色土、砂質土、暗褐色砂質土の順に堆積しており、最下層の黒色土は有機質であった。

ＳＫ－１３２出土遺物 Fig.100 PL.31

土師器小皿（ヘラ切り）、土師器坏、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（龍泉窯、連江窯）・陶器などが出土した。

406は土師器小皿で、底部はヘラ切り。口径9.4cm、器高0.8cm。407は土師器椀で、外面口縁直下をヘラ状工具によって窪ませ、端部を玉縁状に仕上げる。白磁椀を模したものであろう。408は須恵質土器の小皿で、底部糸切り。口径8.8cm、器高2.0cm。409は白磁の壺であろう。外面に毛彫り状の文様がある。胎土は淡黄白色を呈し、やや粉っぽい。透明釉をかける。中国広東省あたりの製品であろうか。410、411は白磁の高台付き皿Ⅰ類である。

以上の遺物は12世紀代の特徴を持っている。

ＳＫ－１３５ Fig.101 PL.18

東４面に検出した。Ｃ－２グリッドに位置し、南西側を現代の攪乱坑に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.1m、深さ1.0mである。土坑の壁はほぼ直立しており、基底面は平坦で、中央が少し窪む。

ＳＫ－１３５出土遺物 Fig.102 PL.31

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系）・陶器、高麗青磁などが出土した。

412～419は全て白磁である。412～415は平底皿Ⅱ類。412、413は外底の釉を掻き取る。414は体外面下部から底部は露胎で、釉下に化粧掛けしている。415は極めて低い高台が付き、畳付から外底にかけて露胎である。釉下に化粧掛けする。416は合子の蓋である。上面にヘラで施文している。胎土は黄白色を呈し、やや粉っぽい。釉は空色をおびた透明釉で、全体に貫入がある。417は合子の身で、高めの高台が付く。外面を縦位にヘラで施文する。口縁端部から内面は露胎で、口唇部に重焼きの痕跡が残る。418はⅤ類、419はⅡ類の白磁椀の底部片で、外周を打ち欠いており、玩具として用いたものか。

以上の遺物より、12世紀中頃～後半に比定されよう。

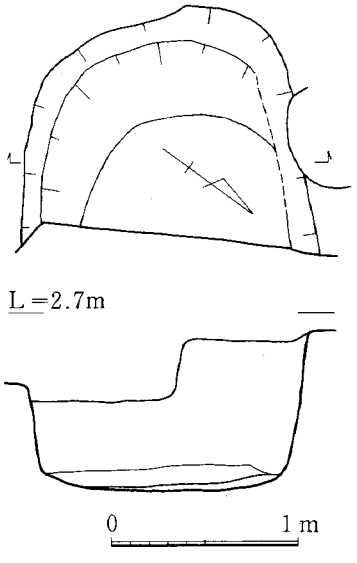


Fig.99 ＳＫ-132実測図(1/40)

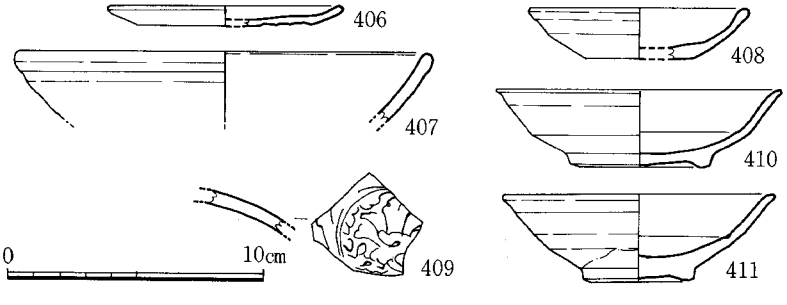


Fig.100 ＳＫ-132出土遺物実測図(1/3)

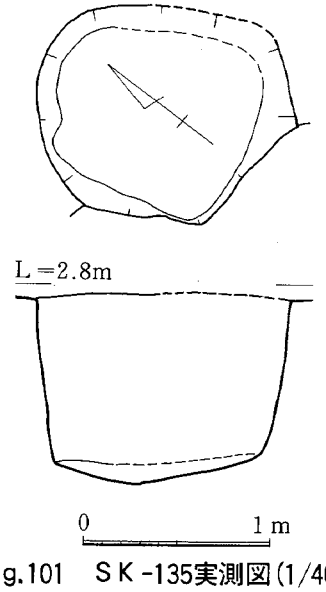


Fig.101 ＳＫ-135実測図(1/40)

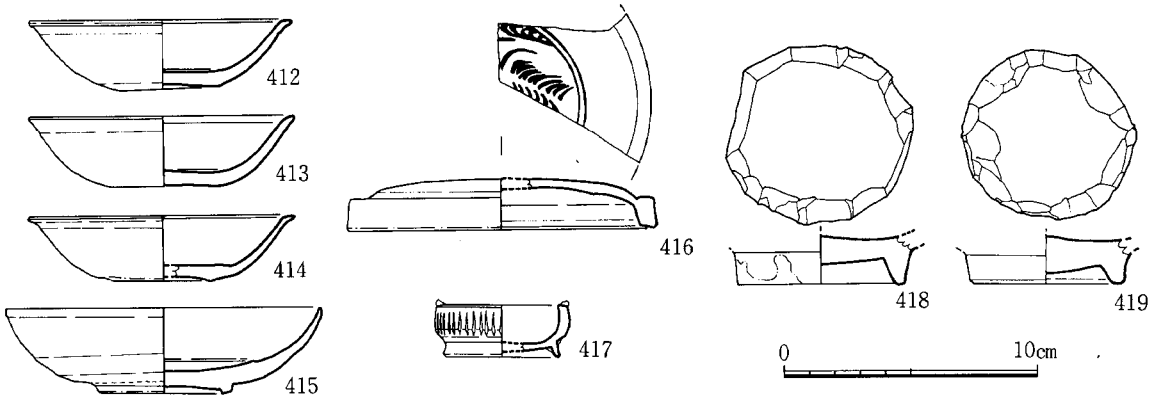


Fig.102　ＳＫ-135出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１４５　Fig.103　PL.18

東４面に検出した。Ｄ－２グリッドに位置する。東側を他の土坑に切られる。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長径1.7m、短径1.3m、深さ0.55mである。断面形は逆台形をなし、基底面は平坦につくる。

ＳＫ－１４５出土遺物　Fig.105 PL.31

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、中国産白磁・青磁（北宋前半代越州窯系、龍泉窯）・陶器などが出土した。

420は越州窯系青磁の水注である。体部外面は縦位の劃線により瓜割り形に分割され、それを中心に片切り彫りによる施文を加える。外底から頸部内面まで施釉しており、外底に細長い目跡が残る。図上に復元した法量は、口径12.5cm、器高20.0cmである。北宋前半代の製品であろう。421～423は白磁皿で高台が付く。421、422の高台は極めて低く、釉下には化粧掛けしている。中国広東省付近の製品と考えられる。423は白磁高台付皿のⅠ類である。

時期は、12世紀代にあてられよう。

ＳＫ－１４８　Fig.104

東４面に検出した。Ｅ－１～２グリ

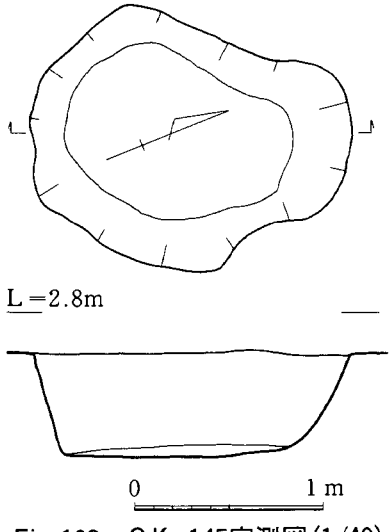


Fig.103　ＳＫ-145実測図(1/40)

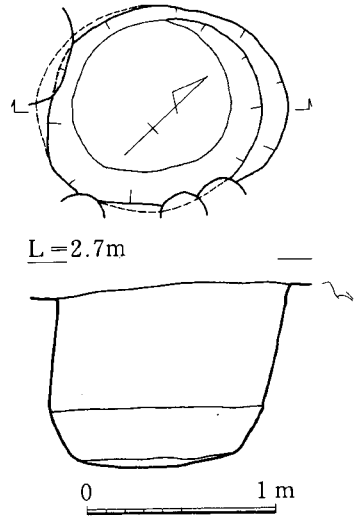


Fig.104　ＳＫ-148実測図(1/40)

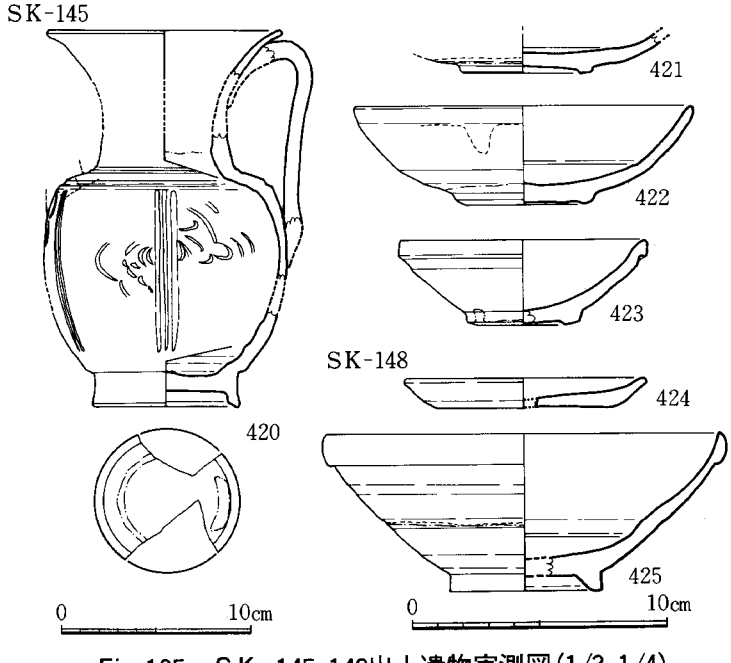


Fig.105　ＳＫ-145、148出土遺物実測図(1/3、1/4)

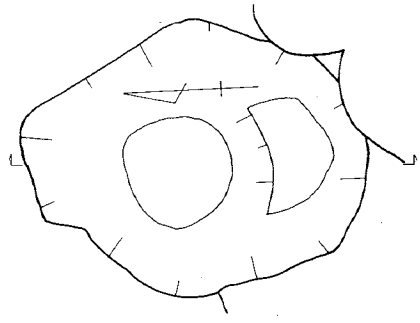
ッドに位置する。平面プランは南北に若干長い円形を呈し、長径1.25m、短径1.1m、深さ1.0mである。土坑は南西方向に向かって掘り下げており、かたよった袋状の断面形を呈する。基底面は平坦である。

ＳＫ－１４８出土遺物 Fig.105 PL.31

土師器小皿（ヘラ切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・陶器が出土した。

424は土師器小皿で、底部はヘラ切り。口径9.6cm、器高1.2cm。425は白磁椀のⅡ類で、釉下に化粧土を施す。

12世紀代か。



ＳＫ－１５０ Fig.106 PL.18

東４面に検出した。Ｅ－２グリッドに位置する。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、長径1.85m、短径1.45m、深さ0.8mである。南側にテラス状に一段高くつくる。基底面は皿状をなす。

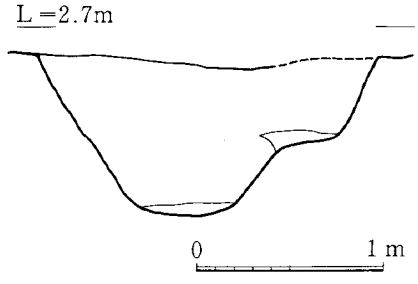


Fig.106 ＳＫ-150実測図(1/40)

ＳＫ－１５０出土遺物 Fig.107 PL.31

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系）・陶器が出土した。

426、427は瓦器椀である。高台は低い。内外面のヘラ磨きはかなり雑で、磨きと磨きの間の隙間が多い。428は白磁椀で、外底には墨書がある。花押か。

以上の遺物は、12世紀代に位置づけられよう。

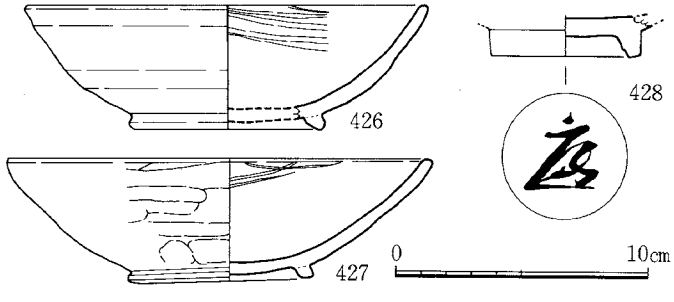


Fig.107 ＳＫ-150出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－１５４ Fig.108

東４面に検出した。Ｅ－２グリッドに位置する。平面プランは南北にやや伸びた円形を呈し、長径1.5m、短径1.25m、深さ1.05mである。円筒状に掘り下げており、土坑の壁はほぼ直立している。基底面は浅い皿状を呈する。

ＳＫ－１５４出土遺物 Fig.109 PL.31

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、須恵質土器鉢の他、多量の中国産白磁が出土した。

429は土師器の小皿で、底部はヘラ切りである。口径9.4cm、器高1.5cm。430は土師器丸底坏で、押し出し痕は認められるが、内面にヘラ磨きはなく、底部の丸みは退化している。

431～434は白磁である。431は高台付き皿Ⅰ類。432は合子の身で、口縁の受け部から内面、および畳付以下は露胎である。見込みには径３cmの円

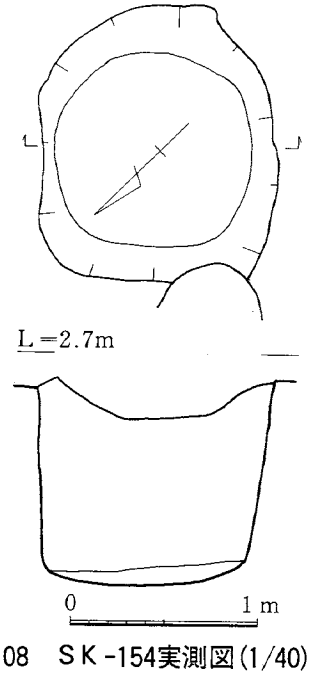


Fig.108 ＳＫ-154実測図(1/40)

形の熔着痕が3ヶ所残っており、内面には小坏を3個配していたと思われる。口径14.6cm、器高3.3cm。433は椀Ⅱ類で、釉下に化粧掛けしている。434は椀Ⅳ類である。

以上の出土遺物は、12世紀中頃に位置づけることができよう。

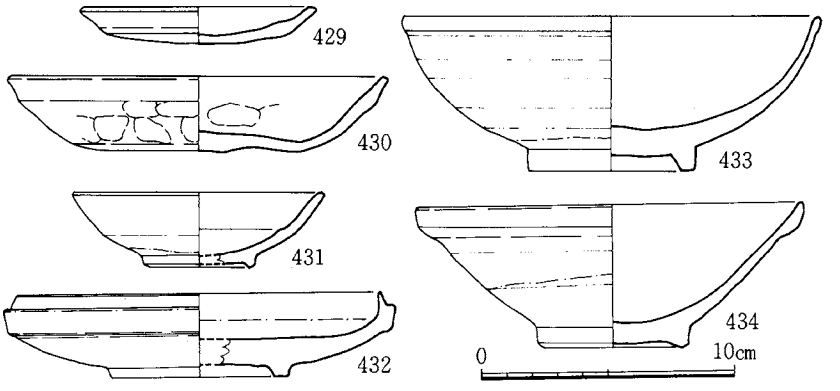


Fig.109　SK-154出土遺物実測図(1/3)

SK－155　Fig.110　PL.18

東4面に検出した。E－2グリッドに位置する。北端は他の土坑に切られている。平面プランは南北に長い楕円形を呈しており、長径1.6m、短径1.2mを測る。深さは0.8mで、断面形は袋状を呈し、土坑の壁が外へ膨らむ。。

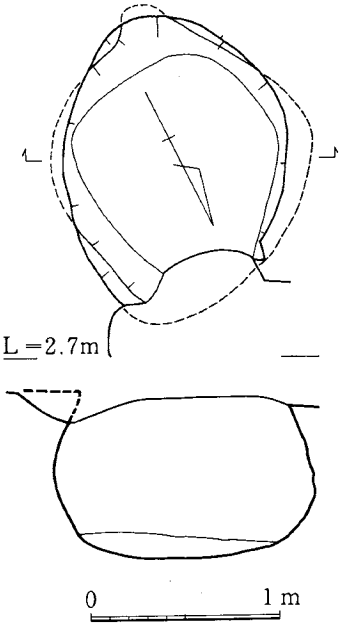


Fig.110　SK-155実測図(1/40)

SK－155出土遺物　Fig.111　PL.31

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青白磁・陶器が出土した。

435は土師器の小皿で、底部はヘラ切りである。口径8.6cm、器高1.3cmを測る。436、437は瓦器椀で、体部には丸みがあり、器高はやや高めである。436は内外面に細かいヘラ磨きを施しており、口唇部内面には沈線を巡らせている。畿内系の土器であろうか。437は雑なヘラ磨きを施しており、内面にはコテあて痕が残る。

438、439は白磁の椀Ⅴ類である。ともに口縁は小さな玉縁につくる。

以上の遺物は、12世紀前半～中頃に位置づけられよう。

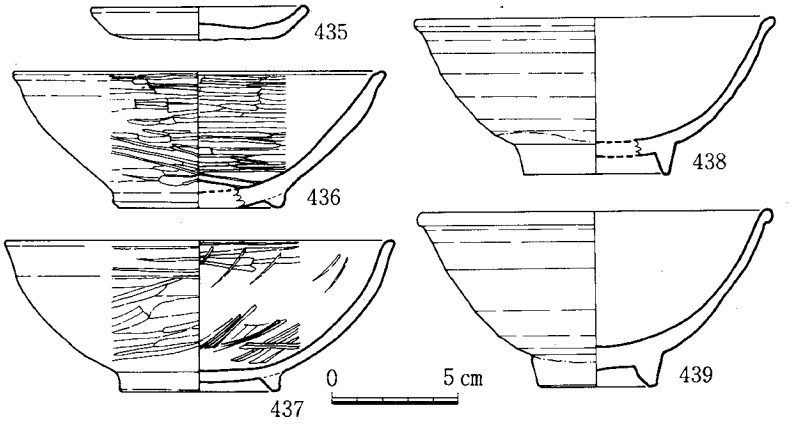


Fig.111　SK-155出土遺物実測図(1/3)

SK－165　Fig.112　PL.18

東4面に検出した。D－3～4グリッドに位置し、北端をSK-130に切られる。西側の一部は、調査区境のため未調査。平面プランは南北にやや長い円形を呈し、長径1.3m、深さ0.95mである。円筒形に掘り下げており、土坑の壁は直立し、基底面は平坦である。

SK－165出土遺物　Fig.113　PL.32

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質

土器鉢、緑釉、灰釉、中国産白磁・青磁（龍泉窯、連江窯）・陶器などが出土した。

440、441は土師器の小皿で、底部は糸切り。440は口径8.8cm、器高1.1cm。441は口径9.3cm、器高1.0cm。442、443は土師器丸底坏で、底部の押し出しは目立たず、体部の丸みは退化しており、内面のヘラ磨きは雑な印象を受ける。442は口径15.0cm、器高3.0cm、443は口径15.1cm、器高3.0cmを測る。444は須恵質土器鉢で、口縁端部は平坦で、内側へ少し突出する。底部は丸みを帯びている。口径28.0cm、器高11.2cm。東播系須恵器か。

以上の遺物は、12世紀前半～中頃に位置づけられよう。

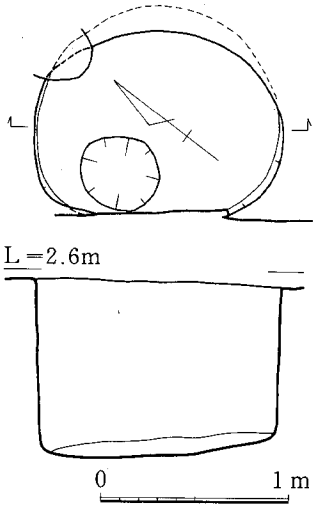


Fig.112　ＳＫ-165実測図(1/40)

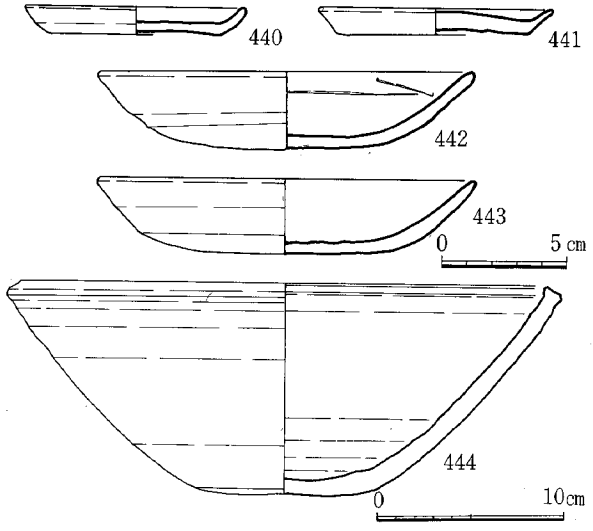


Fig.113　ＳＫ-165出土遺物実測図(1/3、1/4)

ＳＫ－２１７　Fig.114　PL.18

西２面に検出した。Ｂ－５グリッドに位置する。平面プランは不整な隅丸方形を呈し、南北1.4m、東西1.4mで、深さは0.2mとかなり浅い。土坑の底面は平坦である。土坑の南よりの位置から、備蓄銭が固まって出土した。銅銭は、十数枚ごとに棒状に固まったものが、折り重なって出土しており、銅銭の孔に紐を通して数珠つなぎにし、袋のようなものに入れた状態で置かれたものと思われる。

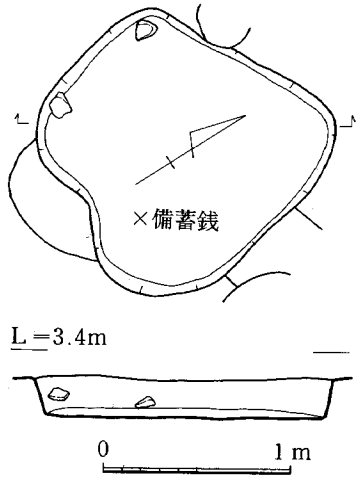


Fig.114　ＳＫ-217実測図(1/40)

ＳＫ－２１７出土遺物　Fig.115　PL.32　Tab. 9

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、土師質土器、石製品、中国産白磁・明染付け皿・陶器などの他、大量の銅銭が出土した。

445、446は滑石製品である。445は石鍋を再利用して、石錘としたものである。上端と左右に切り込みを入れており、片面にススが付着している。下端部は欠損する。446は小形の模造品で、偏平な石につまみを付けた形を呈する。下面は凸につくる。

銅銭は計159枚を数える。内訳はTab.9に示す通りである。最古のものは「開元通寶」で初鋳621年、最も時期の下るものは「弘治通寶」で初鋳1488年で、量的には「洪武通寶」（1368年）が多い。

15世紀後半に位置づけられる。

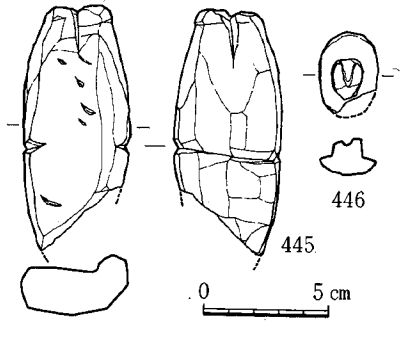


Fig.115　ＳＫ-217出土遺物実測図(1/3)

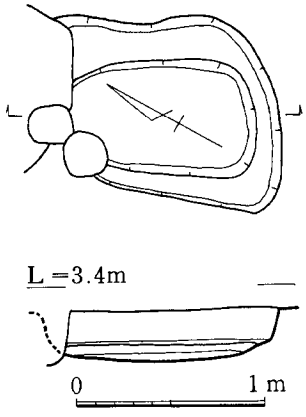


Fig.116　ＳＫ-225実測図(1/40)

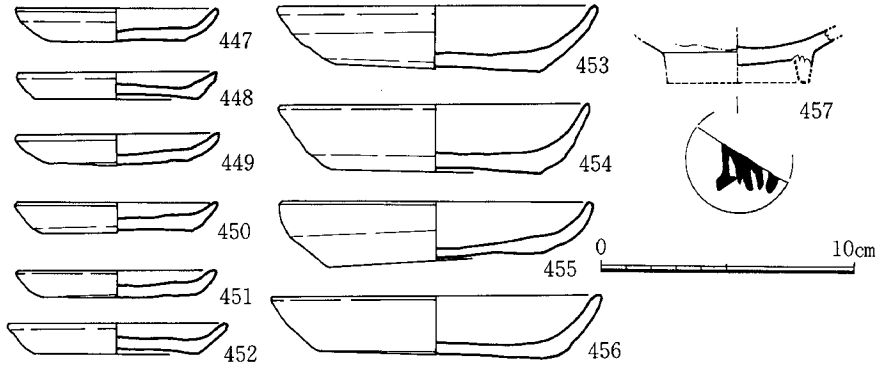


Fig.117　ＳＫ-225出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－２２５　Fig.116

西２面に検出した。Ｄ－５グリッドに位置し、北端を他の土坑に切られる。平面プランは南北に長い不整な隅丸長方形を呈し、南北1.1ｍ以上、東西0.9ｍで、深さは0.25ｍと浅い。土坑の底面は段状に掘り窪めている。

ＳＫ－２２５出土遺物　Fig.117　PL.32

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師質土器鍋、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・陶器が出土した。

447～452は土師器小皿で、底部は糸切り。口径8.0～8.1cm、器高1.1～1.4cmで、法量の数値が近似する。453～456は土師器坏で、底部は糸切り。口径12.3～13.0cm、器高2.4～2.7cm。

457は白磁椀で、外底に墨書があり、「綱」であろうか。

以上の遺物は14世紀代にあてられよう。

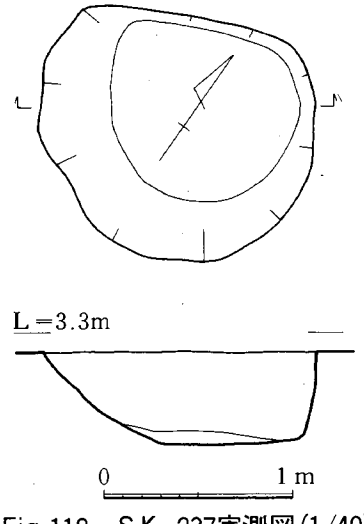


Fig.118　ＳＫ-237実測図(1/40)

ＳＫ－２３７　Fig.118　PL.18

西２面に検出した。Ｅ－６～７グリッドに位置する。平面プランは北側が直な円形を呈し、径は1.3～1.5ｍである。深さは0.5ｍで、北よりに深く掘る。

ＳＫ－２３７出土遺物

Fig.119　PL.32

中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ・Ⅴ類）・明青花、青銅製品が出土した。

458は龍泉窯系青磁椀Ⅴ類で、体部内面に雷文を入れる。見込みにもスタンプ文があるが、不鮮明で図示できない。高台内は露胎で、「大」の墨書がある。459、460は明

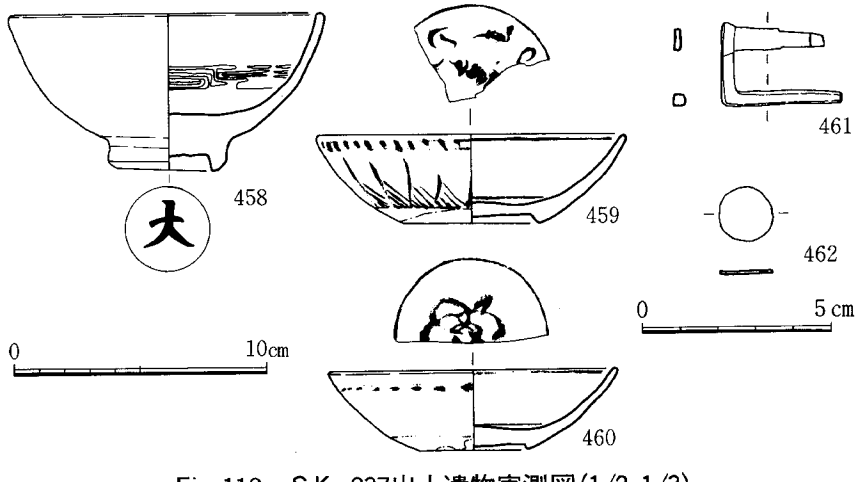


Fig.119　ＳＫ-237出土遺物実測図(1/2、1/3)

代の青花皿で、碁笥底である。459は体部外面に蕉葉文を施しており、見込みの文様は梵字であろうか。

461は青銅製の鍵の一部である。「L」形の細い棒に「ー」形の薄い板を付けて、「匚」字形につくる。462は青銅製品である。径1.4cmの円形の板で、極めて薄い。461に付属するものか。

以上の遺物は、15世紀後半～16世紀代に比定できよう。

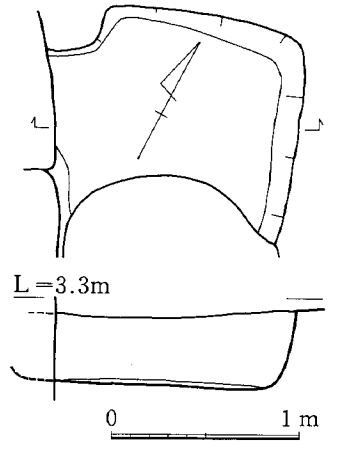


Fig.120　SK-238実測図(1/40)

SK－238　Fig.120

西2面に検出した。E－5～6グリッドに位置する。現代井戸と試掘トレンチに切られており、平面プランは不明瞭だが、隅丸方形になるものであろう。東西長1.3mで、南北長は不明。深さは0.35mで、基底面は平坦である。

SK－238出土遺物　Fig.121

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・藍釉・陶器などが出土した。

463は明代の白磁皿である。口縁は端反りで、畳付外縁を斜めに面取りしている。

464、465は青銅製品である。464は繭型分銅で、片面に楔で「五匁」と陰刻する。長さ2.3cm、最大幅1.6cmで、重量は正確な計量を行っていないが、約15gを量る。465は刀の責金具である。

以上の遺物は、15世紀後半～16世紀代に比定される。

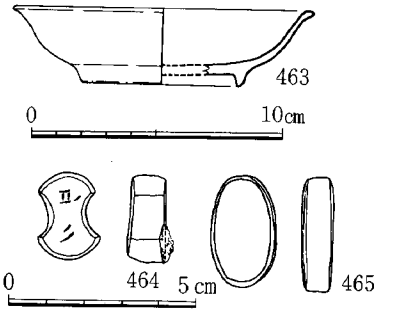


Fig.121　SK-238
出土遺物実測図(1/2、1/3)

SK－239　Fig.122

西2面に検出した。B－4グリッドに位置する。東西調査区の境にあり、東側の調査区に伸びていたはずだが、東では検出できていない。現状では南北に長く、径2.1m。深さ0.55mで、ほぼ直に掘り下げており、底面は平坦で南に深い。

SK－239出土遺物　Fig.123　PL.32　Tab.4

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁

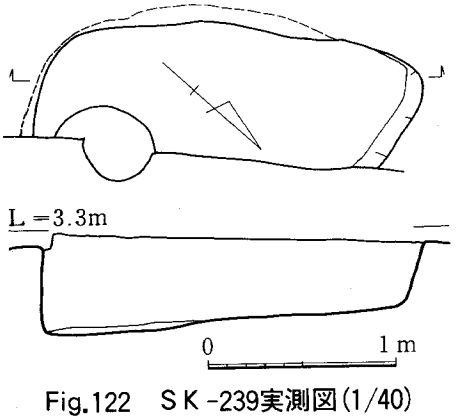
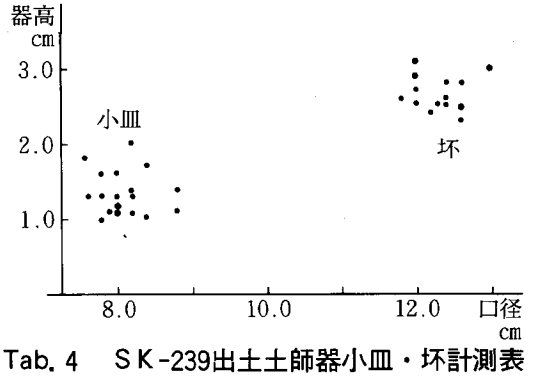


Fig.122　SK-239実測図(1/40)



Tab. 4　SK-239出土土師器小皿・坏計測表

（龍泉窯Ⅰ～Ⅲ類、同安窯）・陶器が出土した。

466～471は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた20個体の平均法量は、口径8.1cm、器高1.3cm。472～475は土師器坏で、全て底部糸切りである。未図化分を含めた17個体の平均法量は口径12.3cm、器高2.7cm。小皿、坏とも、内底のナデ調整はほとんど加えない。

他に、銅銭「皇宋通寶」１枚が出土している。

以上の遺物は、13世紀後半～14世紀中頃に位置づけられよう。

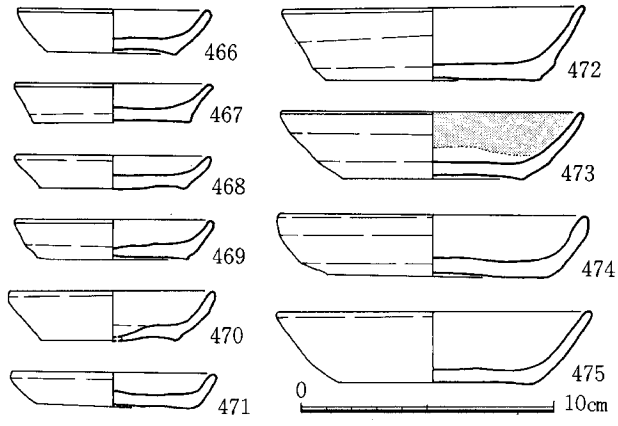


Fig.123　ＳＫ-239出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－２６１　Fig.124　PL.18

西２面に検出した。Ｆ－６グリッドに位置する。いくつかの後世の柱穴に切られる。南北に長い隅丸方形プランを呈し、南北1.4ｍ、東西1.25ｍを測る。断面形は逆台形をなし、深さ0.25ｍである。覆土には礫が多く含まれていた。

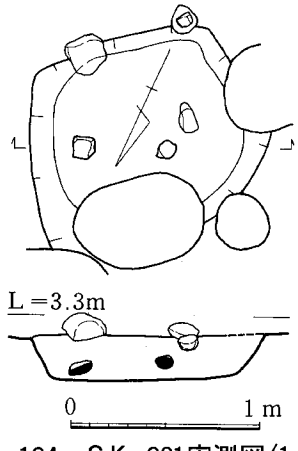


Fig.124　ＳＫ-261実測図(1/40)

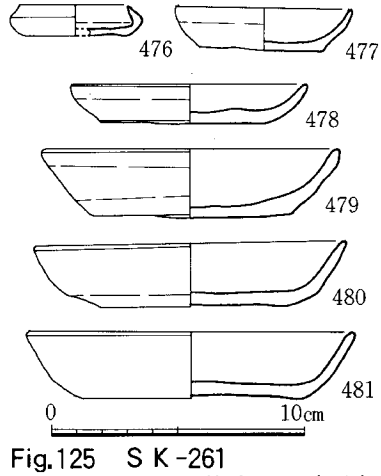


Fig.125　ＳＫ-261
出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－２６１出土遺物　Fig.125　PL.32

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、中国産白磁・青磁（同安窯）・陶器が出土した。

476～478は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。476は口縁端部を内側へ折り返しており、口径4.3cm、器高1.2cmである。477は深めの器形をなし、口径7.0cm、器高1.7cm。478は口径9.4cm、器高1.5cm。479～481は土師器坏で、口径11.8～13.0cm、器高2.5～2.8cmである。

他に、銅銭一枚が出土しているが、錆がひどく、判読不能である。

14世紀代にあてられよう。

ＳＫ－２６４　Fig.126　PL.19

西２面に検出した。Ｆ－５グリッドに位置する。略円形プランの小形土坑である。径は0.9～1.0ｍを測り、深さ0.35ｍで、底面はほぼ平坦である。覆土には礫が多く含まれていた。

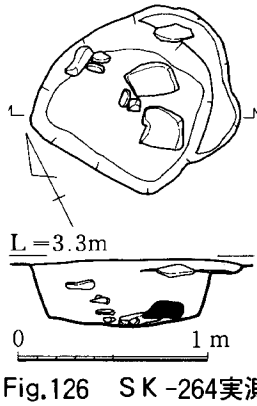


Fig.126　ＳＫ-264実測図(1/40)

ＳＫ－２６４出土遺物　Fig.127　PL.32

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦質土器鉢、中国産青磁（龍泉窯）・陶器が出土した。

482は土師器小皿で、底部は糸切りである。口径8.4cm、器高1.5cm。483、484は土師器坏である。483は口径12.0cm、器高2.5cm、484は口径12.6cm、器高2.7cmである。485は土師器の大坏で、底部は糸切りと見られ、切り離し後、

ナデ調整を加えている。底部の外寄り２ヵ所に穿孔している。口径16.0cm、器高3.7cmを測る。

486は龍泉窯系青磁の椀である。見込みには印花文を施している。畳付から外底は露胎とする。

他に、銅銭一枚があるが、錆がひどく、判読できない。

以上は、14世紀代の遺物であろうか。

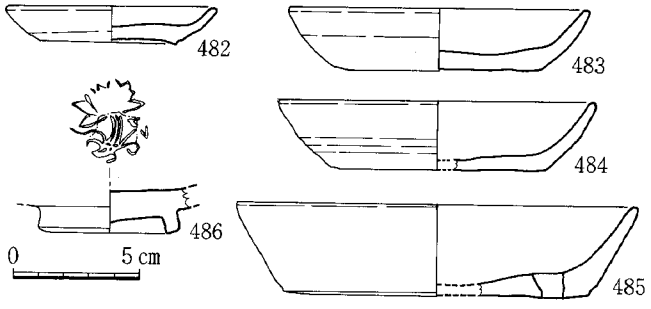


Fig.127　ＳＫ-264出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－２６５　Fig.128　PL.19

西２面に検出した。Ｆ－５グリッドのSK-264の北約２ｍに位置する。平面プランはほぼ円形をなし、径1.45～1.55ｍを測り、深さ0.4ｍで、基底面は平坦である。

ＳＫ－２６５出土遺物　Fig.129　PL.33

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師質土器鍋、瓦質土器鍋、瓦器椀、中国産白磁・陶器・高麗青磁が出土した。

487～489は土師器小皿で、全て底部は糸切りである。未図化遺物を含めた14個体の平均法量は、口径8.2cm、器高1.2cm。490～492は土師器坏で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた16個体の平均法量は、口径12.1cm、器高2.6cm。493は土鍋である。口径28.4cmと大きく、浅い。口縁は短い鍔状の平坦面を持つ。内外面に刷毛目調整を施し、外面にはススが付着している。494は瓦質土器の片口鉢である。口縁は断面三角形に肥厚させる。刷毛目調整を施すが、内面は使用によって器面が剥落している。口径30.0cm、器高11.6cm。

他に、銅銭２枚が出土している。ひとつは「元祐通寶」だが、他方は判読不能である。

出土遺物は14世紀代に比定される。

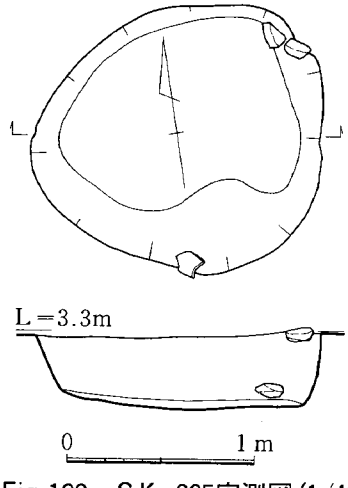


Fig.128　ＳＫ-265実測図(1/40)

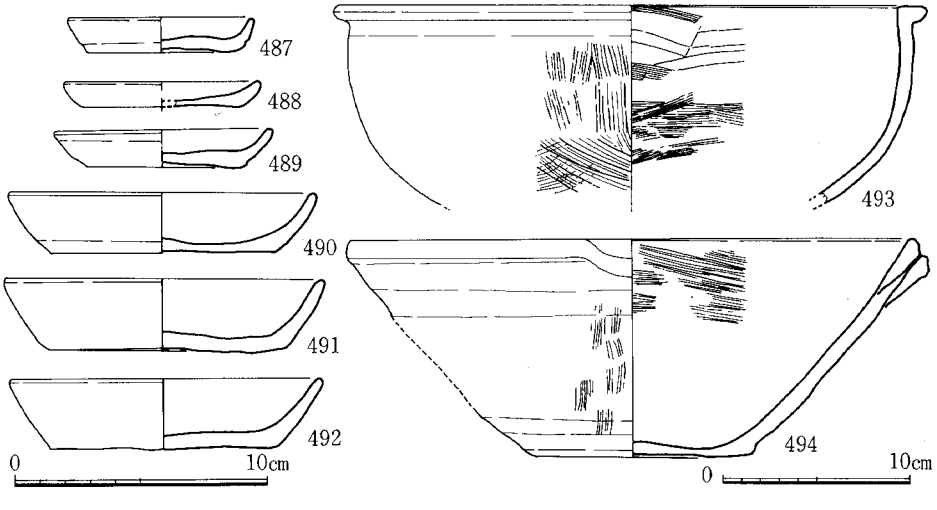


Fig.129　ＳＫ-265出土遺物実測図(1/3、1/4)

ＳＫ－２８０、２８１　Fig.130

西３面に検出した。Ｃ－４グリッドに位置する。平面プランは不整な隅丸方形を呈し、南北3.1ｍ、東西2.95ｍを測り、やや南北に長い。深さは0.35ｍで、底面は皿状を呈する。土坑底面の東寄りに楕円形プランの土坑がひとつあり、SK-281とした。別の土坑であると考えたが、出土遺物には時期差は見られない。SK-281は、長径1.5ｍ、短径1.1ｍを測り、深さは0.55ｍである。

ＳＫ－２８０、２８１出土遺物　Fig.131、132　PL.33　Tab.５

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、土師質土器鍋、瓦質・須恵質土器鉢、国産陶器、羽口・鋳型片等鋳造関連遺物、土製品、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯Ⅰ・Ⅱ類、同安窯）・青白磁・黒釉・陶器などが出土した。SK-280と281の遺物の様相に差異は認められないため、まとめて説明を加える。Fig.131がSK-280出土、Fig.132がSK-281出土の遺物である。

土師器小皿、坏の法量をTab.５に示す。495～503、514、515は土師器小皿で、全

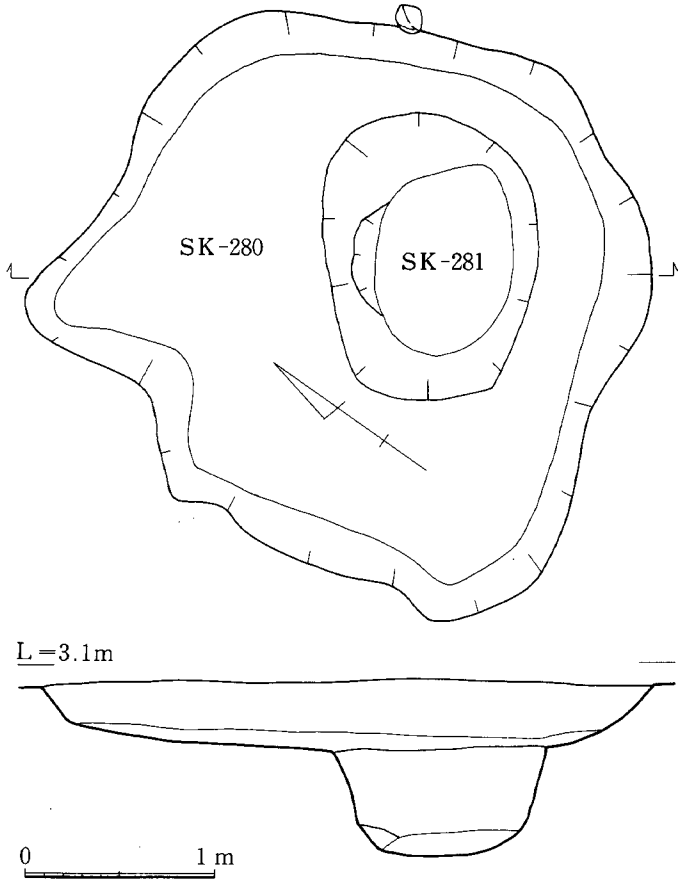


Fig.130　ＳＫ-280、281実測図(1/40)

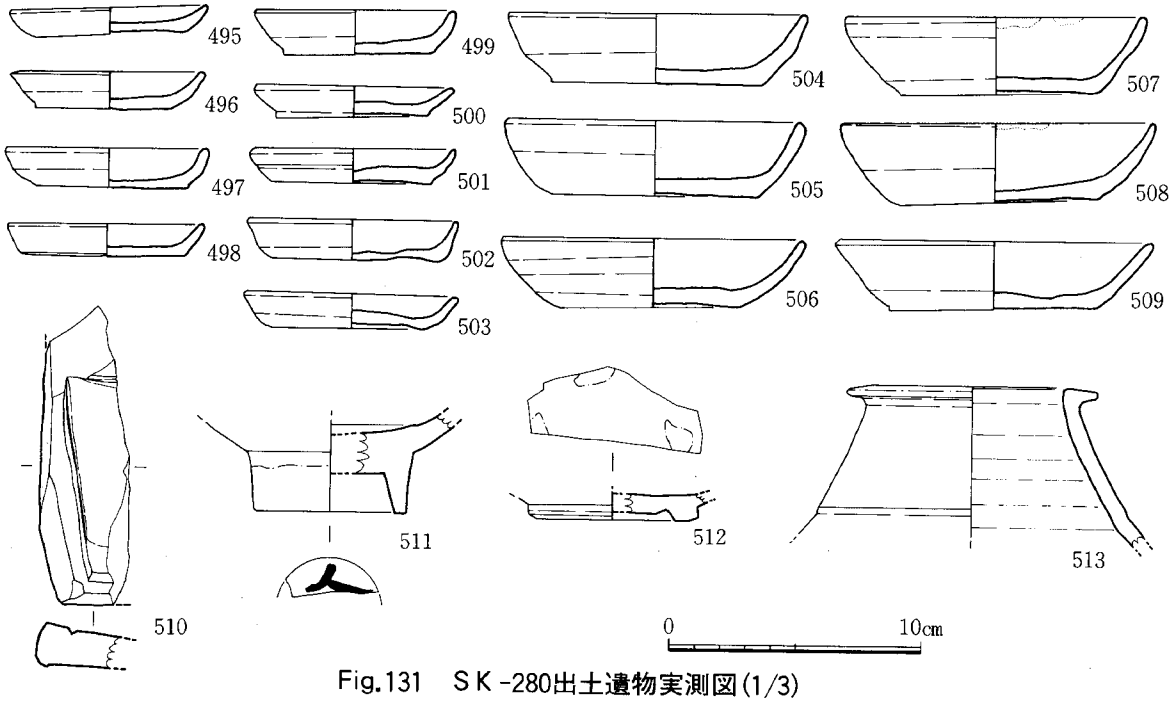


Fig.131　ＳＫ-280出土遺物実測図(1/3)

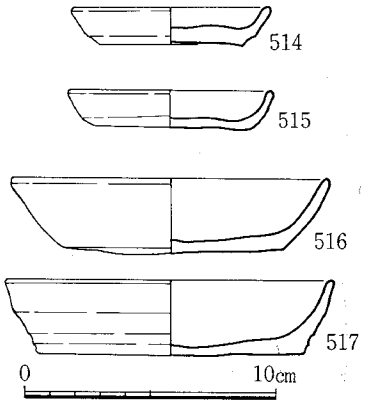
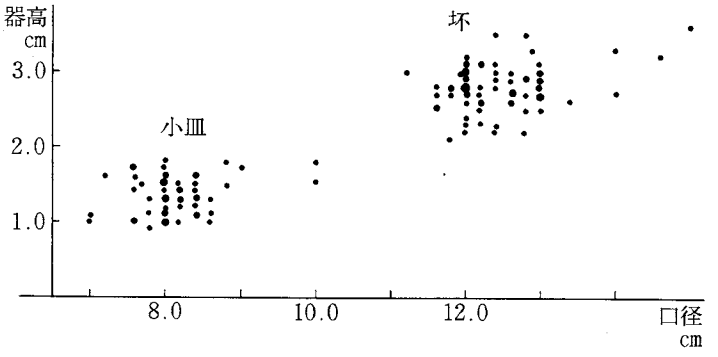


Fig.132　ＳＫ-281出土遺物実測図(1/3)



Tab. 5　ＳＫ-280、281出土土師器小皿・坏計測表

て底部は糸切りである。未図化遺物を含めた68個体の平均法量は、口径8.0cm、器高1.3cm。504～509、516、517は土師器坏で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた93個体の平均法量は口径12.4cm、器高2.8cm。小皿、坏ともに、内底のナデ調整はほとんど見られない。

510は石製の硯である。陸部に墨痕が認められる。底面には脚が付いていた痕跡があるが、折れた跡を研磨し、継続使用している。

511は白磁椀Ｖ類である。外底に墨書の一部が認められる。512は黒釉の椀である。高台内面を削り出してのち、外縁に沿って再度ヘラ削りを加えており、Ｖ字形に窪んでいる。胎土は黄白色を呈し、やや軟質で、釉は黒茶色の不透明釉である。底部は露胎で、見込みには大きめの目跡が付いている。513は中国陶器Ｃ群の壺である。紅灰色を呈する硬陶質の胎土に、やや緑味を帯びた不透明釉がかかる。

他に、銅銭「開元通寶」「皇宋通寶」「大観通寶」の３枚が出土した。

以上の遺物は14世紀前半～中頃のものであろう。

ＳＫ－２８２　Fig.133　PL.19

西３面に検出した。SK-280の北西側に隣接し、これに一部を切られている。また、南側にSK-283が位置しており、これと切り合うが、先後関係は確認できなかった。平面プランは東西にやや長い隅丸方形で、東西1.2m、南北0.9mを測る。遺構検出面からの深さは0.6mで、底面はやや西に深い。

ＳＫ－２８２出土遺物　Fig.134　PL.33

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、瓦質土器鉢、国産陶器、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯、同安窯）・陶器が出土した。

518～523は土師器小皿で、全て底部は糸切りである。口径7.7～8.8cm、器高1.1～1.5cm。524～528は土師器坏で、全て底部は糸切りである。口径11.9～13.1cm、器高2.6～2.7cm。小皿、坏ともに、内底のナデ調整はほとんど施されない。

14世紀前半～中頃の時期に位置づけられよう。

ＳＫ－２８３　Fig.133　PL.19

西３面に検出した。SK-280の西側に隣接し、これに著しく破壊されている。北側SK-282との切り合いは不明で、調査時に一緒に掘り下げてしまっている。隅丸方形プランをなすものと見られるが、規模は不明である。検出面からの深さは0.45mで、底面は平坦であった。土師器小皿と坏が一括して

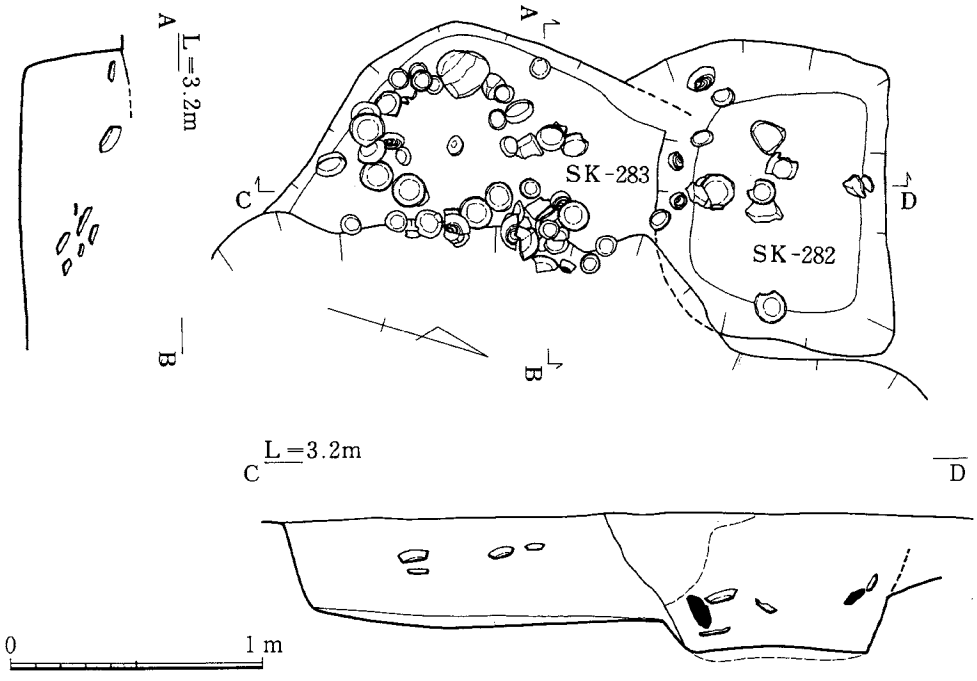


Fig.133　SK-282、283実測図(1/30)

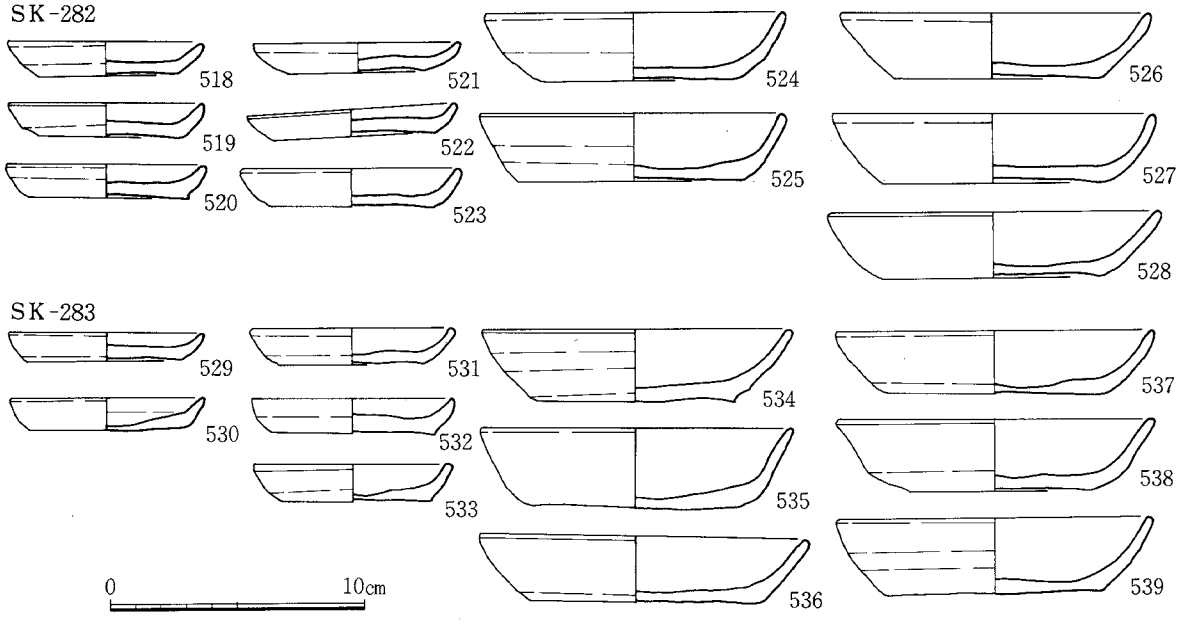
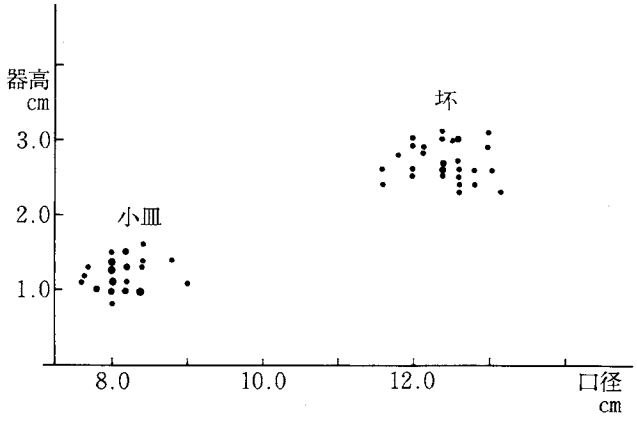


Fig.134　SK-282、283出土遺物実測図(1/3)



Tab. 6　SK-283出土土師器小皿・坏計測表

廃棄されており、これらは土坑がある程度埋没した段階で周囲から投げこまれたものと見られる。

SK-280、282、283は互いに切り合い関係にあるが、出土遺物には大きな時期の隔たりを認めることはできなかった。

ＳＫ－２８３出土遺物 Fig.134 PL.33 Tab.6

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師質土器鍋、瓦器椀・瓦質土器鉢、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯Ⅰ類、同安窯）・陶器が出土した。

出土した土師器小皿、坏の法量は、グラフにしてTab.6に示した。

529～533は土師器小皿で、全て底部は糸切りである。口径7.6～8.5cm、器高1.2～1.5cm。534～539は土師器坏で、全て底部糸切りである。口径12.1～13.1cm、器高2.5～3.2cm。小皿、坏ともに、内底のナデ調整はほとんど見られない。

銅銭は「乾元重寶」「治平元寶」が２枚出土した。

14世紀前半から中頃の時期に比定できよう。

ＳＫ－２９０ Fig.135 PL.19

西３面に検出した。Ｄ－５グリッドに位置する。平面プランは長円形を呈し、長径1.9m、短径1.6mを測る。土坑の断面形は、遺構検出面から0.5mまではすり鉢状をなし、以下は円筒形に直に落ちる。基底までの深さは0.95mで、基底面は平坦につくる。北側の壁はえぐれ気味で、断面袋状を呈する。土坑壁に現れた土層は、①暗褐色土、②白色砂（風成砂）、③クロスナ、④黄褐色砂＋白色砂で、④層は特にもろく、北側のえぐれはこれが崩落した結果と見られる。土坑内の覆土は大きく上下に分かれ、上層は黒色土、下層は砂質土であった。遺構実測図に示した遺物は、この上下層の境目付近から出土しており、下層には炭化米などを含む有機質の腐食土が帯状に挟まれていた。

ＳＫ－２９０出土遺物 Fig.136 PL.33

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、黒色土器、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・青白磁・陶器が出土した。

540～545は土師器小皿である。540～542は底部ヘラ切りで、口径8.5～9.4cm、器高1.4～1.7cm。543～545は底部糸切りで、口径9.0～9.5cm、器高1.2～1.4cm。546～548は土師器丸底坏で、内面にコテあて痕を残す。口径15.0～15.4cm、器高3.0～3.6cm。549は土師器坏で、底部糸切りである。土師器坏は底部ヘラ切りのものと、糸切りのものがあり、ヘラ切りのものは口径15.0～16.0cm、器高2.6～3.6cm、糸切りのものは口径15.0～15.8cm、器高2.9～3.1cmである。550は土師器坏で、外面にひらがな書きと見られる墨書がある。

551～553は瓦器椀である。口が広く器形が浅いタイプの椀で、高台は断面台形を呈し低い。内面のヘ

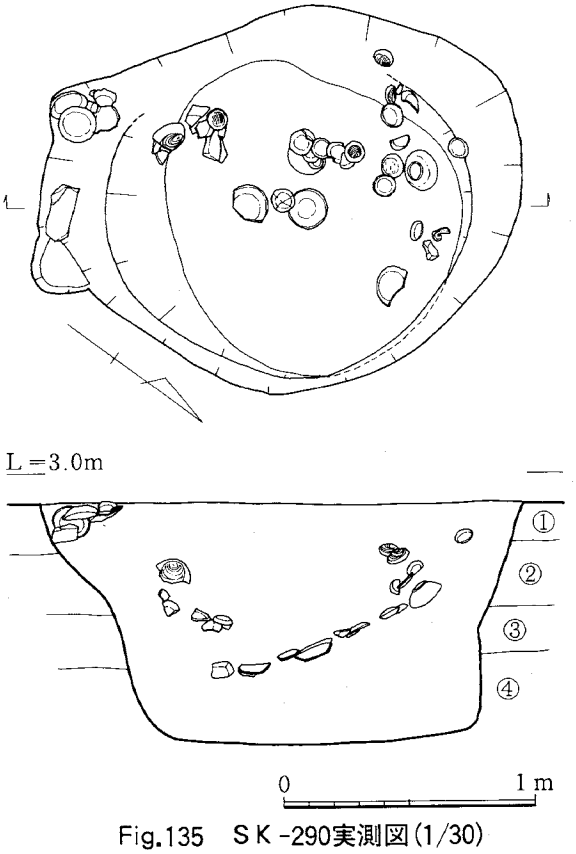


Fig.135 ＳＫ-290実測図(1/30)

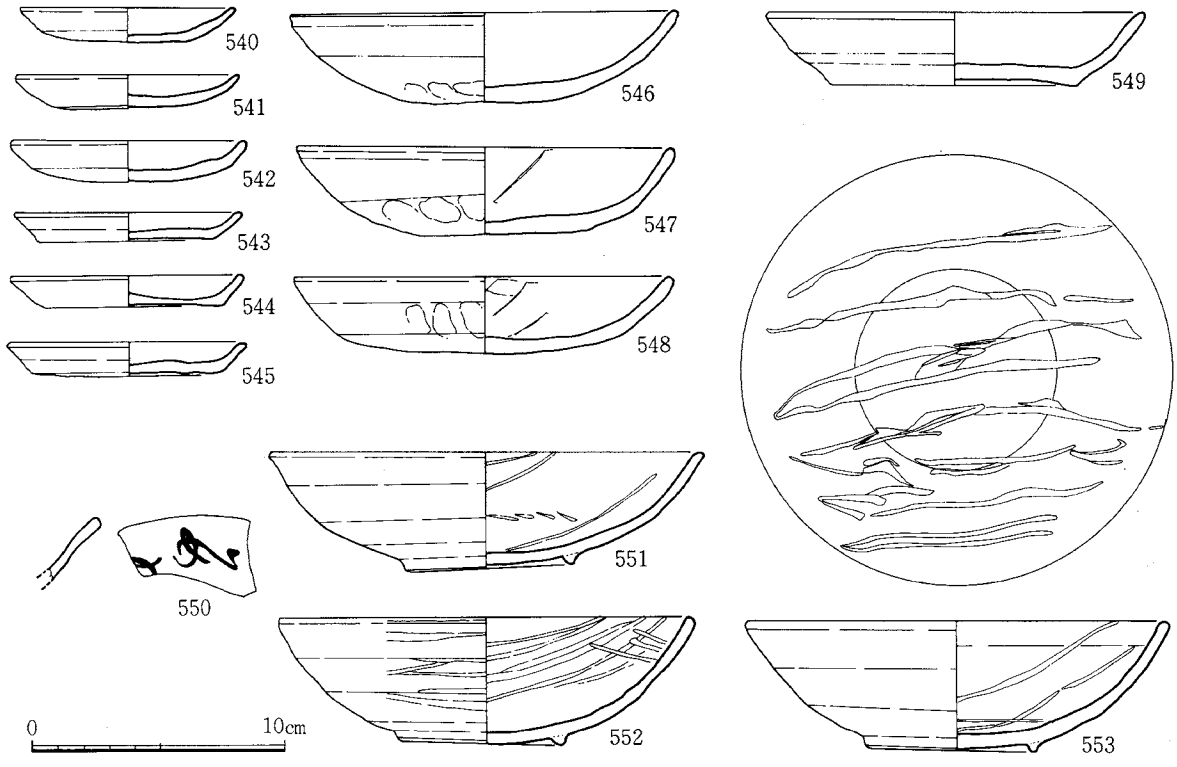


Fig.136　ＳＫ-290出土遺物実測図(1/3)

ラ磨きには特徴があり、551、553はジグザグ状に、552は四分割してヘラ磨きを施している。551は口径17.2cm、器高4.6cm、552は口径16.5cm、器高5.0cm、553は口径16.8cm、器高5.2cm。

12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

ＳＫ－３０１　Fig.137

西３面に検出した。Ｄ－６～７グリッドに位置し、井戸SE-300を切っている。平面プランは不整な隅丸方形をなし、南北1.15ｍ、東西0.95ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ0.6ｍである。

ＳＫ－３０１出土遺物　Fig.139

土師器小皿（糸切り）、土師器坏、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器などが出土した。

554は滑石製模造品である。鍋等の容器を模したものか。

ＳＫ－３０５　Fig.138

西３面に検出した。Ｄ－６グリッドに位置する。平面プランは楕円形をなし、長径1.35ｍ、短径0.9ｍを測る。断面形は皿状を呈し、深さ0.25ｍである。基底面は平坦である。

ＳＫ－３０５出土遺物　Fig.139　Tab.7

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ・Ⅴ類、同安窯）・陶器が出土した。

出土した土師器坏の法量をTab.7に示した。

555～559は土師器坏で、底部は全て糸切りである。図示できなかった遺物

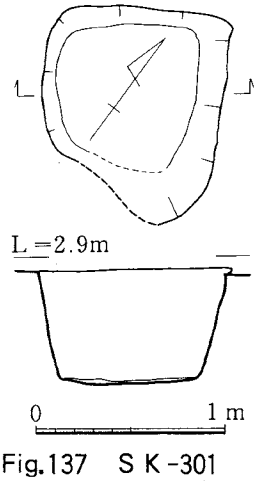


Fig.137　ＳＫ-301
実測図(1/40)

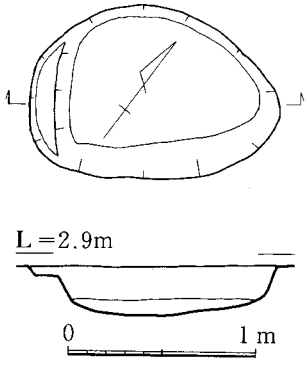
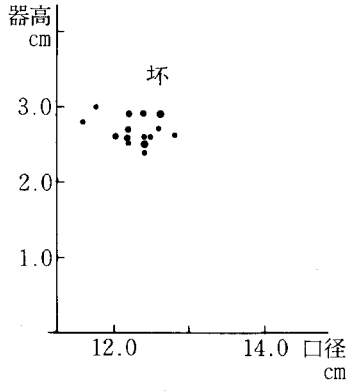


Fig.138　ＳＫ-305実測図(1/40)



Tab. 7　ＳＫ-305出土土師器坏計測表

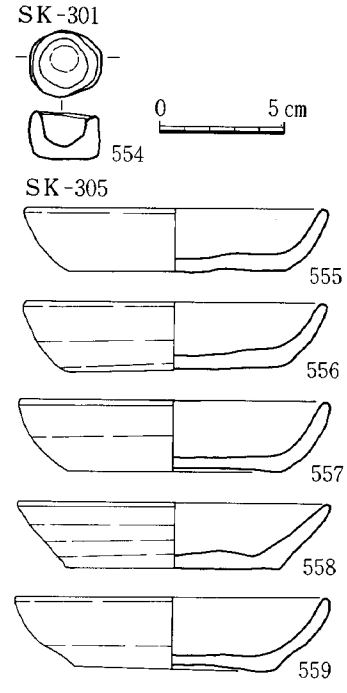


Fig.139　ＳＫ-301、305出土遺物実測図(1/3)

を含めた21個体の平均法量は、口径12.3cm、器高2.7cmである。

14世紀前半～中頃に位置づけられよう。

ＳＫ－３２０　Fig.140　PL.19

西３面に検出した。Ｆ－５グリッドに位置する。他の土坑・ピットに一部を切られる。平面プランは円形をなし、径1.0～1.1ｍを測る。断面形は東に深い略逆台形で、深さ0.5ｍである。覆土には、礫が多く含まれていた。

ＳＫ－３２０出土遺物　Fig.141　PL.34

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青磁（越州窯系、同安窯）・陶器が出土した。

560、561は土師器小皿で、底部は糸切りである。560は口径7.8cm、器高1.3cm、561は口径8.2cm、器高1.5cm。562～567は土師器坏で、全て底部糸切りである。口径11.4～13.0cm、器高2.7～3.3cm。内底のナデ調整はほとんど見られない。

他に、銅銭が７枚出土しているが、判読できるものはない。

13世紀後半～14世紀代の時期にあたろう。

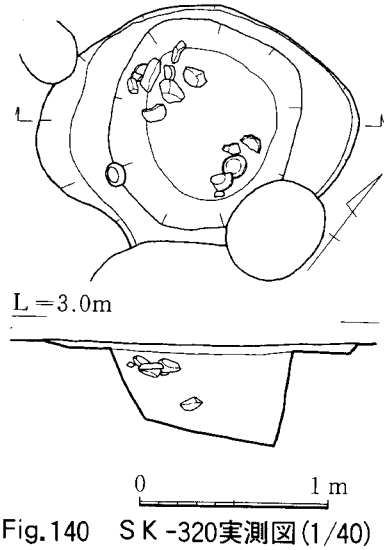


Fig.140　ＳＫ-320実測図(1/40)

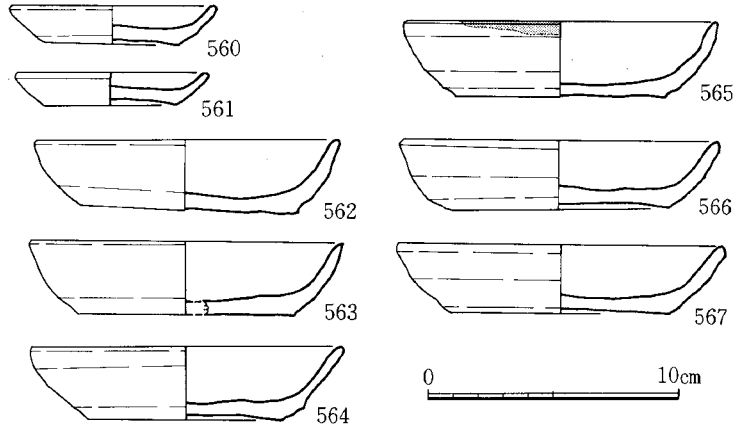


Fig.141　ＳＫ-320出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－３２８　Fig.142　PL.19

西３面に検出した。Ｅ－５グリッドに位置する。平面プランは長円形をなし、径0.95～1.1ｍを測る。断面形は深い逆台形で、深さ0.85ｍである。柱穴の可能性がある。

ＳＫ－３２８出土遺物　Fig.143　PL.34

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、須恵質土器鉢、緑釉、土錘、中国産白磁・青磁（連江窯）・青白磁・陶器、高麗青磁などが出土した。

568は土師器丸底坏で、口径14.8cm、器高3.5cm。569は青磁小椀で、体部は直線的に開き、内面には２本単位のヘラによる施文がある。高台は低く削り出す。胎土は灰白色を呈し、釉は淡いオリーブ色の不透明釉である。器表面には褐色の鉄斑が浮き出している。口径11.4cm、器高4.1cm。福建省連江窯の製品か。

12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

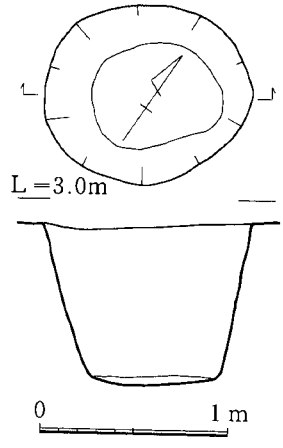


Fig.142　ＳＫ-328実測図(1/40)

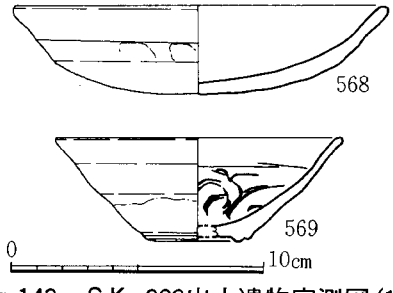


Fig.143　ＳＫ-328出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－３４３　Fig.144

西４面に検出した。Ｃ－４グリッドに位置する。３面検出のSK-280の北側に隣接し、これに切られている。また、東西の調査区にまたがっているが、先に調査を実施した東側では確認できていない。平面プランは隅丸方形を呈し、南北3.0ｍと大きい。ほぼ直に箱掘りしており、底面は平坦である。深さ0.65ｍである。

ＳＫ－３４３出土遺物　Fig.145　PL.34

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・陶器が出土した。

570は土師器小皿で、底部は糸切りである。口径9.6cm、器高1.6cm。571は土師器丸底坏で、内面にヘラ磨きを施す。口径15.4cm、器高3.3cm。572は土師器坏で、底部は糸切りである。口径15.4cm、器高3.4cm。573は深い器形の坏で、肉厚で重量感がある。外面上半から内面に回転ヘラ磨きを施し、内面には放射状のヘラ磨きを重ねる。外底はヘラ削りを施す。口径14.0cm、器高4.6cm。573は古代の土器と思われる。

574は有溝の土錘である。紡錘形を呈し、縦位に溝を切る。

12世紀中頃～後半に位置づけられよう。

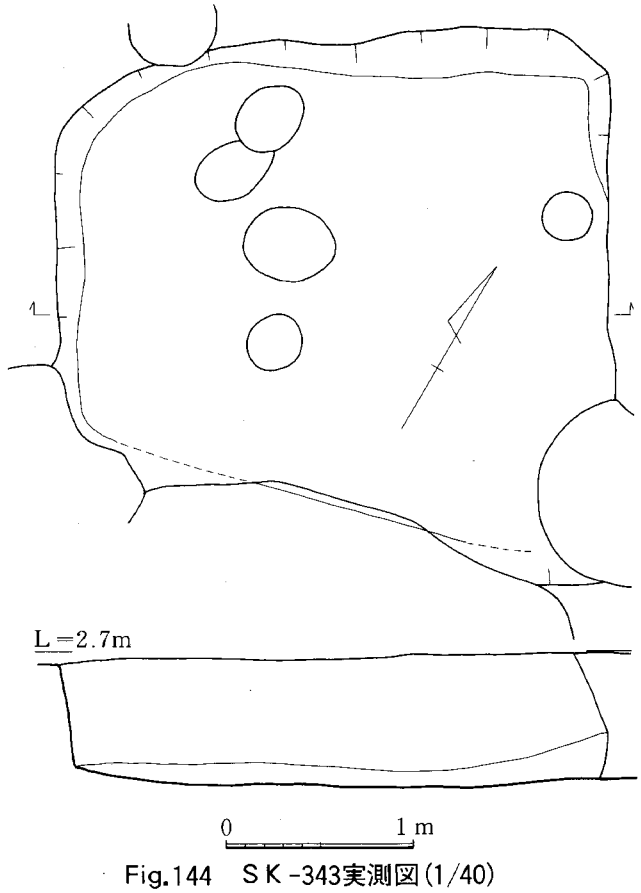


Fig.144　ＳＫ-343実測図(1/40)

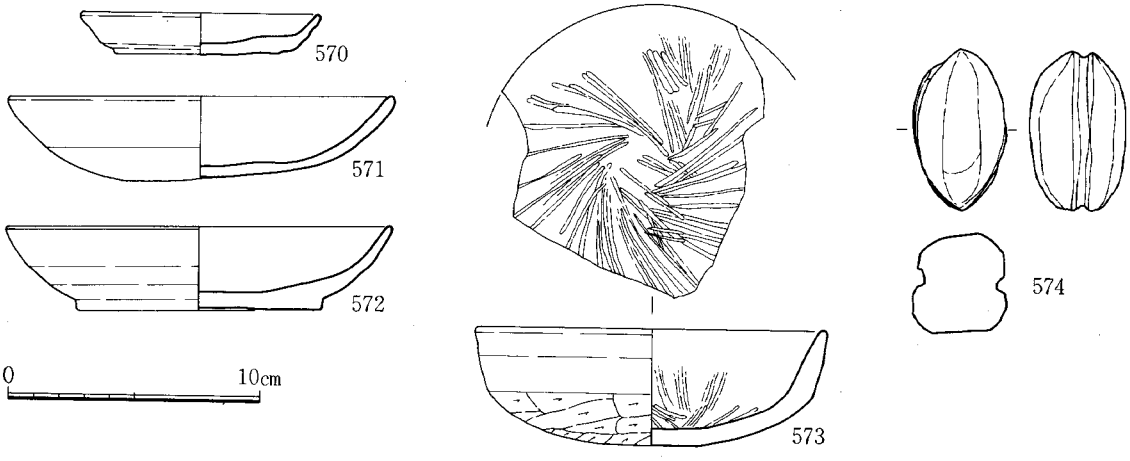


Fig.145　ＳＫ-343出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－３４６　Fig.146

西４面に検出した。Ｃ－５グリッドに位置する。平面プランは南北に長い不整な楕円形を呈し、長径1.25ｍ、短径1.0ｍ。断面形は皿状をなし、深さ0.3ｍである。底面にピット１がある。

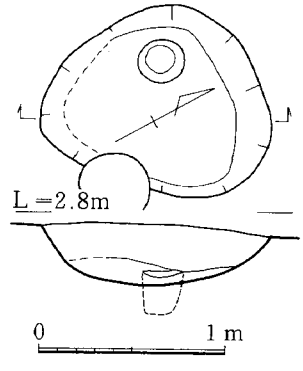


Fig.146　ＳＫ-346実測図(1/40)

ＳＫ－３４６出土遺物　Fig.147　PL.34

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、黒色土器、瓦器椀、越州窯系青磁が出土した。

575は越州窯系青磁の小椀で、口縁端部は上方につまみ上げ、底部は上げ底気味の平底である。黄白色の精良な胎土に、やや白濁したオリーブ色の不透明釉がかかる。体外面下部から底部にかけては露胎である。口径12.2cm、器高4.7cm。

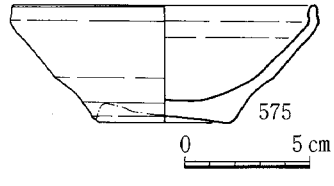


Fig.147　ＳＫ-346
出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－３５５　Fig.148　PL.19

西４面に検出した。Ｅ－５グリッドに位置する。東側を中世の土坑に、北側を後述の木棺墓SK-360に切られている。平面プランは東西に長い楕円形と見られ、長径は推定1.7ｍ、短径1.25ｍである。深さ0.3ｍで、底面は平坦である。獣骨などの食物残滓が底面より浮いた状態で出土しており、埋没時に生活塵を投棄している。

ＳＫ－３５５出土遺物　Fig.149　PL.34

土師器小皿（ヘラ切り、糸切り）、土師器坏（ヘラ切り、糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（越州窯系）・青白磁、高麗青磁が出土した。土師器丸底坏の出土量が多い。

576～578は土師器小皿で、底部は糸切りである。口径8.8～9.0cm、器高1.1～1.3cm。579は土師器坏で、底部糸切りである。口径15.4cm、器高3.4cm。580は土師器丸底坏で、内面にコテあて痕が残る。口径15.6cm、器高3.5cm。

581は青磁椀である。胎土は灰褐色を呈し、細かい白色の砂粒を含む。釉は淡オリーブ色の透明釉で、光沢がある。高台の内側あたりまで施釉しており、畳付と見込みにそれぞれ４ヵ所の目跡が残る。582は白磁椀のＶ類である。583は陶器の壺か。底部は安定の悪い平底である。胎土に白色ないし暗赤褐色の粒子を多量に含み、釉は黄茶色の透明釉で、下半は露胎である。

以上の遺物は、12世紀前半～中頃に位置づけられる。

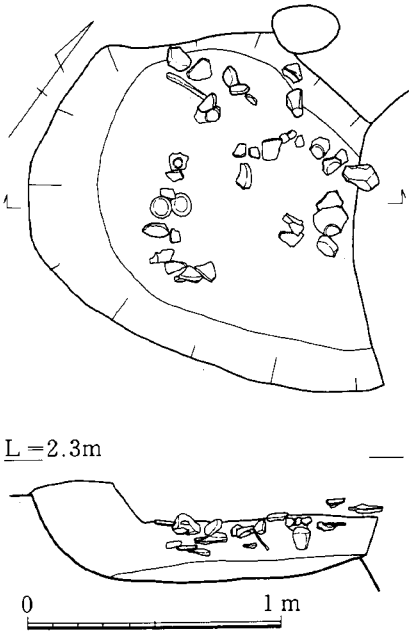


Fig.148　ＳＫ-355実測図(1/30)

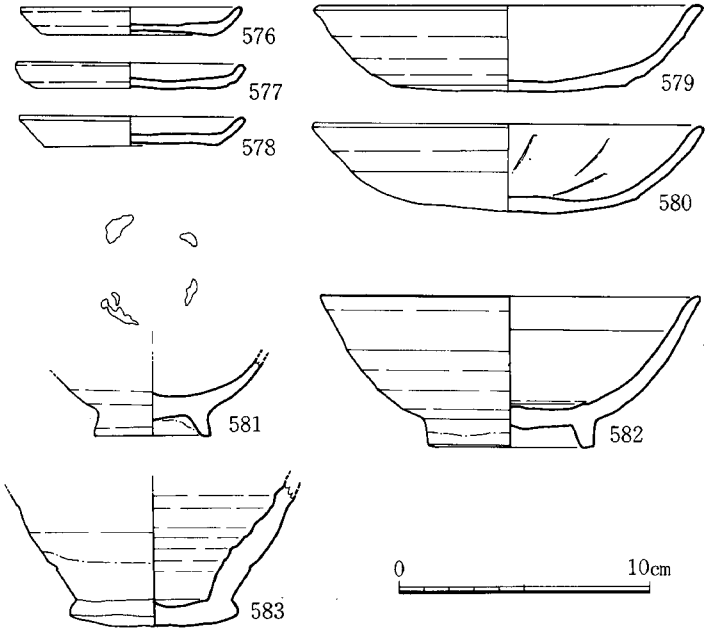


Fig.149　ＳＫ-355出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－３６６　Fig.150　PL.19

西４面に検出した。Ｅ－４グリッドに位置する。南側を中世の土坑に切られ、東側はサブトレンチにかかる。東西に長い楕円形プランと見られるが、規模は不明。断面形は逆台形を呈し、深さ0.6ｍである。獣骨などの食物残滓が底面より浮いた状態で出土した。

ＳＫ－３６６出土遺物　Fig.151　PL.34

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、瓦器椀、須恵質土器鉢、中国産白磁・青磁・青白磁・陶器が出土した。

584～586は土師器小皿で、底部糸切り。口径8.8～9.2cm、器高1.3～1.4cm。587は土師器丸底坏で、底部糸切り。内面にヘラ磨きを施す。押し出し痕がなく、底部の丸みは退化している。口径16.2cm、器高3.1cm。588は瓦器椀で、浅めの器形で、高台は低く断面台形を呈する。内外面のヘラ磨きはやや粗雑で、内面には４分割のヘラ磨きを加えているようである。口径17.4cm、器高5.2cm。

589は白磁椀Ⅱ類で玉縁は極めて小さく、釉下には化粧土を施す。

遺物の時期は12世紀中頃～後半に比定される。

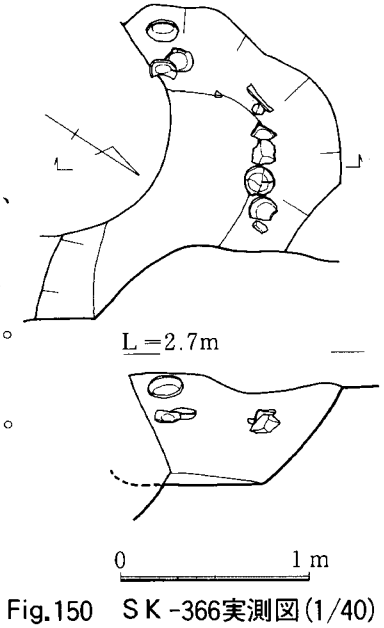


Fig.150　ＳＫ-366実測図(1/40)

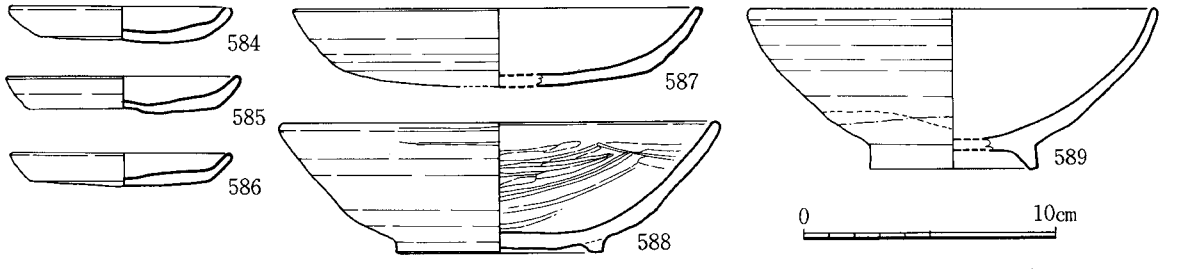


Fig.151　ＳＫ-366出土遺物実測図(1/3)

(5)瓦溜り

ＳＫ－６１　Fig.152　PL.20

東２面に検出した。調査区の東端部付近のＤ～Ｅ－１～２グリッドに位置する。試掘トレンチに一部を切られている。掘り方は南北に長い楕円形プランを呈するが、北端は隅丸方形を意識しているようである。最大径は南北7.5ｍ、東西4.7ｍを測る。断面形は浅皿状を呈するが、底面にはゆるい起伏があり、中央がやや浅い。検出面から底面までの深さは、0.3～0.45ｍである。土層は、上層より①暗黄褐色土（瓦を多量に含む）、②暗黄褐色砂質土、③黒褐色砂質土（基盤層）である。①層には、瓦とともに、焼けた壁土（柱や板材の木目圧痕が明瞭に残るものが多い）、焼土、炭化物が多量に含まれている。②層は壁土の細片を含むが、瓦はほとんど含まれない。覆土には瓦がぎっしり詰まっており、その出土量はコンテナ箱にして約150箱分にものぼるが、瓦は全て割れている。

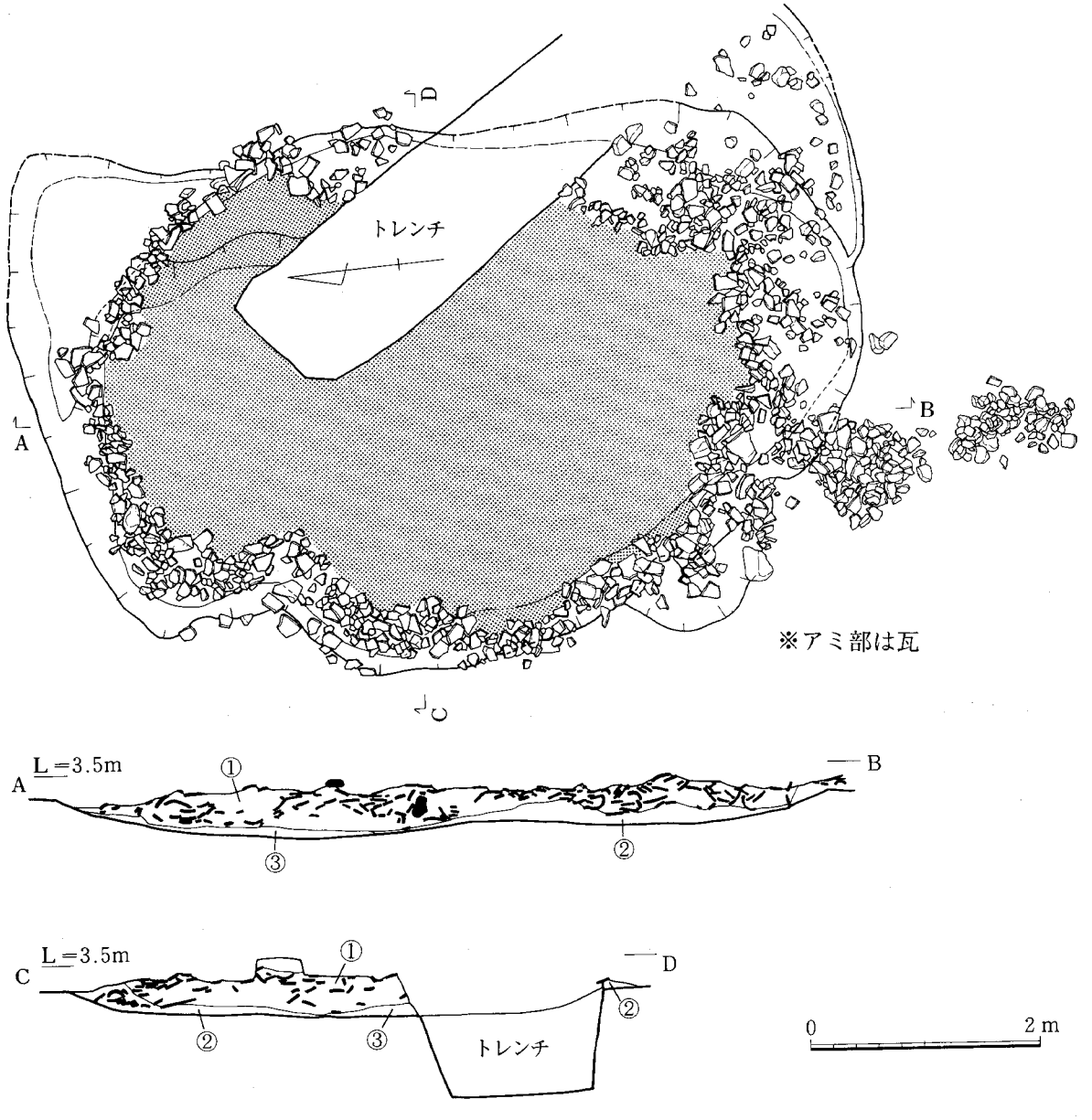


Fig.152　ＳＫ-61実測図(1/60)

南側では①層の上に薄く粘土層が被っていたが、この粘土は石組基礎建物SB-45の地業に伴うものであると見られ、SB－45がこの遺構を埋めた後に造られていることが知れる。SB－45は同じく石組基礎建物であるSB－47を破壊して造られていることから見て、この瓦溜りは、SB－47が火災によって崩壊した後、SB－45に造り変える際に形成されたものである可能性が高い。

また、SK－61の南外にも瓦が集積している部分が２ヵ所程見られるが、これらは別の小さな瓦溜りの掘り方を飛ばしてしまったものと考えられる。

ＳＫ－６１出土遺物　Fig.153～157　PL.34、35

土師器小皿（糸切り）、土師器坏（糸切り）、土師器丸底坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、火鉢、須恵質土器鉢、国産陶器、瓦、石製品、土錘、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯Ⅰ類、同安窯）・黒釉・陶器、高麗・李朝陶磁器などが出土した。

590～593は土師器小皿で、底部は糸切りである。口径7.8～9.0cm、器高1.0～1.8cm。594は土師器坏で、口径11.4cm、器高2.6cm。

595は白磁鉄絵大鉢である。胎土は淡灰褐色を呈し、釉はやや空色がかった不透明釉で、外底は露胎である。見込みに鉄釉で太いタッチの絵画を描く。高台径11.4cm。中国広州西村窯の製品に類似する。596は白磁小壺で、胎土は淡黄白色を呈しやや粉っぽく、釉は白濁釉。底径3.0cm。597は青白磁の燭台であろうか。

598～637は瓦である。598は鬼面文の鬼瓦で、目鼻の背後が中空であることから見て型造りではなく、厚さ３cmの粘土板に粘土を貼り付けて顔を造形したものと思われる。頭頂部と下半を欠き図中にアミで示した部分は剝落している。立体的な造りで、目玉には竹管で瞳を表現し、鼻は横に広く鼻孔が大きく、眉髭には先が３条に割れた櫛状の施文具で毛を表現する。焼成は良好で須恵質をなす。現存する部分で幅29.6cm、高さ21.6cmを測る。小片のため図化していないが、他に髭ないし眉の部分に相当すると見られる別の破片があり、鬼瓦は１対分が出土していることになる。599～605は軒丸瓦である。いずれも三つ巴文を内区に配するが、599、600と601～605では巴の回転方向が逆向きである。内区の巴文はいずれも長く尾を引く。599は内区の巴が逆時計回りに尾を引くもので、巴文の周囲に19個の珠文を配すが、下半部の珠文はヘラで削り取られている。丸瓦部分は凸面に縄目叩き、凹面に布目を残す。600も巴が逆時計回りに尾を引くが、599に比べて外区が低い。珠文数は12で、瓦当径は13.7cmを測る。601～605は内区の巴文が逆向きに回転するもので、いずれも須恵質である。瓦当は型取りした後、皆一様にナデて形を整えており、同范関係が判然としない。606～629は軒平瓦である。606～615のタイプと、616～629のタイプの２群に別れる。606～615は内区に均整唐草文を配し、中心飾りがない。全て同范と見られる。瓦当幅の分かるものでは、606が23.5cm、607が23.9cm、608が23.5cmである。平瓦部分は凸面がヘラナデ、凹面が模骨の痕をナデ消している。610は瓦当の接合部にヘラによる刻みを施す。607～609、615は焼成は不良だが、他は概ね良好。616～629は中心飾りに上向きの５葉の花弁を配する均整唐草文である。616、617、620、627は同范、621、622、625、628は同范と見られる。616は平瓦部分の一側面を斜めに切っており切隅瓦と見られる。616、629には釘孔がある。平瓦部の調整手法は概ねナデ調整で、まれに模骨の痕跡を残すものがある。619は焼成が甘く土師質を呈する。630～633は丸瓦で、凸面は縄目叩きを半スリ消し調整し、凹面は布目が残る。凹面にはヒモの圧痕が螺旋状に残り、布を引きずり出した痕跡が一様に残っている。丸瓦の端部は全てヘラで面取りしており、丸みを持たせたものが多い。634～637は平瓦である。器面の残りは悪いが、全て丁寧にナデ調整されており、凹面に模骨の痕跡と微かな布目が認められる。丸瓦同様、端部は全て面取りされる。桶巻き造りによるものか。

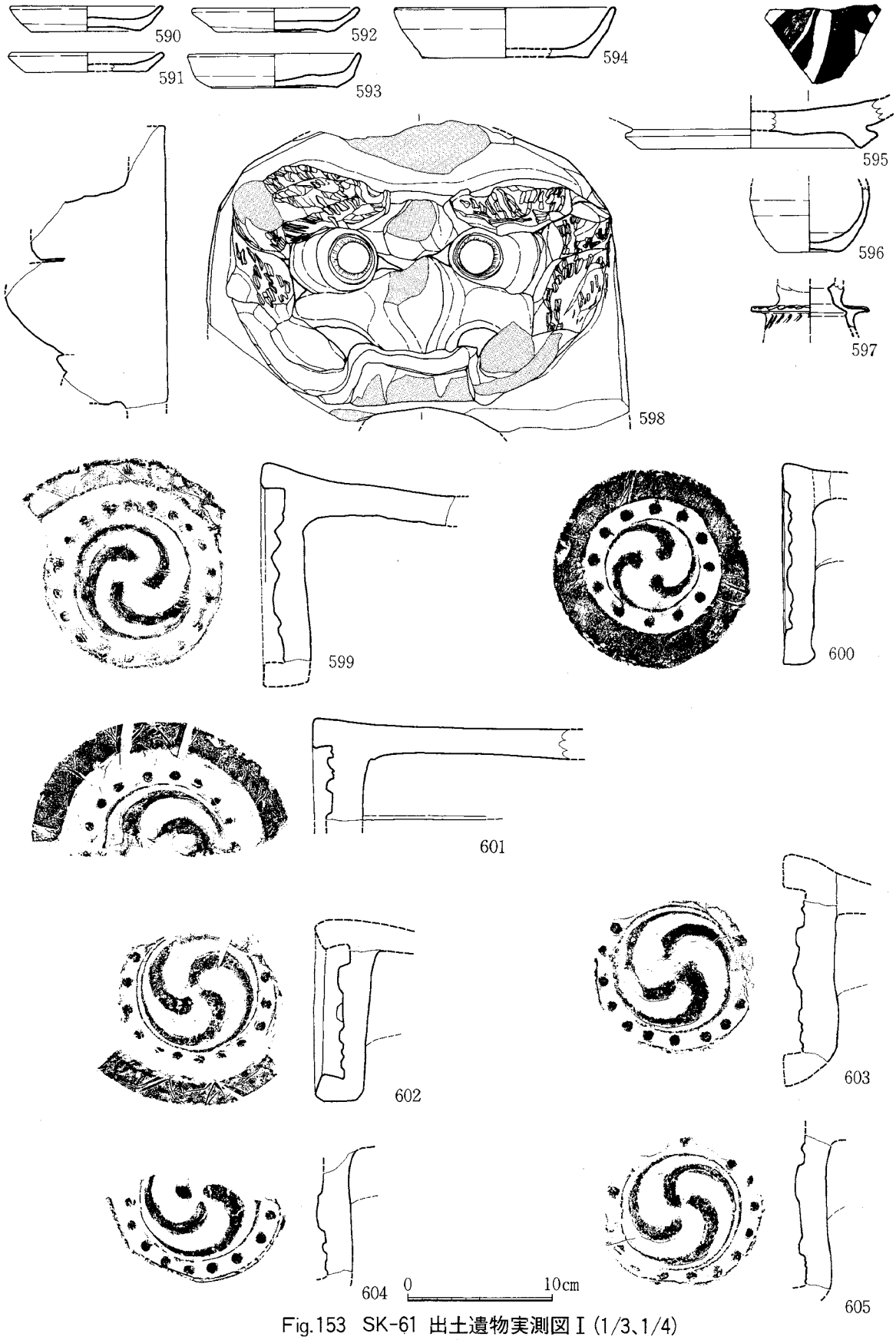


Fig.153 SK-61 出土遺物実測図Ⅰ(1/3、1/4)

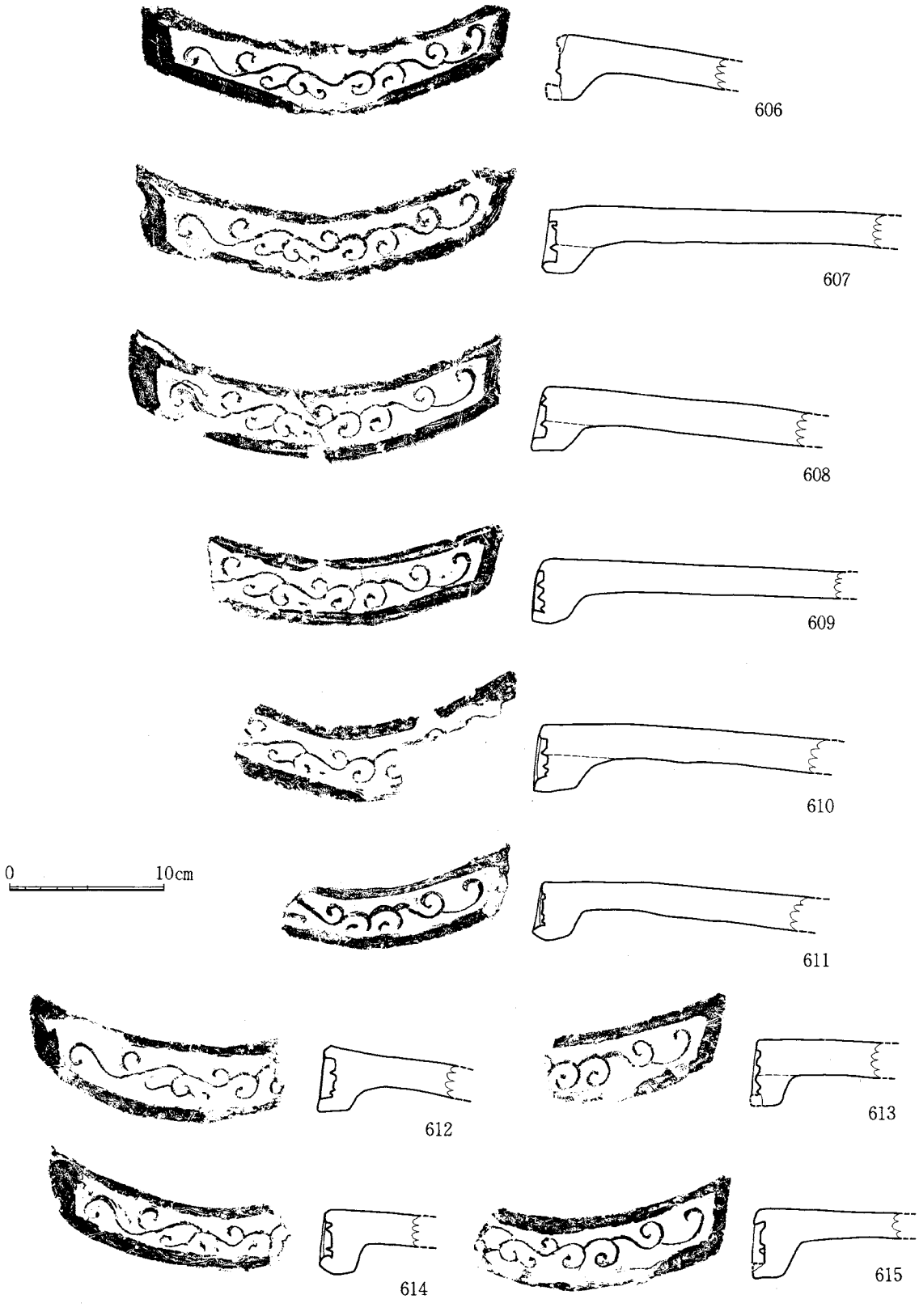


Fig.154　SK-61 出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

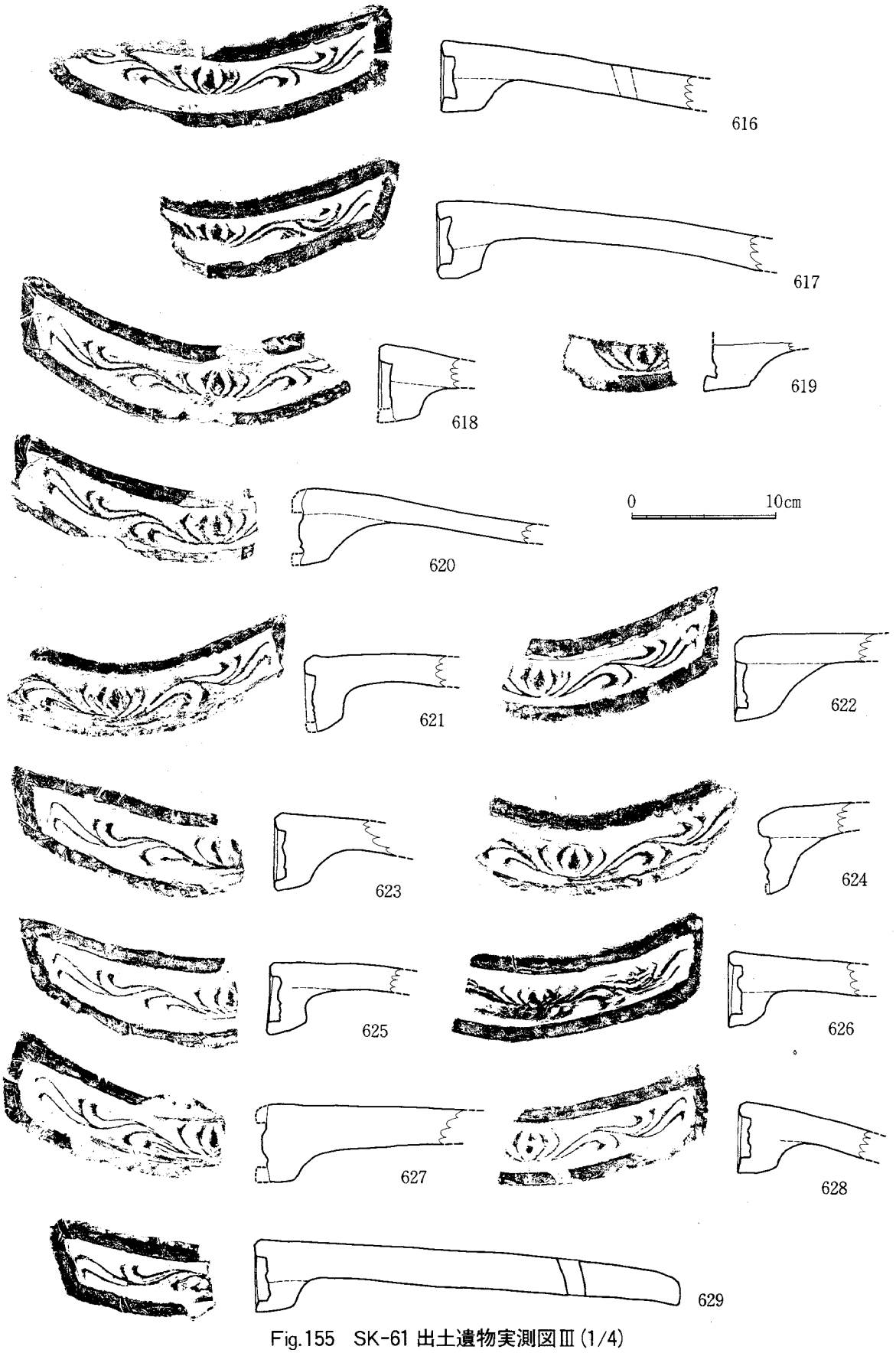


Fig.155　SK-61 出土遺物実測図Ⅲ (1/4)

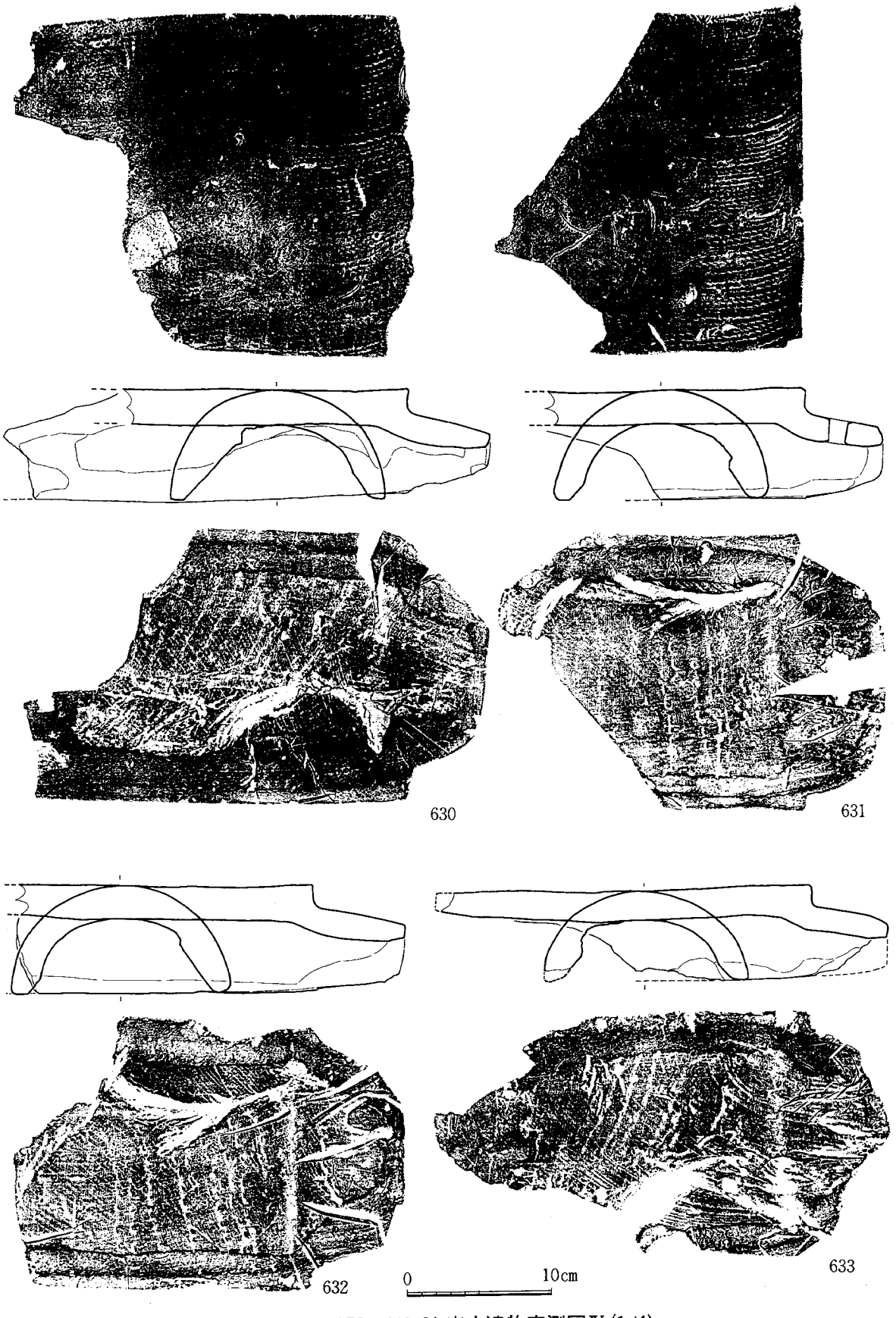


Fig.156　SK-61 出土遺物実測図Ⅳ (1/4)

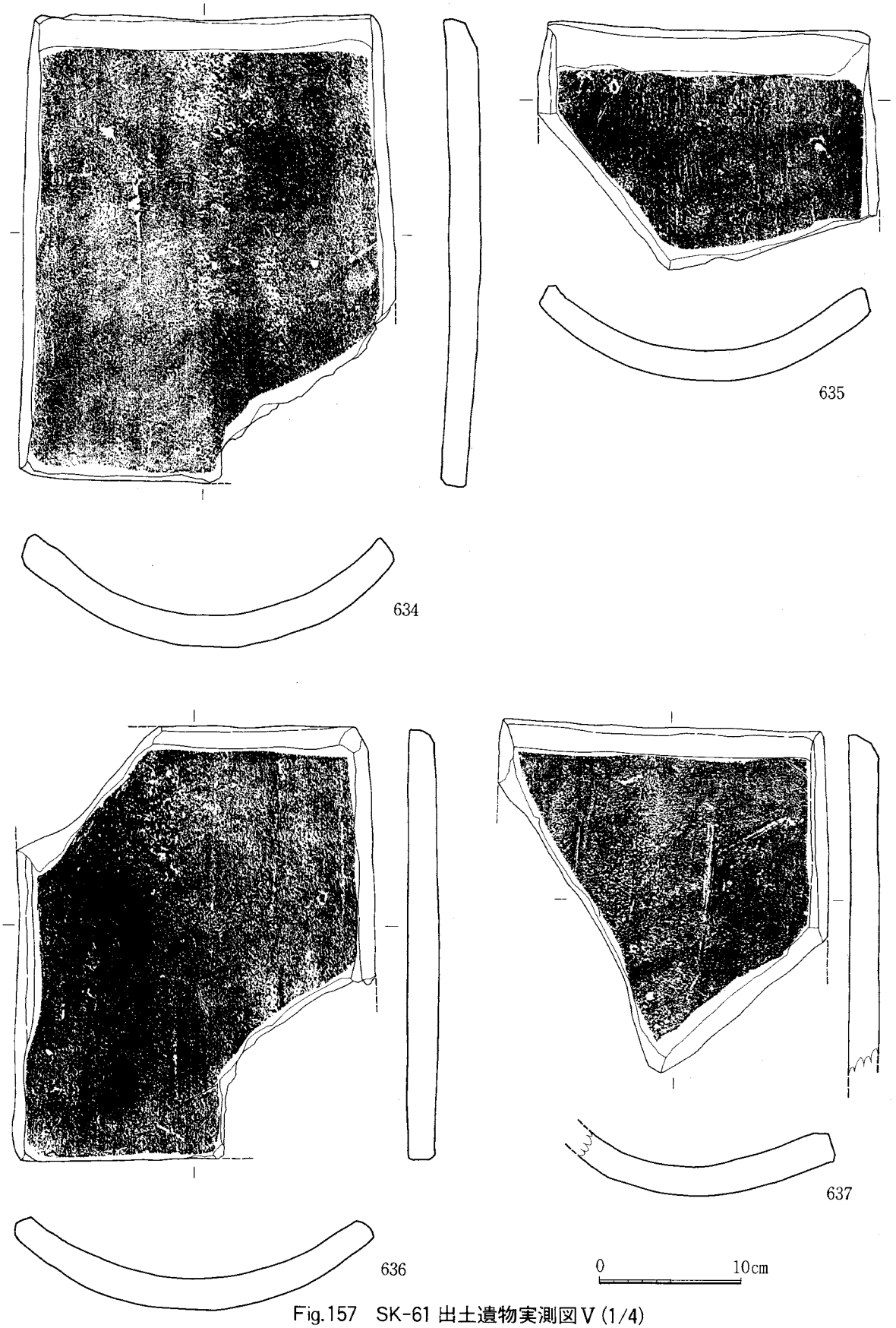


Fig.157　SK-61 出土遺物実測図Ⅴ (1/4)

(6)鋳造関連遺構

鋳造に関連する遺構は、２面に検出した。東西調査区に１ヵ所ずつ確認したSK-48とSK-211は15ｍの距離を置いて位置している。

Fig.158に示したのは、Ｃ－１～２グリッド付近に検出した遺構である。ここには、後述するSK－48とSK－54が1.5ｍの距離を置いて検出された。ともに鋳造関連の遺物を埋めた廃棄坑であるが、周辺には、固く踏み締められた面や、炉の一部と見られる焼けた粘土が分布していた。図に示した遺構のうち、SX－60とした遺構は、踏み締められて土間状に固くなった面で、1.5ｍ四方の範囲に及んでおり、北側へ緩く下っている。周囲を後世の遺構に破壊されており正確な範囲は把握できなかった。SK－48の東には、細い道路状の固い面が確認できた。幅0.3ｍ程度の範囲が硬化しており、上面には土器細片や砂利が露呈していた。この遺構は、調査区の東外へ伸びている。また、SK－48の東側2.5ｍの位置には、破壊された炉の一部と見られる焼けた粘土が確認された。また、周辺には土坑や柱穴を幾つか検出できたが、掘立柱建物等を確認するには至らなかった。

以上の遺構の用途や相互の関わり等については明らかにしがたいものの、この一帯が作業場的な役割を持つ場所であったことは間違いのないところであろう。

ＳＫ－４８　Fig.159　PL.21

東２面に検出した。Ｃ－１～２グリッドにかけて位置する。鋳造関連遺物の廃棄坑である。平面プランは、東側がやや膨らむ楕円形を呈し、長径1.15ｍ、短径0.7ｍを測る。断面形は略逆台形をなし、深さ0.37ｍを残している。西側は土坑上端がラッパ状に少し開き、東側基底面は低い段をなす。土坑

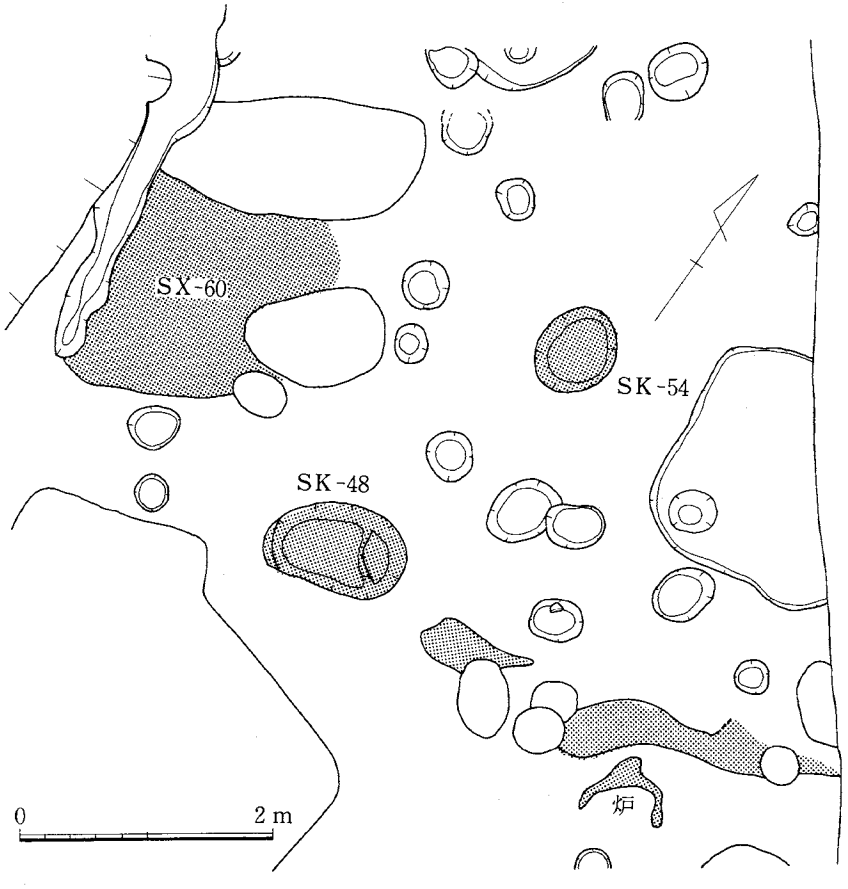


Fig.158　鋳造関連遺構配置図(1/60)

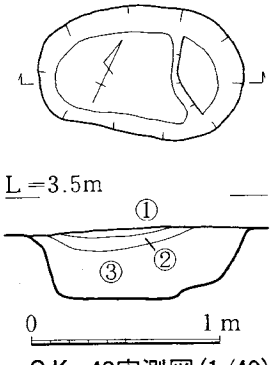


Fig.159　ＳＫ-48実測図(1/40)

覆土は、①炭、②焼土、③ふかふかの暗褐色砂質土である。遺物は主に③層から出土し、鋳造に関連する土製鋳型、取瓶、素材に用いられた銅銭、銅滓、砥石、炉壁の一部などの遺物が一括して廃棄されていた。また、上～中層にかけては礫が投げ込まれていたが、これには特別に焼けた痕跡等は認められなかった。

ＳＫ－４８出土遺物 Fig.160 PL.35

土師器小皿、土師器坏、瓦質土器鉢、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器のほか、鋳造関連遺物、銅銭などが出土した。

650～654は土師器坏で、全て底部は糸切りである。口径12.4～14.2cm、器高2.4～3.0cm。

655は土製の鋳型である。アミで示した部分が焼けている。仏像を鋳出すための鋳型で、長さ10.5cm、幅5.6cm、厚さ4.5cmである。鋳型内の像は、高さ9.0cm、幅4.2cmを測る。元型となった仏像は木像で、鋳型内に木目が明瞭に残っている。木像に厚さ0.9cm程度の粘土を巻き付けた後、縦割りして型を取っており、分割した位置は中心を少しずれている。鋳型を合わせると偏平な卵型となり、鋳造作業前にこの卵を覆って厚さ0.1cmの薄い粘土を貼って固定している。鋳型は使用後、バラバラに破壊されて廃棄されており、鋳造は１回のみ行われたものと見られる。鋳型の像の足元にはヘラで湯口をあけており、鋳型の側面には合わせる際の目印と見られる切り込みが認められる。元型となった像は、密教の秘仏である「歓喜天」の木像である。人身象頭の双身像で、冠をかぶる方が女天である。656は655とは明らかに異なる土製鋳型の一部である。小片のため全容を知り難いが、655の台座

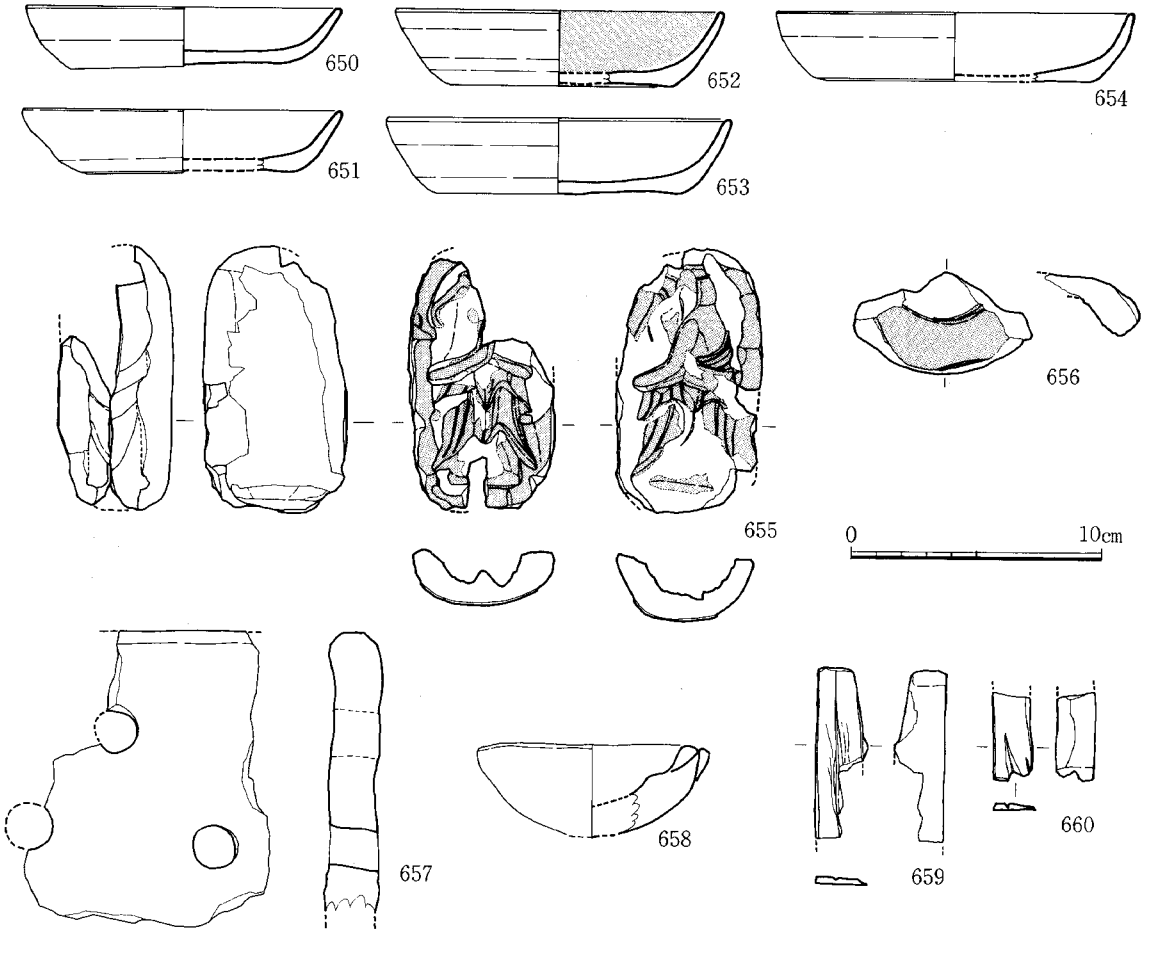


Fig.160 ＳＫ-48出土遺物実測図(1/3)

の可能性がある。アミで示した作業面はヘラで平滑に仕上げられ、焼けている。655と同様、外側を薄い粘土で覆っている。657は炉壁の一部と見られる。土製で、胎土には多量のスサを含む。径1cm程度の円孔が3ヵ所に見られ、内面には熔解した銅の一部が付着している。658は取瓶である。小形の椀形を呈し肉厚で、片口が付く。内面には銅が厚く融着しているが外面は加熱を受けていない。口径9.0cm、器高3.7cmである。

659、660は砥石片である。同一個体と見られるが、接合しない。頁岩系の石材を用いており、両面を使用しているが、片面に使用による深い切り込みがある。

銅銭は「景徳元寳」「祥符□□」など4枚が出土した。鋏で切られたような銅銭があり、銅像の原料とされた可能性が強い。

出土した土師器から見て、14世紀前半代に位置づけられよう。

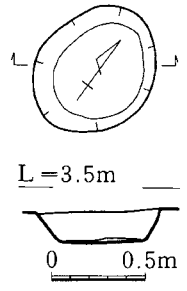


Fig.161　SK-54 実測図(1/40)

SK－54　Fig.161

東2面に検出した。C－1グリッドに位置する。鋳造に関連する木灰の廃棄坑であろう。平面プランは南北にやや長い円形を呈し、径0.6～0.7m、深さ0.15mで、断面は逆台形をなす。覆土には、炭・焼土等が詰まっていた。

SK－54出土遺物　Fig.162

土師器小皿、土師器坏、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）が出土した。

662～665は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径7.8～9.1cm、器高1.0～1.4cm。

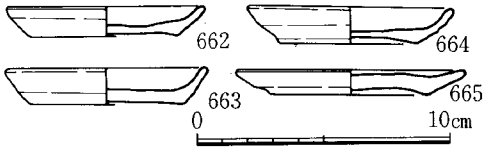


Fig.162　SK-54出土遺物 実測図(1/3)

SK－211　Fig.163

西2面に検出した。B－4～5グリッドに位置する。鋳造関連遺物の廃棄坑である。一部を後世の遺構に切られている。平面プランは東西に長い楕円形を呈し、長径1.65m、短径約1.2m、深さ0.3mで、断面は東に偏った逆台形をなす。

SK－211出土遺物　Fig.164　PL.35　Tab.8

土師器小皿、土師器坏、瓦器椀、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・陶器のほか、鋳型、取瓶、炉壁等の鋳造関連遺物が多数出土した。

土師器小皿の口径・器高をTab.8に示した。

666～677は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。未図化遺物を含めた21個体の平均法量は口径8.2cm、器高1.4cm。673は底部中央に焼成前の穿孔がある。678は土師器坏で、底部は糸切りである。口径13.0cm、器高2.4cm。

679は白磁枢府椀で、体部は腰折れで、内面に印花文を施す。高台内にはハマの痕が残る。口径11.8cm、器高4.5cm。

680は土製鋳型である。青銅製鍋の外型で、鋳造された鍋の法量は口径18.0cm、器高9.0cmである。鍋の片口も同時に鋳出したと見られ、鋳型上端部の1ヵ所が浅く窪んでいる。内面には厚さ0.4cmの真土を貼っている。底部の中央には径3.0cmの孔があり、ここも真土で埋められている。この孔は、外型を作製する際に、中子型と合わせるために入れられた心棒の痕跡と見られる。鋳型の胎土には、多量の砂粒とスサを含んでいる。682も土製鋳型である。厚さ3.6cmの円盤形を呈しており、径は28cmで、鍋鋳型の外径とほぼ一致する。胎土が鍋鋳型に酷似するほか、中央に一孔をあけること、鋳型下

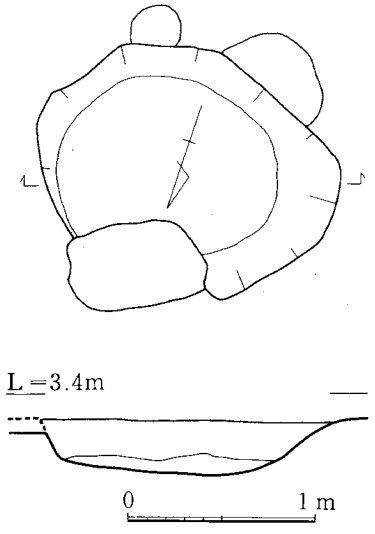
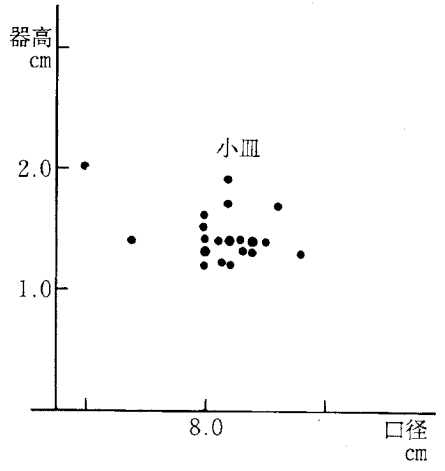


Fig.163　ＳＫ-211実測図(1/40)



Tab. 8　ＳＫ-211出土土師器小皿計測表

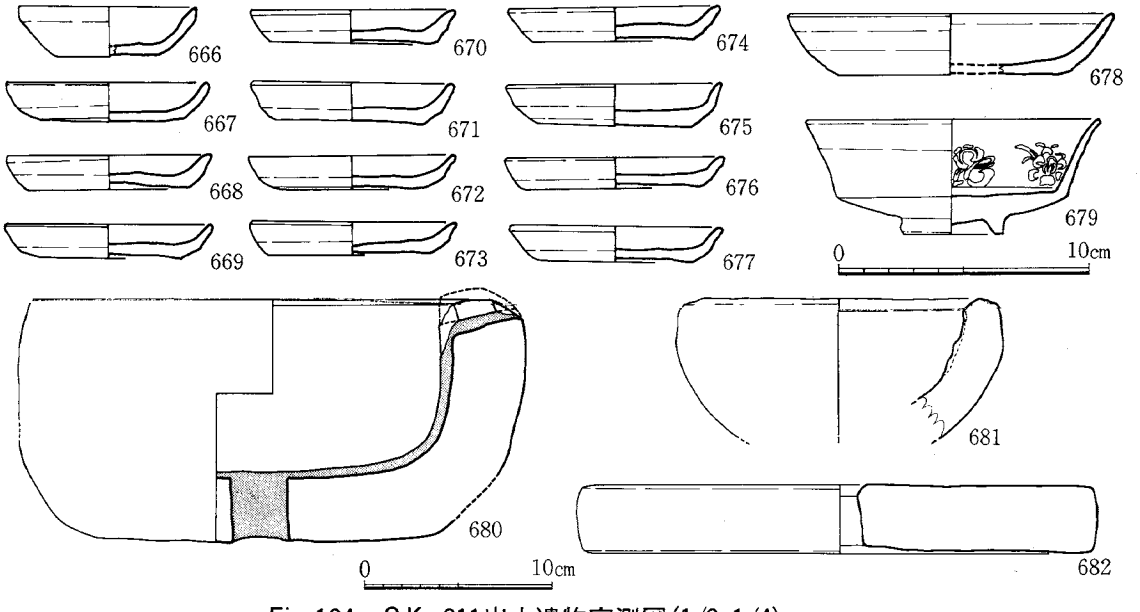


Fig.164　ＳＫ-211出土遺物実測図(1/3、1/4)

面の一部に真土が付着することなど、鍋鋳型との類似点が多く、これとセットで用いられた鋳型と見られる。使用方法としては、銅を流し込む際に、上から溢れ出さないよう押さえる役目を果たしたものと思われる。681は取瓶で、深めの椀形を呈する。内面には銅滓が厚くこびり付く。口径は16.6cmである。

14世紀前半～中頃の遺物と見られる。

(7)木棺墓

ＳＫ－３６０　Fig.165　PL.21、22

西４面に検出した。Ｄ－５グリッドに位置する木棺墓である。一部を３面検出の遺構に破壊されている。木棺の主軸方位は磁北から70°東に偏しており、頭位はほぼ西向きである。木棺は腐食して残っていなかったが、釘がほぼ原位置に残っており、木棺の規模・構造を知ることができる。棺の法量

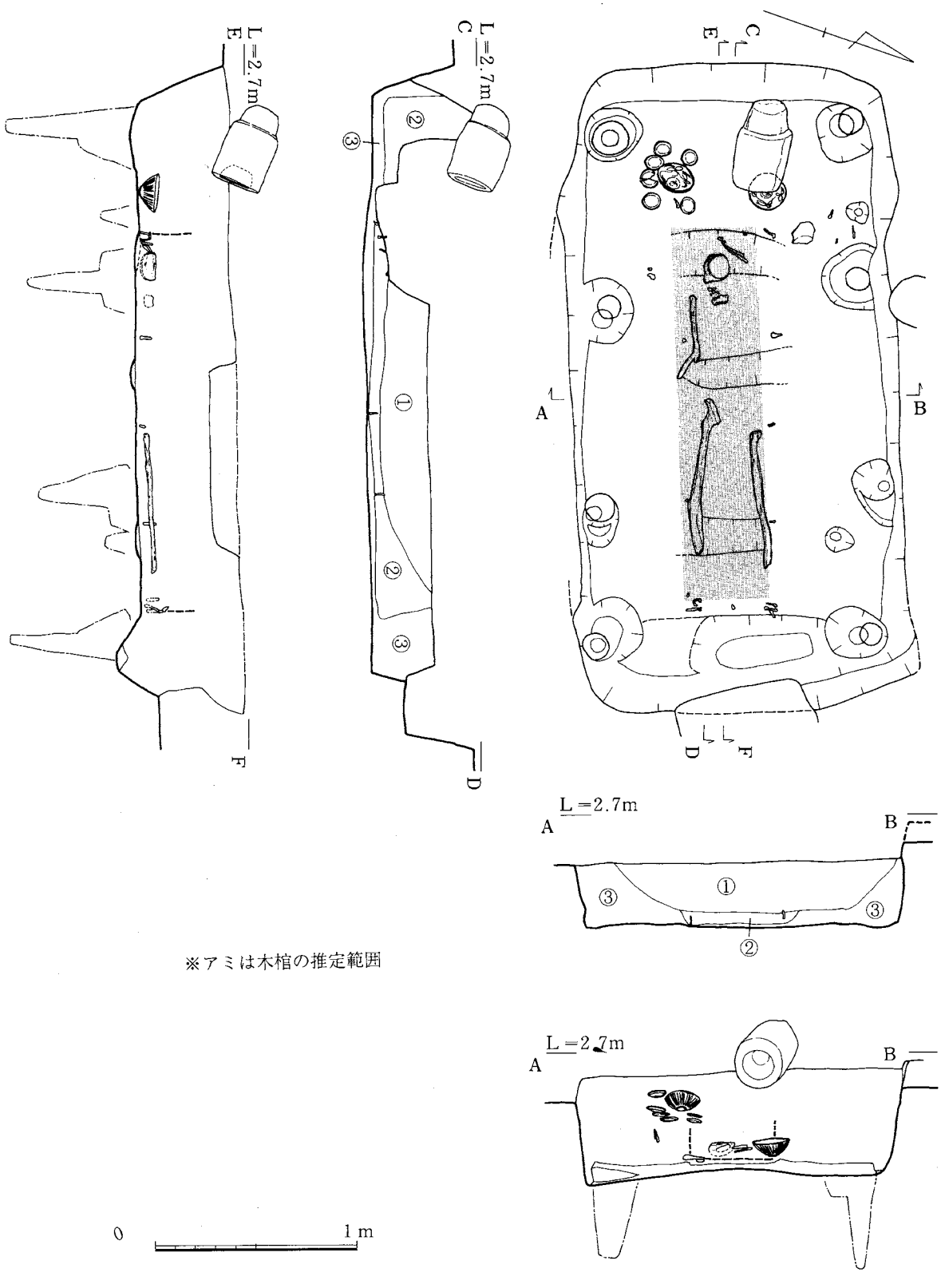


Fig.165　木棺墓ＳＫ-360実測図(1/30)

は長さ1.88m、幅0.42mである。釘は先端を上に向けて立つものと、棺側に先端を向けて寝るものがあり、前者は底板を棺に固定するための、後者は側板を小口板に固定するための釘と見られる。釘の位置から見て、木棺はまず側板で小口板を挟んで井桁に組み、これを底板の上に乗せて底から釘で固定したものと見られる。

人骨は残りが悪く、歯を数本採取できたのみであるが、頭、右腕、両足のそれぞれ一部が痕跡として残っており、身長160cm前後の人物と見られる。

墓壙は、東西に長い隅丸方形プランを呈し、長3.24m、幅1.62mで、ほぼ直に箱掘りしている。検出面から底面までは0.4～0.5mを残す。底面には、壁沿いに8本の柱穴が見られ、うち7本の柱穴には柱痕跡が認められた。上屋が架けられていたことを示す柱穴と見られる。墓壙の覆土は、①黒色砂質土と砂の互層（自然堆積土）、②有機質の黒色砂質土、③汚れた地山砂＋黒色砂質土（掘り方内の埋め土）である。②層は棺内に流入した層と見られ、東西が直に立ち上がっている。ただし、西側は木棺の小口位置を示す釘から西へ0.7m過ぎた位置に②層の立ち上がりがあり、棺とは別の箱状のものが埋められていた可能性がある。

副葬遺物は土師器小皿6点、青磁椀2点、握り鋏1点である。棺内の副葬品は握り鋏（690）のみで、

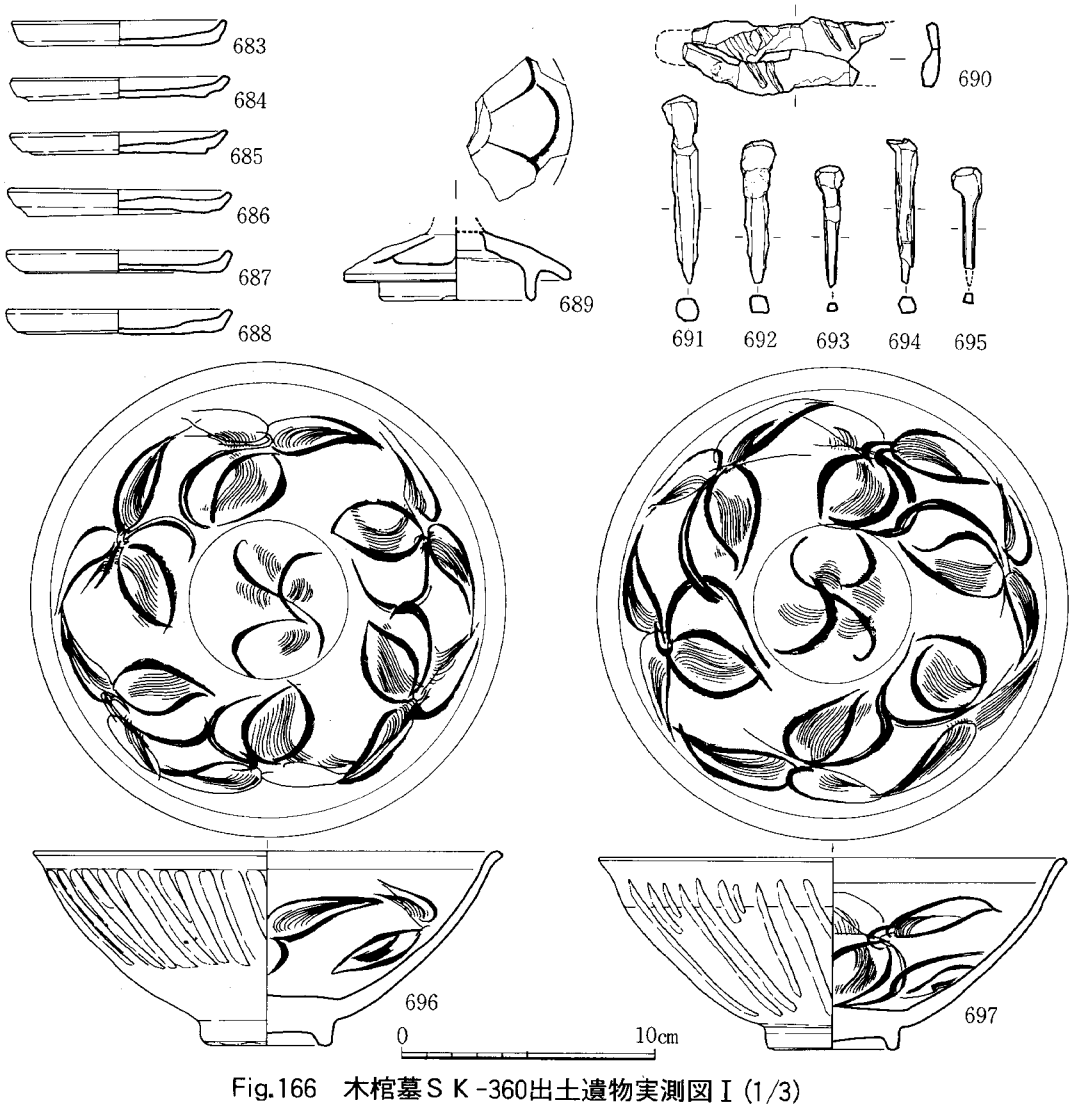


Fig.166　木棺墓ＳＫ-360出土遺物実測図Ⅰ（1/3）

頭部脇に置かれてあった。青磁椀１点(696)は棺の外の掘り方底面に出土し、土層断面に見られる箱状のものに入れられていた可能性がある。他の７点(683～688、697)は底面よりやや浮いた状態で出土しており、何らかの容器に入れて、棺上に置いたものと見られる。

また、墓壙西端の検出面レベルで、横転した状態の石塔が出土した。木棺墓の頭位に立っていたものと見られ、墓標である可能性が強い。木棺が腐食して陥没する際に、転倒して墓壙内に転げ込んだものと考えられる。

全ての遺物を取り上げた後、棺の下３ヵ所に、幅01～0.2ｍの帯状に黒色砂が認められた。棺を墓壙に下ろす際に敷かれた横木等の痕跡と見られる。

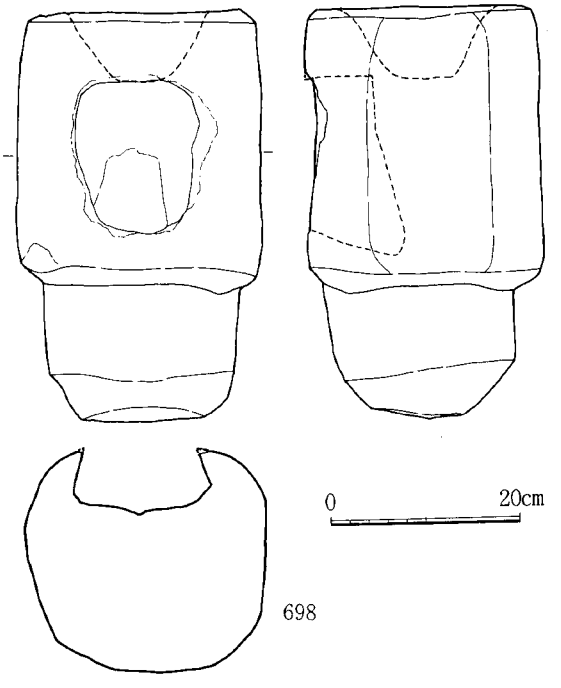


Fig.167　木棺墓ＳＫ-360出土遺物実測図Ⅱ(1/8)

ＳＫ－３６０出土遺物　Fig.166、167　PL.36

土師器小皿、土師器坏（糸切り）、瓦器椀、須恵質土器鉢、土錘、中国産白磁・青磁（越州窯系、龍泉窯）・青白磁・陶器、高麗青磁が出土した。

683～688は土師器小皿で、底部は全て糸切りである。口径8.6～8.8cm、器高0.9～1.0cmにおさまり、規格性が強い。これらの小皿６点は副葬遺物である。

689は高麗青磁であろうか。蓋の小片で、胎土は灰色を呈し、細かい砂粒を含む。釉は青味のかかった透明釉で、天井部内面以外に施釉する。口縁端部に目跡が残る。696、697は龍泉窯系青磁の椀で、ともに副葬遺物である。体部は直線的に開き、端部が少し外反する。体部外面には片切り彫りで縦位の劃線を入れ、内面には櫛描きと片切り彫りで草花文を施す。胎土は灰白色を呈し精良で、淡いオリーブ色の透明釉をかけ、畳付から外底は露胎とする。ともに、口径18.6cm、器高7.7cmを測る。２点は製作技法や法量が酷似しており、規格性が強い。

690は鉄製の握り鋏と見られる。錆がひどく、木質が付着しており、形が不鮮明である。

691～695は棺材の接合に用いられた鉄釘である。頭部、横断面とも方形を呈する。

698は石塔である。石灰岩系の非常に脆い石材を用いている。円筒形を呈し、左右側面は面取りし僅かに平坦面がある。下端部は周囲を削って突起状に造っており、台座等に差し込むものであろう。正面と上面には抉り込みを施しており、正面の孔は袋状を呈し下奥に深い。台座、笠を失った塔身のみの残欠であろうか。

以上の遺物は、13世紀前半～中頃に位置づけられる。

6．近世の遺構と遺物

(1)井戸

ＳＥ－３５　Fig.168　PL.23

東１面に検出した石組の井戸である。Ｃ～Ｄ－３グリッドを中心に位置する。１面で掘り方の一部

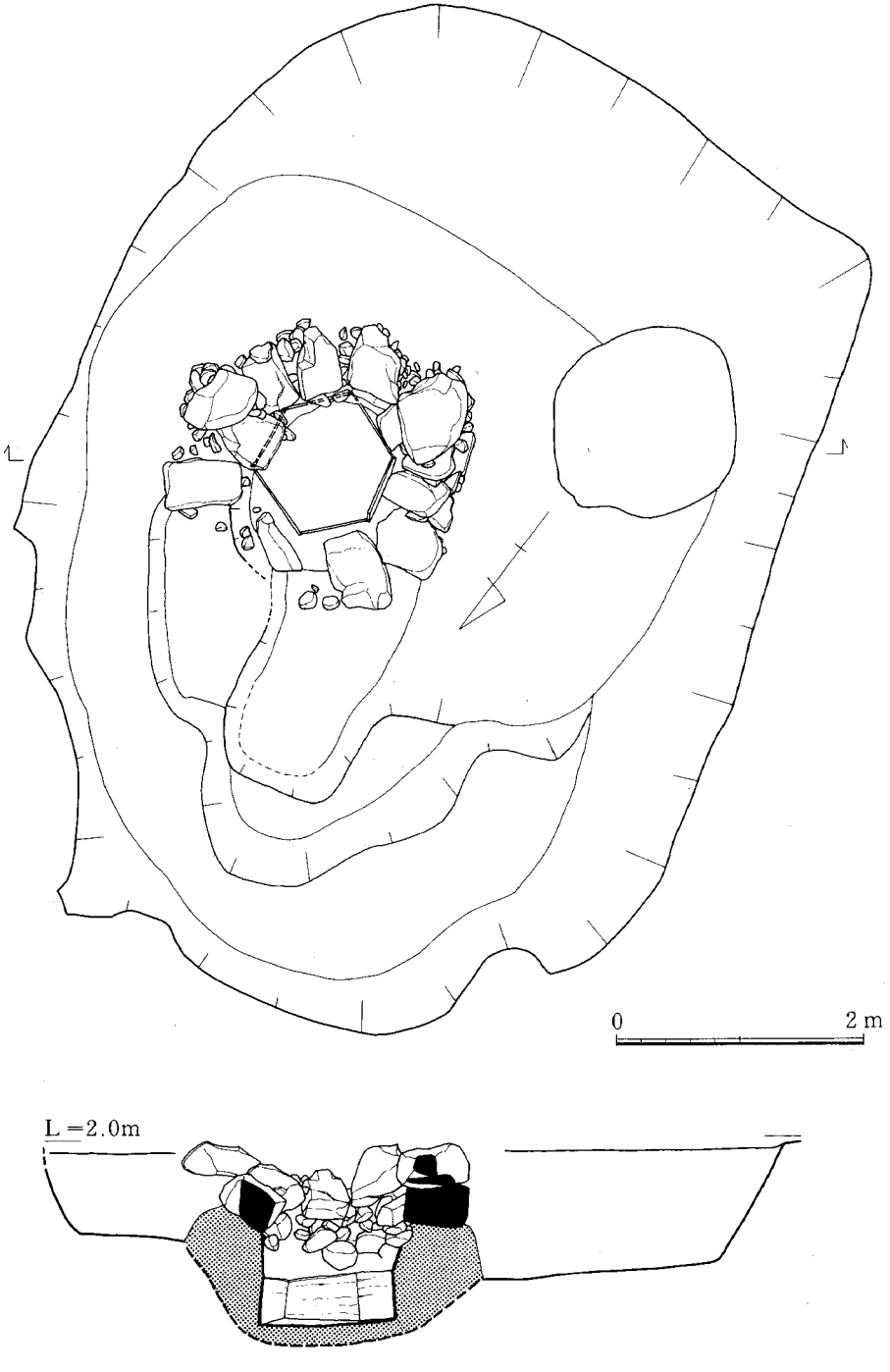


Fig.168　ＳＥ-35実測図(1/60)

を検出し、井戸基底部の調査は５面で行った。北側は現代の攪乱坑に大きく切られており、この部分は、攪乱坑の底面で掘り方を確認した。

掘り方は南北に長い隅丸方形プランをなし、長径8.0ｍ、短径6.0ｍを測る。ただし、これは５面で確認した規模であり、実際はもっと大きい。掘り方底面は段状に掘り窪めており、中央からやや東よりに石積みの井戸側をつくる。標高1.4ｍあたりから石を積み上げており、その下には木組の水溜を置いている。木組の天端と石積みの基底には0.4ｍほどの間隙があるが、ここには小児頭大～拳大の礫を充填しており、湧水レベルはこの間にある。井戸が廃棄された後、石を抜かれており、石積みは基底部の１～２段を残すのみであった。木組は、木板を平面６角形に組んだもので、長さ55～65cm、幅30cm、厚さ１cmの板材を用いているが、残りが悪く、樹種は同定できなかった。

ＳＥ－３５出土遺物　Fig.169、170　PL.36

Fig.169-699～727は、井戸の廃棄後、石積みの礫を抜く際に掘られた土坑から出土した遺物で、

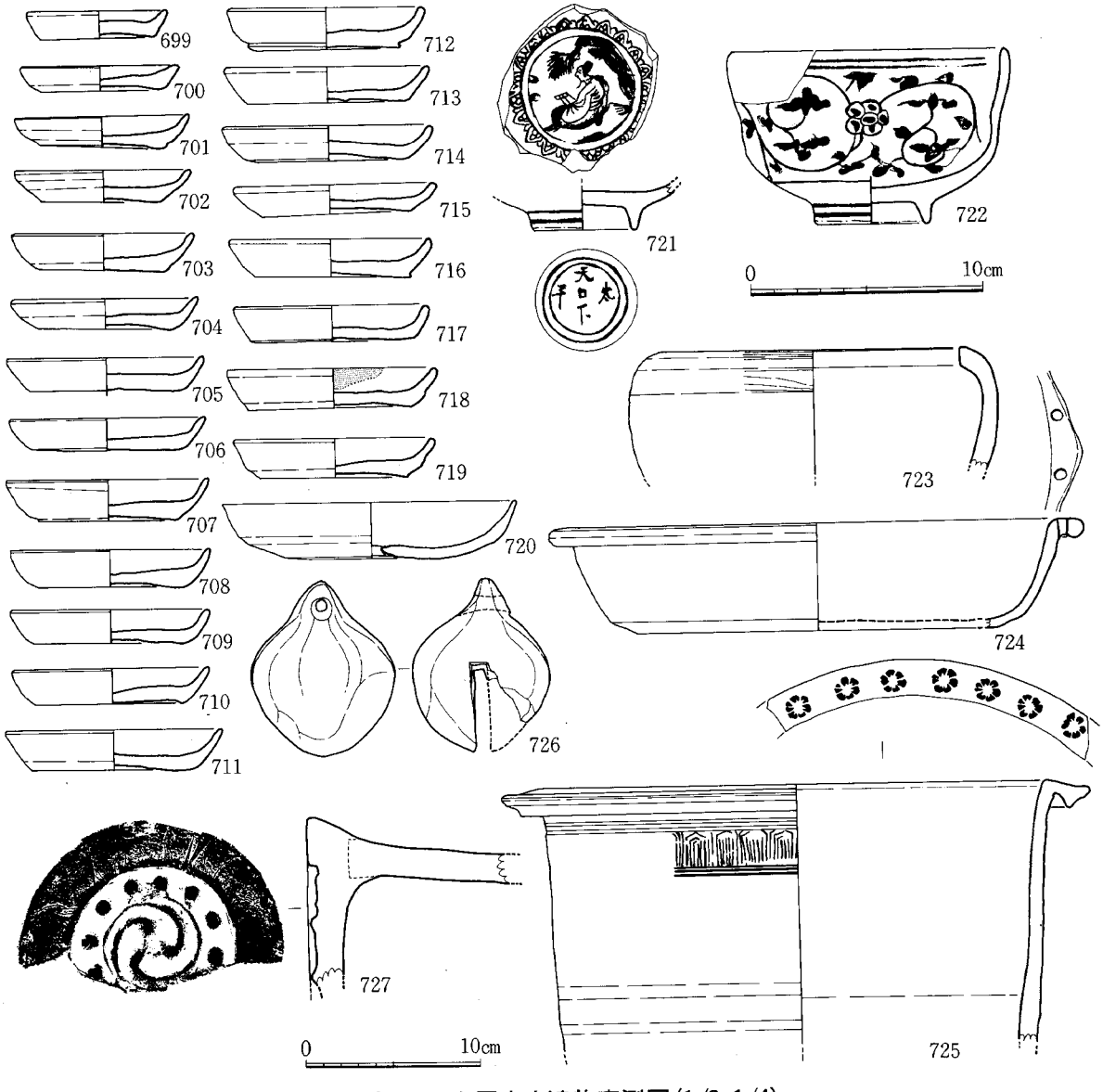


Fig.169　ＳＥ-35上層出土遺物実測図(1/3、1/4)

SE－30の遺構番号で取り上げた。土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋・鉢、瓦質土器鉢・火鉢、須恵質土器鉢・火鉢、国産の近世陶磁器（白磁、青磁、染付、陶器、素焼き土器等）、土製品、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ・Ⅴ類、同安窯）・青花、李朝陶磁器などが出土した。

699～719は土師器小皿で、全て糸切り底である。口径6.0～9.2cm、器高1.1～1.7。720は土師器坏で、底部は糸切り。底部の中央に穿孔している。口径12.6cm、器高2.5cm。

721は明代青花椀で、饅頭心タイプの外底に「天下太平」の文字がある。722は肥前系染付椀で、外面に花唐草文を施し、畳付に砂が付く。723、724は瓦質土器火鉢で、口縁が内湾するものと、外へ屈曲して鍔状になるものがある。725は雑釉陶器大鉢で、口縁端部に梅花文をスタンプする。

726は土鈴で、無花果形を呈し、上端に穴をあける。727は軒丸瓦の瓦当付近の小片である。内区に三つ巴文を配する。瓦当径15.0cm。他に「永楽通寶」が一枚ある。

以上の遺物は17世紀以降に位置づけられよう。

Fig.170-728～741はSE－35の掘り方および井戸側内より出土した遺物である。土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢・火鉢、須恵質土器鉢、国産の近世陶磁器（白磁、染付、陶器）、瓦、石製品、土製品、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ～Ⅴ類、同安窯、連江窯）・青白磁・青花・陶器、高麗・李朝陶磁器などが出土した。

728～731は土師器小皿で、全て糸切り底である。口径6.2～8.2cm、器高1.0～1.4cm。

732は白磁小壺で、碁笥底。縦耳を付ける。白色の精製された胎土に透明釉をかけ、内面と外面下半～底部は露胎。733、734は明代の白磁小椀で、切り高台につくる。畳付と見込みに4ヵ所の目跡が残る。735、736は龍泉窯青磁椀である。735はⅠ類で外底に墨書がある。736は外底の釉を輪状に掻き取る。737は元代の青花で、片口か。口縁端部を釉剝ぎし、外面には退化した蓮弁文を施す。738は明代青花皿である。碁笥底で、畳付は釉剝ぎする。739は雑釉陶器椀である。胎土は粗く、白色の砂粒を含み、淡灰青色の不透明釉をかける。畳付と見込みに目跡が残る。740は李朝の白磁か。胎土はあまり精製されず、釉はやや空色がかった透明釉である。畳付と見込みに目跡が残る。

741は軒丸瓦で、瓦当には、櫛田宮の「花菱文」を配する。他に「寛永通寶」「明道元寶」の2枚の銅銭が出土した。

北側を切る現代攪乱坑から混入した遺物もあるが、全体的には17世紀代か。

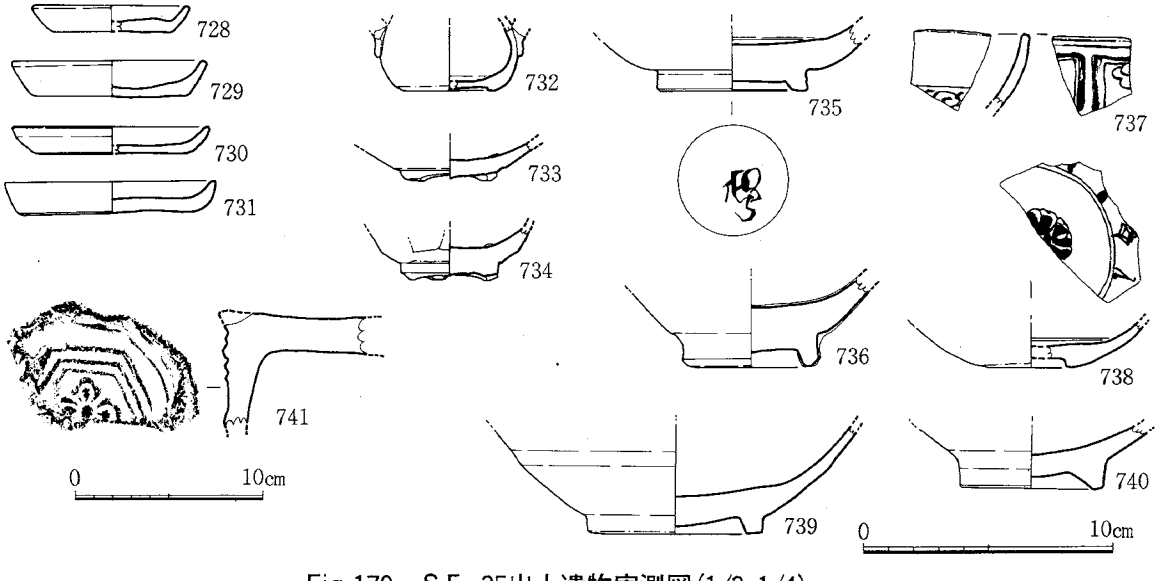


Fig.170　ＳＥ-35出土遺物実測図(1/3、1/4)

(2)土坑

近世の土坑は9基を報告する。一部近代に下るものも含まれる。

ＳＫ－０２ Fig.171

東１面に検出した。Ｆ－２グリッドに位置する。東西に長い方形プランを呈し、長径1.3m、短径1.1mを測る。断面形は逆台形をなし、検出面から底面まで1.0mを残す。

ＳＫ－０２出土遺物 Fig.172 PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢・火鉢、国産の近世陶磁器（染付、陶器）、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯Ⅰ・Ⅴ類、同安窯）・青花・陶器、李朝陶磁器などが出土した。

742、743は土師器小皿である。742は口径6.0cm、器高1.5cm、743は口径6.0cm、器高1.8cmである。744～747は土師器坏で、口径9.8～10.4cm、器高2.0～2.5cmの間にある。小皿、坏ともかなり小形化している。

748は明代青花の蓮子椀で、外面にアラベスク文様、内面に法螺貝と波涛文を施す。749は肥前系染付皿である。750は明代白磁の端反り皿である。751、752は雑釉陶器椀で、751は内面に白泥を塗った所謂刷毛手である。ともに畳付と見込みに目跡が残る。753は瓦質土器の火鉢で、内面に刷毛目調整を施す。口縁直下に２条の突帯を貼付し、その間に巴文をスタンプする。

ＳＫ－０３ Fig.171

東１面のＥ－２グリッドに検出した。不整な楕円形プランを呈し、長径1.45m、短径1.2m、深さ0.65mで、断面形は逆台形をなす。

ＳＫ－０３出土遺物 Fig.172 PL.37

土師器小皿、土師器坏、瓦質土器鉢、国産近世陶磁器（白磁、青磁、染付、陶器、素焼き土器）、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器、李朝陶磁器などが出土した。

754、755は肥前系染付である。754は腰折れの小鉢で、外底に「富貴長春」の銘が入る。755はそば猪口。756は焙烙で、把手付け根の下面には離れ砂が付着する。

ＳＫ－０６ Fig.171

東１面のＥ～Ｆ－３グリッドに検出した。長方形プランを呈し、長径2.0m、短径1.3m、深さ0.35mで、箱型に掘る。

ＳＫ－０６出土遺物 Fig.172 PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋・鉢、国産近世陶磁器（白磁、青磁、染付、陶器、素焼き土器）、瓦、中国産白磁・陶器、李朝陶器が出土した。

757は焙烙で、把手は欠損している。外面下半から底部にヘラ削りを加え、底部と内面にはススが付着する。758、759は素焼きの小形七輪である。玩具あるいは茶道具か。

ＳＫ－１２ Fig.171

東１面のＦ－２グリッドに検出した。東西に長い楕円形プランを呈し、長径1.55m、短径0.8m、深さ0.35mで、断面形は逆台形をなす。

ＳＫ－１２出土遺物 Fig.172 PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋・火鉢、瓦質土器鉢・火鉢、国産近世陶器、瓦、中国産白

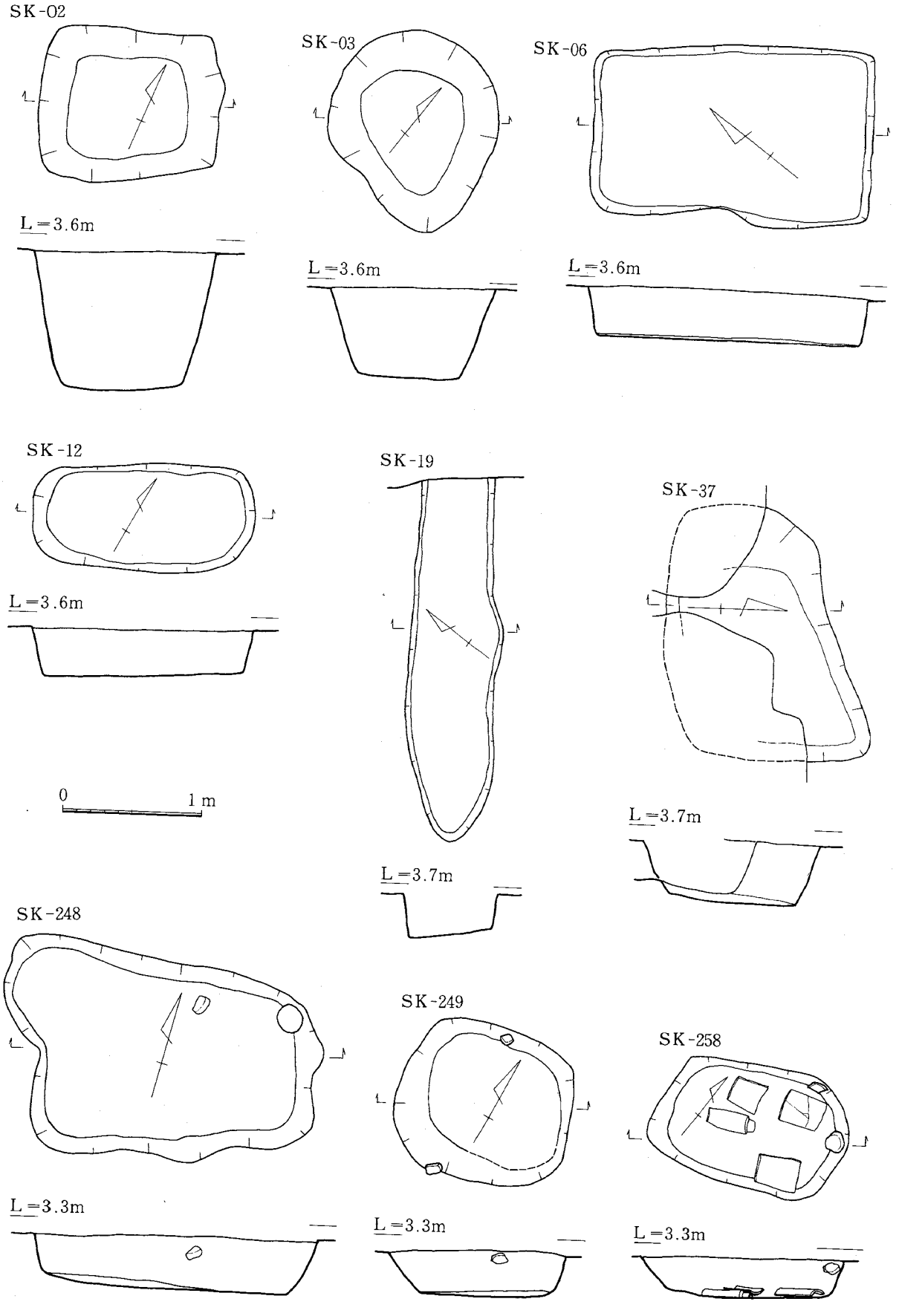


Fig.171　近世土坑実測図(1/40)

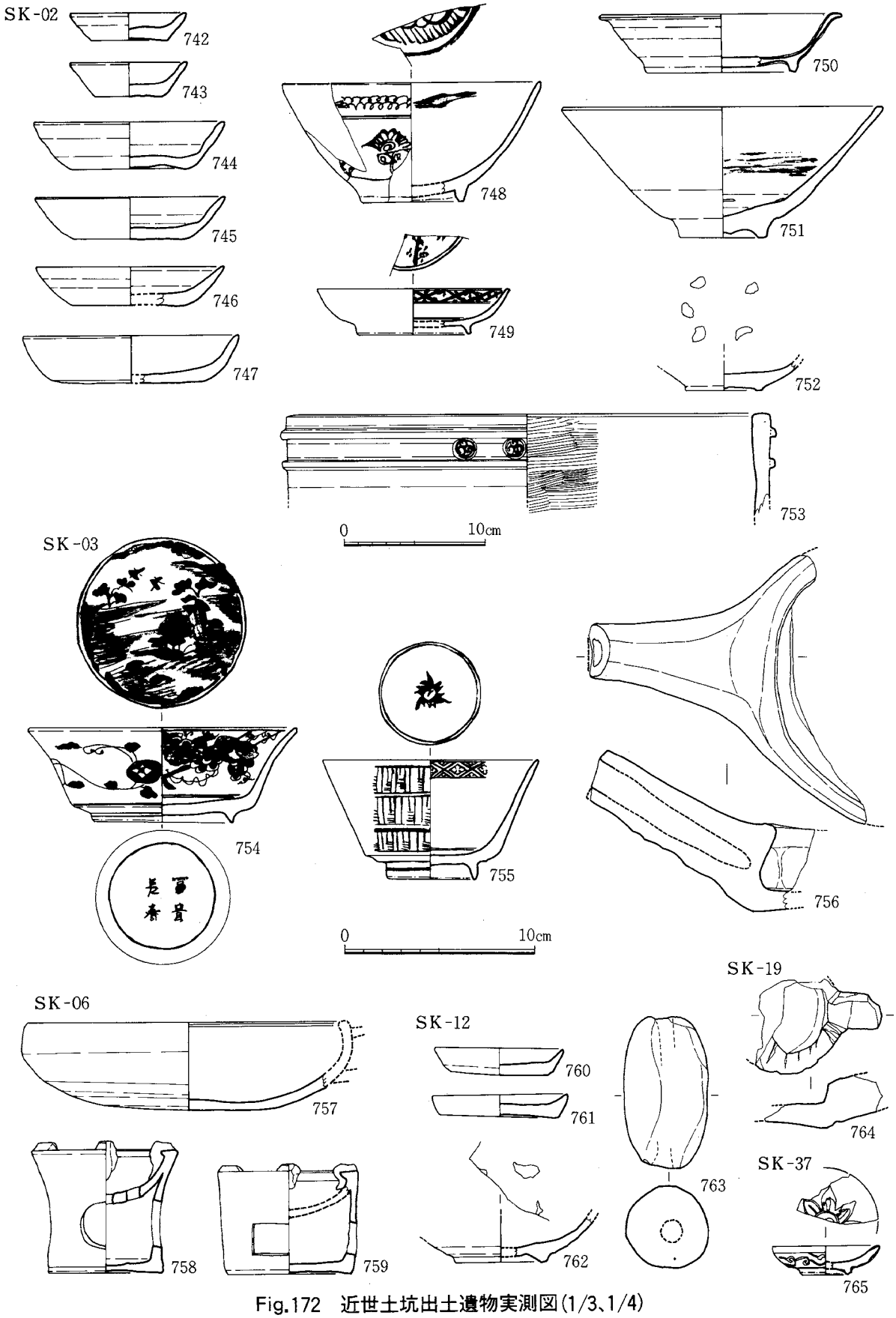


Fig.172　近世土坑出土遺物実測図(1/3、1/4)

磁・青磁（越州窯系、龍泉窯、同安窯）・青花・陶器、李朝陶器が出土した。

760、761は土師器小皿で、底部糸切り。ともに小形品である。760は口径6.7cm、器高1.4cm、761は口径7.1cm、器高1.2cm。762は雑釉陶器椀で、灰褐色の粗い胎土に、黄味を帯びた透明釉をかける。畳付と見込みに目跡が残る。763は土錘である。大型で厚みがある。長8.1cm、厚4.4cm。

ＳＫ－１９ Fig.171

東１面のＥ－２グリッドに検出した。溝状に長い楕円形プランを呈し、東端は試掘トレンチに切られて長径は不明。幅は0.6ｍである。調査時に底面を掘り過ぎている。

ＳＫ－１９出土遺物 Fig.172

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器火鉢、国産近世陶器（染付、陶器）、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・陶器、李朝陶器などが出土した。

764は滑石製品の一部である。把手付き鍋等の模造品か。

ＳＫ－３７ Fig.171

東１面のＣ－２グリッドに検出した。現代の攪乱坑に切られて残片的である。東に開く不整な方形プランを呈し、長さ1.7ｍを測る。深さ0.45ｍで、断面は逆台形をなす。

ＳＫ－３７出土遺物 Fig.172 PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・陶器などが出土した。

765は青磁紅皿か。型作りで、内外面に印花文を押す。精製された灰白色の胎土に、淡灰青色の透明釉をかける。

ＳＫ－２４８ Fig.171 PL.23

西２面のＦ－６～７グリッドに検出した。東西に長く、西に開く不整な台形プランを呈し、長径2.4ｍ、短径1.5ｍ、深さ0.4ｍで、断面形は東にやや深い逆台形を呈する。

ＳＫ－２４８出土遺物 Fig.173 PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢・火鉢、国産陶器、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・青花・陶器などが出土した。

766、767は土師器小皿で、底部は糸切り。766は口径6.1cm、器高1.3cm、767は口縁端部にススが付着し、口径6.2cm、器高1.2cm。

768は二彩で、陶俑の台座と思われる。。側面に段を持ち、上段に緑彩、下段に黄彩を施す。胎土は淡赤褐色を呈し、きめが細かい。内面は露胎で、上面には別の個体が剝がれ落ちた痕跡がある。769は肥前系染付の小坏で、高台内に「大明年造」の文字を入れる。770は明代の青花皿で、碁笥底につくる。見込みに吉祥文字の一部が見える。他に、銅銭４枚が出土しており、「咸平元寳」「祥符元寳」「天□□寳」などがある。

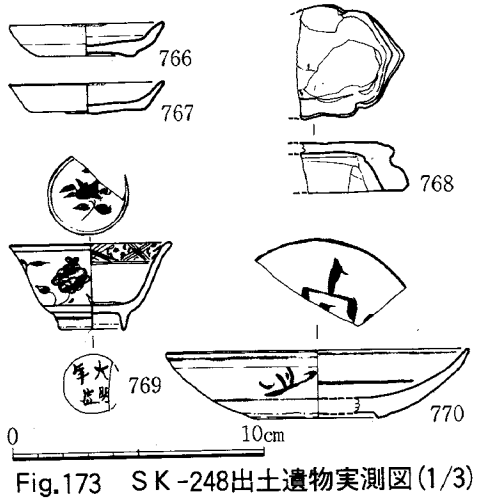


Fig.173 ＳＫ-248出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ－２４９　Fig.171　PL.23

西２面のＦ－６グリッドに検出した。やや東西に長い円形プランを呈し、長径1.25ｍ、短径1.1ｍ、深さ0.33ｍで、断面形は逆台形を呈する。

ＳＫ－２４９出土遺物　Fig.174　PL.37

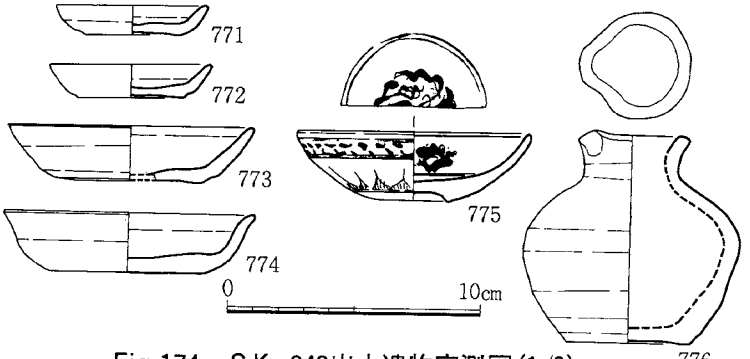


Fig.174　ＳＫ-249出土遺物実測図(1/3)

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢、国産陶器、瓦、中国産白磁・青磁（龍泉窯）・青花・陶器、高麗・李朝陶磁器などが出土した。

771、772は土師器小皿で、底部は糸切り。771は口径6.0cm、器高1.2cm、772は口径6.4cm、器高1.3cm。773、774は土師器坏で、底部糸切り。773は口径9.7cm、器高2.1cm、774は口径10.0cm、器高2.4cm。

775は明代青花皿で、碁笥底。全面に施釉した後、畳付の釉を掻き取る。776は備前焼きの徳利で、片口になっている。他に、銅銭が２枚出土し、「元豊通寶」「洪武通寶」がある。

ＳＫ－２５８　Fig.171

西２面のＥ－６グリッドに検出した。東西に長い隅丸方形プランを呈し、長径1.4ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.3ｍで、断面形は逆台形を呈する。底面には平瓦３点、丸瓦１点が散漫に置かれてある。瓦の上面のレベルは揃っており、上に何かを据えたものか。

出土遺物には、土師器坏（糸）、瓦器椀、土師質土器鍋・鉢、須恵質土器鉢、瓦、中国産白磁・青磁（同安窯）・陶器があるが、図化していない。

(3)その他の遺構

ＳＫ－０５　Fig.175

東１面のＥ－３グリッドに検出した。埋甕遺構で、便壺と見られる。近代以降に下る可能性が強い。掘り方は円形プランを呈し、長径1.05ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.35ｍで、断面形は逆台形を呈する。掘り方の北よりに一段下げて、ここに陶器の甕を置く。甕は平底で上部は削平されている。

ＳＫ－０５出土遺物　Fig.176　PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋・鉢、瓦質土器、国産近世陶磁器（染付、陶器）、瓦のほか、ごく少量の中国産白磁・青磁・明代青花が出土した。

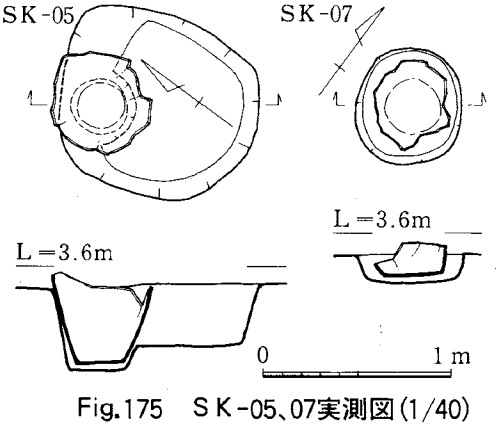


Fig.175　ＳＫ-05、07実測図(1/40)

777、778は土師器坏で、底部糸切り。胎土は淡黄白色で、かなりきめが細かい。型作りと見られ、体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りを加えている。内底と外底の中心付近が黒く変色する。777は口径12.1cm、器高2.4cm、778は口径11.5cm、器高2.0cm。779は雑釉陶器の灯明皿で、底部は糸切り離しのまま放置する。釉は暗褐色の不透明釉で、内底と体部下半は露胎である。780は軒丸瓦である。内区

に三つ巴文を配し、珠文数は12を数える。

ＳＫ－０７　Fig.175

東１面のＦ－３グリッドに検出した。SK－05と同様の遺構で、より削平が進んでいる。掘り方は円形プランを呈し、長径0.6m、短径0.55m、深さ0.15mである。陶器の甕の底部のみが残る。

出土遺物は、ほぼSK－05と同様のものが出土しているが、遺構の時期を示すものではない。

ＳＸ－１０　Fig.177　PL.24

東１面のＥ－２～３グリッドに検出した。瓦積みの竪穴状遺構である。掘り方は東西にやや長い隅丸方形プランで、長径2.5m、短径2.05m、深さ0.65mで、断面形は逆台形を呈する。掘り方の少し西に寄せて、内法1.15×1.05mの方形に面を揃えて瓦を積み上げる。瓦はおおむね小口積みであるが、平積みのものも混じっており、統一性はない。数段に分け、レベルを揃えながら0.85mほど積み上げている。底面からは鉄釘が数本出土したのみで、特別に固くなった面などは確認できなかった。

用いている瓦は、桟瓦が主体で、他に丸瓦・平瓦や、桟瓦へ移行する過渡期的な形態と見られる瓦などが少数混ざっており、江戸時代中期以降の所産と見られる。

地下の穴蔵のような用いられ方をした遺構であろうか。

ＳＸ－１０出土遺物　Fig.178　PL.37

土師器小皿、土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器鉢・火鉢、国産近世陶磁器（白磁、青磁、染付、陶器）、瓦、土製品、中国産白磁・青磁（龍泉窯、同安窯）・青白磁・青花・陶器、高麗・李朝陶磁器などが出土した。

781は土師器小壺で、底部は糸切りである。胎土は赤褐色を呈しきめが細かく、焼成は堅緻でよく締まっている。口径3.1cm、器高3.3cm。782は龍泉窯系青磁椀で、外面に縦位の細線を入れる。釉は一部高台内に及ぶ。783は李朝青磁椀で、白土で象嵌を施した三島手である。784、785は雑釉陶器椀で、灰白色の粗い胎土に、白濁した不透明釉を施す。畳付

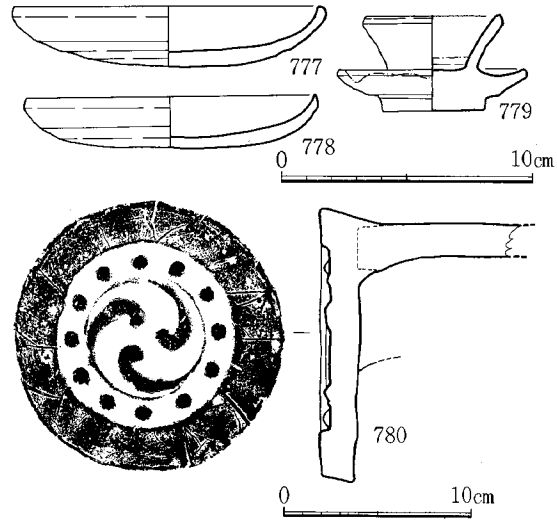


Fig.176　ＳＫ-05出土遺物実測図(1/3、1/4)

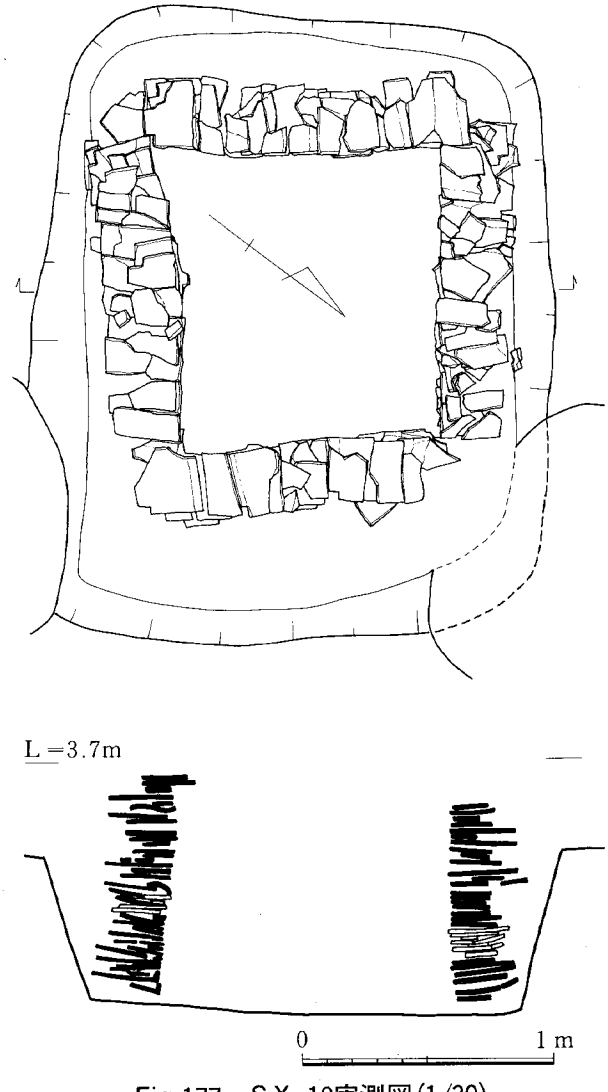


Fig.177　ＳＸ-10実測図(1/30)

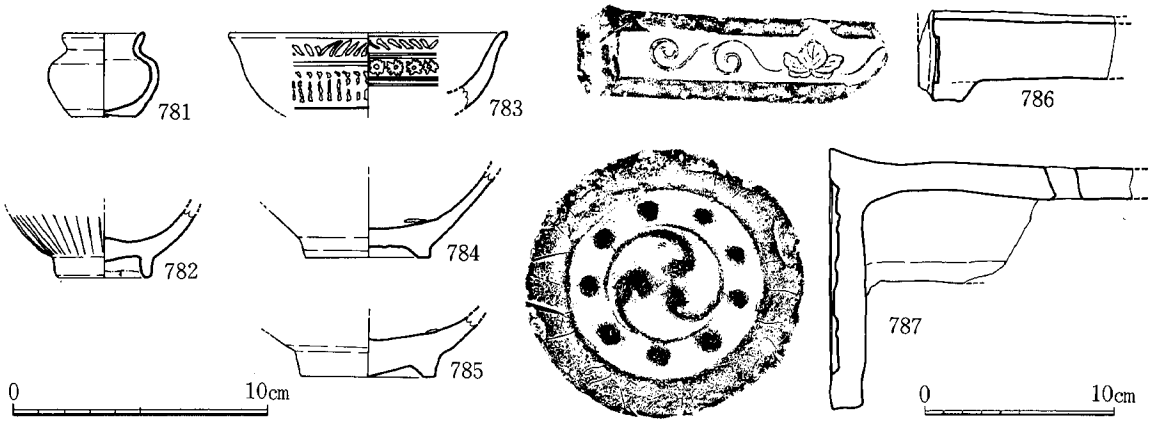


Fig.178　ＳＸ-10出土遺物実測図(1/3、1/4)

と見込みには目跡が残る。786は桟瓦の軒平瓦である。内区に均整唐草文を配している。787は軒丸瓦で、内区には三つ巴文を配し、９個の珠文が巡る。瓦当径は14.4cmを測る。

ＳＸ－３６　Fig.179　PL.24

東１面に検出した。Ｄ－２グリッドに位置している。自然礫を集めた遺構である。検出面では掘り方が不明瞭で、礫を除去した後の底面でその一部を確認することができた。礫は全て赤変するか、あるいは割れており、加熱して用いられたことが明らかである。礫群の中央部付近から、先端を折られた状態のウミニナが少量出土しており、あるいはウミニナ等の調理に用いられた礫を使用後にまとめて棄てたものであろうか。

礫に混じって、瓦、フイゴ羽口などが出土したが、時期は明確でない。

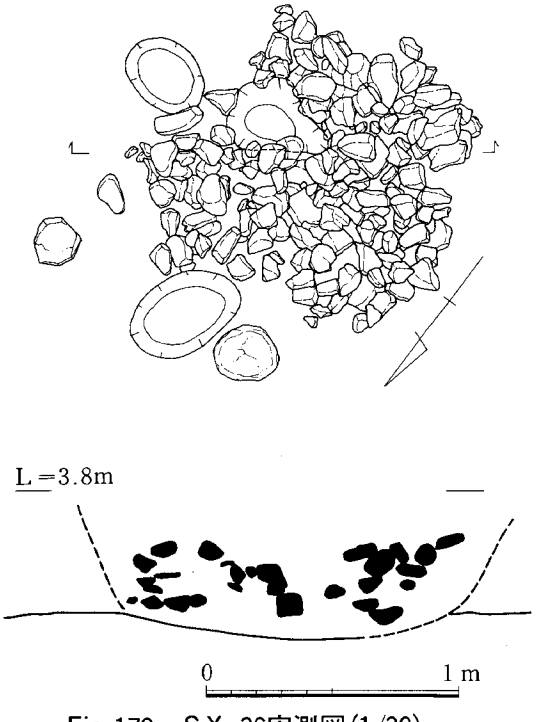


Fig.179　ＳＸ-36実測図(1/30)

7．包含層・柱穴出土遺物

包含層や、掘立柱建物にまとまらない柱穴等から出土した重要遺物を掲載した。第80次調査で出土した約600箱の遺物の1/2弱は包含層出土遺物であり、ここに掲載できなかった遺物や図化できなかった遺物が多数残っている。

(1)弥生時代、古墳時代の遺物　Fig.180　PL.38

788、789は弥生土器である。788は小形の鉢型土器で、外面に粗い刷毛目調整を施す。口径12.9cmを測る。789は甕形土器で、口縁は打ち欠いており、底部に穿孔している。小児用の甕棺か。

790、791は古墳時代前期の古式土師器で、いずれも甕形土器である。791はややこぶりである。ともに口縁は内湾して開き、端部が内側へ突出する。外面刷毛目調整、内面ヘラ削り調整である。

(2)古代の遺物　Fig.181　PL.38

792～794は土師器である。792は小皿で、かなり高めの高台が付く。口径7.6cm、器高4.3cm。793は皿で、底部は回転ヘラ削り調整である。口径16.0cm、器高2.1cm。794は大坏で、低い高台が付く。底部は回転ヘラ削りで、内外面に回転ヘラ磨きを施す。口径19.0cm、器高5.9cm。795は焼塩壺で、内面に布目痕が残る。尖底になるものと思われる。口径11.8cm。

796～799は緑釉陶器である。796、797は小形の深い坏形をなし、底部は平底で、いずれも糸切り痕が残る。796は口縁が少し内湾気味で、口径8.8cm、器高2.6cm。797は端部が外反しており、口径9.6cm、器高3.1cm。ともに磨きは施しておらず、胎土は黄白色を呈し土師質、釉の掛かりは不均一で斑点状になっており、外底は露胎である。長門産の緑釉陶器か。798は椀で、円盤状の高台を削り出す。胎土は淡黄灰色を呈し土師質で、全面に施釉している。799も椀で、輪高台である。見込みに沈

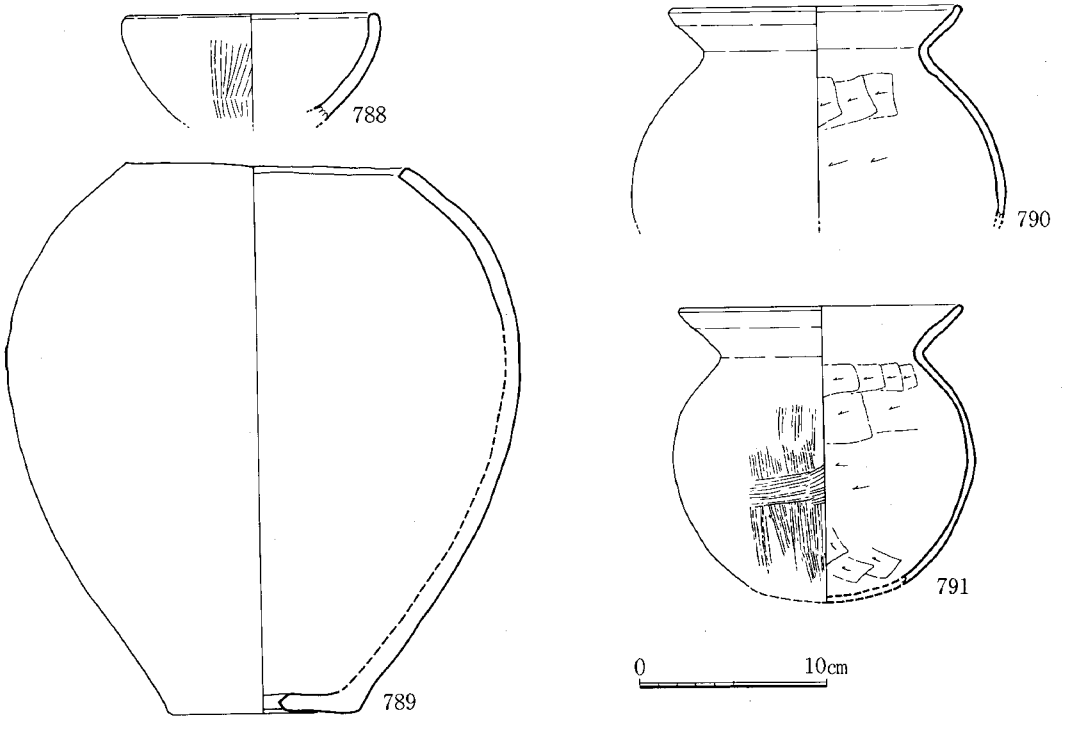


Fig.180　包含層出土遺物実測図Ⅰ(1/4)

圏線を巡らせる。胎土は灰色を呈し須恵質で、全面に施釉する。見込みに重焼きした別の個体の一部が融着する。高台径は7.0cmを測る。

800～808は越州窯系青磁である。800は粗製の椀で、円盤状の高台が付く。外底部の中心を浅く削り、蛇の目高台状につくる。外面下半を露胎とし、釉下には化粧土を施す。見込みと底部外縁に目跡が残る。底径は7.4cmである。801、802は精製の椀で、輪高台が付く。全面に施釉し、畳付と見込みに目跡が残る。801は高台径8.6cm。802は胎土に細かい砂粒を少量含み、高台を竹節状につくることから、高麗青磁の可能性がある。高台径7.0cm。803～806は五代から北宋前半代の越州窯系青磁と見

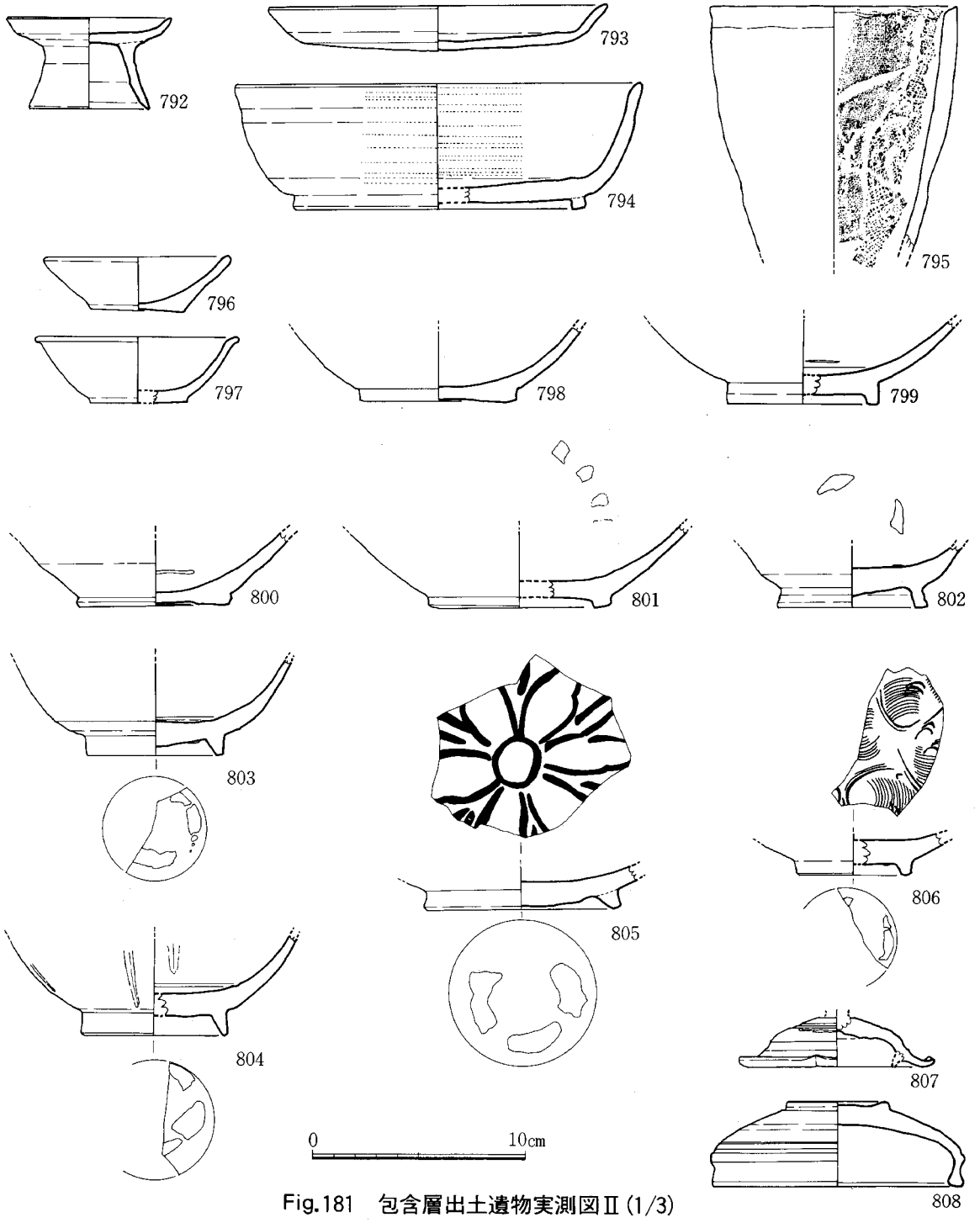


Fig.181　包含層出土遺物実測図Ⅱ(1/3)

られる。いずれも輪高台で、全面に施釉し、高台の内側に細長い目跡が付く。803は高台径6.5cm。804は外面の6ヵ所に縦位の劃線をヘラで入れ、高台径7.0cm。805は内面にヘラ彫りによる花文を配し、高台径9.3cm。806は内面に櫛描きと片切り彫りによる文様を施し、高台径4.5cmである。807、808は蓋である。807は口縁が外反し、端部には刻目を入れる。天井部のつまみと口縁内面のかえりが欠けた痕がある。また、天井部には沈線2条が巡り、この部分に目跡が残る。内面は露胎で、口径9.2cm、器高2.3cm。808は天井部に輪状のつまみを付ける。口縁は少し内傾し、端部は面取りする。口唇部から内面は露胎で、口唇部に目跡が残る。口径11.7cm、器高4.0cmで、つまみの径は4.8cmを測る。

(3)中世の遺物 Fig.182～183 PL.38、39

809は須恵質系土器の水滴である。体部は三角錐形を呈し、頸部が細くくびれ、短く開く口縁が付く。口径3.5cm、器高5.0cm、底径7.2cm。暗灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。810は土製の模造品と見られる。尖塔形を呈し、中空で底部は開く。外側から11カ所に穿孔し、孔の間を細かい刺突で埋めている。底径3.8cm、器高6.7cmの小形品で、博山炉などを模したものであろうか。811は土師器坏で、糸切り底である。内底面に菊花文をスタンプし、焼成は非常に良好で堅致。812は瓦質土器のすり鉢である。体部は少し丸みを持ち、口縁は薄く肥厚し、端部は斜めに面取りされる。口径32.0cm、器高13.7cm。813、814は土師質土器の鍋である。813は器高が低めのタイプで、底部は丸

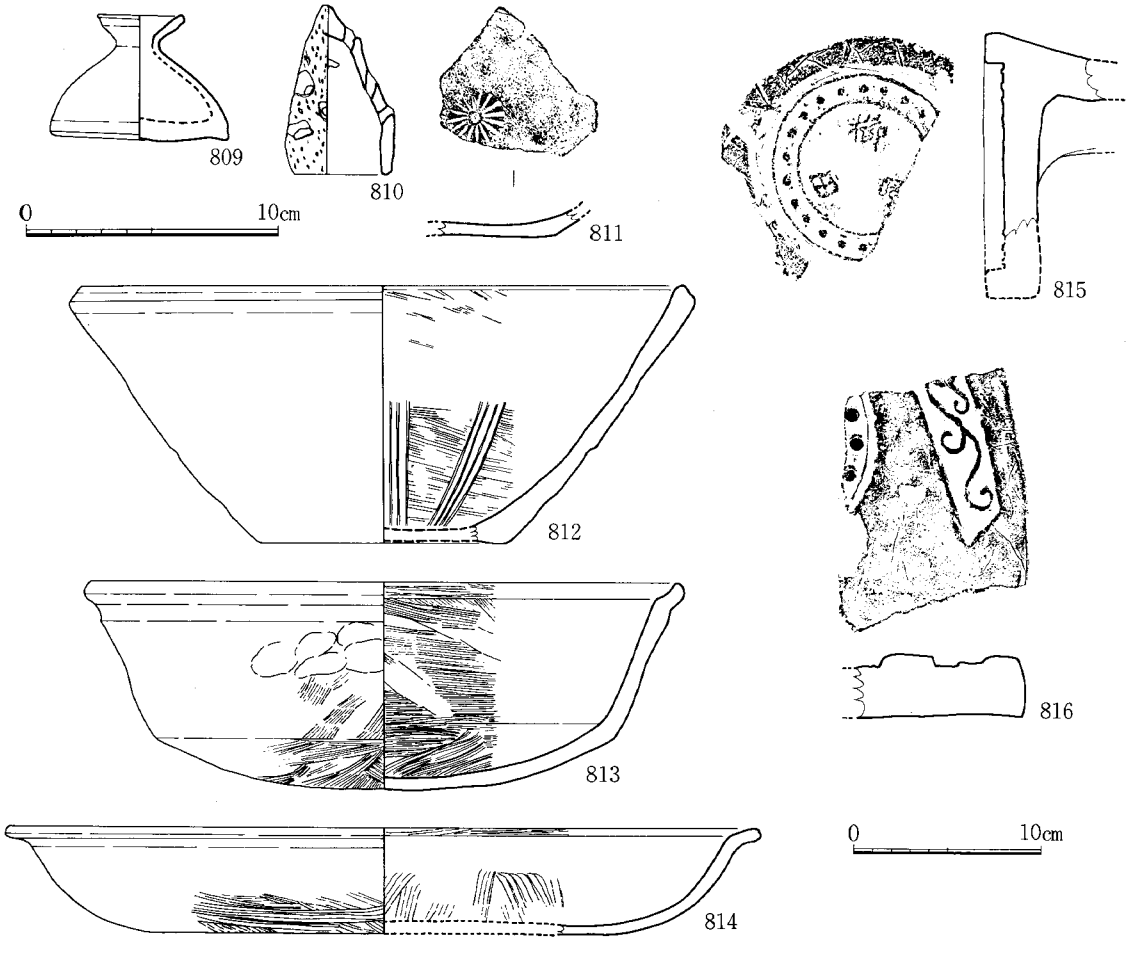


Fig.182 包含層出土遺物実測図Ⅲ(1/3、1/4)

みを持っている。口縁端部を外屈させ、上方へ短くつまみ上げる。内外面に刷毛目調整を施しており、外面にはススが付着している。口径32.0cm、器高11.0cm。814は813よりも更に浅めの器形をなし、平底で体部は丸みを持ち、口縁は緩く屈曲して短く外反する。全面に刷毛目調整を施し、内外面の上半部はナデ調整を加えて、刷毛目を消している。内面の刷毛目はやや目が粗い。外面にはススが付着する。口径40.0cm、器高5.6cm。

815は軒丸瓦である。瓦当内区には「櫛田宮」の文字銘を入れ、周囲に2条の圏線と珠文を配する。瓦当径は14.0cm。同様の瓦は博多遺跡群第70次調査（「博多41」に報告済）でも出土しているが、これに比べると815は文字の位置が少し外区寄りにある。816は鬼瓦。中央に丸瓦瓦当文様の連珠文、外よりに平瓦瓦当文様の唐草文の一部が残る。

817～825は青磁である。817は龍泉窯系青磁の蓋である。上面に片切り彫りで花弁文を施す。内面は露胎で、口径6.6cm、器高1.9cm。818は黄釉椀で、底部は円盤状につくり外縁を面取りする。胎土は灰色を呈し、きめが細かく硬質。釉は暗黄褐色の不透明釉で、外面は露胎。表面に細かい褐班が浮く。見込みに6ヵ所の熔着痕があり、底部には3ヵ所に目跡が残る。底径5.5cm。819は青磁で、内面に櫛描きでスリ目を施しており、すり鉢か。胎土は淡黄褐色を呈し精良で、釉は黄味の強いオリーブ色の透明釉で、かなりガラス質である。口縁部のみに施釉している。口径15.6cm、器高7.6cm。820は龍泉窯系青磁椀である。見込みには亀をデザインした文様をスタンプしている。釉は畳付までかかり、高台内にはハマが付着したままである。821は龍泉窯系青磁の椀Ⅴ類で、外面に退化した雷文と蓮弁文を陰刻し、見込みには草花文をスタンプする。釉は高台の中途までかかる。口径14.4cm、器高7.0cm。822は龍泉窯系青磁の大皿である。体部は下部でやや腰折れ気味に屈曲し、口縁は外反しながら大きく外に開く。口縁端部は肥厚する。見込みにねじり花文、体部内面にはヘラ彫りによる鱗状文を施す。外面はヘラ彫りによる文様を対に施す。高台下端まで施釉し、外縁を掻き取る。畳付から外底にかけては露胎である。口径19.6cm、器高3.7cm。823は青磁の菊花皿で、型づくりである。体部が花弁状を呈し、口唇部に刻み目を入れて輪花とする。全面に施釉しており、畳付は釉を剝ぎ取る。口径12.5cm、器高3.0cm。景徳鎮窯の16世紀代の製品と見られる。824、825は青磁の香炉である。824は体部下端の3ヵ所に脚を付ける。釉はオリーブ色のガラス質透明釉で、全面に施釉する。口径9.5cm、器高4.4cm。825は平底をなし、底部脇に小さな脚を3ヵ所付けるが、接地しておらず、装飾的である。釉は淡青緑色の透明釉で、内面と外底は露胎である。

826～831は白磁である。826は椀Ⅴ類で、同類のものと比べると小ぶりである。口径12.0cm、器高5.6cm。827は皿で、高台は低く厚みがあり、雑に削り出している。胎土はやや軟質で、乳白色の不透明釉をかけており、かなり光沢がある。畳付から高台内は露胎で、全体に貫入がある。828、829は腰折れの皿である。いずれも胎土はきめが細かいが、やや粉っぽく、釉は乳白色の不透明釉である。畳付から高台内は露胎とし、828は見込みを輪状に釉剝ぎする。ともに口径11.0cm、器高3.0cm。830は平皿のⅡ類で、同類のものに比べるとやや大型である。外面下半から底部は露胎で、釉下に化粧土を施しているようである。口径13.0cm、器高3.8cm。831は合子の身である。内面には小さな坏を3個体配するものと見られる。高台は低く削り出している。胎土は淡灰白色を呈し、釉は空色がかったガラス質透明釉で、受け部と外底部は露胎である。口径11.7cm、器高3.3cm。

832～834は青白磁である。832は椀で、内面に片切り彫りと櫛描きで精緻な文様を施す。全面施釉の後、外底の中央を円く釉剝ぎしており、ハマの痕が残る。833は合子蓋で、型作りによっており、外面に印花文を施す。口唇部から内面の中途までは露胎とする。口径10.6cm、器高2.6cm。834は小形の椀で、高台は細身で高い。内外面に毛彫りにより精緻な文様を描く。高台の外側の数カ所にはツメ

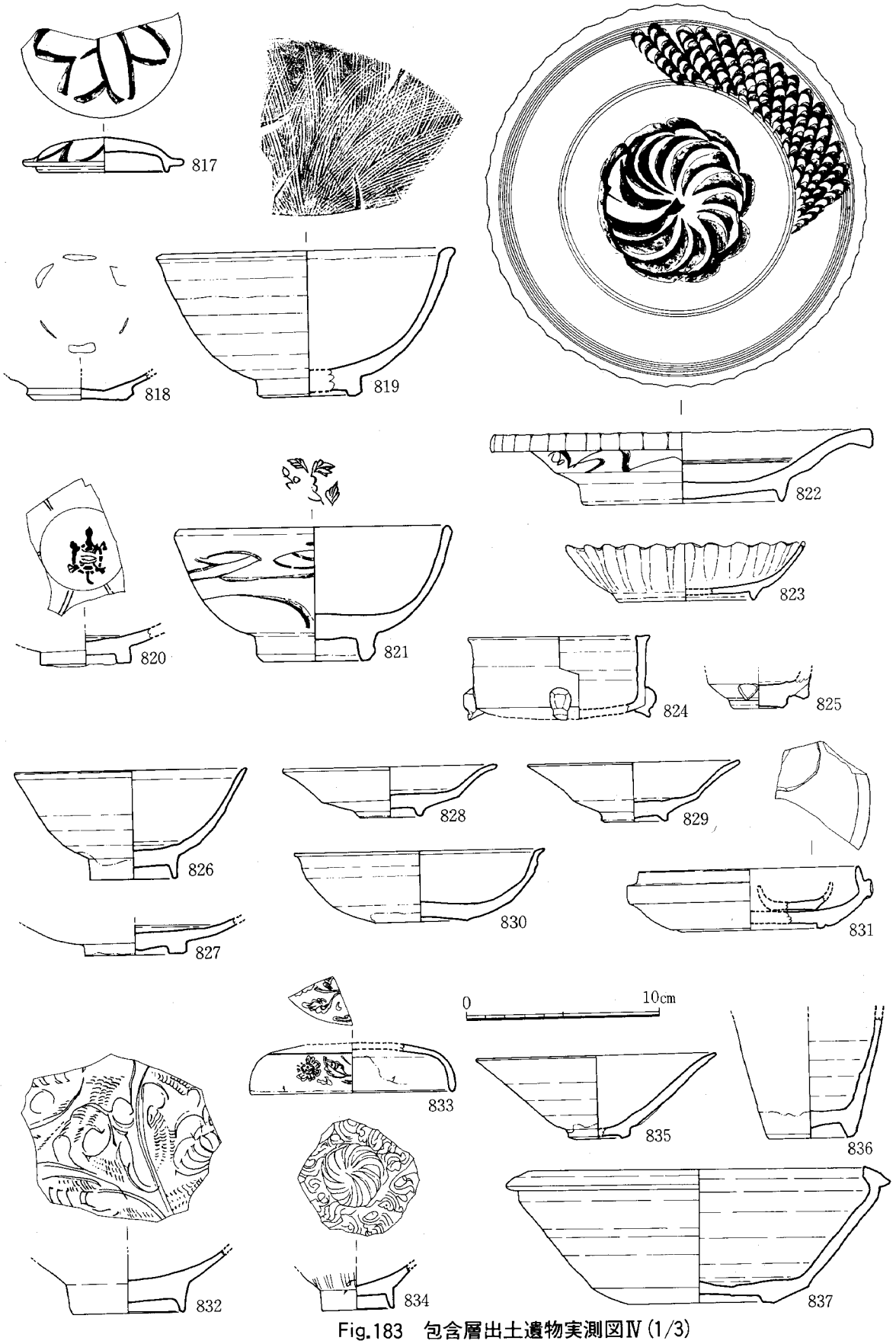


Fig.183　包含層出土遺物実測図Ⅳ (1/3)

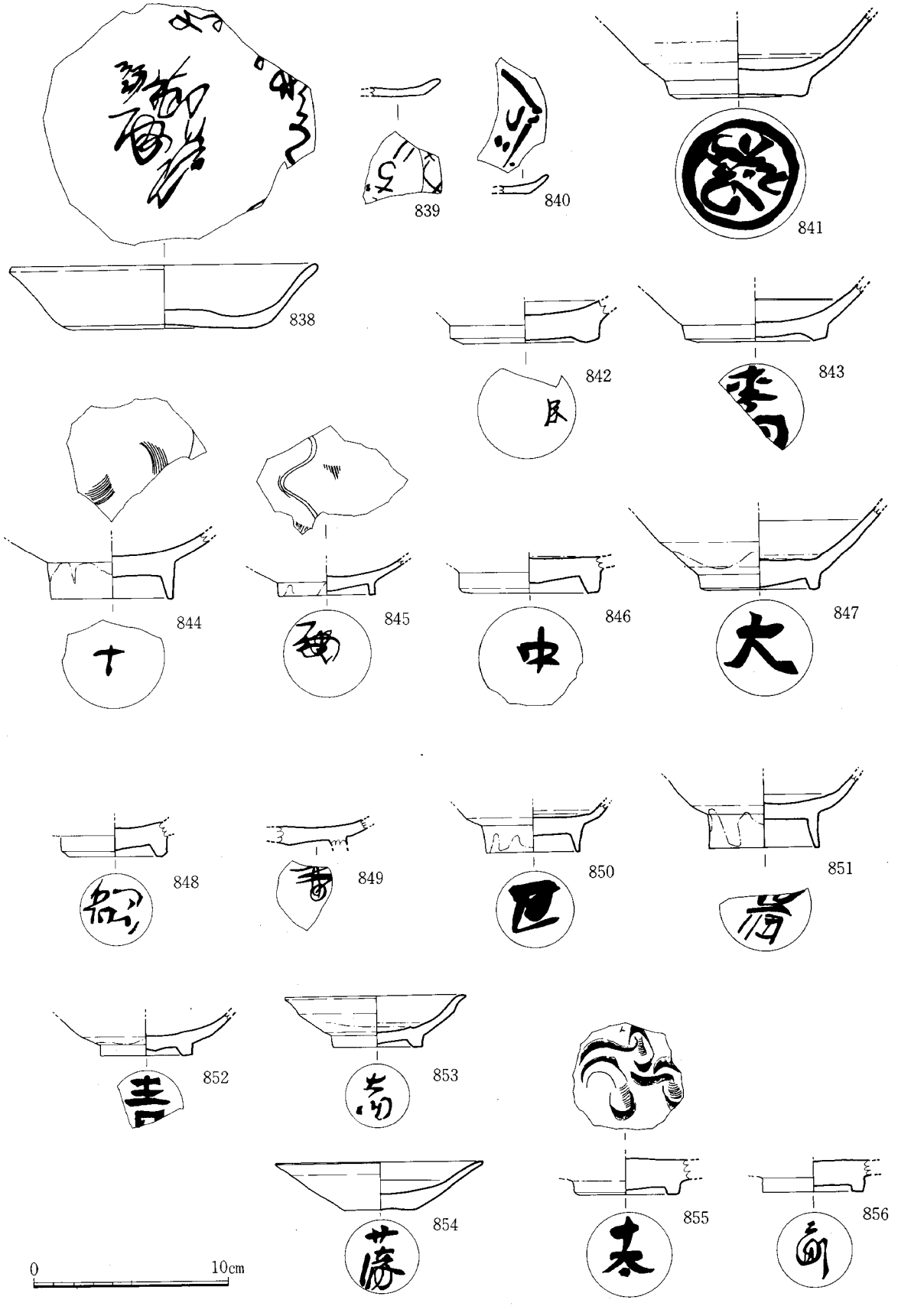


Fig.184　包含層出土遺物実測図Ⅴ(1/3)

状のキズがあり、施釉時に挟んだ痕跡であろうか。

835は黒釉の椀である。底部径が小さく、体部は大きく開き、やや端反りする。胎土は黒灰色を呈し、釉は黒色の不透明釉である。禾目天目で、口径12.6cm、器高4.4cmを測る。836は中国陶器B群の小瓶である。837は中国陶器B群の平鉢で、全面に施釉し、底部外縁を剝ぎ取る。口径17.4cm、器高7.0cmである。

(4)その他　Fig.184～187　PL.39、40

838～856は墨書土器で、838～840は土師器、841～854は白磁、855・856は青磁で、白磁、青磁の墨書は全て高台内に記されている。838、839の墨書は仮名文字か。840は絵画の可能性もある。841は丸の中に文字または絵が描かれるが、この形態の墨書は博多遺跡群では珍しい。843は「李綱」、851、853は「□綱」でいずれも綱首銘の墨書である。845は花押か。844は「十」、846は「中」、847は「大」でいずれも漢字一文字である。以上に図示した以外にも、約20点の墨書陶磁器が出土している。

857～867は石製品である。857、858は滑石を用いたスタンプ形の製品である。857は方形板につまみを付けた形につくり、腹面には花唐草文風の文様を陽刻し、つまみには横から穿孔している。858も同様の形状をなすが、陽刻はなく、本体は楕円形の円盤状を呈する。859は滑石製石鍋片を再加工した製品で、楕円形の板に鈕を2つ付け、板にも2ヵ所穿孔している。860、862も滑石製石鍋片に手を加えたもので、方形の板状に形を整え、1～2カ所に穿孔したものである。861は滑石製の有溝石錘である。側面に溝を回し、正面にも細い切れ目を入れている。長6.6cm、厚2.4cm、重70g。863は滑石製の権で、上端の鈕は欠けている。重量は約60gである。864、865は滑石製の模造品で、865には4ヵ所に突起を付けており、石鍋を模したものか。866は石製丸輌である。濃緑色の石材を用いている。下面は研がれておらず、穿孔がある。867は石製硯である。額は幅狭で、陸部に墨痕が残る。裏面は削った痕がそのまま残る。

868は骨製のヘラである。頭頂部の一孔を中心に、放射状に5本の線刻を入れる。

869は青銅鏡の小片である。和鏡で、縁は直角式の中縁で、背面の文様は不鮮明である。面径は推定10.0cmである。

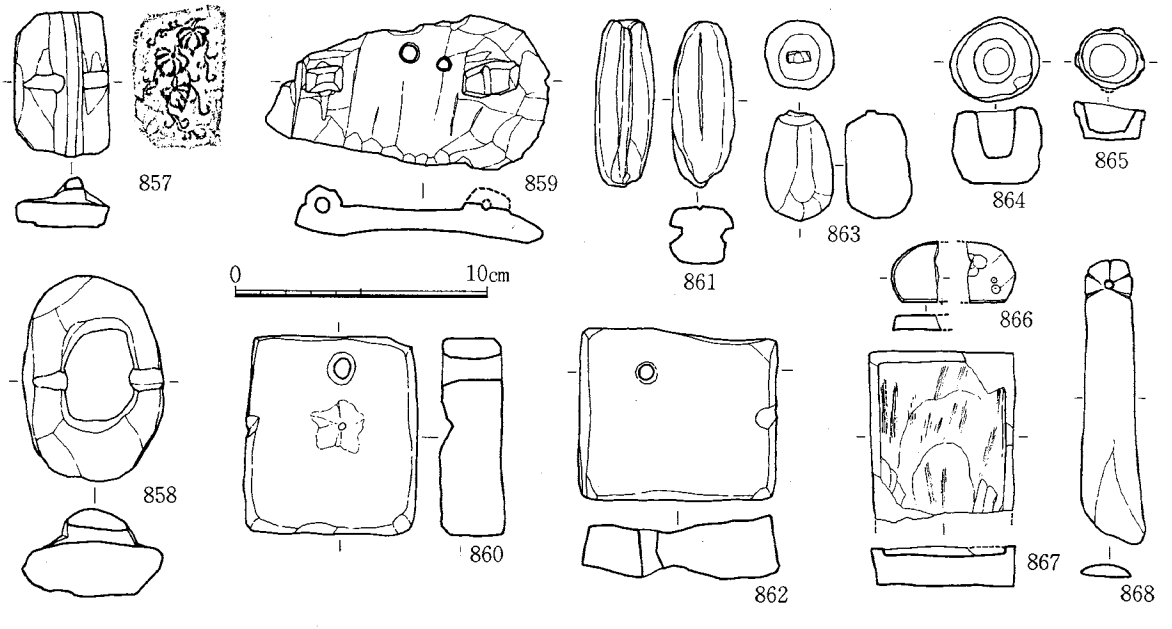


Fig.185　包含層出土遺物実測図Ⅵ(1/3)

870～877は鋳造に関わる遺物である。870、871は坩堝で、内面から一部口縁にかけて厚く銅が融着している。872は炉壁の一部であろう。径約2.0cmの孔を空け、胎土には多量のスサを含み、二次的な加熱を受け変色している。873～875はフイゴの羽口である。先細りし、タール状に融解した銅が付着している。876、877は円筒形を呈する土製品である。径3.7cm、長さ4.8cmで、胎土中には多量の砂粒とスサを含み、二次加熱を受けている。他の遺構からも同様のものが数点出土しており、鋳造に関わる遺物と考えられる。

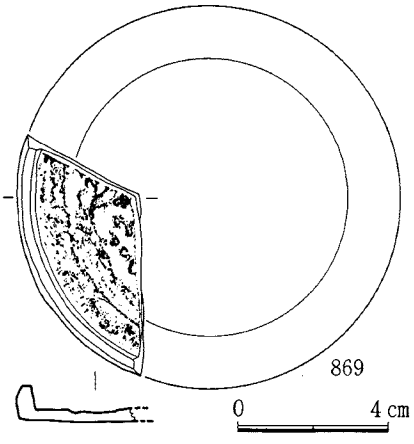


Fig.186　包含層出土遺物実測図Ⅶ(1/2、1/3)

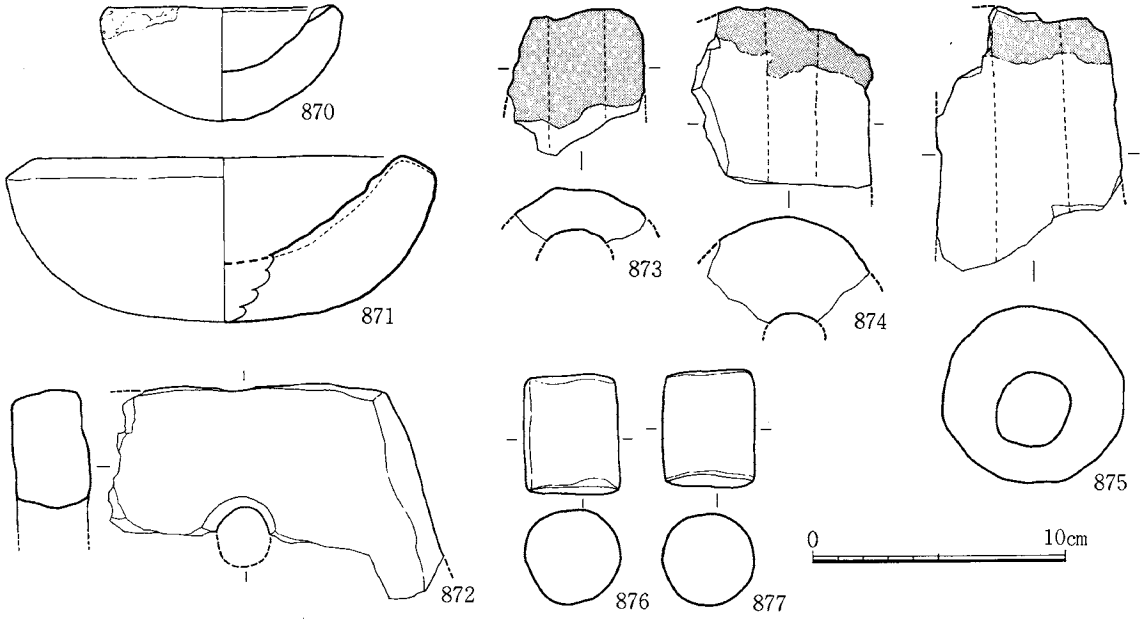


Fig.187　包含層出土遺物実測図Ⅷ(1/3)

(5)柱穴出土遺物　Fig.188　PL.40

878、879は土師器坏で、底部糸切りである。ともに内面に梵字と見られる墨書があり、878は更に中央に「天地」と書かれている。878は口径11.3cm、器高2.3cm、879は口径11.2cm、器高3.0cmである。880は土師器小皿で、内面から口にかけて油煙が付着しており、灯明皿である。口径6.2cm、器高2.0cmの小形品である。881は内外面に炭素を吸着させた黒色土器の小壺である。頸部は細くしまり、体部は偏平な球形を呈し寸詰まりである。外面に横方向の細かく密なヘラ磨きを施した後、劃線で体部を4区画に分け、瓜割り状にする。焼成後に肩部に一孔を穿つ。口径3.3cm、器高5.2cmと小さく、水滴であろう。

882は白磁の小坏である。粉っぽい胎土に、やや青黄色がかった透明釉を施す。883は白磁皿で、低く高台を削り出す。釉下には化粧土をかける。884は高麗青磁か。胎土は黒灰色を呈し、細かい白色砂粒を含む。釉は暗灰青色の半透明釉で、大きな貫入が認められる。中国広東省の製品か。

885、886は滑石製品である。885はスタンプ形を呈し、つまみに一孔と、貫通しない孔2つがある。

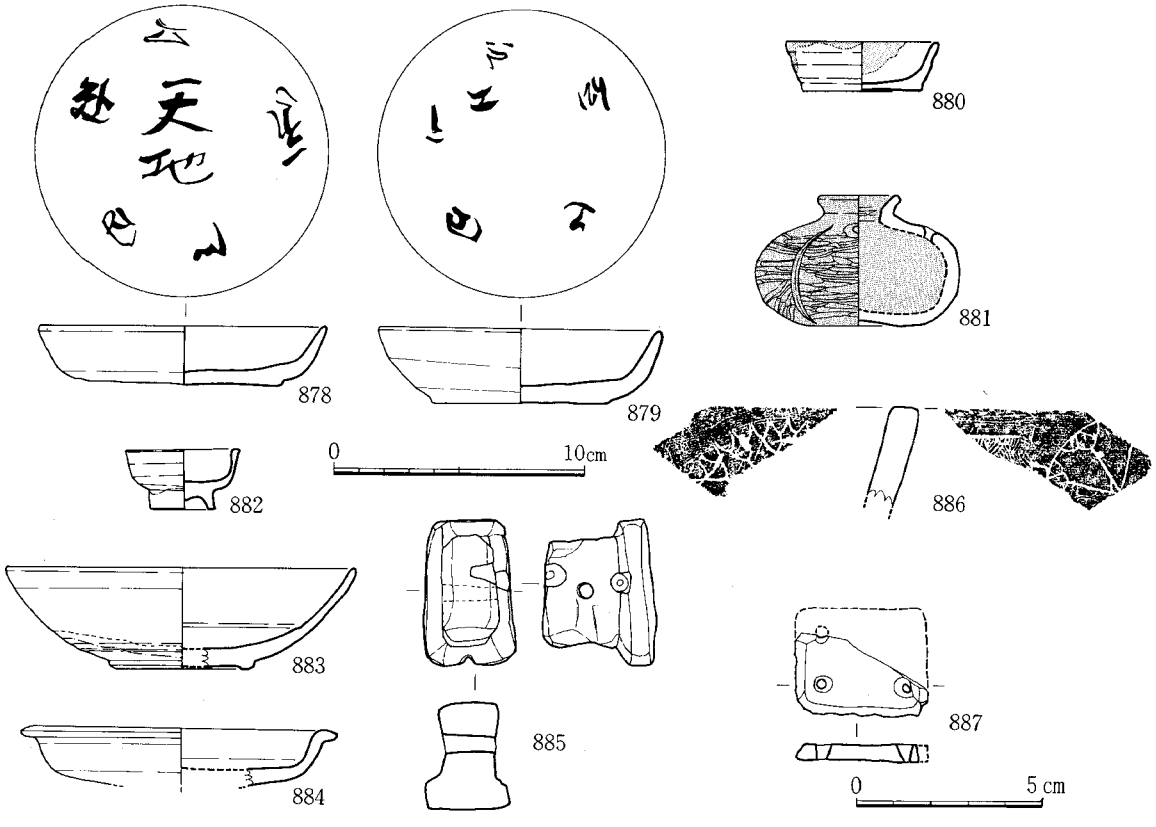


Fig.188　柱穴出土遺物実測図(1/2、1/3)

886は両面に細い線刻で幾何学的な文様を施すが、これがもとの容器の文様なのか、再利用品に加えた文様なのか不明である。

887はガラス製の帯飾りと見られ、四隅に穿孔がある。西2面のピットから出土しており、古い時代のものではないと考えられる。

(6)玉類　Fig.189

888～895は各遺構および包含層から出土した玉類を集めたものである。

895のみ滑石製の臼玉で、他は全てガラス製品である。894は丸玉、他は小玉である。891は2個が分割されないまま残っている。

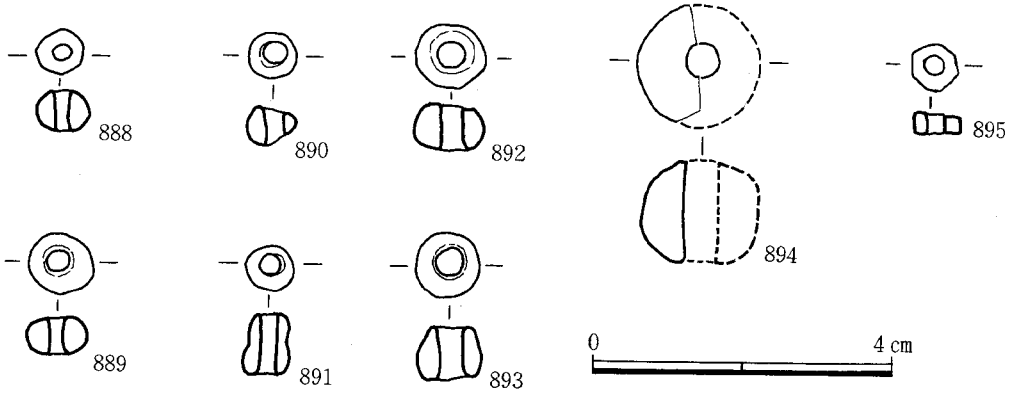


Fig.189　玉類実測図(1/1)

(7)銅銭

銅銭は各遺構、包含層から365枚出土した。うち銭銘の判読できたものは264枚である。量的には

Tab. 9 遺構別銅銭一覧表Ⅰ

面	遺構番号	銭貨名	枚数
1面	SK-12	皇宋通寶	1
	SK-21	皇宋通寶	1
	SE-31上層	解読不能	1
	SE-35 石抜穴	永楽通寶	1
	SE-35	寛永通寶	1
3面	SE-35 石組内	明道元寶	1
2面	SK-39	乾元重寶	1
	SD-40	太平通寶	1
		□□□寶	1
		解読不能	1
	SD-40下層	解読不能	2
	SD-41掘方	解読不能	1
	SK-48	景德元寶	1
		祥符□□	1
		解読不能	2
	SK-50	解読不能	1
	SD-52	□□通寶	1
	SX-60上面	解読不能	1
3面	SK-67	解読不能	1
	SK-80	熙寧元寶	1
2層	SE-100西	嘉泰通寶	1
2層3面	SE-100	明道元寶	1
		元豊通寶	1
3面	SE-100下層	至□□寶	1
	SK-108	解読不能	1
2面	SK-217	開元通寶	1
		咸平元寶	1
		景德元寶	1
		祥符通寶	12
		祥符元寶	22
		祥符□寶	1
		天禧通寶	7
		天聖元寶	1
		皇宋通寶	1
		治平元寶	1
		元豊通寶	5
		元祐通寶	1
		大観通寶	1
		正隆元寶	1
		至大通寶	1
		洪武通寶	89
		永楽通寶	1
		弘治通寶	1

面	遺構番号	銭貨名	枚数
2面	SK-217	解読不能	11
1面	SK-219	永楽通寶	1
2面	SK-239	皇宋通寶	1
	SK-248	咸平元寶	1
		祥符元寶	1
		天□□寶	1
	SK-248	解読不能	1
	SK-249	元豊通寶	1
		洪武通寶	1
	SK-261	解読不能	1
	SK-264	解読不能	1
	SK-265	元祐通寶	1
		解読不能	5
	SK-267	咸平元寶	1
	SK-269	皇宋通寶	1
	SE-270	一　　銭	1
	SE-280	開元通寶	1
		皇宋通寶	1
		大観通寶	1
3面	SK-283	乾元重寶	1
		治平元寶	1
	SK-312	祥符通寶	4
		景祐元寶	1
		天豊通寶	1
	SK-320	解読不能	7
1面	pit-0008	解読不能	1
	pit-0019	解読不能	1
	pit-0048	紹聖元寶	1
	pit-0049	紹聖元寶	1
	pit-0117	解読不能	1
2面	pit-0143	嘉祐通寶	1
		熙寧元寶	1
	pit-0152	元豊通寶	1
	pit-0163	解読不能	1
	pit-0202	祥符通寶	1
		熙寧元寶	2
	pit-0203	元豊通寶	1
	pit-0393	開元通寶	1
3面	pit-0419	紹聖元寶	1
	pit-1019	解読不能	1
2面	pit-1030	景定元寶	1
	pit-1043	解読不能	1
	pit-1115	□□□寶	1

面	遺構番号	銭貨名	枚数
2面	pit-1146	洪武通寶(裏に銭)	1
	pit-1170	政和通寶	1
	pit-1181	開元通寶	1
		□和通寶	1
	pit-1184	元豊通寶	1
3面	pit-1552	□□元寶	2
		□□□寶	1
4面	pit-2197	元豊通寶	1
	pit-2304	和同□□	1
東1面	包含層	太平通寶	1
		景德元寶	1
		祥符□□	1
		景祐元寶	1
		皇宋通寶	1
		熙寧元寶	1
		聖宋元寶	1
		淳熙元寶	1
		端平元寶	1
		□定元寶	1
		□宋□寶	1
		□宋元寶	1
		解読不能	8
	イチョウ抜穴	開元通寶	1
		景德元寶	2
		天聖元寶	1
		元豊通寶	1
		元祐通寶	1
		解読不能	1
1面	サブトレンチ②	解読不能	1
1~2面	B-1包含層	皇宋通寶	1
		治平元寶	1
		解読不能	1
	C-1包含層	天禧通寶	1
		熙寧元寶	1
		元符通寶	1
		政和通寶	1
		慶元通寶	1
		□宋□□	1
		解読不能	4
	C-2包含層	熙寧元寶	1
	D-2包含層	元符通寶	1
		大観通寶	1
		□□元寶	1

「洪武通寶」が多い。年代的には、最も古いものは「開元通寶」、最も新しいものは「寛永通寶」である。「端平通寶」は博多遺跡群では初めての出土である。また、和同開珎が出土した。

Tab. 10　遺構別銅銭一覧表Ⅱ

面	遺構番号	銭貨名	枚数
1~2面	D-2包含層	解読不能	6
	D-3包含層	元祐通寶	1
	D-3包含層	解読不能	1
	E-2包含層	解読不能	1
	F-2包含層	□□通寶	1
東1~2面	包含層(北東)	紹聖元寶	1
		解読不能	1
1~2面	3·4包含層	熙寧重寶	1
2面	B-1包含層	皇宋通寶	1
		解読不能	1
	C-1包含層	至大通寶	1
		解読不能	1
	D-2包含層	淳化元寶	1
		解読不能	1
	E-2包含層	咸平元寶	1
	E-3包含層	開禧通寶	1
西2面	包含層	淳化元寶	1
		天聖元寶	1
		皇宋通寶	1
		熙寧元寶	1
		永楽通寶	1
		解読不能	1
2~3面	B-1包含層	解読不能	1

面	遺構番号	銭貨名	枚数
2~3面	B-4包含層	淳化元寶	1
	C-4包含層	太平通寶	1
	C-5包含層	嘉祐通寶	1
		宣和通寶	1
		解読不能	1
	D-1包含層	元豊通寶	1
		紹聖元寶	1
		□宋通寶	2
		解読不能	1
	D-2包含層	天聖元寶	1
		熙寧元寶	1
	D-3包含層	解読不能	1
	D-6包含層	元豊通寶	1
	D-7包含層	嘉定通寶	1
	E-2包含層	皇宋通寶	1
		元豊通寶	1
		元□通寶	1
		解読不能	1
	E-4包含層	解読不能	2
	E-5包含層	開元通寶	1
		□□元寶	1
		解読不能	1
	F-2包含層	開元通寶	1

面	遺構番号	銭貨名	枚数
2~3面	F-2包含層	天聖元寶	1
		元豊通寶	1
		景□元寶	1
		解読不能	1
	F-3包含層	熙寧元寶	1
		解読不能	1
	F-4包含層	祥符通寶	1
		解読不能	3
	F-5包含層	解読不能	1
	F-6包含層	政和通寶	1
3面	D-4包含層	皇宋通寶	1
		熙寧元寶	1
		元豊通寶	1
	包含層	□□元□	1
		解読不能	1
3~4面	C-4包含層	開元通寶	1
		太平通寶	1
	F-5包含層	開元通寶	1
東壁面清掃時		政和通寶	1

Tab. 11　出土銅銭一覧表

合計 365枚

銭貨名	初鋳年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	9
乾元重寶	758	唐	2
太平通寶	976	宋	4
淳化元寶	990	宋	3
咸平元寶	998	宋	4
景德元寶	1004	宋	5
祥符元寶	1008	宋	22
祥符通寶	1008	宋	19
祥符□□	1008	宋	3
天禧通寶	1017	宋	8
天聖元寶	1023	宋	5

銭貨名	初鋳年	時代	枚数
明道元寶	1032	宋	3
景祐元寶	1034	宋	2
皇宋通寶	1037	宋	12
嘉祐通寶	1056	宋	2
治平元寶	1064	宋	3
熙寧元寶	1068	宋	10
熙寧重寶	1068	宋	1
元豊通寶	1078	宋	19
元祐通寶	1086	宋	4
紹聖元寶	1094	宋	4
元符通寶	1098	宋	2

銭貨名	初鋳年	時代	枚数
聖宋元寶	1101	宋	1
大観通寶	1107	宋	3
政和通寶	1111	宋	4
宣和通寶	1119	宋	1
正隆元寶	1156	金	1
淳熙元寶	1190	南宋	1
慶元通寶	1195	南宋	1
嘉泰通寶	1201	南宋	1
開禧通寶	1205	南宋	1
嘉定通寶	1208	南宋	1
端平通寶	1234	南宋	1

銭貨名	初鋳年	時代	枚数
景定元寶	1260	南宋	1
至大通寶	1310	元	2
洪武通寶	1368	明	91
永楽通寶	1408	明	4
弘治通寶	1488	明	1
和同□□	708	日本	1
寛永通寶	1636	日本	1
一　銭	明治10年	日本	1
解読不能			101

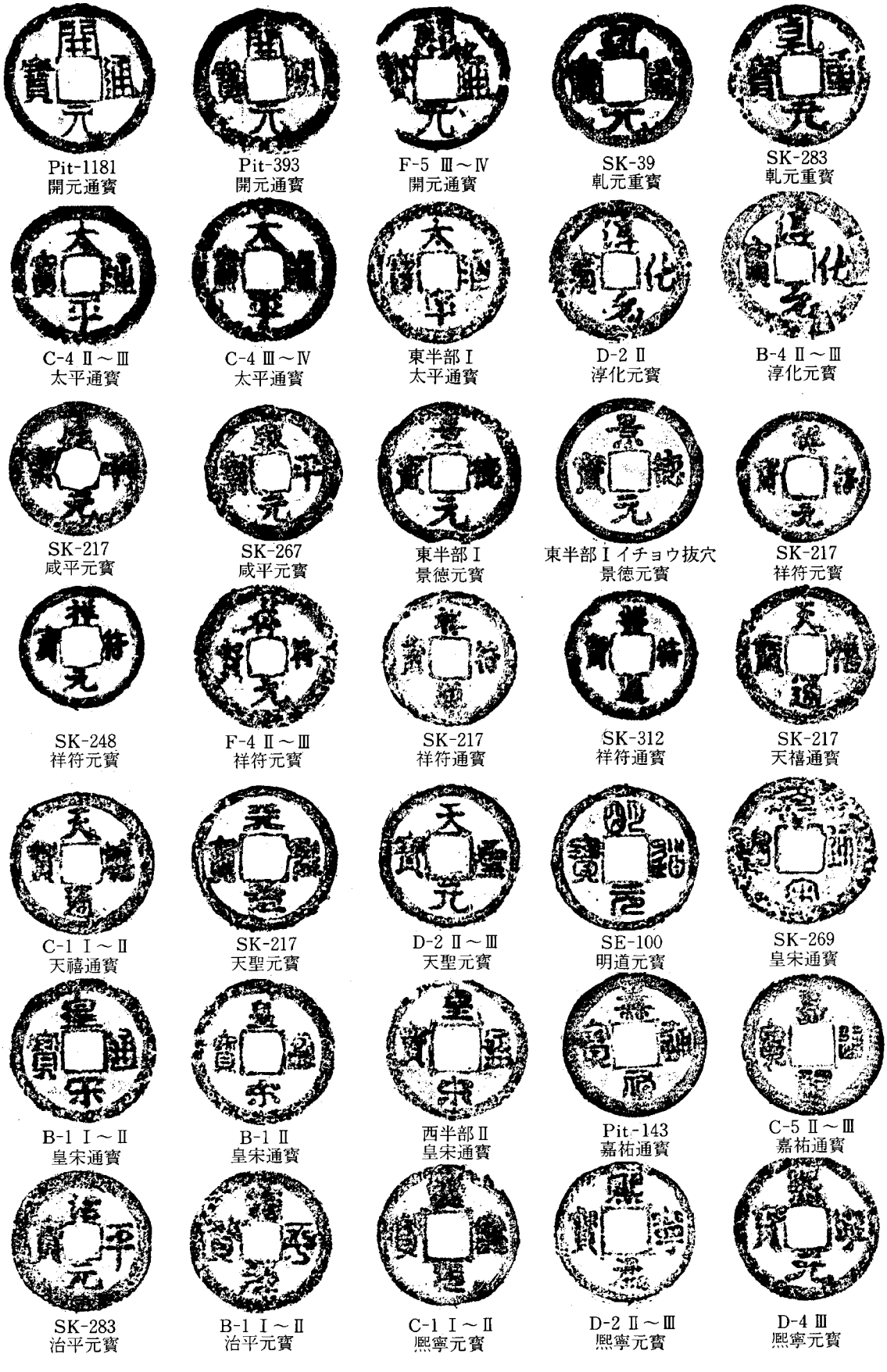


Fig. 190　出土銅銭拓本Ⅰ（1/1）

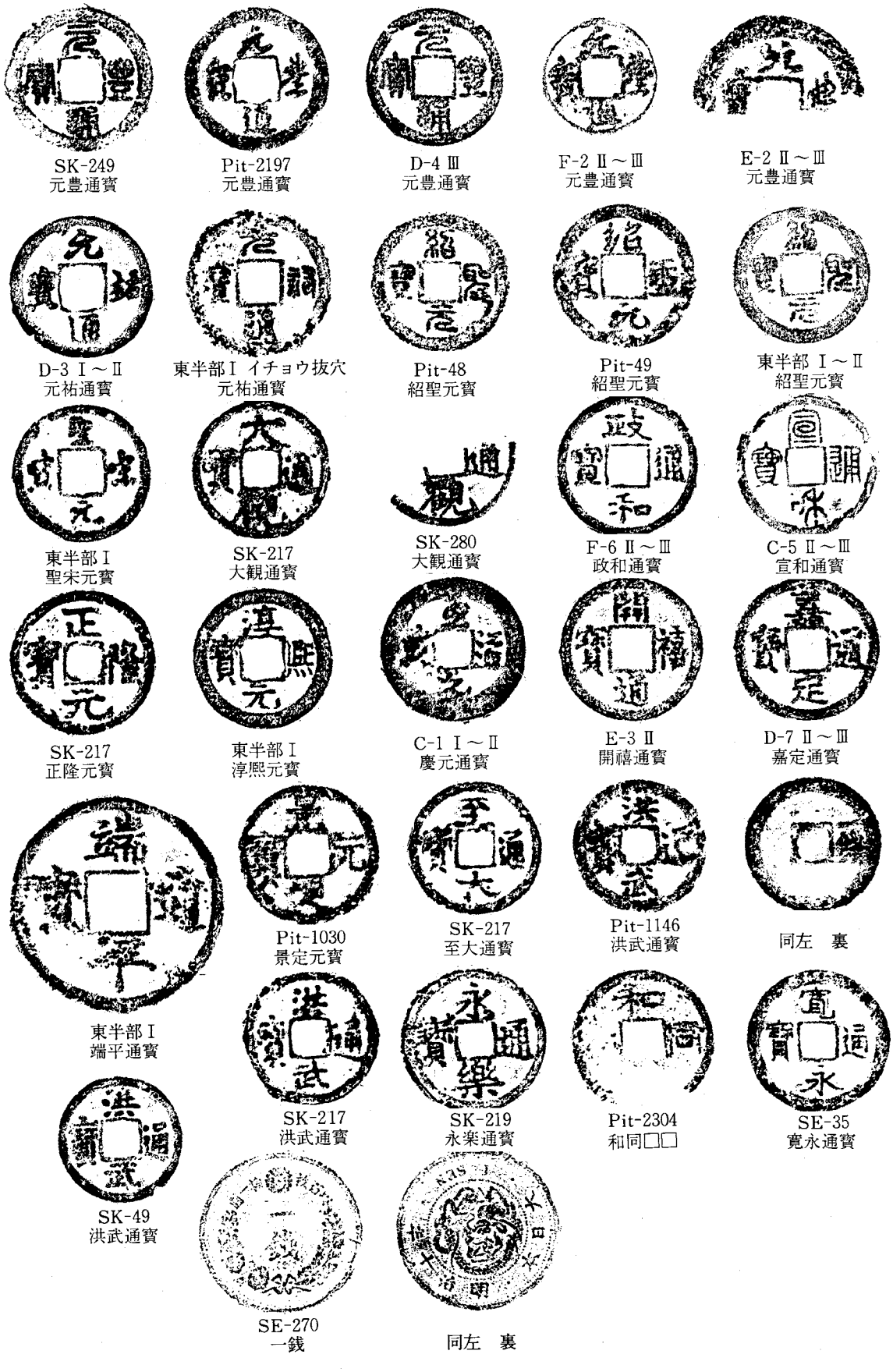


Fig. 191 出土銅銭拓本Ⅱ（1/1）

Ⅳ. おわりに

各時代の遺構について

最も古い遺物は弥生時代中期の土器で、基盤土である河口砂の中から出土したが、この時期の遺構は検出していない。弥生時代後期前半の遺構は、竪穴住居跡４軒と小児甕棺墓３基を検出したが、検出面は湧水レベルと0.8ｍの比高差しかなく、また風成砂の下面に検出しており、砂丘として陸地化した直後に形成された遺構と見られ、生活適地に位置するとは言いがたい。当該期の遺構については今後の周辺調査による追確認を待って検討を加える必要がある。

古墳時代前期の布留式土器は風成砂中から出土した。遺物が集中して出土する箇所もあったが明確な遺構は検出できなかった。

古代の遺構は竪穴住居跡の柱穴を４軒分、溝１、井戸１、土坑１をそれぞれ検出した。このうち井戸を除く遺構は８世紀後半～９世紀初頭のものと見られ、集落を画する小規模の溝のなかに竪穴住居跡が営まれた状況を想定しうる。土坑は竪穴住居跡に伴うものと見られ、井戸はこれらよりも時期がやや下る。古代の遺物としては越州窯系青磁が一定量の出土を見たほか、石製丸鞆、銅銭「和同開珎」などが包含層・柱穴より出土している。

中世の遺構は多数を検出した。このうち時期の特定できる遺構について、その下限の時期を以て時代毎に分けてみると、

12世紀　井戸６、土坑20

13世紀　井戸４、土坑３、木棺墓１

14世紀　溝（道路）２、建物基礎３、井戸３、土坑18、瓦溜り１＋α、鋳造関連遺構２

15世紀　溝（道路）１（14世紀より継続？）、土坑１

16世紀　土坑２

となり、12～14世紀に遺構の数的なピークのあることが分かる。また、柱穴を多数検出しており、建物としてまとめることはできなかったものの、上記した各時期の遺構のボリュームに見合う掘立柱建物群の存在が想定される。12世紀代の遺構には、一部11世紀後半に遡る遺物を持つものもあり、白磁等の輸入陶磁器がある程度まとまって出土している。13世紀に入ると、井戸の数は見劣りしないものの、土坑数が激減している。また、木棺墓１基が造営されているが、これは墓地を構成しない屋敷内墓的なものと見られ、この地があまり人の足が入らない場所となっていたことを想定させる。14世紀になると遺構数は再び増大し、道路や瓦葺きの建物の存在等、町（もしくは神社の社領）として整備された状況を伺わせる遺構が見られるようになる。小規模の道路の切り合いと考えたSD-40は磁北から15°西に偏し、現在の町割り（グリッド軸の方向）とは主軸をやや異にしており、瓦葺きの建物と考えられる石組基礎建物SB-45、240などがこれと方位をほぼ等しくしている。これらは14～15世紀にかけてのこの周辺の町割りの方向を示すものと考えられる。また歓喜天像や銅鍋の製作に関わる鋳造関連遺構は、鋳物師の活発な活動を示すものと言えよう。15世紀以降になると、小規模の道路遺構は継続して残っていると考えられるものの、遺構数は激減している。目立った遺物としては、SK-217より出土した159枚の備蓄銭等がある。

近世の遺構としては、石組井戸１、土坑９、瓦積みの地下室状遺構等を検出した。

櫛田宮と関連する遺物には瓦当２点がある。１点は第70次調査でも出土した「櫛田宮」銘を入れた

軒丸瓦で、包含層より出土しており、中世のものと見られるが詳細な時期は不明である。他の１点はSE-35より出土した櫛田宮の紋である「花菱紋」を施した軒丸瓦で、17世紀以前の遺物と見られる。櫛田宮の成立時期は未だに不確定であるが、少くとも17世紀には当地は既に社領に含まれていたものと見られ、それ以前の時期の遺構にも櫛田宮に関連するものが含まれていると考えられる。

歓喜天像鋳型について

鋳型は14世紀前半代の土坑SK-48から出土した。長さ10.5cm、幅5.6cm、厚み4.5cmで、これから鋳出される像の大きさは、高さ9.0cm、幅4.2cmである。元型となった像は木像と見られ、鋳型内に木目が残っていた。また、土坑からは鋳型とともに、取瓶、原料にしたと見られる銅銭、銅滓、仕上げの砥石などが一括出土しており、この場所で鋳造されたことが明らかである。

歓喜天は密教の秘仏で、正式には「大聖歓喜双身毘那夜迦天王」略して「聖天」とも別称し、『密教辞典』によれば「インドでも早期から信仰された。もとは悪神であったが、行動自在で智慧の神となって、吉凶禍福を祈願され、双身像に就ては種々の説話を生じたし、わが国では夫婦相愛、子女の出産などに関連した神として信仰を集めている。生駒の聖天（宝山寺）を始め各地に聖天を祭る。」像の形は単身、双身、立像、座像などがあり、双身の像は「像頭人身の夫婦和合して相抱いて正立するもの（中略）男天は赤色の袈裟、女天は頭に華鬘（天華冠）を着けて区別し、また、男天は鼻が長く曲り、女天は鼻短く目長く身体が肥っている。」今回出土した鋳型は、像を取り出す際にバラバラに破壊されて残りが悪いが、一方の像が冠を被っていることが確認でき、こちらが女天であろう。歓喜天像は本来、真言律で本尊供養等の裏行に用いられるもので、密教に深く関わる秘仏である。現存する像には江戸時代作のものが多く、より古い像には小型のものが多いようであるが、これらは秘仏として公開されていない。14世紀頃に、調査地点の周辺にあったと考えられる密教関連の寺院としては、櫛田神社の北側にあったとされる大乗寺がある。大乗寺は空海の開基（寺伝による）で、大正９年に市内大手門１丁目に移転したが昭和19年に空襲により焼失して現存しない。また江戸時代には、櫛田神社の社領内に東長密寺の末寺として神護寺がおかれ、明治維新の神仏分離令により廃寺となるまで存続したことが知られているが、江戸時代以前にも神護寺の前身となる何らかの神宮寺が存在していた可能性が考えられる。今回出土した歓喜天像鋳型はこれらの寺院内での修法に用いる像を作製する為のものと見られ、鋳造関連遺構が残された当調査地点がこれらの寺院に密接に関連する場所に含まれることを示している。

出土遺物について　PL.40

本文中に述べた出土遺物の他に、特筆すべきものとして、邢窯系白磁椀、長沙窯系黄釉壺、白磁鉄絵鉢（広東省西村窯？）、龍泉窯系篡木文角瓶（南宋）(900)、龍泉窯蕉段皿（元）(899)、磁州窯翡翠釉壺、藍釉椀、倣定柿釉椀、色絵人形（明？）(897)、ベトナム鉄絵（896）等が出土している。また、全体的に見て、古代から中世にかけての輸入陶磁器の逸品が多く、博多における当調査地点の性格を反映するものと思われる。

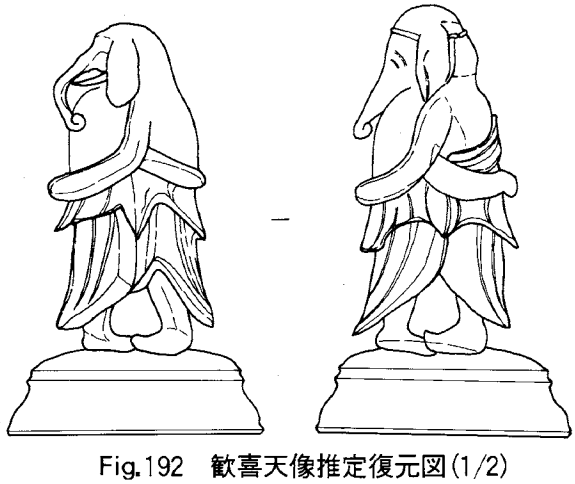


Fig.192　歓喜天像推定復元図(1/2)

V．博多遺跡群第80次発掘調査で出土した骨類について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

博多遺跡群第80次発掘調査では、中世（鎌倉時代～室町時代）の遺物包含層や遺構覆土より哺乳類や魚類の骨類が多数出土している。これらは当時の食物残滓などとみられるが、現在、発掘調査成果の整理中であり、詳細は不明である。

今回、福岡市教育委員会によって採取されたこれらの骨類35袋（No．1～35）について、当時の動物質食料等の利用実態を明らかにするために鑑定を行うことにした。鑑定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いし、その成果として署名原稿を以下に掲げた。

2．博多遺跡群第80次発掘調査出土の脊椎動物遺体

早稲田大学　金子浩昌

(1)出土した脊椎動物遺体種名表

腔腸動物門　Phylum COELENTERATA
- 花虫綱　Class Anthozoa
  - イシサンゴ目　Order Seleractinia
    - 属・種不明　Gen. et sp.　indet.

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
- 硬骨魚綱　Class Chondrichthyes
  - スズキ目　Order Perciformes
    - アジ科　Family Carangidae
      - ブリ　Seriola quinqueradiata

哺乳綱　Class Mammalia
- クジラ目　Order Cetacea
  - マイルカ科　Family Delphinidae
    - カマイルカ　Lagenorhynchus obliquidens
    - バンドウイルカ　Tursiops gilli
    - ゴンドウイルカ科　Family Globicephalidae
    - オキゴンドウ　Pseudorca crassidenns
- 食肉目　Order Canivora
  - イヌ科　Family Canidae
    - イヌ　Canis familiaris
- 奇蹄目　Perissodactyla
  - ウマ科　Family Equuidae
    - ウマ　Equus caballus
- 偶蹄目　Artiodactyla
  - シカ科　Cervidae
    - ニホンジカ　Cervus nippon
  - ウシ科　Bovidae

ウシ　Bos taurus

(2)動物遺体の概要

a．魚類

ブリ：前上顎骨は破片。椎体と同じ位の大きさの個体のものと思われる。尾椎体は両端を欠くものであるが、全長25.0㎜位になるもの。体長65㎝位。

b．哺乳類

イヌ：腰椎の椎体片１点があったのみである。

カマイルカ：ほぼ完存する環椎１点がある。

バンドウイルカ：腰椎体の椎体径63㎜。

オキゴンドウ：標本は打ち割られたような状態で出土したものである。完全な形に復元することはできないが、上顎骨の片側に８つ並ぶ大型の歯槽、歯高80㎜、径15～20㎜になる歯、頭蓋全長650㎜前後と推定され、これらの標本はオキゴンドウのものと考えられる。

分断された頭蓋片のなかに後頭顆３点があり、少なくとも３個体の頭蓋がここにあったことがわかる。上顎骨の破片も２個体分がある。歯はすべて脱落している。

下顎骨の保存されているのは１乃至２個体であって、歯槽内に歯根の一部が残されているのがみられた。

ウマ：一個体分のものの一部の骨格である。計測の可能な標本について次に結果を示す。

右肩甲骨頸部最小径49.0㎜

右上腕骨遠位骨端幅70.8㎜、同骨体最小径30.3㎜

右中手骨全長199.0㎜

右脛骨全長303.0㎜

日本在来馬のなかでもっとも小さいトカラ馬系統の大きさである。

ニホンジカ：角の破片２点があるのみである。保存の状態がよく似ており、もとは同じ標本ではないかと思われる。標本の一つ分岐部分の破片には鋸による切断跡がみられる。両側から切り込み海綿体の部分で折っている。

ウシ：臼歯１点と基節骨片１点があったのみである。ほとんど咬耗の見られない若い個体のもの。

(3)あとがき

この一括された骨群は鎌倉時代から室町時代に属するものと考えられている。このなかで確認された動物種は、魚類は僅かに一種ブリがあったのみで、標本も２点のみでその他はすべて獣骨であった。獣骨のうちウシが歯１点、ウマが一個体分の骨としては少ないがまとめて埋存していた。小型のウマであった。この時代としてはしばしばみられた大きさのウマである。そして個体数、骨の数共に多かったのがイルカ類で、オキゴンドウの頭蓋、椎骨が集積していたようである。頭蓋、椎骨には打ち割られた痕跡がみられ、この場所で解体と頭蓋の処理が行われたことを示していた。このような骨格の出土は神奈川県鎌倉市の中世遺跡においてもしばしばみるところであって、その目的、方法は同じであったと思われる。ただし、これらの骨類の出土状況に付いての知見が情報として今少し提供されていれば、骨格の復元と個体関係、解体の主目的などについて推測する可能性もあったのではないかと考えている。

表１　骨類同定結果

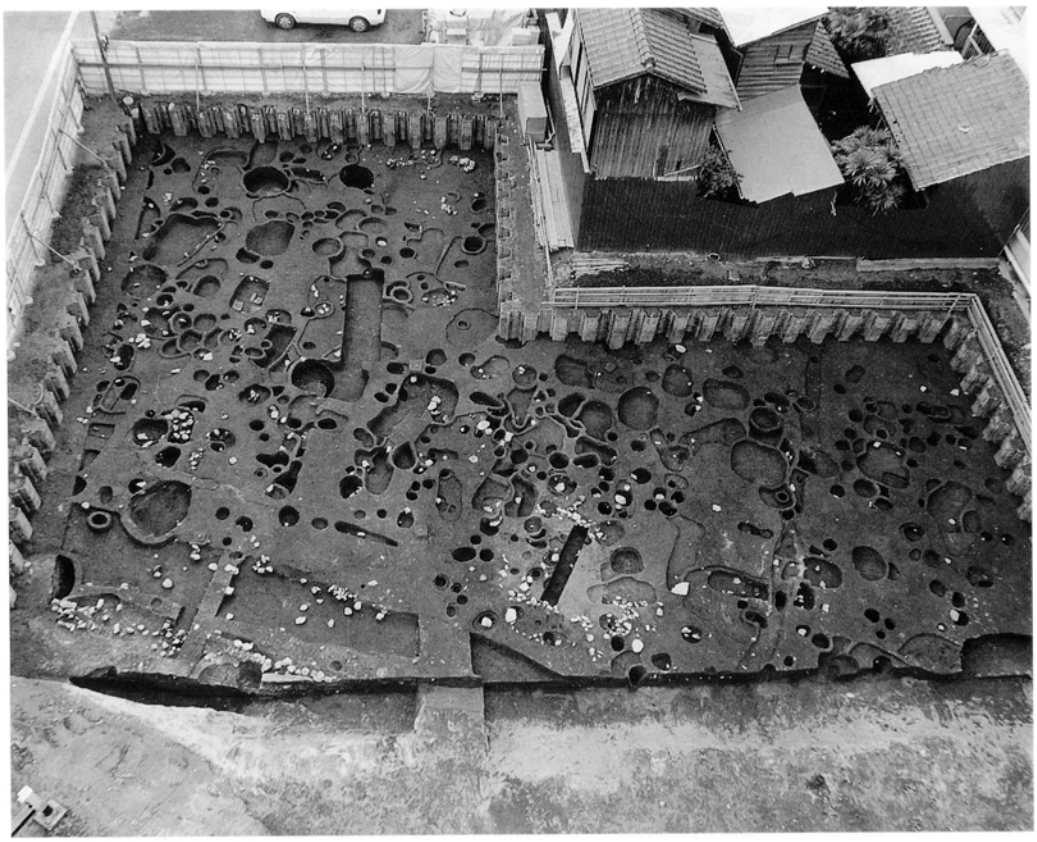
No.	出土遺構	備考	同定結果
1	2-3面包含層E-2g	1	海獣　骨片　水磨
2	2-3面包含層E-3g	中5～6	Max fr.1　他にfr.5
3	1面pit.-8	1	サンゴ類　破片
4	2-3面包含層E-3g	中～小50	ゴンドウ　下顎片1(No.34の歯と一連) Max fr.1 他にfr.5さらに小片多
5	2-3面包含層D-4g	小20	海獣　骨片　5＋α
6	2面SD-250	2	鹿角　分岐部切断　焼ける
7	4面pit.-819	1	ウシ　石　M3
8	2面SD-40	細5	ウマ　臼歯片
9	2-3面包含層E-2g	小片1	ゴンドウ　腰椎体
10	3面SE-300井筒内	5	バンドウイルカ　腰椎体　イルカ類　下顎片　ウシ　基節骨pro
11	2面SE-35掘方	小5	海獣　骨片　ゴンドウ　歯1
12	2-3面包含層E-3g	中10	L.Max.1（バンドウ位のもの）　他fr.6
13	3面SE-100井筒内	1	ウマ　R.下顎臼歯
14	4面pit.-789	1	ウマ　歯破片
15	1面SK-21	1	イルカ類　椎体
16	4面SK-355骨①	細片10？	骨片
17	4面SK-355骨②	小10	海獣　骨片
18	2面SD-40	小片1	陸獣（イヌ）　腰椎体片
19	2面SE-35上層	1	イルカ類　鼻骨
20	2面SD-40下層	小片1	海獣　骨片
21	1面SK-06	小片1	ウミガメ類　縁骨片
22	3面SE-35下層	3	イルカ類　肋骨片2　下顎骨片1
23	1面SK-05甕内	小片2	ブリ　前上顎骨R　尾椎骨
24	2面SK-38	小片1	焼鹿角　切痕あり
25	1面SK-12	小片1	海獣　骨片
26	3面SE-35	小片1	陸獣　骨片
27	2-3面包含層D-3g	大1　小1	イルカ類　環椎
28	2面pit.-1209	1	ゴンドウ　腰椎体（割）
29	3面pit.-1363	1	ウマ　上顎L　臼歯片
30	3面SK-275	小片1	陸獣　骨片　切痕
31	4面SE-168井筒内	多量中～大50	ウマ　肩甲R.頸部幅49.8,G.c.幅37,上腕R.Bd.71.0,SD.32.0, 橈L.BP69.0±,中手GL.200±,中央径29.8,SD29.6, 骨盤R.L,腸骨最小径40.5,大腿L.dis片,SD.34.0, 脛L.GL.,Bd／,SD37.0,中足.R.L,BP.41.0,Bd40.0 上顎歯R＜P2(P3)P4＞M1.M2,L＜(P2)＜P3,P4＞M1.M2 下顎歯R＜P2～4＞M1.M2.L＜P2～4＞M1.M2
32	2-3面包含層D-3g	多量大30	ゴンドウ　上顎骨R（歯槽8）　椎骨　後頭顆　頭蓋片　下顎骨 イヌ　上顎骨
33	2-3面包E-3g骨①北	バインダ付大30	ゴンドウ　腰椎　棘突起　上顎骨片　下顎関節顆　頭蓋片　後頭顆　破片
34	2-3面包E-3g骨②南	バラ大.中.小30	ゴンドウ　下顎骨R（歯8）（No.4と一連）
35	2面SD-40下層	1	ゴンドウ　腰椎

PLATES
(図　　版)

1．東１面北半部（南東から）

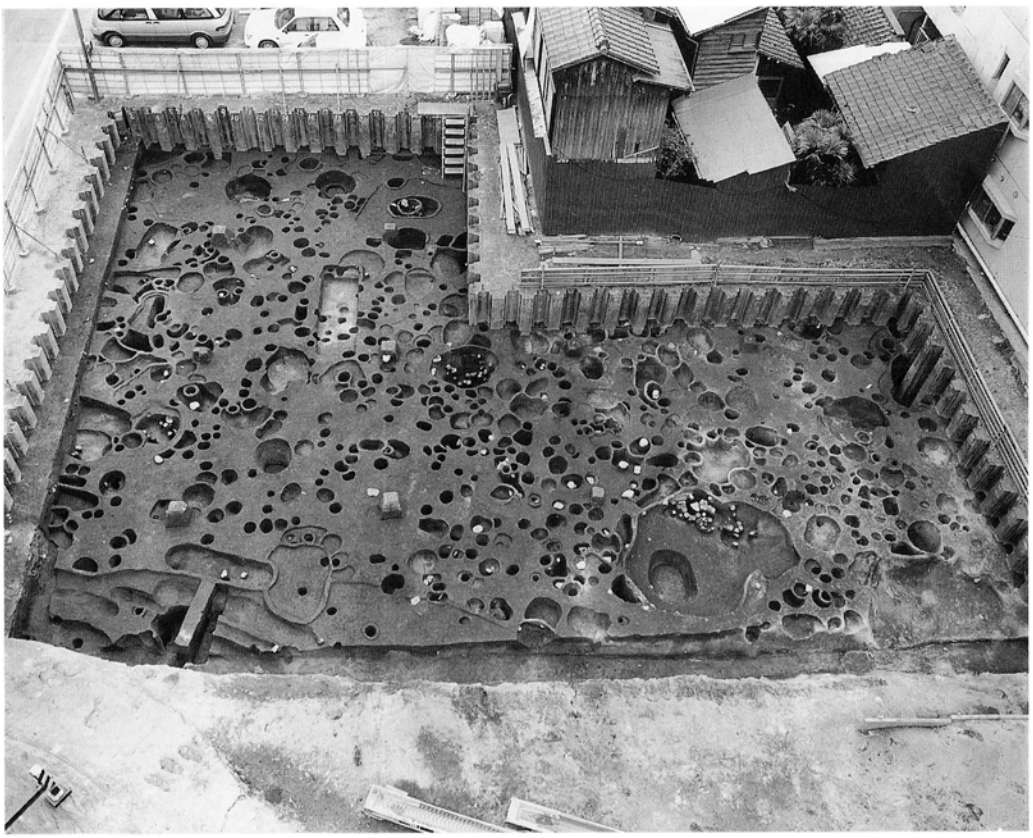
2．東１面北半部（南西から）

1．東２面全景（南西から）



2．西２面全景（北東から）

1．東３面全景（南西から）



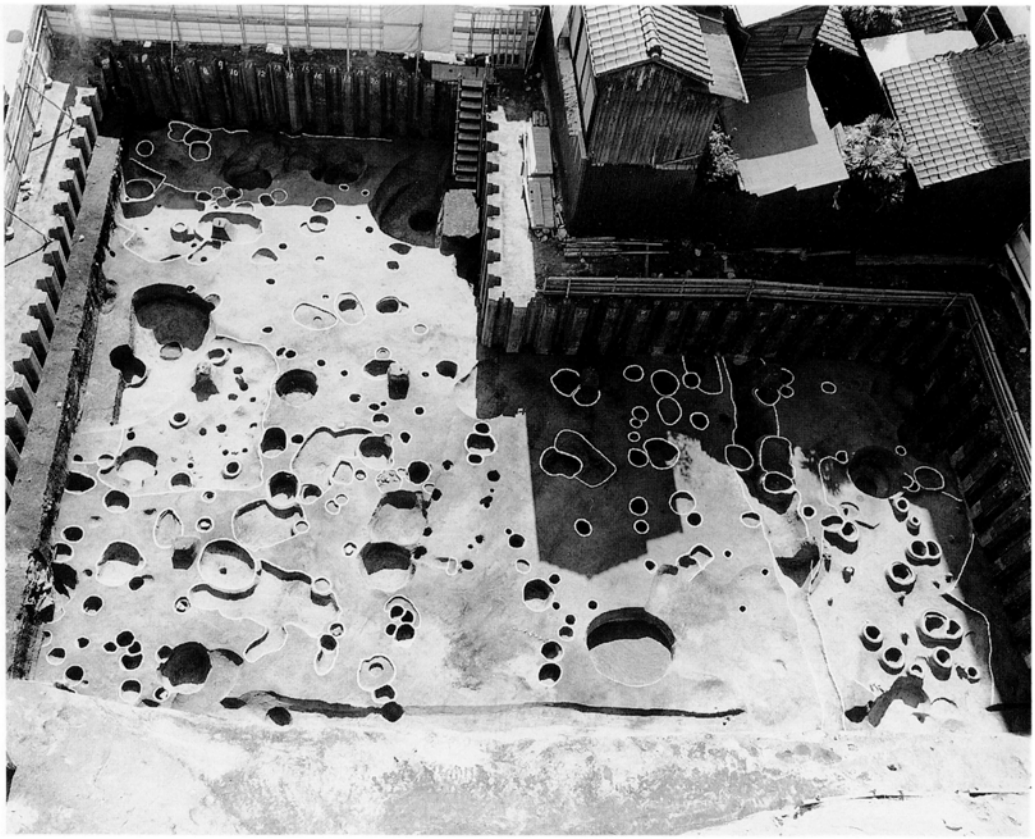
2．西３面全景（北東から）

1．東４面全景（南西から）

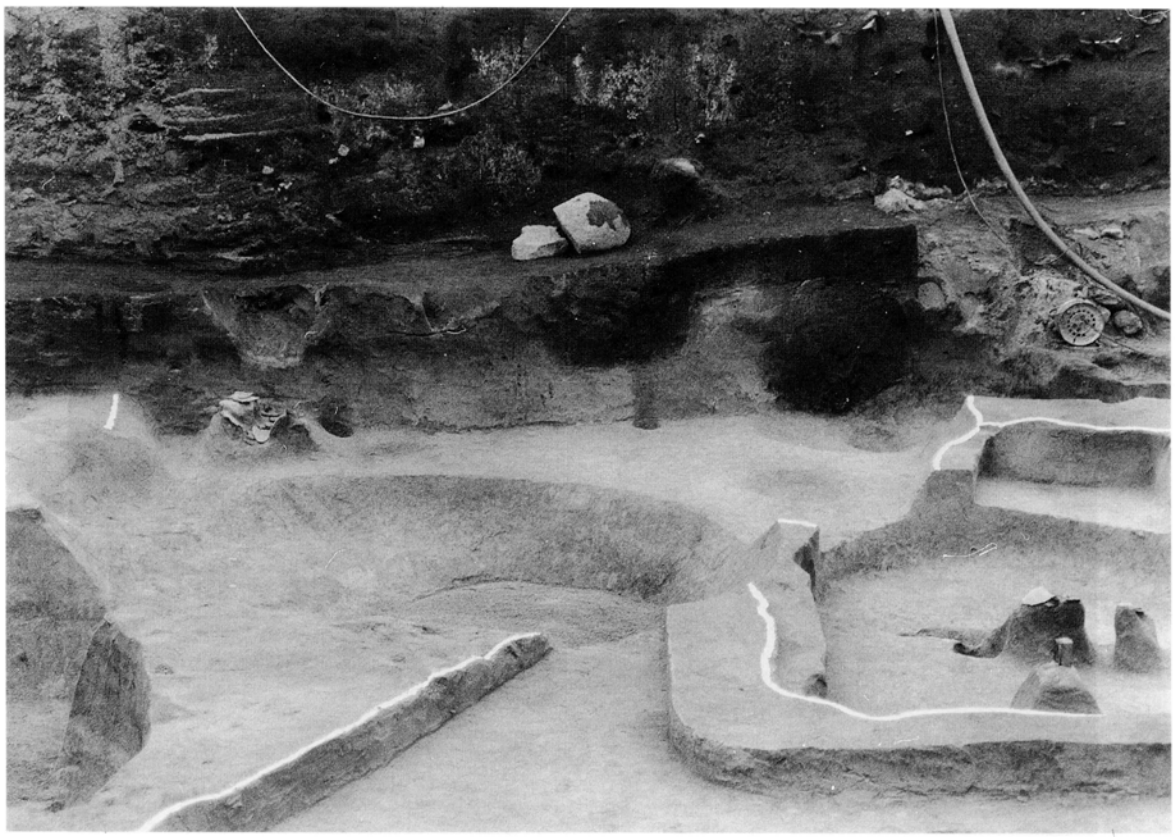
2．西４面全景（北東から）

1．東５面（古代）全景（南西から）

2．東５面（弥生時代）全景（南西から）

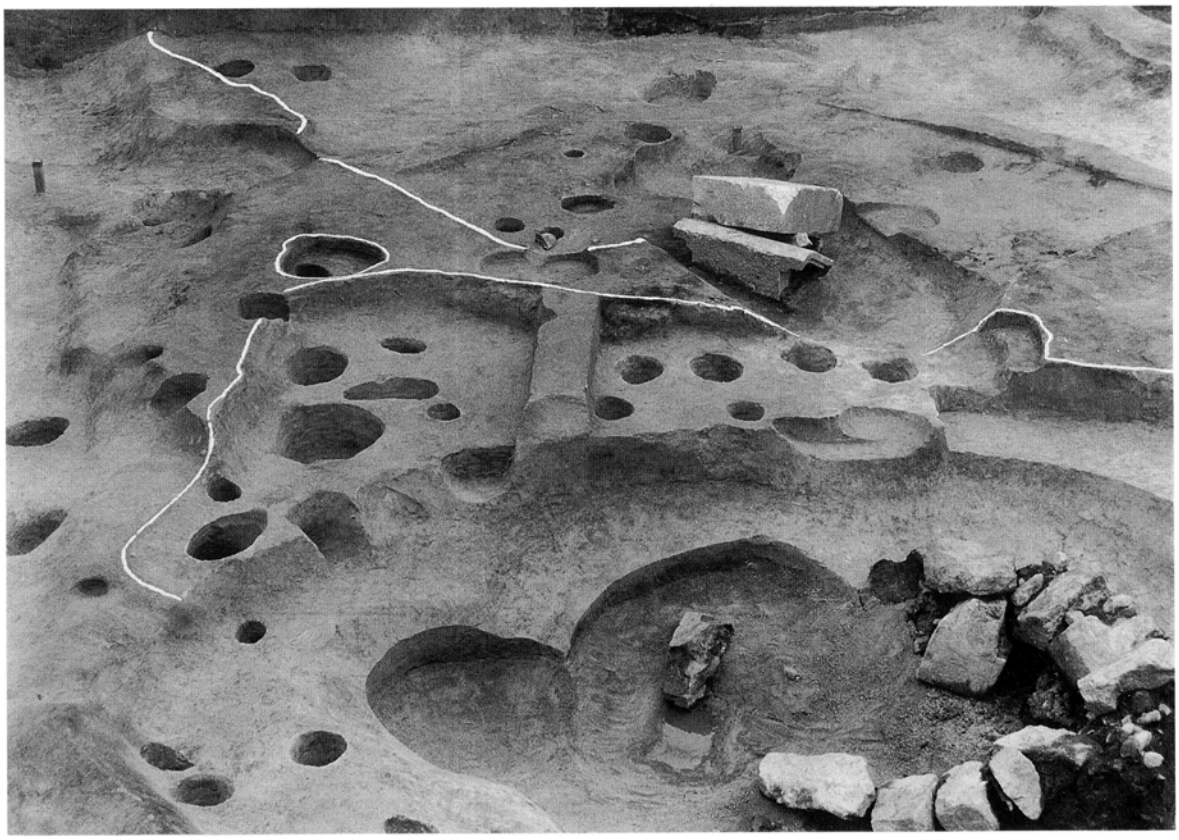


1．西５面全景（北東から）

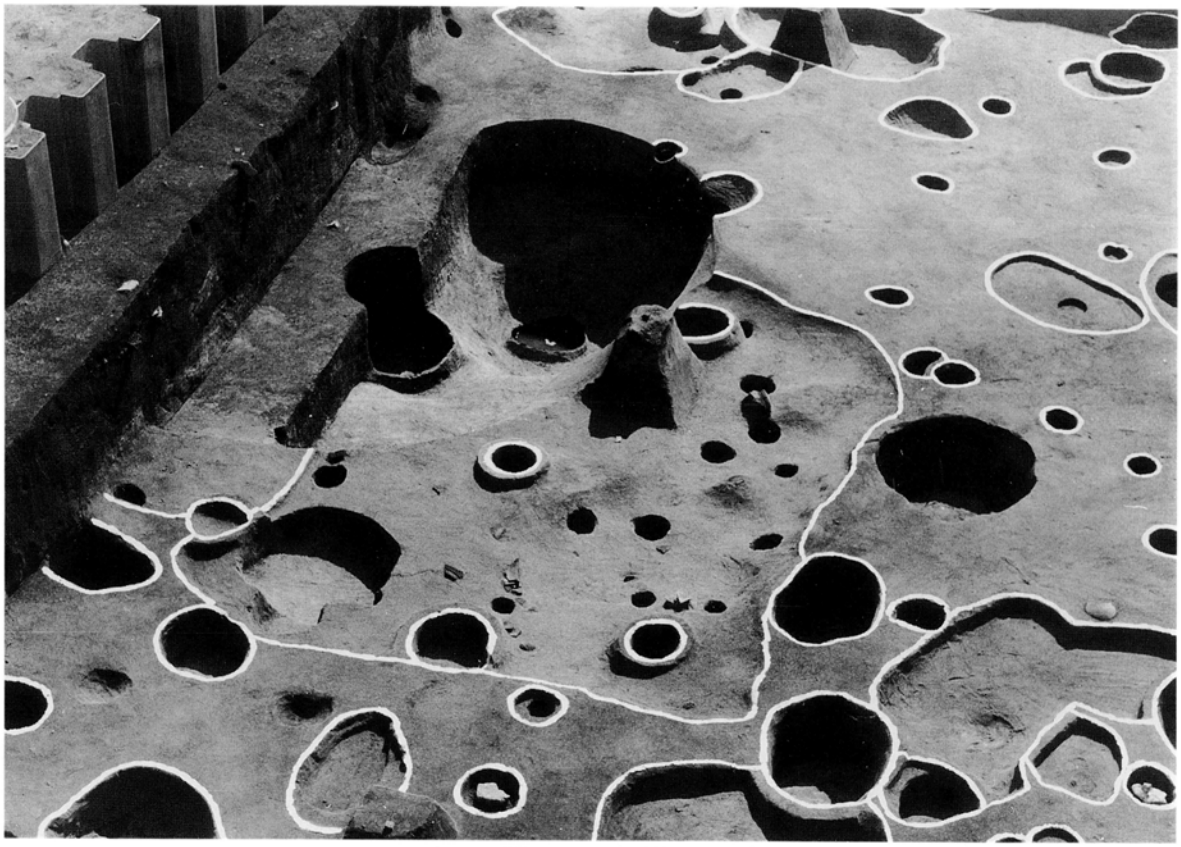


2．５面SC-190（北東から）

1． 5面SC-198（西から）

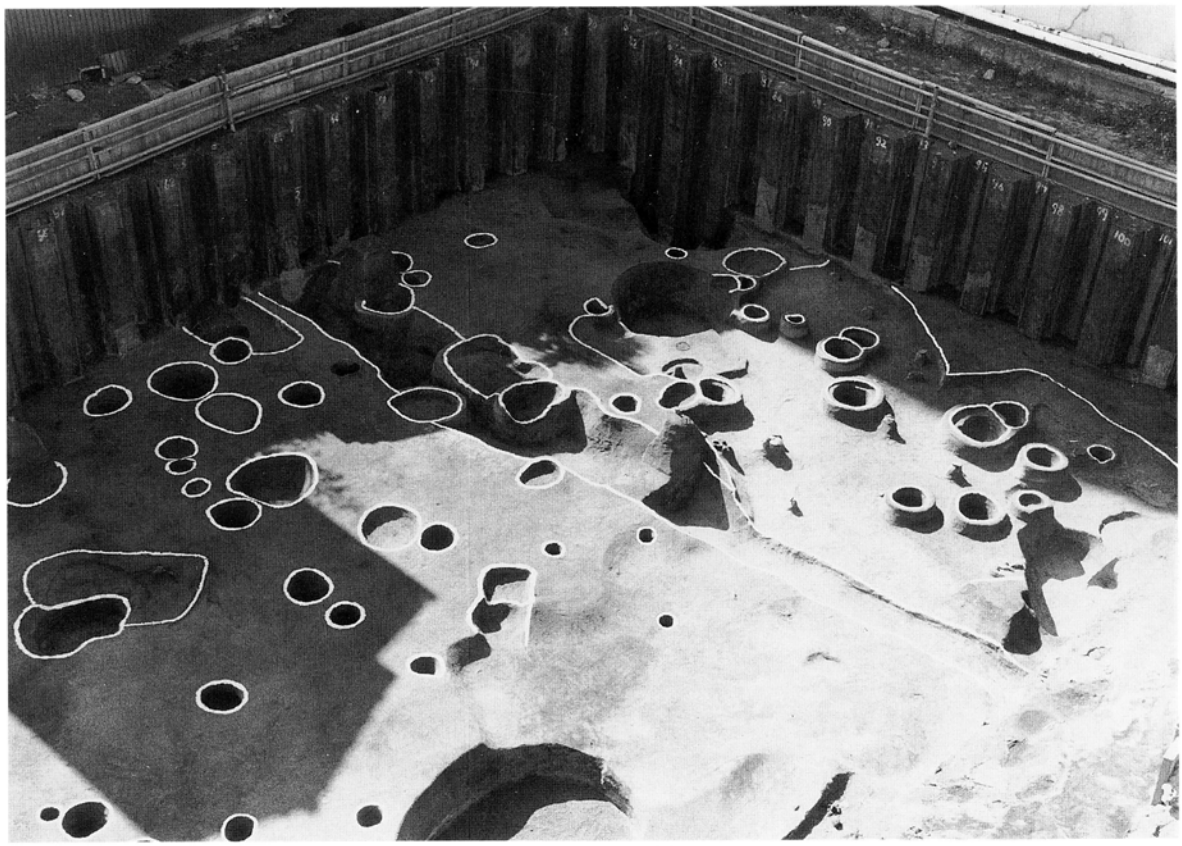


2． 5面SC-200（南西から）



1．5面SC-390（北東から）

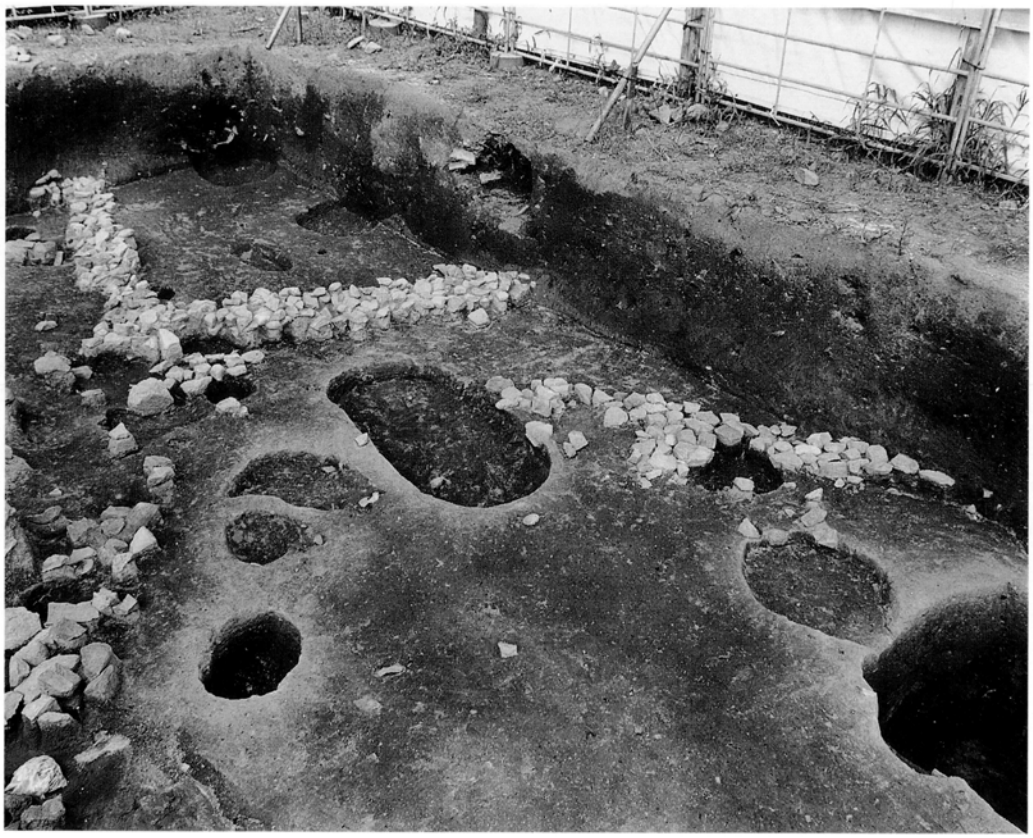
2．5面SK-187（南西から）



1． 5面SD-183（東から）

2． 4面SE-195（東から）

1．４面ＳＤ-181（東から）



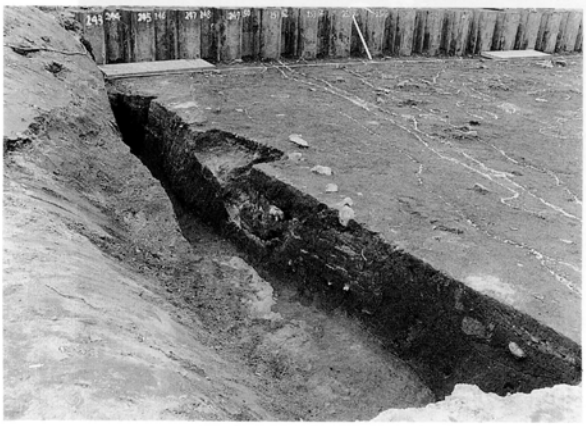
2．２面SB-45、47（西から）

1． 2面SB-240（東から）

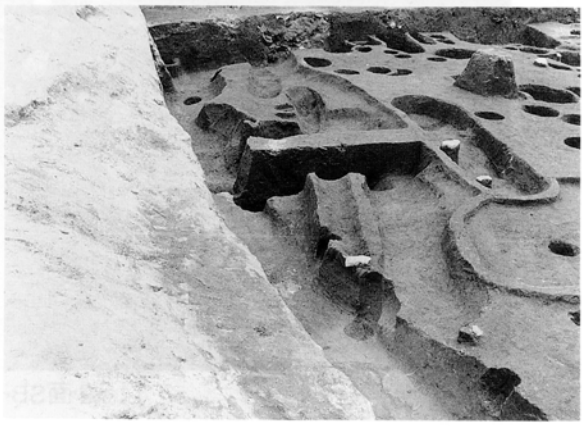
2． 2面SB-240 土層断面（南から）

1．東２面SD-40 土層断面（南東から）

2．西２面SD-40 土層断面（南東から）



3．西３面SD-40 検出時（北から）

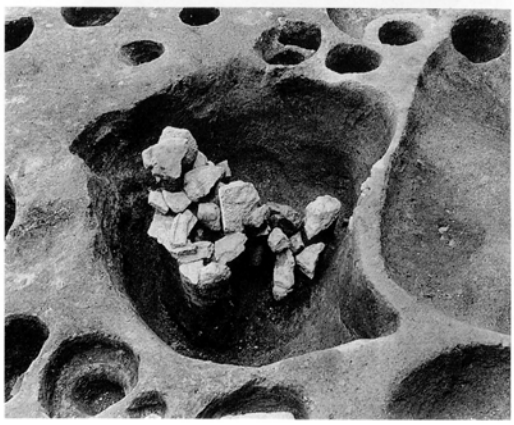


4．西３面SD-40（北から）

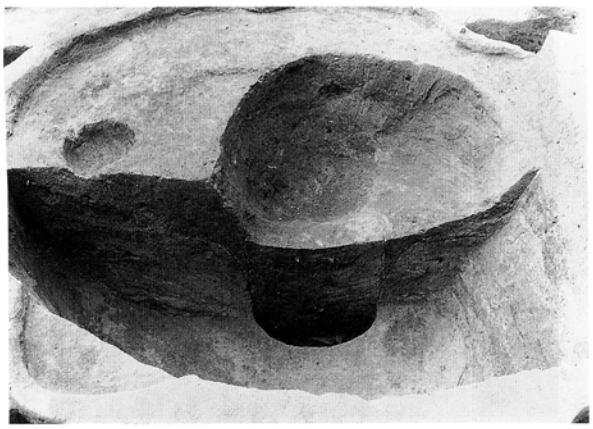
5．３面SE-100（北西から）

6．３面SE-100 土層断面（南西から）

7．３面SE-112（南西から）



8．３面SE-124 上面（北東から）

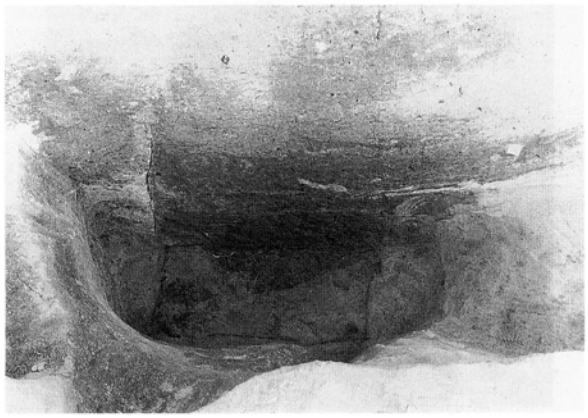


1．４面SE-124 土層断面（北東から）

2．４面SE-124 完掘状態（南西から）

3．４面SE-134（南西から）

4．４面SE-168（南西から）



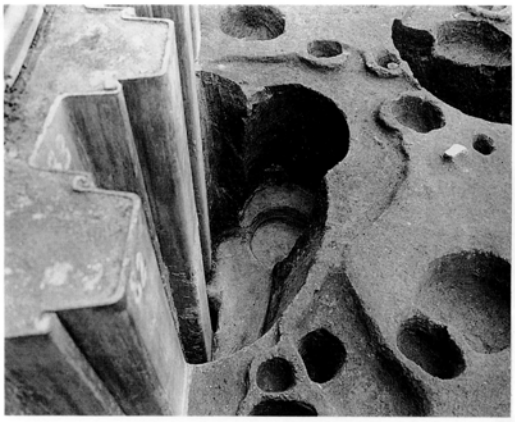
5．４面SE-179（南西から）

6．４面SE-180（北から）

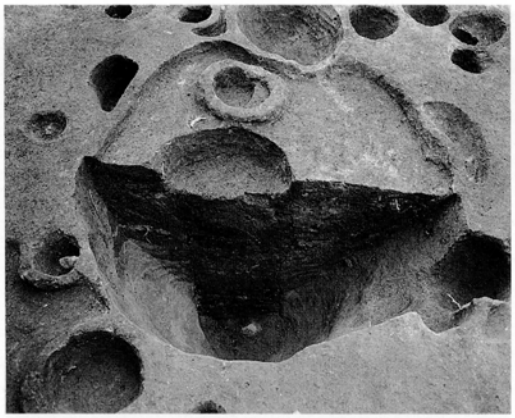
7．５面SE-188、192、194（南西から）

8．５面SE-188（南西から）

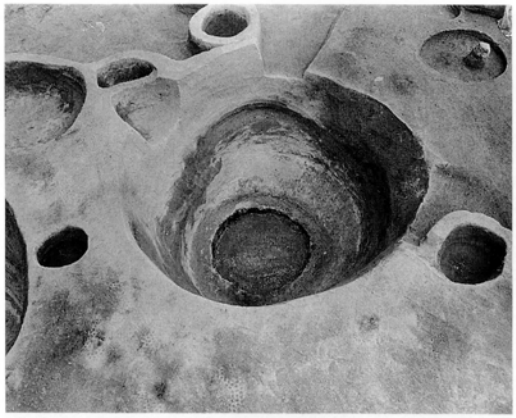
1．5面SE-193（南から）



2．3面SE-285、286（南西から）



3．3面SE-287 土層断面（南西から）

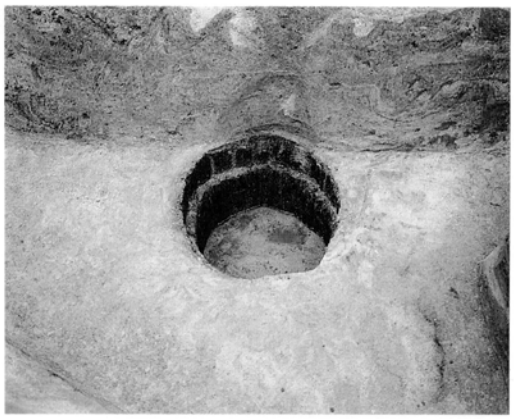


4．3面SE-287 完掘状態（南西から）

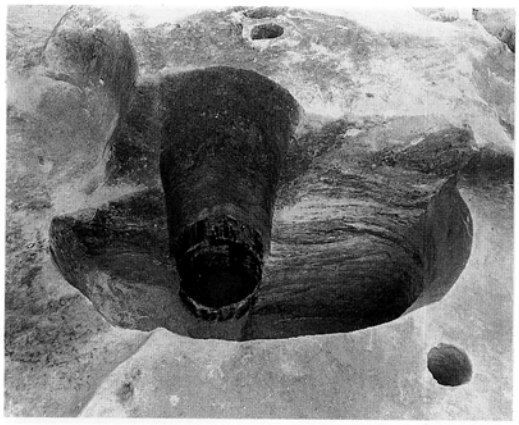
5．3面SE-300 土層断面（南東から）

6．3面SE-300 鏡出土状況（南東から）

7．3面SE-300（南東から）



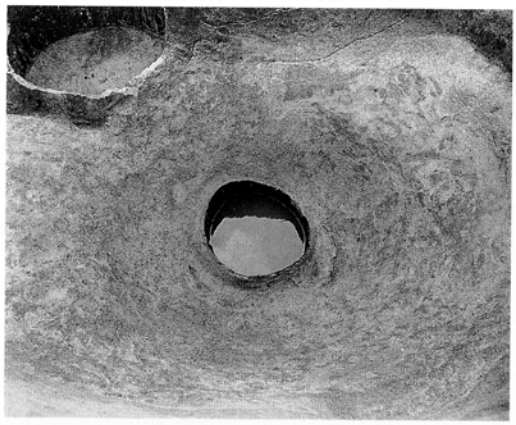
8．3面SE-300 井戸側（南東から）



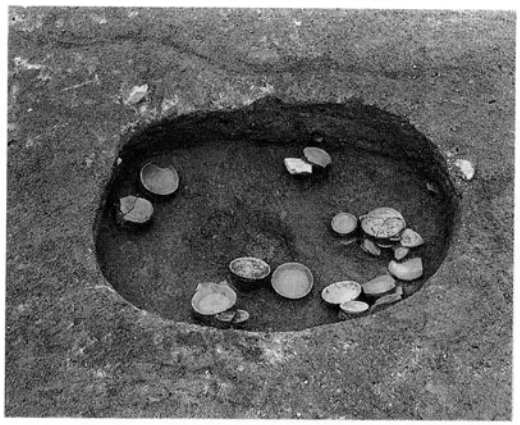
1．４面SE-350 土層断面（南西から）

2．４面SE-350 井戸側（南西から）

3．４面SE-370 土層断面（北西から）



4．５面SE-380（北西から）



5．２面SK-38（西から）

6．３面SK-64（南から）

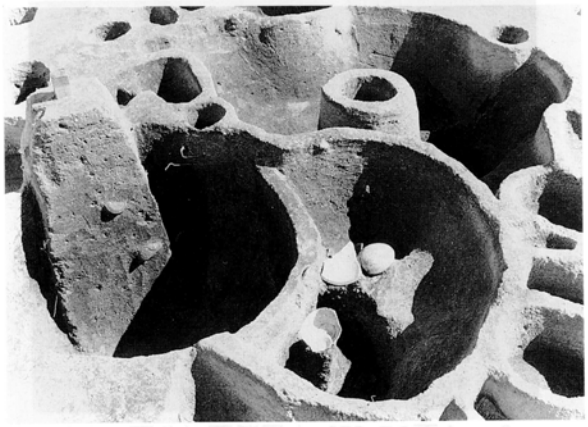
7．３面SK-69（南西から）

8．３面SK-80 西半部（東から）

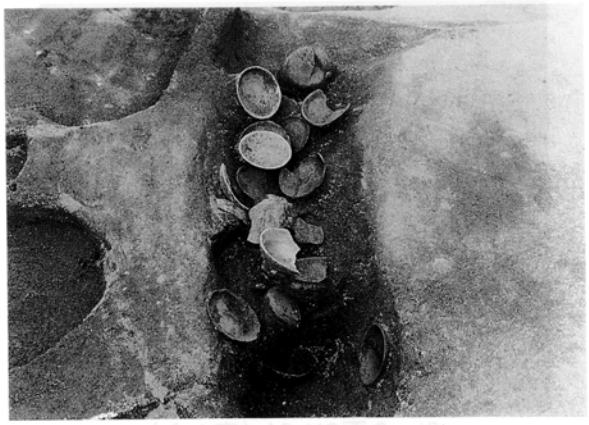
1．3面SK-82（南西から）

2．2～3面SK-121（北から）

3．4面SK-122（南西から）



4．4面SK-125、126、127（西から）

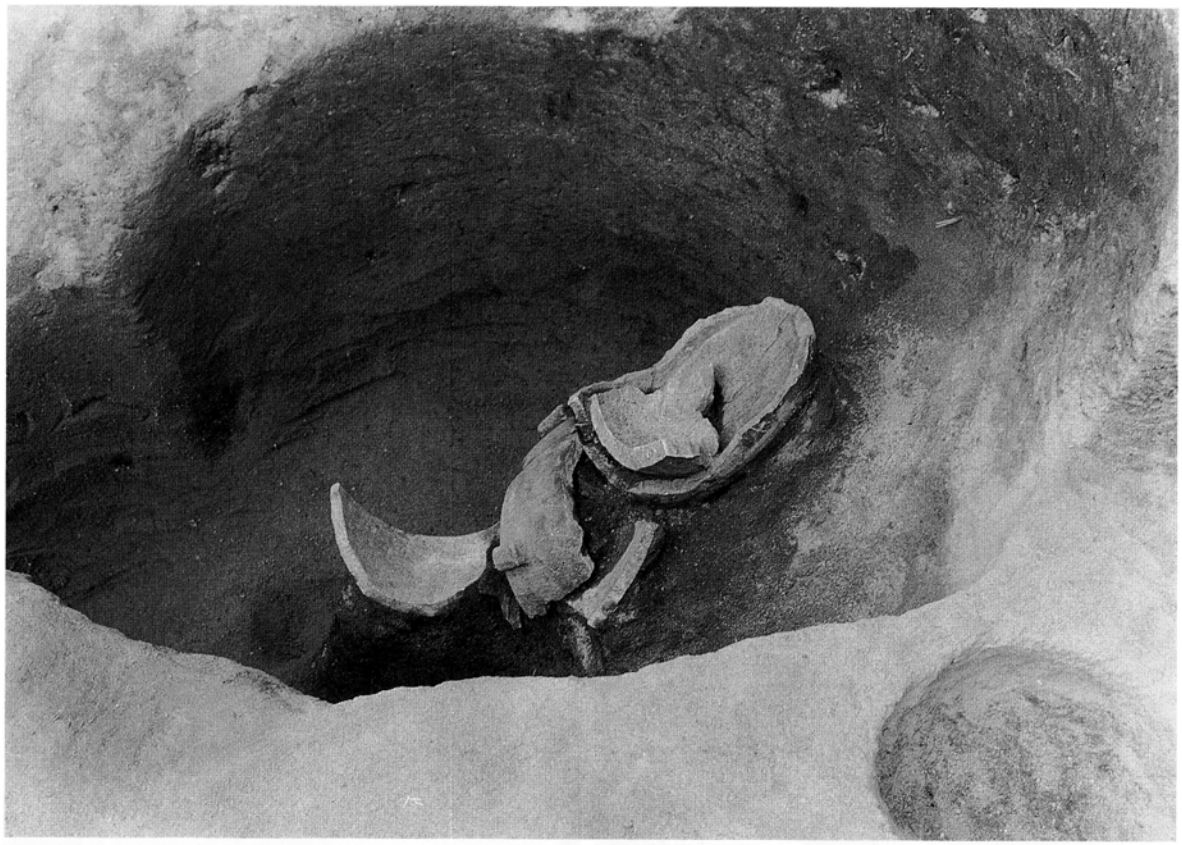


5．4面SK-130（南から）

6．4面SK-130（東から）

7．4面SK-132（南西から）

8．4面SK-129 石鍋出土状況（南から）

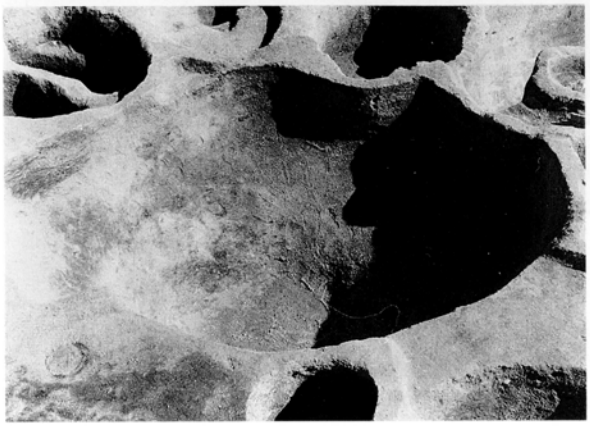


1．4面SK-129 石鍋出土状況（東から）

2．4面SK-123 白磁出土状況（東から）

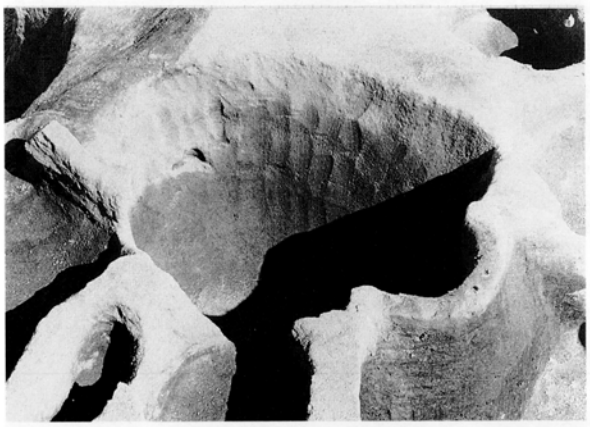
1．４面SK-135（南西から）

2．４面SK-145（南東から）



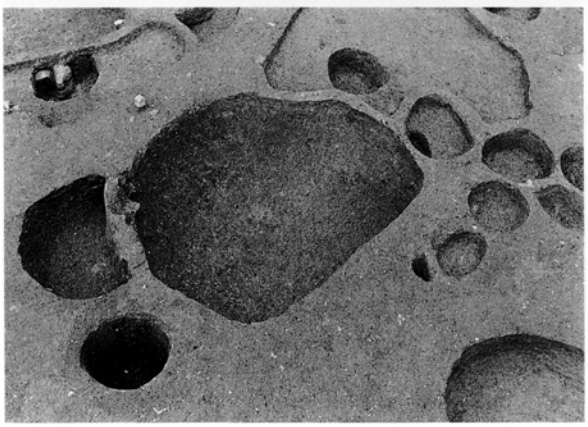
3．４面SK-150（西から）

4．４面SK-155（北から）

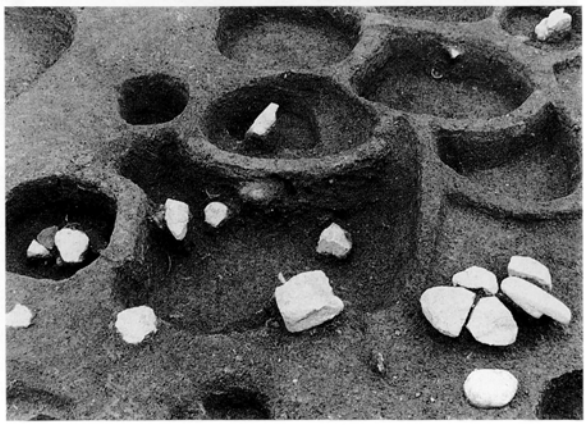


5．４面SK-165（南西から）

6．２面SK-217 銅銭出土状況（北から）



7．２面SK-237（北から）



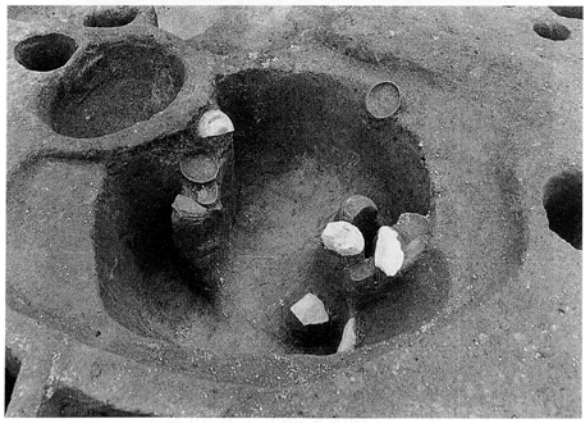
8．２面SK-261（南東から）

1．２面SK-263、264（南東から）

2．２面SK-265（南東から）

3．３面SK-282、283（北東から）

4．３面SK-290（南西から）



5．３面SK-320（北から）

6．３面SK-328（北西から）

7．４面SK-355（南東から）

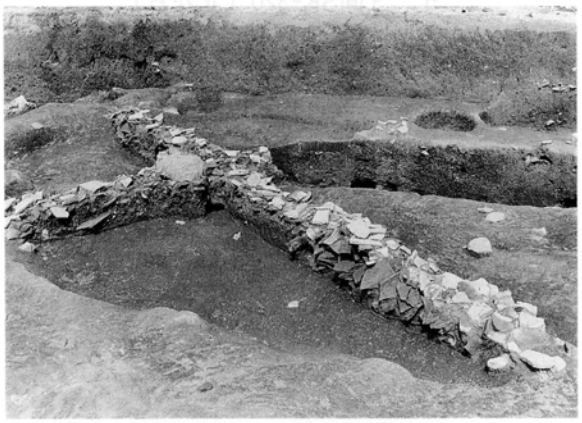
8．３面SK-366（北東から）

1．２面SK-61（南西から）

2．２面SK-61（西から）

3．２面SK-61（北から）

4．２面SK-61 土層断面（西から）

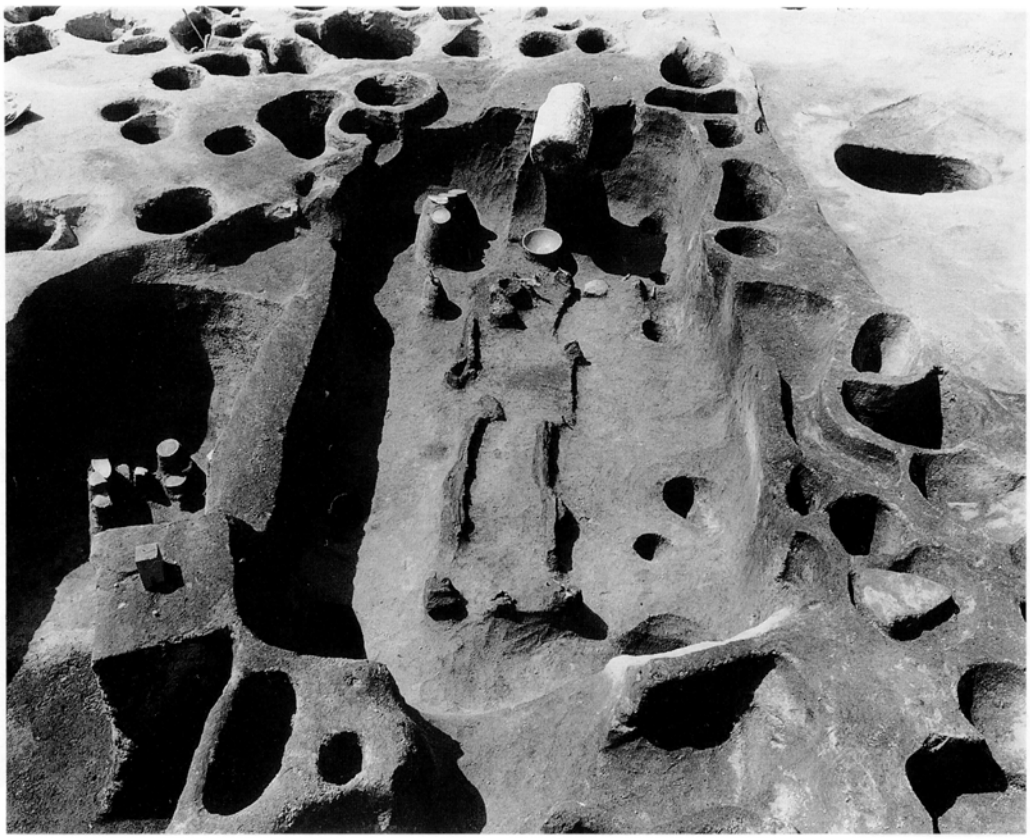


5．２面SK-61 土層断面（南西から）

1． 2面SK-48（南東から）

2． 4面SK-360（南西から）

1．4面SK-360（南東から）

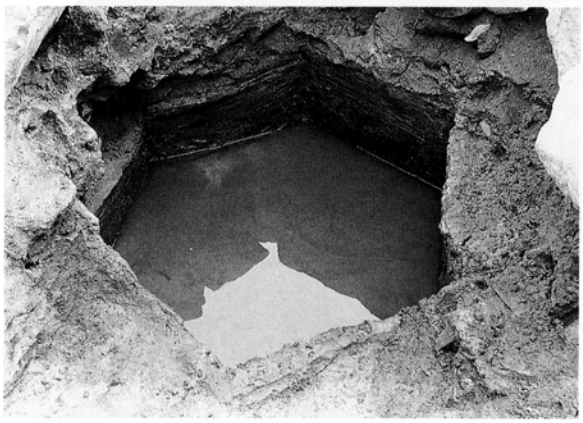


2．4面SK-360（北東から）

1．５面SE-35 完掘状態（南西から）

2．２面SE-35の上面（南西から）

3．２面SE-35 石組（北西から）



4．５面SE-35 井戸側（北西から）

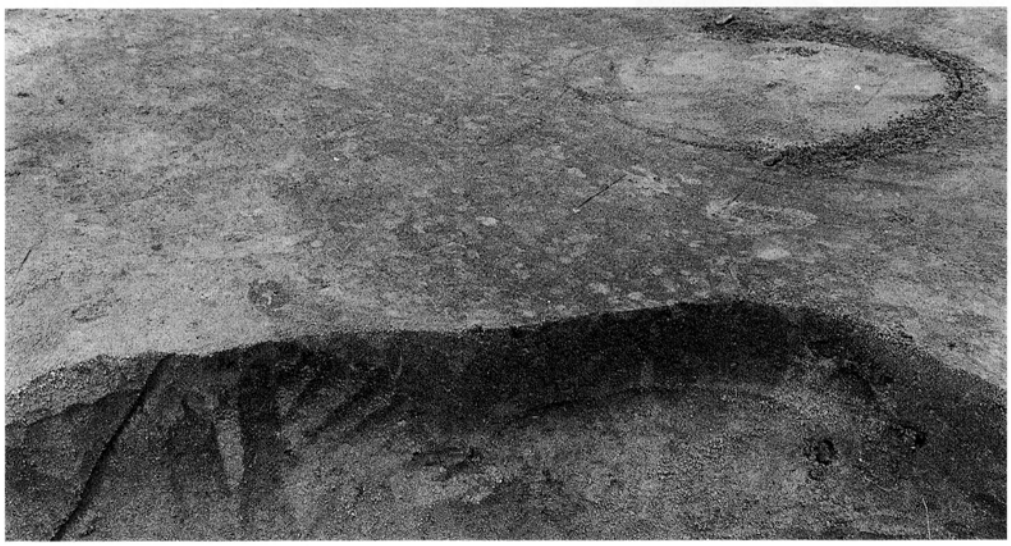
5．２面SK-248、249（北から）

1．1面SX-10（南から）

2．1面SX-36（南東から）

1．南壁土層断面（北西から）

2．西５面の砂丘断面（南東から）



3．東５面の生痕

SC-190

3

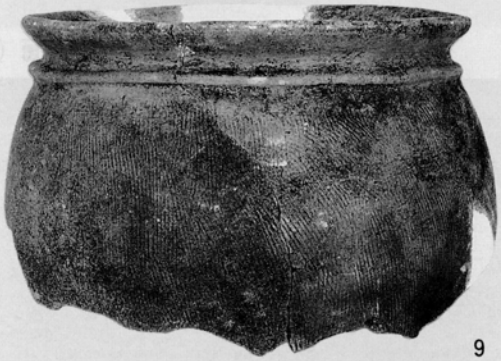
SC-198

4

SK-187

8

SK-385



9

SK-394

11

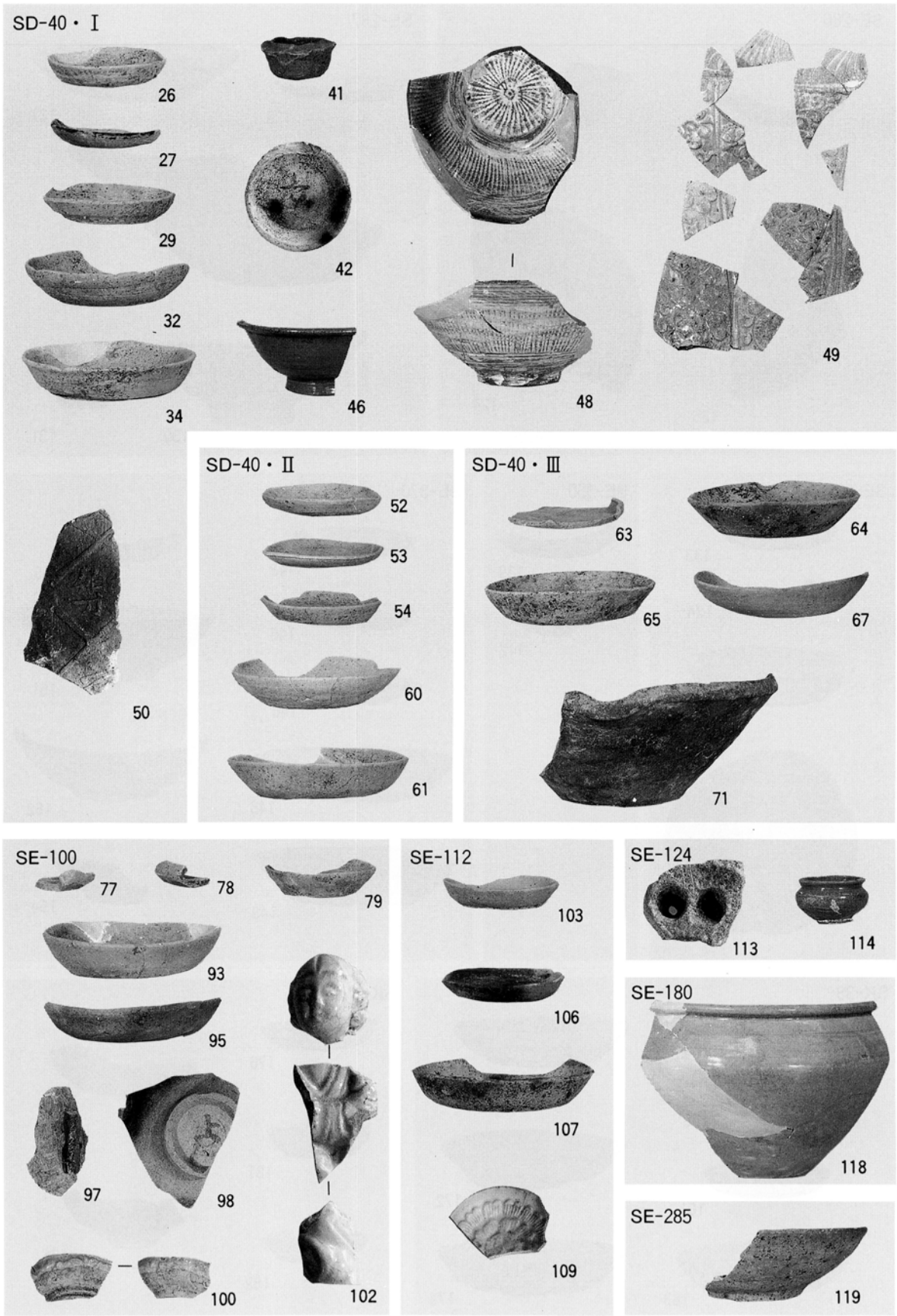
SE-195

17

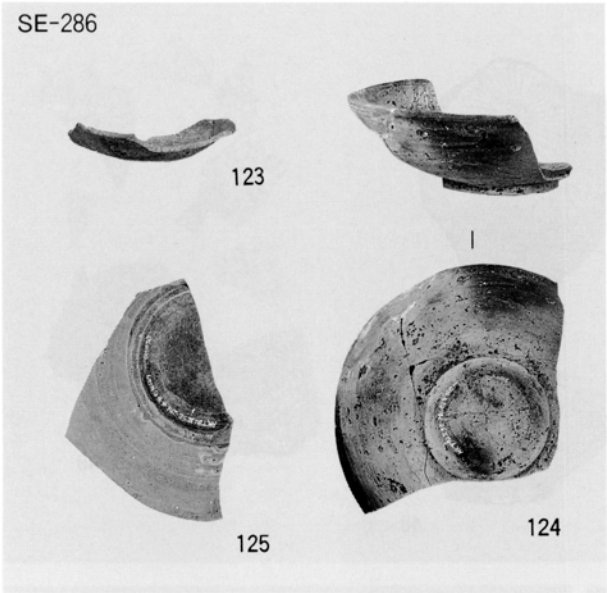
18

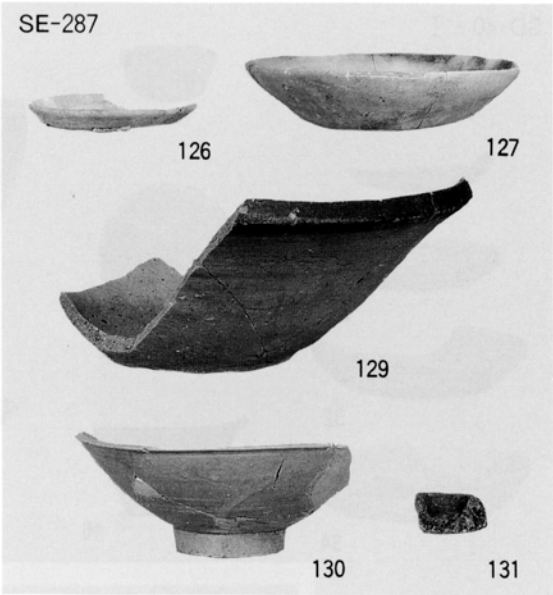
19

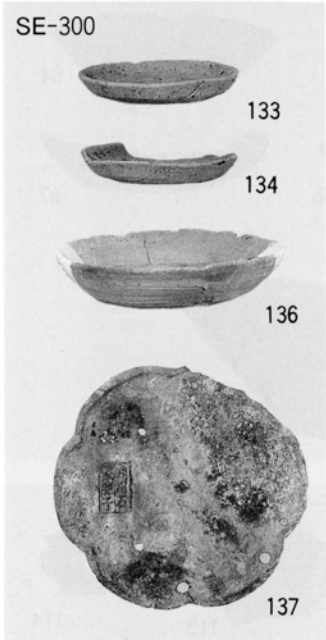
出土遺物・Ⅰ

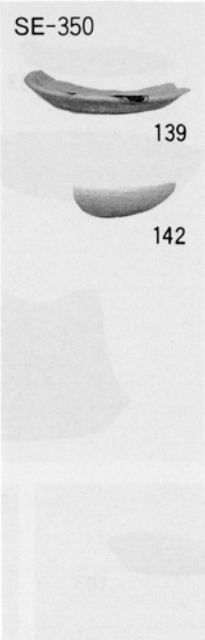

SD-40・Ⅰ
26
41
27
29
42
32
46
48
49
34
50
SD-40・Ⅱ
52
53
54
60
61
SD-40・Ⅲ
63
64
65
67
71
SE-100
77
78
79
93
95
97
98
100
102
SE-112
103
106
107
109
SE-124
113
114
SE-180
118
SE-285
119

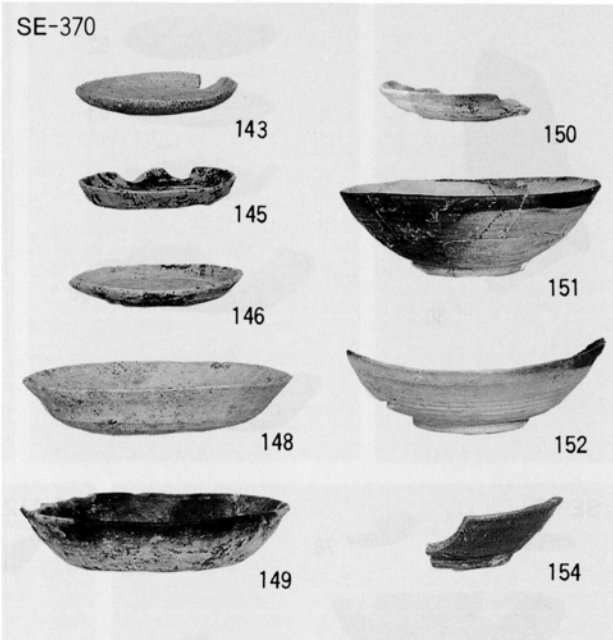
出土遺物・Ⅱ

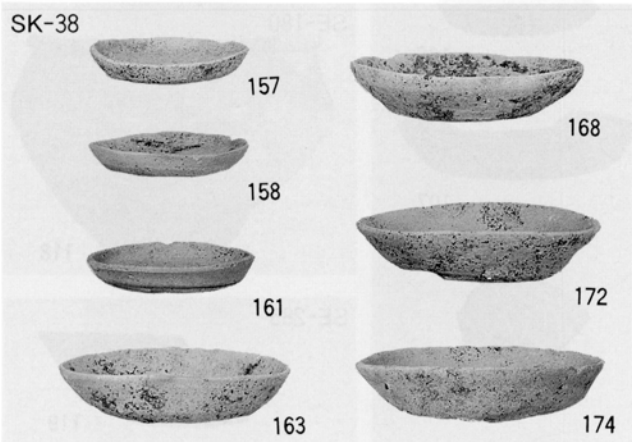

SE-286
123
124
125

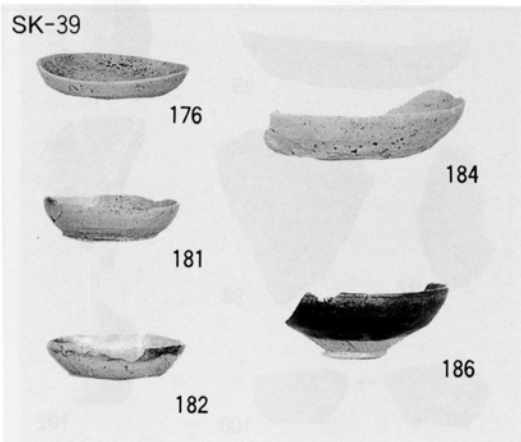

SE-287
126
127
129
130
131


SE-300
133
134
136
137


SE-350
139
142


SE-370
143
150
145
151
146
148
152
149
154


SK-38
157
168
158
161
172
163
174


SK-39
176
184
181
186
182

出土遺物・Ⅲ

SK-51

190

191

SK-69

200

201

202

206

208

SK-80

222

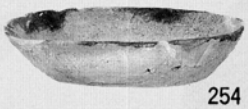
227

228

248

279

249


254

261

SK-82

297

299

301

302

303

307

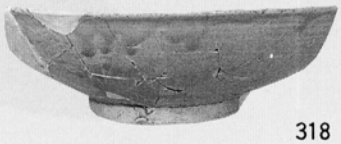
308

SK-97

310

316

314


318

SK-99

323

SK-110

331

334

332

出土遺物・Ⅳ

SK-117

337

SK-122

350

351

SK-123

356

357

359

SK-125

369

373

374

371

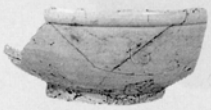
372

375

SK-126

383

384



386

387

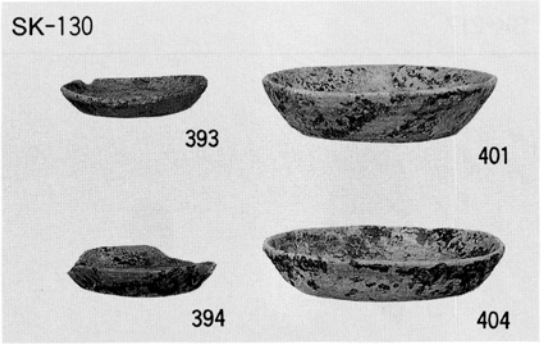
388

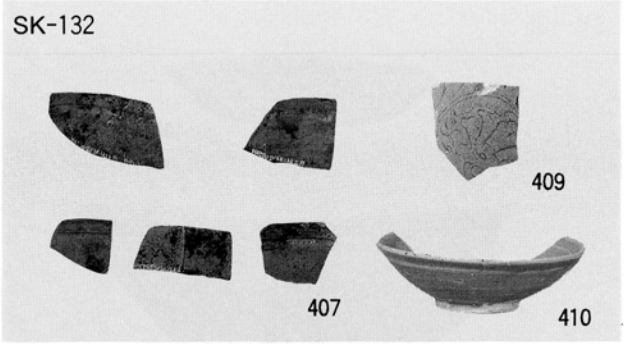
SK-129

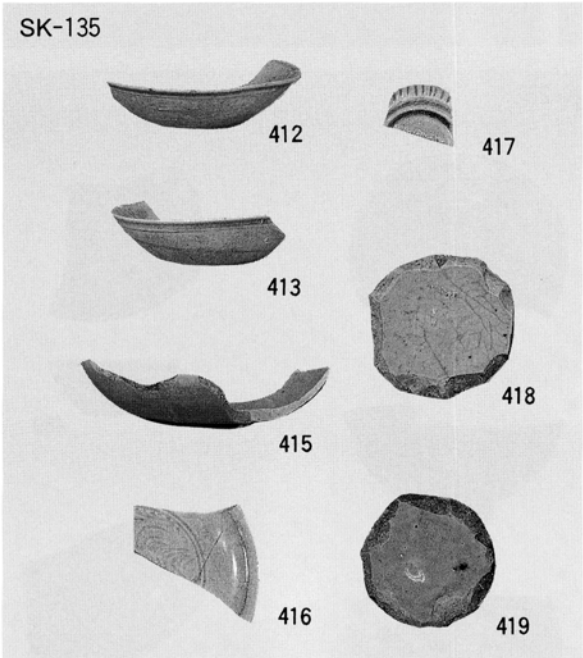
391

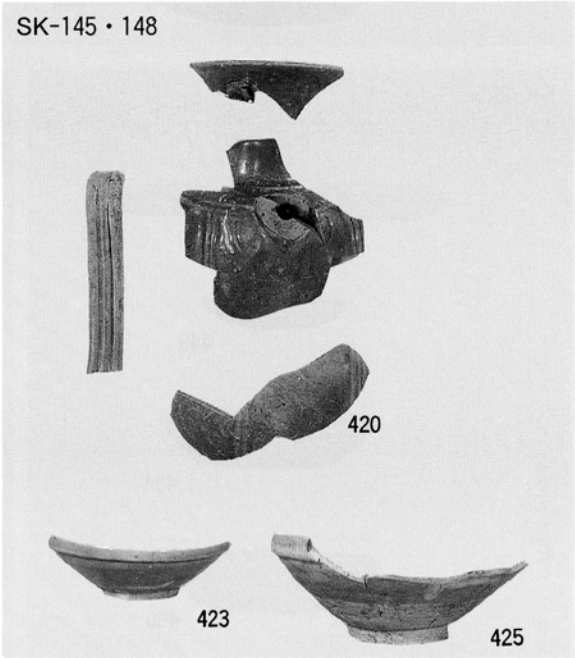
392

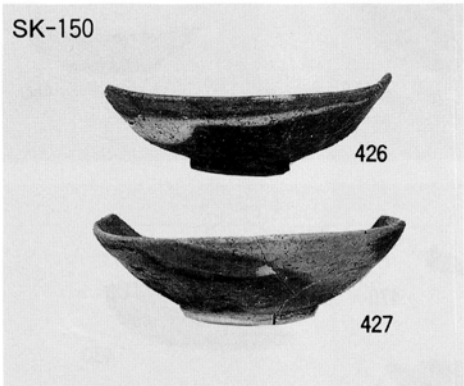
出土遺物・V

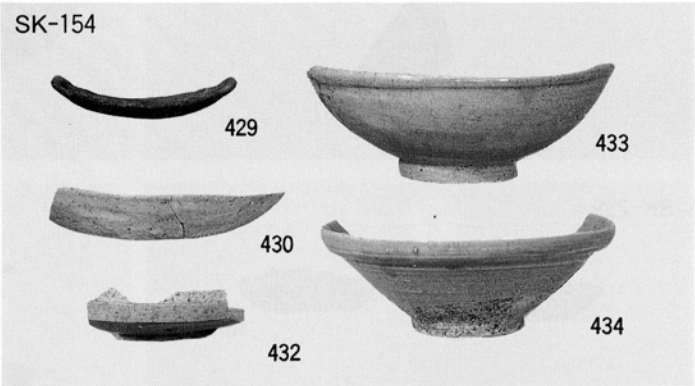

SK-130
393
401
394
404


SK-132
409
407
410


SK-135
412
417
413
418
415
416
419


SK-145・148
420
423
425


SK-150
426
427

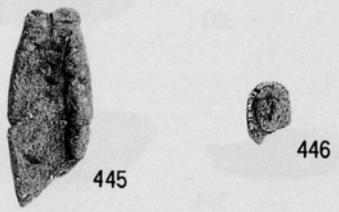

SK-154
429
433
430
434
432

SK-155
436
437
438

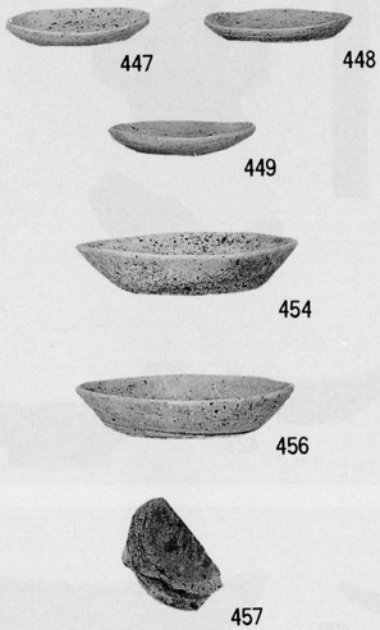
出土遺物・Ⅵ

SK-165

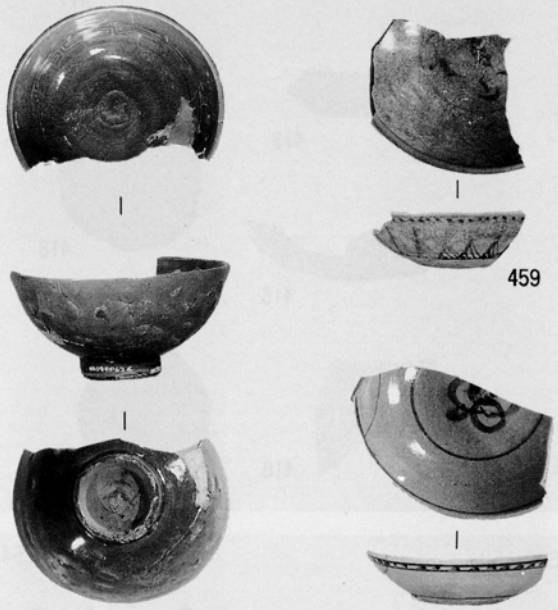
SK-217



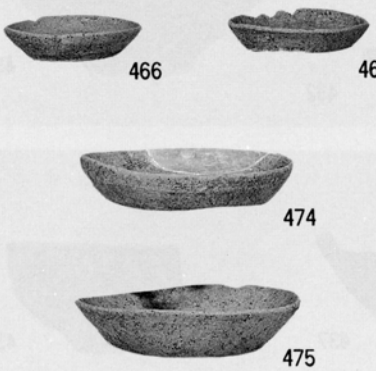
SK-225



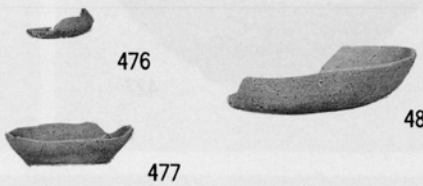
SK-237



SK-239

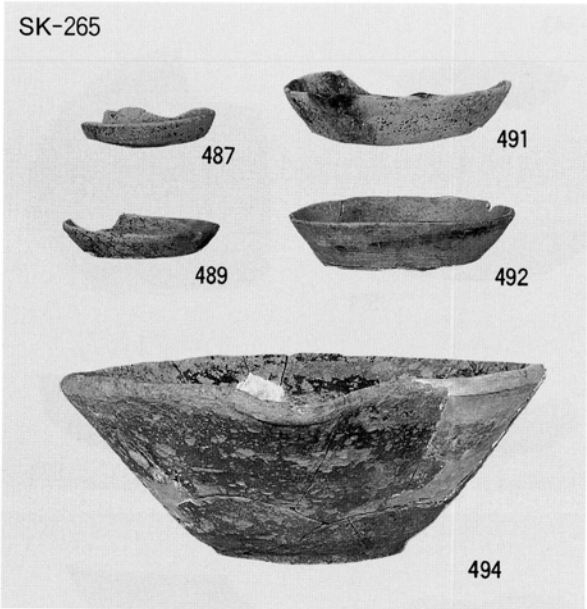


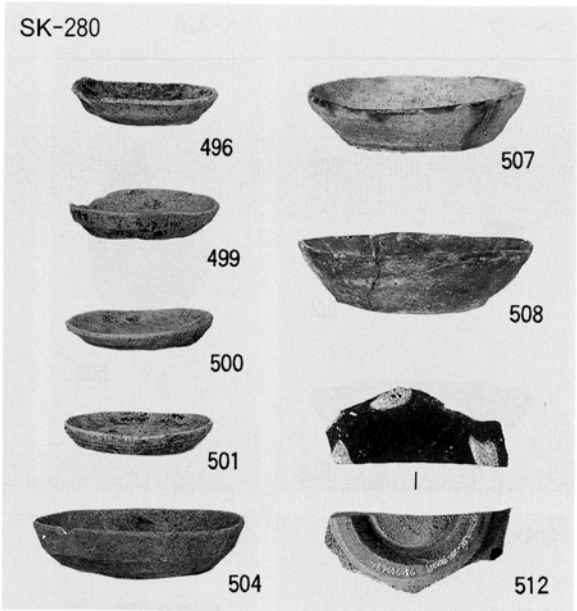
SK-261

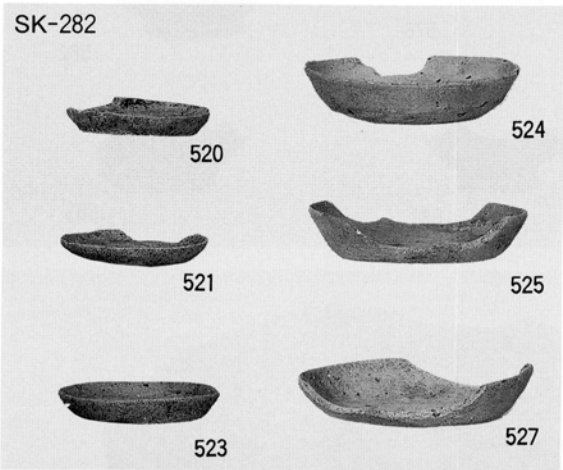


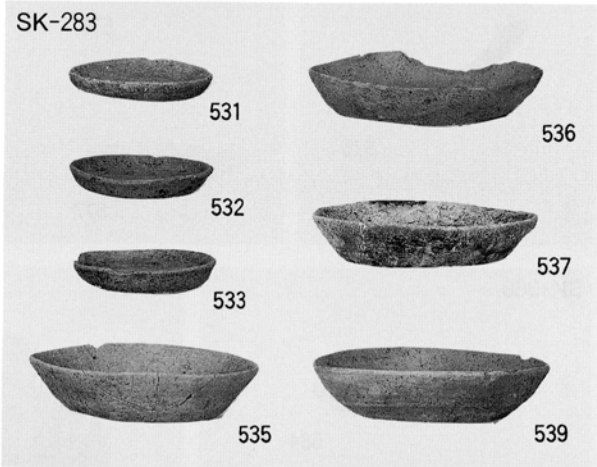
SK-264

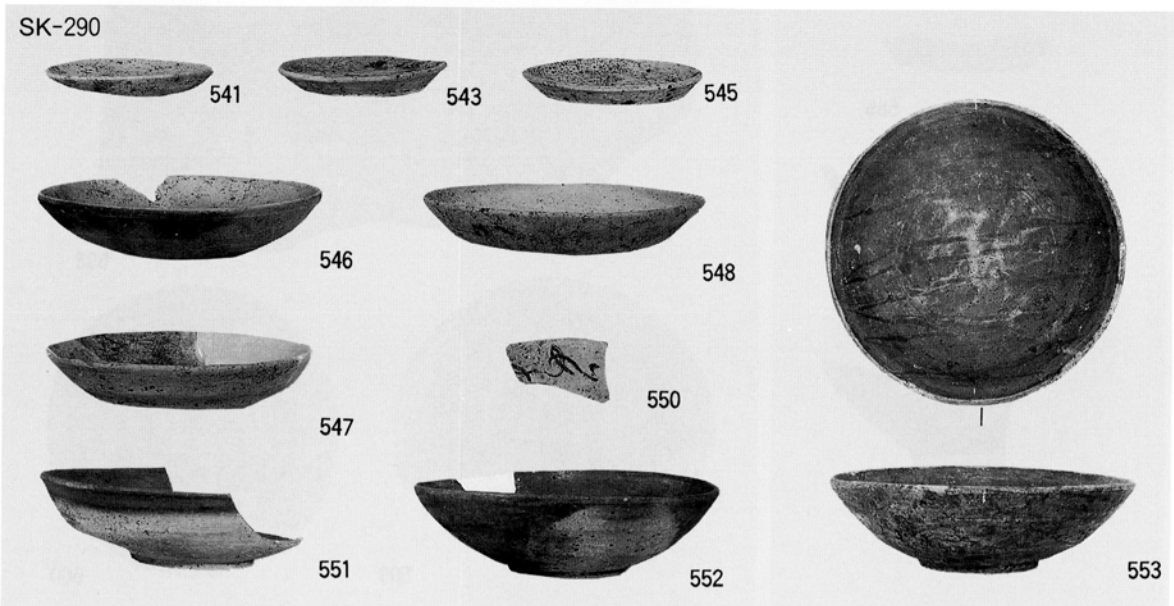
出土遺物・Ⅶ


SK-265
487
491
489
492
494

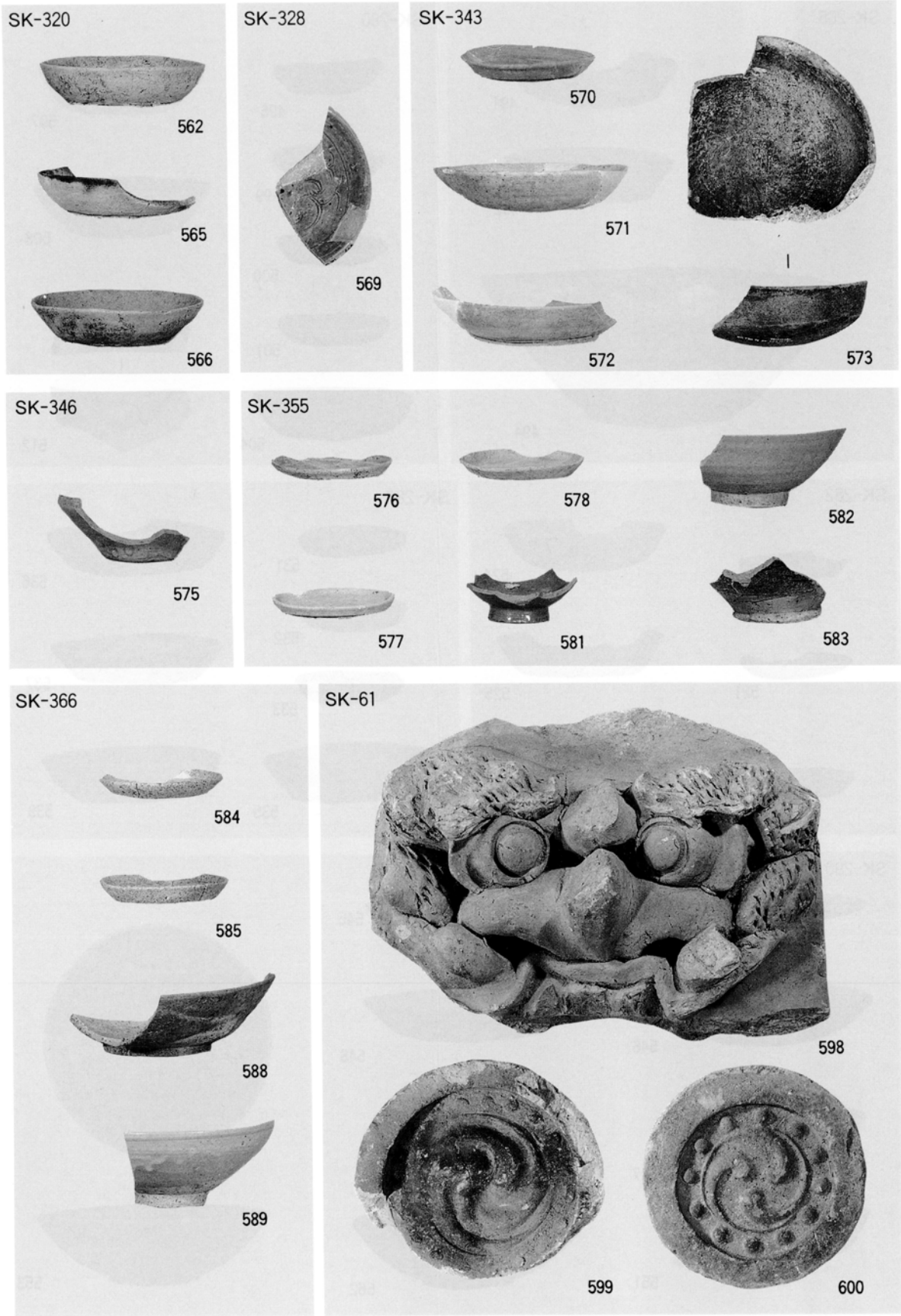

SK-280
496
507
499
508
500
501
504
512


SK-282
520
524
521
525
523
527

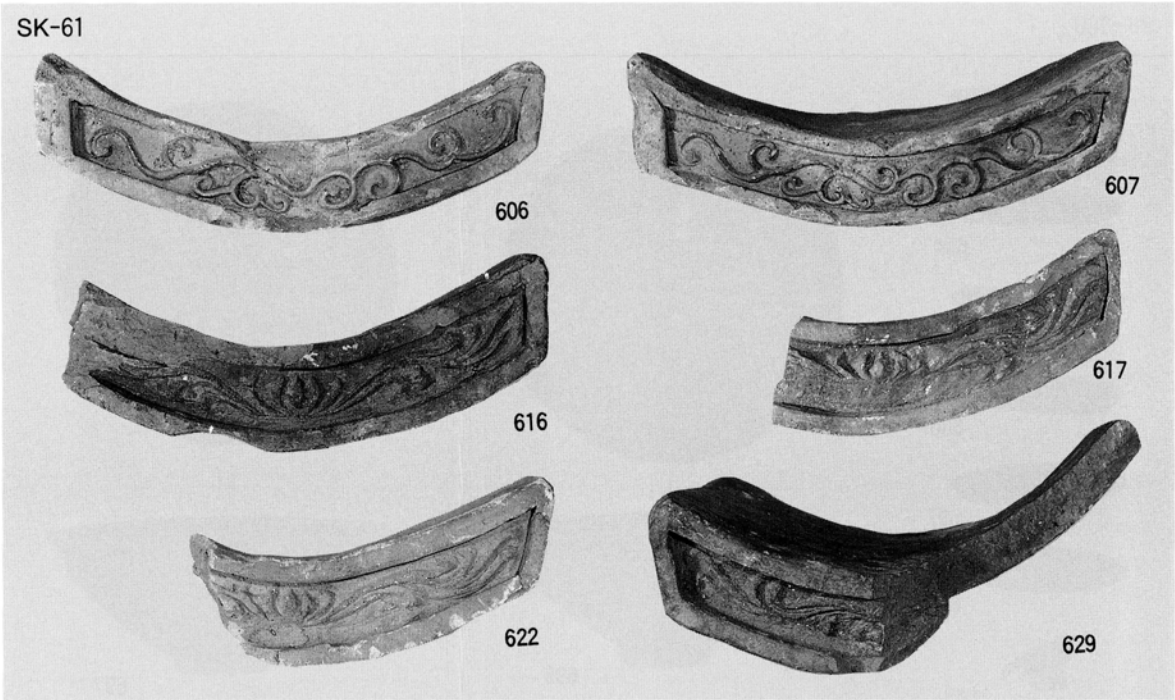

SK-283
531
536
532
537
533
535
539

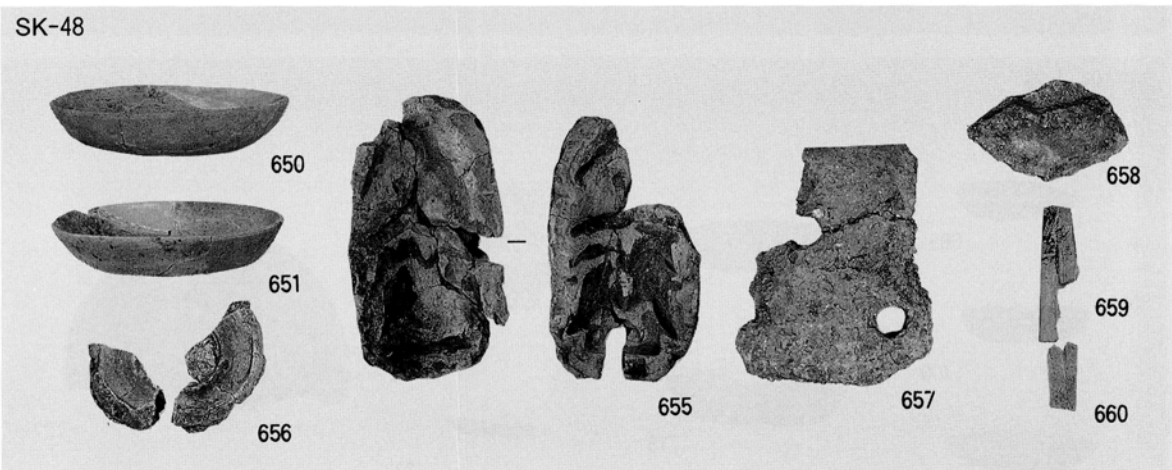

SK-290
541
543
545
546
548
547
550
551
552
553

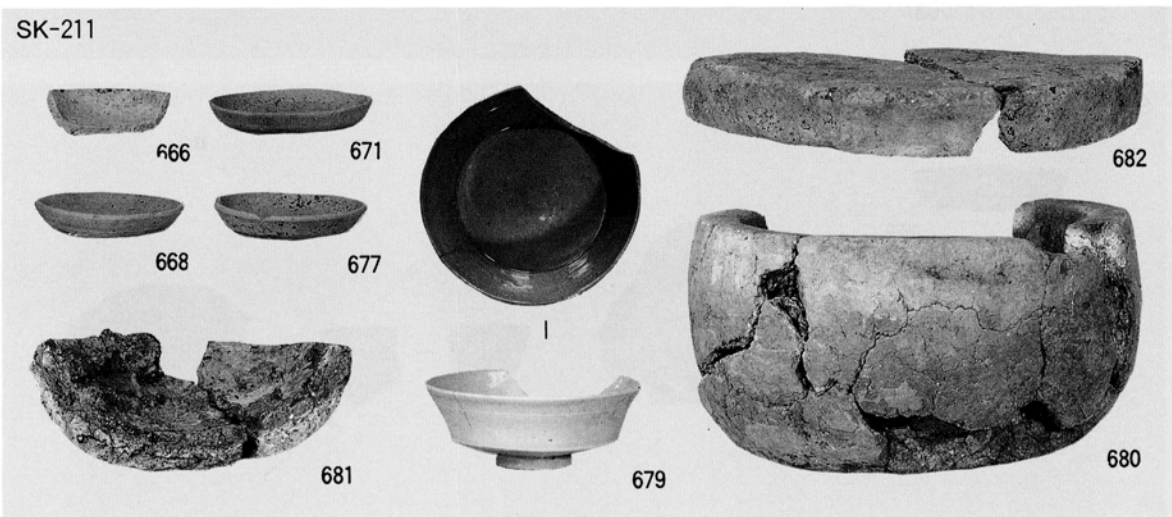
出土遺物・Ⅷ


SK-320
562
565
566
SK-328
569
SK-343
570
571
572
573
SK-346
575
SK-355
576
578
582
577
581
583
SK-366
584
585
588
589
SK-61
598
599
600

出土遺物・Ⅸ


SK-61
606
607
616
617
622
629


SK-48
650
651
656
655
657
658
659
660


SK-211
666
671
668
677
681
679
682
680

出土遺物・X

SK-360

683

684

685

686

687

688

689

696

697

SE-35 上層

699

700

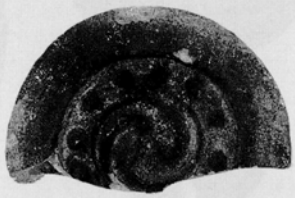
702

703

718

722

723

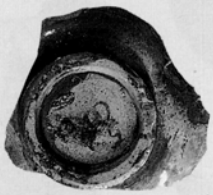

727

SE-35

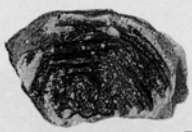
729

730

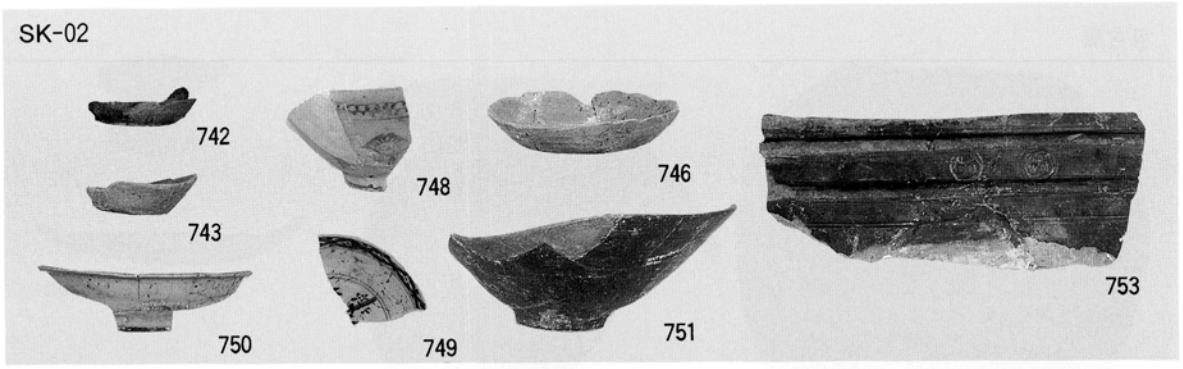
731

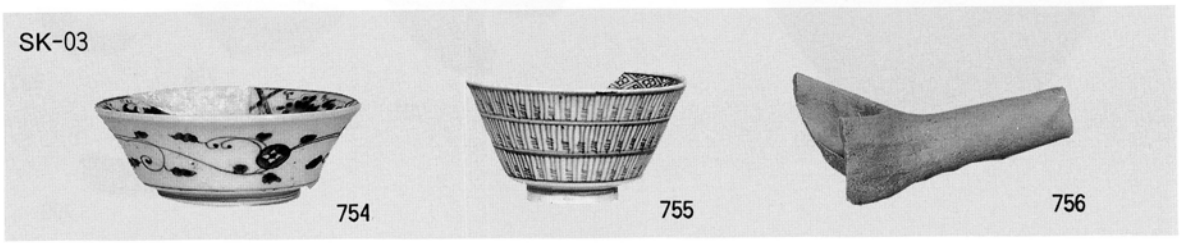

735

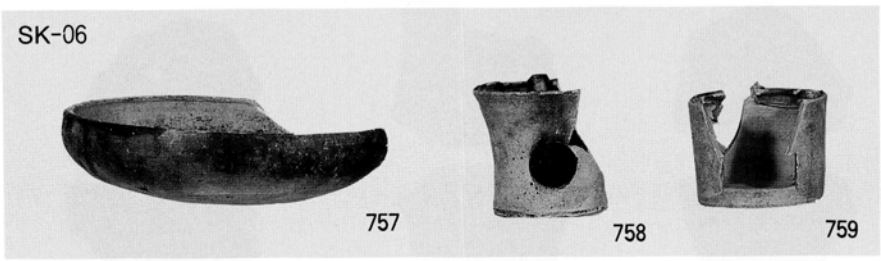
737

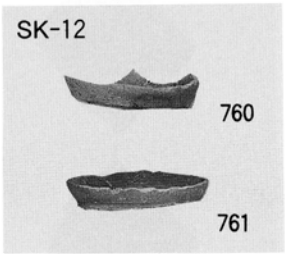

741

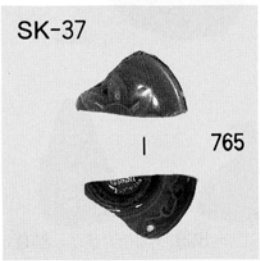
出土遺物・XI

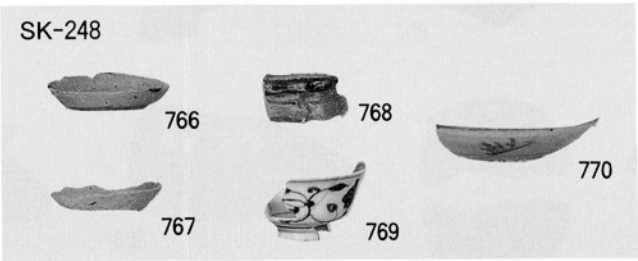

SK-02
742
743
750
748
749
746
751
753

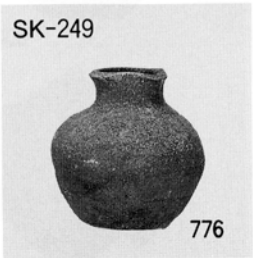

SK-03
754
755
756

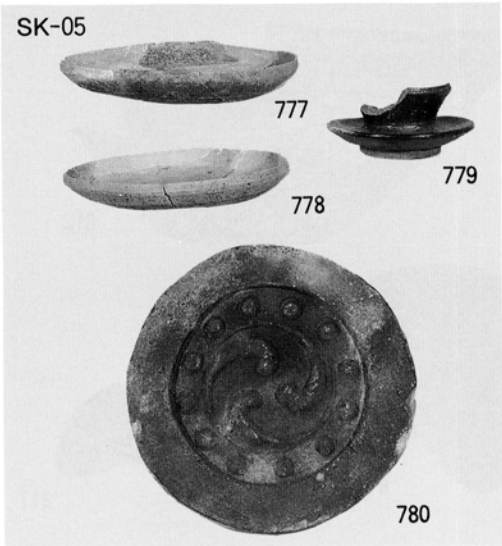

SK-06
757
758
759

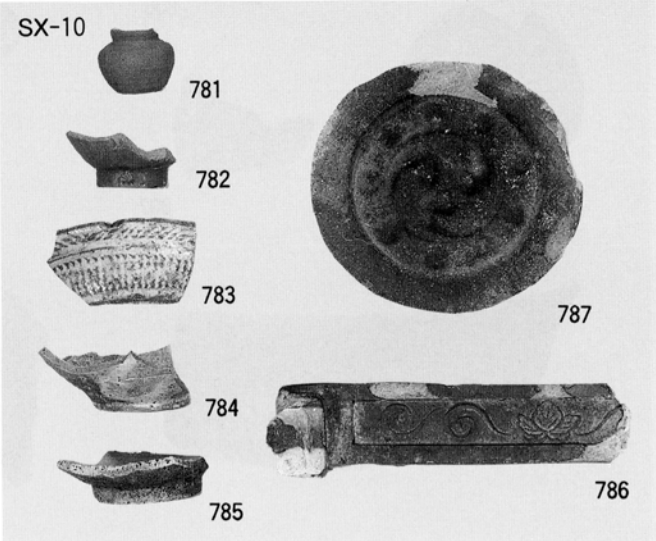

SK-12
760
761


SK-37
765

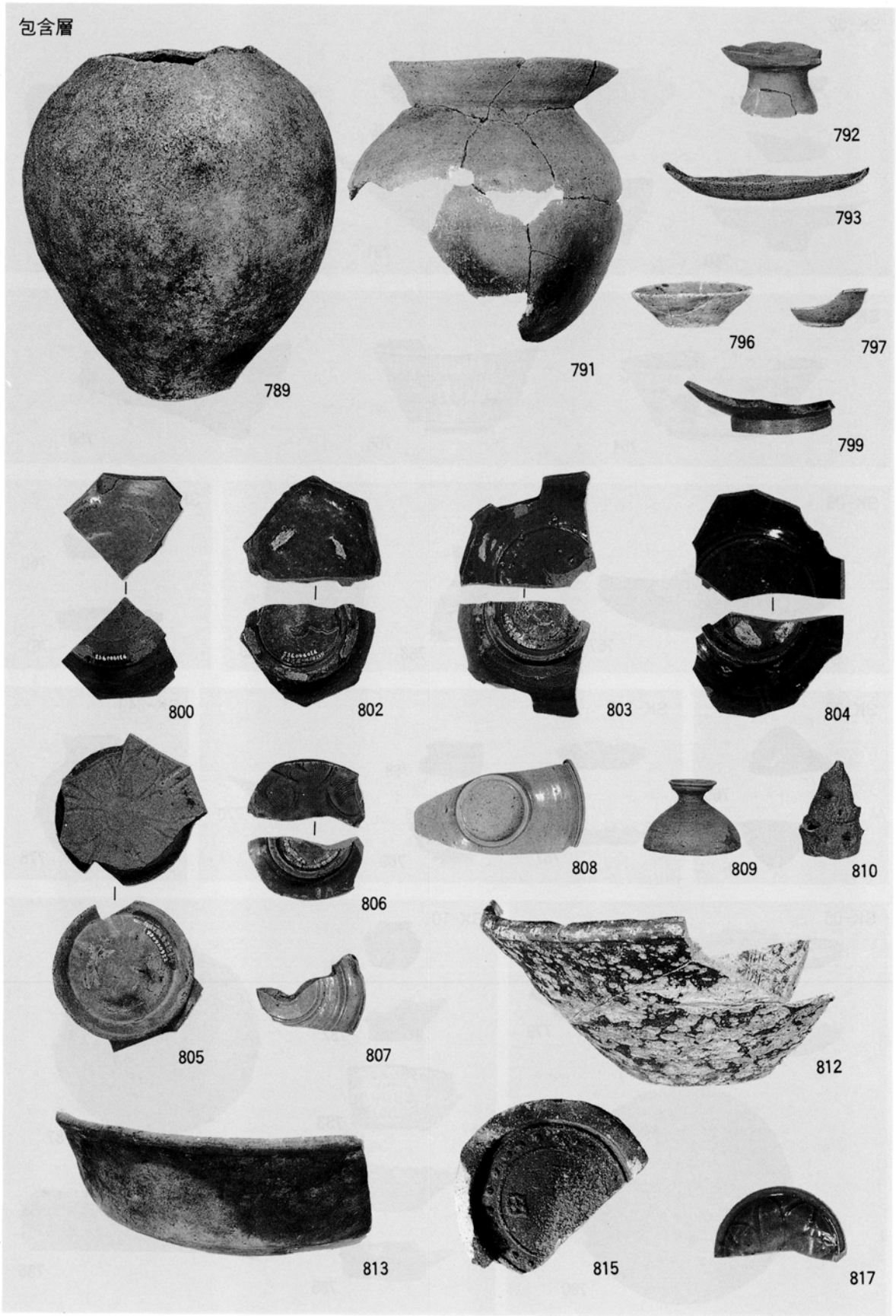

SK-248
766
767
768
769
770


SK-249
776


SK-05
777
778
779
780


SX-10
781
782
783
784
785
786
787

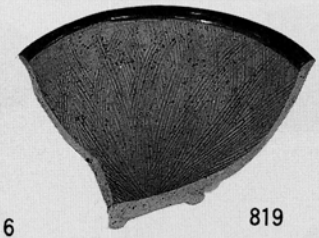
出土遺物・XII

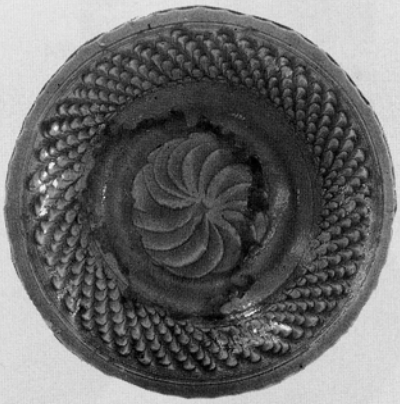

包含層
789
791
792
793
796
797
799
800
802
803
804
805
806
807
808
809
810
812
813
815
817

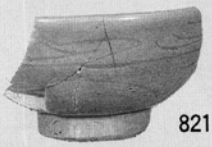
出土遺物・XIII

包含層

816

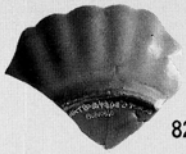

819

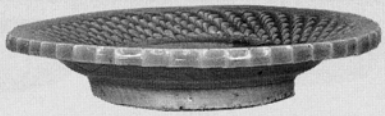



821

818

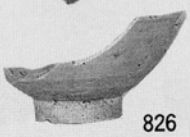
820


823



824

825


826

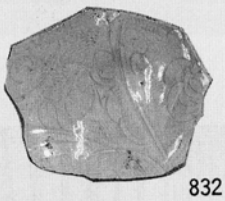
822

828

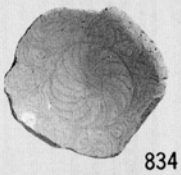
829

830

831


832

833


834

835

836

837

857

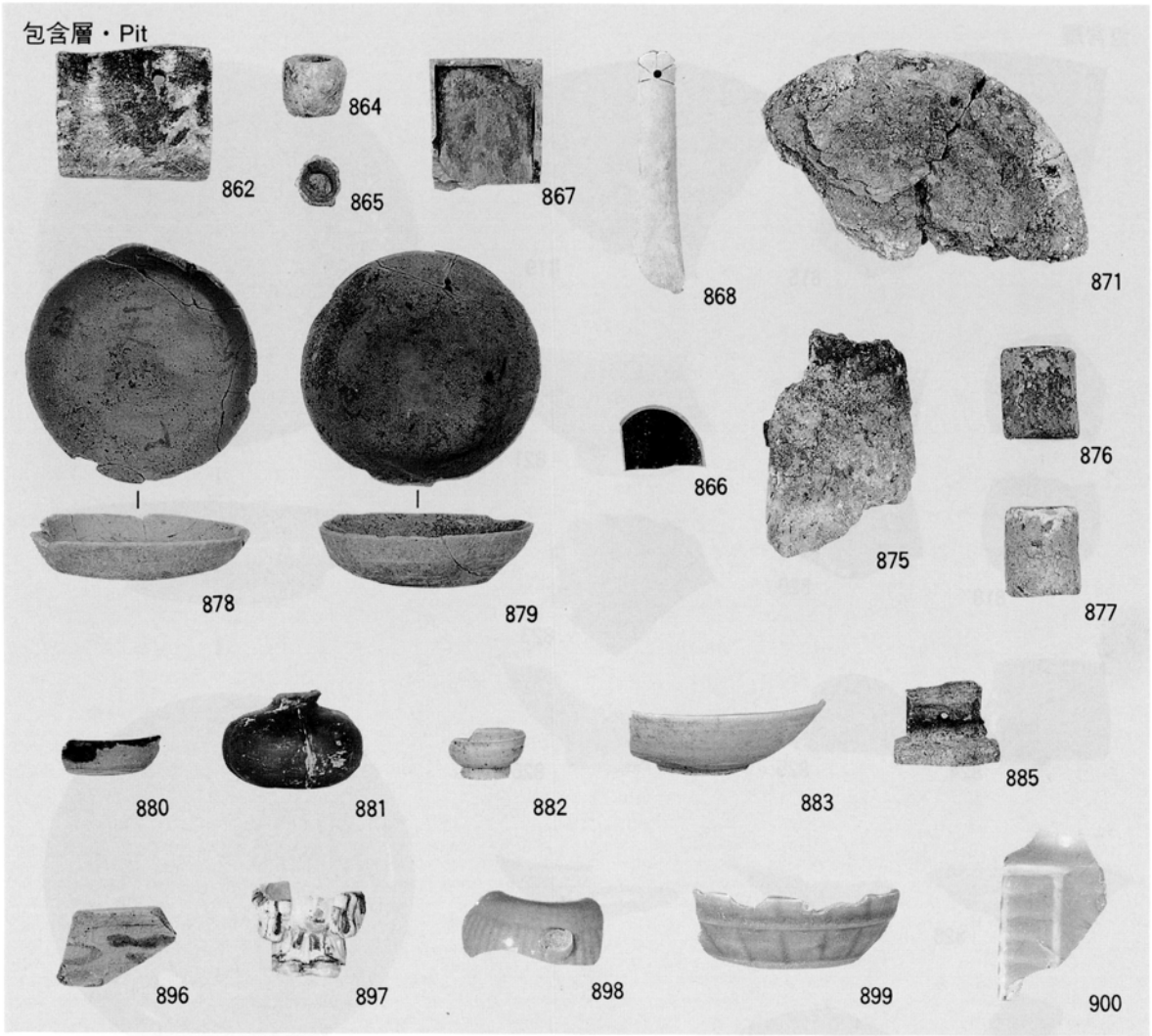
858

859

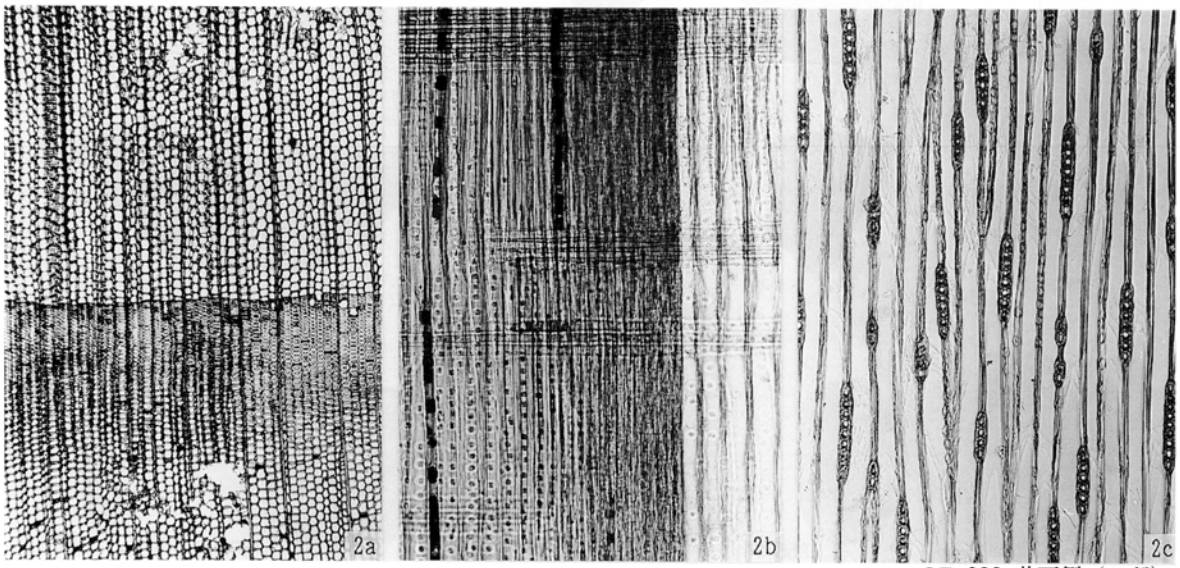
860

861

出土遺物・XIV



1．出土遺物・XV



SE-300 井戸側（スギ）

2．材の顕微鏡写真

博　多　51

－ 博多遺跡群第80次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集

1996．3．31

発　行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　久 野 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区天神５丁目５－８